
Double dragon

夜聖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Double dragon

【Nコード】

N8260K

【作者名】

夜聖

【あらすじ】

王属特務関連…と言っても日番谷くんが零番隊という設定ではありません。日番谷くんに兄貴が居て、その人が零番隊長だったらどうなんだろうという妄想から出来たモノ。その零番隊長が一護を零番隊に引き入れに来たら…。サイトよりもこちらの方が更新は早いと思います。捏造性が高いので閲覧にはご注意ください。

01：白銀の訪問者

最近、虚と遭遇する機会が多くなった気がする。

午前の授業に一回。そして、昼休み、午後の授業にも必ず出現する。更に放課後も、必ず午後5時に虚の群れが出現。そして夜中の2時にメノスが一体。

ここ一週間ほど、死神代行黒崎一護の出勤は、かなり頻繁なモノになっていた。

絶対に異常なのに、護廷は全く動かない。ルキアだって向こうに帰ったきり戻って来てくれないのだ。

これは本当に異常なのか、それとも単なる偶然に過ぎないのか。正直何なのかわからなくなってくる。

それとも、確かに異常ではあるが、護廷は一護もすっかり死神業になれたと思い任せているのだろうか。

確かに一護が死神になってから、かなりの月日が経っている。そしてその力も、隊長格にさえ全く劣らない、むしろ上回っているのではないかというほどだ。

それでもやはり、誰からの連絡もないのはおかしいのではないのか？

……一護は虚と対峙するたび、そう思っていたが自ら向こうと連絡を取るということはしなかった。

「月牙天衝！！」

何百回、何万回月牙天衝を撃っているだろうか。一護は呑気に考えながら、目の前の虚に攻撃する。

現在の時刻は午前2時すぎ。今日も例の如く、代行証によって深夜に起こされたのだ。

今日で既に8回もこれが続けているため、メノスグランデを倒すのにもすっかり慣れてしまった。

一護は消滅してゆく巨大な黒い影を見ながら、深い溜め息をつく。

「まったく……減るところか増えてるってどういうことだよ……つーか誰か来いよな、ルキアでも恋次でも冬獅郎でもいいからよ」

そう、文句を言っても答えてくれる者はいないことはわかっている。一護は再び溜め息をつく、斬月を背に収める。そうして早く寝てしまおうと、家の方向へと身体を向けたその時だった。

「っ！！」

突然背後に感じた冷氣。そして、襲いかかる氷の飛龍。

一護は咄嗟に斬月を抜き、それを月牙天衝で破壊する。しかし龍は砕けることなく、そのまま一護に突っ込んだ。

辛うじて刀で受け止めるが、龍の威力が意外に強い。そのまま後方へと飛ばされ、廃墟となっているビルに突っ込んでしまった。

もうもうと立ち込める土煙。そしてパラパラと落下する、壁であったコンクリートと、龍であった氷。

背中に走った鋭い痛みにつめきながら一護は一人の死神の顔を思い出す。

「あ……」

一護を襲った氷の龍が飛んできた先、風に煽られて、銀色の髪と真っ白い袴が揺れる。

彼は翡翠色の双眸を見開き「しまった」というように声を漏らした。

壁にめり込んだ一護は、訳がわからないまま考え込む。

襲いかかってきた氷の龍。それがなんなのかはよく分かっている。

しかし、しかしだ。自分が攻撃されたというのなら何故なのかわからなかった。

何故アイツが、こんなことをしたのか。そしていつもの倍以上に感じるこの霊圧は、何なのか。

一護は砕けたコンクリートと氷の欠片を散らしながら、壁から身体を放す。

そして取りあえず怒鳴ってみようと正面に建つ死神を見据え、目を細めた。

確かに目の前には、思った通りの色彩を持った死神が立っている。

しかしそれがいつもと違ったため、喉から発しようとしていた声は止まってしまった。

そして代わりに出てきたのは、呆然と確認するような声。

「……お前、冬獅郎か？」

「冬獅郎じゃねえ。日番谷隊長だ」

すかさず返して来る彼、日番谷。
しかし当たり前なはずの答えも、今は違和感ばかりを一護に覚えさせる。

ふわりと逆立った白銀の髪。そして切れ長の、澄み切った翡翠色の双眸。そこだけを見ると、一護のよく知るあの日番谷冬獅郎だ。
しかしおかしいのはここからだ。前髪は何故か下りており、答えるその声も普段より幾分低い。
そして何より、目の前の彼は一護より身長が高いのだ。

十番隊長が子供だということを知らない奴は居ない。そして霊圧だって、隊長格というだけに大きいが、ここまで重くない。
冷や汗が一筋、頬を伝う。目の前のこいつは本当に日番谷なのか、疑わざるを得なかった。

なんか、なんかまた、妙なことが起きているのではないか。そういう、漠然とした不安だろうか。

しかし一護は無理矢理それをとっぱらい、ぱん、と手を合わせた。

「……わかった！ 涅の仕業だな……！」

「何がだよ……とにかく黒崎一護、今回俺は、お前に話があって現世までやってきた」

「あ？ 何だよ。つーかいつも以上によそよそしいな」

疑った……。のだが。妙なことが起きている、と思ったのだが、勝手に涅の仕業だと判断し、自己完結してしまった。
だって、涅が何かをしでかしたのだって十分面倒事だろう？

それに対して日番谷は反応を見せず、イキナリ本題に入ろうとする。だがそこで、一護はまた疑問を持った。

話があつて現世まで来た、ということに違和感はない。

おそらく最近頻繁に出没している虚の事だろう。しかし話をするのに、何故自分は攻撃されたというのだろうか。

そして涅によつてこんな姿にされたというのなら、どうして平然とやつてくる？

それだけじゃない、イキナリ攻撃してきた理由もわからなかった。

「……やっぱり何かおかしい……お前本当に冬獅郎なのか？」

「日番谷隊長だと言っている。まあ、警戒するのも無理はないな」

「どう考えたつて警戒するだろ！ 確かにあの龍は氷輪丸だけど、イキナリ攻撃してきた理由がわからねえよ！！」

「それはお前の力を見極めるためだ」

「俺の力を……？」

ますます訳がわからなかった。

見極めるも何も、数々の闘いを一緒にくぐりぬけてきた彼は一護の実力をわかっているはずだ。

そして何も言わずに不意打ちなんて、日番谷らしくない。

一護は一度解いてしまった警戒心を再び抱きながら、日番谷を見る。

「……一体何のためだ？」

「おまえがこちらに相応しいがどうか見極めるためだ。因みに、最近虚の出没回数が増したのはこちらの手まわしだ」

「それじゃあ今までののはお前らが？」
「そうだ」

なるほど、だからこんな異常な状態でも誰も来なかったのか、と思う。しかしそうなれば、態々そんな事をする理由はないはずだ。そして今更だ。

大体こちらにふさわしいって、何なんだ？ 先ほどから彼の言動は妙なところがある。

やはり先程からつつかえているこの違和感からは抜け出せない。

そして冷静になってみて、やっと彼の霊圧の変化に気がついたのだ。冷たいながらも何処か凜として、どこか暖かな日番谷の霊圧。しかし目の前の彼は、色々なモノが混雑している。

氷、炎、水、雷……それら全てが合わさったような、混沌とした、しかしきつちりと、一つの場所に整っているような、不思議な霊圧。そしてやはり、日番谷と同じ感覚もある。だけど日番谷ではない……。

……目の前の者は何者なのか、一護は漸く日番谷ではないことを確定した。

「てめえ、冬獅郎じゃねえだろ……よく似てるけど、やっぱり違う」「何も俺は、冬獅郎だとは言っていないぞ？ ツーかやっぱり誤魔化しは効かないんだな」

そう言って肩をすくめる彼。

一護は警戒心を強め、刀を構える。

なりは死神のように見えるが、日番谷に化けようとして失敗した虚という可能性もある。

そして、霊圧がかなり大きい。……もしもこいつが敵ならば、一筋縄ではいかないだろう事がわかる。

「化けようとして失敗って、虚もそこまで間抜けじゃないと思うぜ？ それに俺はお前の味方だ」

「……」

「信じてないな、その目は。それに霊圧が大きいと言っても、80%は制限してきてるんだけど」

ふわり、と彼の長い襟足が揺れる。

80%押さえてこの霊圧だと……？ 一護は内心、戦慄した。そしてコイツ、一護の心を読んでいる。

突然攻撃を仕掛けてきた、謎の男。

そいつの容姿も、霊圧も日番谷と酷似しているが全くの別人。

そして一体何のために一護の前に現れたのか、何者なのか……わからないことが多すぎる。

一護は決して警戒心を緩めることはしなかった。

「そうか、まずは名乗らないといけないな。……俺の名は日番谷^{リュウ}ウシロウ^{ウシロウ} 獅郎。王属特務零番隊隊長、そして十番隊隊長、日番谷冬獅郎の兄だ」

くるり、と振り向けば、シンプルな緑色の紐で束ねられた長い銀色の襟足と一緒に袴が翻る。

そしてその背にはしっかりと書かれていた。「零」と。

01：白銀の訪問者（後書き）

ドライブ中の車内にて。

日番谷くん兄貴が居て、一護がその人と日番谷くんを間違えたら面白いだろうなあ…。

そう言えば日番谷くん零番隊設定って結構あるよな。

日番谷くん兄貴がいるとして、その人が零番隊隊長だったらどうなるんだろう…。

…そんな連想から生まれました。

妄想ばかりでごめんなさい>（――）<

王属特務についても良く知らされていないため、そこも妄想で補うことになると思います。

捏造性が高い小説ですが気に入って読んでいただければ幸いです。

02：黒崎は渡さない

突然総隊長に呼び出されたものだから、何事かと思った。

日番谷冬獅郎は、総隊長の言葉を頭の端に入れながら、そんな事を考える。

時刻は午前2時。一人残って事務処理に明け暮れている事も多い時間帯だが、今日に限って就寝していた。

冬獅郎は欠伸を噛み殺しながら総隊長の話を聞き、そして考える。そんな彼が上の空に見えたのだろう。総隊長は不意に話をやめ、目を小さく開いた。

「聞いておるかの？日番谷隊長」

「最近空座町での虚出沒回数が増加してるんですよね？それで？」

それは近頃騒がれていたため、冬獅郎も知っている。

隊長格なら皆知っている事実だ。しかしそれを一護に任せて、こちらには傍観というのもしかと思っていた。

そのためやっこの話か、と思う。そしてまた面倒事を自分におしつけるのか、と。

そもそも、空座町は十三番隊の管轄だ。

十番隊の隊長である冬獅郎には管轄外なのだが、この人は言っても聞かないだろう。

グダグダと文句を言うのも性に合わないため、諦めている。

総隊長は髭を撫でながら、何事もなかったように続けた。

「ふむ…先程、接触したのじゃ」

「黒崎と、虚の核が…？」

総隊長も眠いのか、肝心な主語が抜けている。

冬獅郎も眠い事には眠いのだが、一応頭は機能している。
冷静に返すと、総隊長は平然と頷いた。

「儂も正直よくわからぬ。何故王属特務が黒崎一護を必要とするのか」

「王属特務…！？」

冬獅郎の脳裏に、ある男の顔が浮かぶ。

いや、しかし彼とは限らない。それに彼もその中では特に偉い者。
そんな簡単に現世に行くはずがない。

その言葉に動揺を隠しきれなかった冬獅郎だが、必死に感情を押さえる。

そして思う。この話は、思っていたより重要そうだ。そして事が長引く――…。

「王属特務が黒崎を必要としている？」

「左様。そして日番谷隊長、今回おぬしを呼んだのは、その者が零番隊の隊長だからじゃ」

「……」

冬獅郎は黙り込む。

その一言は、冬獅郎が呼ばれた理由を説明するのに十分だった。

突然動き出した王属特務。彼らは黒崎一護を必要とし、態々隊長を現世に送った。

そして総隊長は、一護を向こうに手渡す気は毛頭ないのだろう。

だからそれを止めるために、その零番隊隊長と縁のある冬獅郎を呼び出した。

しかし、それはお門違いだった。

「俺が頼みこめば向こうも引くとお思いでしょうけど、そう簡単にはいかないですよ」

「何故じゃ？お主と零番隊隊長は…」

「日番谷隊長は、俺の為に動くような人じゃねえっす。多分誰がやっても同じ結果ですよ」

しかし、冬獅郎としてもこの話は気に食わない。

そして、このまま見過ごすつもりもなかった。

「…しかしお主ら、昔はとても仲の良い…」

「今と昔は違います。…とにかく今から空座町に向かいます。…黒

崎は王属には適さねえ…」

「冬獅郎に兄貴が居るって…初耳なんだけど」

「ああ、俺アイツに嫌われてるからな、無理もない」

あれから一護は龍獅郎をつれて帰宅し、部屋で話を聞いていた。

一護は肉体には戻らず、机の椅子に座っている。龍獅郎は、ベッドの上に腰掛けて一護と向き合っていた。

王属特務の事、そして彼が冬獅郎の兄であること。…そこからして一護には訳が分からなく、混乱している。

言われれば確かに冬獅郎とそっくりだ。そこは否定する理由がない。それより、王属特務という物がよくわからなかった。そしてその隊長が、態々一護のところに現れたこと。

なぞは一向に解決しない。

「でもびっくりしたぜ、王属が俺のところに来るなんてな。護廷でもなかなか会えないっていうのに」

「ああ、まあ色々あるんだよ。霊王なんて山本総隊長だって会ったことないはずだぜ？」

「マジかよ…それじゃあ俺、いま貴重な経験してるってことか？」

何とも呑気だ、と冬獅郎なら言いそうである。

しかし一護としては、本当に珍しい者に会えた気分だった。

接触困難だという彼に遭った事より、未知の兄貴に遭ったということ

と。

冬獅郎の兄なんて考えたこともなかったため、感動も一入だ。そして何だか、大人になった冬獅郎と話している気分にもなる。

「まあ、それも当たり前になるんだけどな。…多分おまえは長々と説明しても混乱するだけだから率直に言う。一護、おまえは零番隊に入れ」

「零番隊に。へー…って、え？」

何やら納得したように頷いていた一護だが、言葉を反芻して身を乗り出す。

龍獅郎は、そんな一護を静かに見据えていた。

とても冗談を言っている表情ではない。それ以前に、冬獅郎の兄が冗談なんかを言うのかという事から疑わしい。

というかこの男は、今とんでもないことを口にしなかったか…？

「お、俺が零番隊に？護廷にも入ってないけど？」

「おまえは十分力があるからな。構わないさ」

「……」

死神代行から、零番隊所属の死神になる。

正直言っただけがどういふことなのかいまわからなかった。

零番隊に入れば、仲間と会えなくなるのだろうか？それとも今まで通り、空座町を中心に動けるのだろうか。

そして言われていることの現実感がない。…ここは、頷くべきだろ

うか？

「…俺は」

「断る」

一護の言葉に、別の声が重なった。

中性的な、少年の声。それはものすごく落ち着いていて、にわかには少年のモノだとは思えない。

しかし一護も龍獅郎も、その声の主が誰なのかは分かっていた。

振り返ると、いつの間に居たのか、冬獅郎が腕を組んで壁に寄りかかっている。

そしてじつと、静かな翡翠色で一護を見据えていた。

「冬獅郎！」

「日番谷隊長だ。…今はそんなことどうでもいい。黒崎、お前零番隊に入ることがどういいうことかわかってんのか？」

「……そんな、深刻なことなのか？」

冬獅郎の表情からして、ただ事ではないということが分かった。

そしてそれは決して穏やかな事ではない。

龍獅郎は、険しい表情を見せる冬獅郎を静かな瞳で見ていた。

「基本零番隊は王属の敷地から出ることは許されない。つまり朽木や阿散井はおろか、家族にまで会えなくなる」

「……それじゃあ」

「死神代行みたいに自由ではない。束縛されることになる。お前はそれでもいいのか？」

一護を責めるように、冬獅郎は言う。

恐らく構わないと言っても言えば殴られるだろう。そんな責め立てるような視線だった。

しかし一護には頷く理由がない。自分は死神代行で満足している。そして何より、家族や友達、仲間に会えなくなることが嫌だった。一護は仲間を、多くの人々を護りたいから、死神になった。…しかし零番隊に入れば、それもままならないということだ。だったら一護の答えは決まっている。

「…悪い、龍獅郎さん。俺零番隊に入るわけにはいかないようだ」

「悪いが、それはもう決定事項だ。覆すことはできない」

帰ってきたのは、そんな冷たい言葉だった。

一護は俯けていた顔を上げ、驚きに目を見開く。

向こうで、冬獅郎が溜め息をついた。

「霊王の命令は絶対。護廷に係る者はそれに従わなければならない。一護だつて、正式な護廷ではないと言えど護廷の下に居る」

「ちょ、待ってくれよ！そんな横暴な事つて…！」

「黒崎の言つとおりだ。こいつには家族がいる。それに命だつてあるのに、それではこいつを殺すと言っているようなモノです。…日番谷隊長」

一護は反射的に冬獅郎を見る。

兄弟だというのに、他人行儀な言い方。いや、冬獅郎の方が拒絶しているように見える。

そして龍獅郎も、それには慣れているのか全く動揺を見せなかった。むしろ責めるような目で、冬獅郎を見ている。

「我々護廷は、確かに黒崎一護の力を頼っています。しかし、私生活を剥奪するつもりはありません」

「つまり、護廷が一護を渡さないと？」

「…今回は、山本総隊長もそちら側のご意見には反対なさっています」

日番谷は目を伏せ、龍獅郎の座るベッドへと歩み寄る。

一護はそんな彼らのやりとりを、緊張の面持ちで見っていた。こんな冬獅郎は初めて見たのだ。目上の者に抗う冬獅郎を。

「…驚いたな、まさか山本総隊長までこちらに反抗するのか」

「いや、たとえ総隊長がそちらに従っても、俺が従うつもりはない」

翡翠色と翡翠色がぶつかる。

冬獅郎は、静かな瞳で龍獅郎を見返したまま、言った。

「たとえ総隊長が納得しても、俺が納得できません。——黒崎は

渡さない」

03：兄弟喧嘩

「黒崎は渡さない」

緊迫した空気の中、落ち着いた瞳で、冬獅郎は言う。

冗談じゃなかった。一護に会えなくなる事より、彼の人生を強制的に閉じるということが許せなかった。

確かに一護の力は強大だ。それは冬獅郎も認めている。

しかしだからと言って、彼の人生を剥奪する権利はこちらにない。

一護の意思を無視して零番隊に引き入れるだなんて、冬獅郎には決して許せないことだ。

「…意外だな、まさかお前が、一人の人間に感情移入するなんて」

「感情移入…？ そんなんじゃないよ」

最早敬語を使うことすら忘れて、喧嘩腰になっている。

このまま龍獅郎が斬魄刀を抜けば冬獅郎も抜く、そんな雰囲気だ。

それぞれの視線は、兄弟に向けるモノではない。特に冬獅郎の瞳には、反抗と憎悪しか映っていなかった。

「黒崎は仲間だ。そいつの意思を護ろうとして何が悪い？」

「なるほど、仲間意識か…。どちらにしろ昔のお前にはなかったも

のだな、冬獅郎」

「昔の事は関係ない」

ふ、と表情を緩める龍獅郎に対し、冬獅郎は眉ひとつ動かさなかった。

なにも感じていないと錯覚させるような静かな瞳で彼を見据え、そして静かな声で返す。

しかし今彼を駆り立てている感情は「怒り」だった。そして冷酷な彼に対する「憎悪」

まだ人生を終えていない死神代行に告げるその言葉は「死ね」と言っているのと同じこと。

いくら靈王が言ったからと言って、それだけは許せないはずだった。

…それを、こんな涼しげな顔で言うのだ、この男は。

こんな冷酷な奴が自分の兄貴だなんて、正直思いたくない。

それより、自分の知る日番谷龍獅郎という男は、こんな奴ではなかったはずだと思う。

冬獅郎は、龍獅郎が大嫌いだった。いや、大嫌いになった。…王属特務に入ってから龍獅郎が。

「とにかく、それはお前のセリフではないぞ、日番谷十番隊隊長」

「それはてめえが決める事じゃない。俺の問題だ」

「…お前はいずれ俺の後を継ぐんだ。そんな甘い考えでは、王属特務なんて勤まらない」

一護がハッと顔をあげる。

冬獅郎が王属特務に入る？それはつまり、十番隊を抜けるということか。

しかし冬獅郎はそれに対して決して首肯はしなかった。

「前にも言ったはずだ、俺は零番隊に入る気はない。…俺は十番隊隊長だ」

冬獅郎は断言する。

自分にとつての居場所は護廷十三隊、十番隊だ。

ここから先それが覆うことは決してない。覆す気もない。それに、龍獅郎と同じ道をたどるつもりは全くなかった。

「…もう一度言う。黒崎は渡さない」

「悪いがそれは無理だ。霊王は一護を必要としている」

冬獅郎も龍獅郎も、真っ直ぐ相手の翡翠色を見据え、引く様子はないかった。

それを一護は緊張の面持ちで見ている。

兄弟とは思えぬ緊迫した空気。

そして隊長同士の、小競り合い。

正直冬獅郎は、こういうもめごとは嫌いだ。だからいつも避けて通る。

しかし今度ばかりは違った。一護の一生がかかっているのならば、どんなに反発しても止めるつもりだった。

「…引かないと言つならば、こちらにも考えがある。…率直に言うぜ、帰れ」

「だったらこちらにも応戦するまでだ。俺は引く気はない」

背中の斬魄刀に手をかける、二人の兄弟。

冬獅郎が靈圧を高めたため、部屋の温度が一気に下がった。

力づくでも止める。それが、今の冬獅郎の意思だ。

相手は零番隊隊長。そして遥かに自分より靈圧が高い、かつては「神童」と呼ばれていた男。

彼にかなわないことはわかっている。だが、力の差によって諦めるわけにもいかない事がある。

冬獅郎は只、一護を護りたいだけだった。

しかしその緊迫しきった空気に居たたまれなくなったのか、一護が飛び出し、冬獅郎の手を握った。

「ちょっと待て冬獅郎！刀抜くことはねえだろ！！」

「お前は黙ってる黒崎！一生がかかってんだぞ！」

「っ……」

ものすごい剣幕で、冬獅郎は怒鳴る。

一護はその迫力に圧され、思わず退いてしまった。

冬獅郎は刀に手をかけ、龍獅郎を見据えたまま一護に言う。

「先程も言ったが、零番隊に入るということは束縛されるということ。そしてその時点でお前は肉体に戻ることを許されなくなる。つまり死ぬということだ」

「……」

「それをこいつはすすめているんだぞ？お前はそんなに納得出来るのかよ？」

たとえ一護がそれでいいと言っても、冬獅郎が許すつもりはなかった。

一護は死神であると同時に人間だ。高校生なんて、夢を見つけてそれに向かって前進してゆく大切な時期だ。

それを一護から剥奪する？それは、本来人間を護る筈の者がすることだろうか。

そんなこと、許されるはずがないのだ。

「悪いが、場所を移させてもらっぜ。これでもわからねえというのならてめえは外で凍ってる」

「…お前は昔から口だけは達者だな。…いいぜ、受けてやるよ」

龍獅郎はそう言うと、窓から飛び出す。

冬獅郎もそれを追い、後ろから一護が追いかけた。

深夜の空気はひんやりと冷たい。

冬獅郎にはそれが丁度いくらいだが、一護には多少寒いらしい。腕を押さえ、ブルっ、と身震いするのを見て、冬獅郎は言う。

「お前は部屋に戻って寝てろ。…すぐ終わるから」

「そ、そんなわけにはいかねえよ！家の前でごちゃごちゃやられて寝付けねえし、何よりお前らが戦うのは俺のせいなんだろ！？」

「いいから戻ってる！！」

「冬獅郎…」

もう反発できない、というように歯噛みする一護。
冬獅郎はそんな彼を見て舌打ちをする。

何をこんなにイライラしているんだ自分は、と思う。

そう、龍獅郎に対する怒りに、機嫌の悪さが重なっていた。

それは今更彼が現れたからだろうか。昔から昔から、と冬獅郎の過去を知っている兄貴面をするからだろうか。

今更兄貴面なんて冗談じゃない。冬獅郎は、今の龍獅郎を兄貴だなんて認めない。

…王属特務に属する兄なんて、自慢でもなんでもない。

険しい表情を見せる冬獅郎を見て、龍獅郎が言う。

「…久々に会ったけど、変わったな、お前」

「知るか。俺は昔から変わっちゃいねえよ」

「いや、変わったよ。…少なくとも昔は、他人の為に感情的になれる奴じゃなかった」

それが嬉しいのか、やわらかな表情を見せる。

龍獅郎は、冬獅郎に比べていくらか表情が柔軟だった。

昔からそう。ちょっとしたことで喜び、ふわりと微笑む、そんな子供だった。

そして成長した今も、それは変わらない。

昔はそんな龍獅郎が嫌いじゃなかったのに、今はとてつもなく腹が

立つ。

腹の底からふつふつと怒りとも憎悪とも呼べない黒い感情が湧きたって、不愉快だった。

冬獅郎は舌打ちをすると、勢いよく氷輪丸を抜く。

「悪いが、変わったのは俺じゃない…。昔は、こんなことを淡々と言える人じゃなかったのにな」

「昔はか…今と昔って違うよな。戻りたくても戻れない、それが昔…過去だ」

意味深なことを言う龍獅郎だが、冬獅郎は全く動じなかった。代わりに、氷輪丸の切っ先を上にあげる。

それに反応した一護が、必死さえも見せるように叫ぶ。

「止せって冬獅郎！お前兄貴に向かって斬魄刀向ける気かよ！！」
「兄だろつが何だろつが、こちらに反するのならば敵だ…それにこいつは、もう俺の知っているあいつじゃないようだからな」

そう、変わったのは冬獅郎じゃない、龍獅郎だ。

彼が十番隊に居た頃はもっと他人のことを考えられる人だった。

仲間思いで、部下からも同僚からも慕われる人だった。

それが、彼は簡単に部下を捨てた。

蹴ろつと思えば蹴れるはずなのに、何も言わずに零番隊に行ってしまった。

護廷には手の届かないところへ。

「霜天に坐せ！氷輪丸！！」

握った刀から、水と氷があふれ出す。

そこから龍が生まれ、龍獅郎へと一直線に向かってゆく。しかしそれは彼にあたるところか、かすりもしなかった。

「…確かに、俺は護廷から王属特務に入った。だがそれは仲間を捨てたわけではない」

「てめえは何も言わずにいなくなっただろ。それが捨てた以外になんて言う？」

「……確かに、そう思われても無理はないな」

龍獅郎は、哀しそうに目を伏せる。

冬獅郎は氷輪丸を携えたまま、厳しい目で彼を見ていた。

「だけど上の命令は絶対なんだよ。ごめんな、冬獅郎」

刀身が鞘を滑る音。

それと同時に白銀の刃か煌めき、姿をあらわにする。

龍獅郎はそれを冬獅郎に向けた。

「虚空を穿て——」

「龍ちゃんストーーーーップ!!!!」

斬魄刀解放……。冬獅郎は氷輪丸を構えたが、彼の刀が解放されることはなかった。

突然響いた女の声。その声の主は、龍獅郎に突進し、思い切り抱きつく。

その為龍獅郎は小さな悲鳴を上げながら前のめりになってしまった。

「ら……乱華!! おまえどうしてここに居る!?!」

「どうしてって、副隊長として隊長をサポートしに来ただけよ? そしたらあんたら、刀持って対峙してるじゃない。物騒なんだから」

長いちみつ色の髪をかき上げて、乱華と呼ばれた女性は言う。
そして冬獅郎を見て、にっこりとほほ笑んだ。

「久しぶり、シロ! 相変わらずちっこいわねー、かーわいい!」

「……てめえも、黒崎を連れ去りに来たのか?」

あえてちっこいという言葉を見無視し、乱華を睨む。

すると彼女は「違うわよー」と肩をすくめた。

「確かに黒崎一護には来てもらわなくちゃいけないのかもしれないけど、無理やりさらうことはしないわ。取りあえず今は、兄弟喧嘩を止めに来たのよ」

「兄弟喧嘩…？」

「何よ、違うつていうの？大体龍も大人げないわよ。シロがアンタに敵う訳ないってわかってるでしょ？」

それに対し、冬獅郎は不愉快そうに目を細め、龍獅郎はばつが悪そうに苦笑する。

一護はすっかり状況についていけなく、呆然としていた。

「それに、あんた何焦ってるのよ？…こんな命に素直に従うなんてらしくないわよ」

「……」

「とにかく今回は帰るわね。さ、行きますよ隊長」

乱華はそう言いながら、龍獅郎の手を引く。

彼は、それに抵抗はしなかったが、多少不満げに言った。

「…いいのかよ、靈王に叱られるぜ？」

「別にいいじゃない、あんなお小言聞き流せば」

「お前のその豪放磊落っつか気楽なところアイツにも分けてやってくれ…」

そんな会話を交わしながら、彼らは穿界門を通って退散する。

冬獅郎はちつ、と舌打ちをすると、氷輪丸を鞘におさめた。

一護はそんな彼を見て、半ば呆然としながら問う。

「…あのすげえ人、何？」

「松本乱華。零番隊副隊長であり、松本の姉だ…」

03：兄弟喧嘩（後書き）

ら、乱菊さんにまで姉を作ってしまった…！
済みません；

04：昔の兄と、今のあいつ

あの後一護は、冬獅郎に連れられて尸魂界にやってきていた。

時刻は午前の4時……中には、既に一日の活動を始めている人だっている時間帯だが、大半は夢の中にいる時間帯である。

瀨靈廷では、いまだに起きている隊はいらしい。日もまだ昇っておらず、外は真っ暗だ。無理もない。

先程から冬獅郎は、押し黙ったまま十番隊への道を歩いている。

それほど今の彼は虫の居所が悪い。そしてまた、過去の事を思い出し、それについてもとらわれていた。

今となつては、悔いても仕方がない過去。恨んだつて戻る筈がない過去。いくらやり直したいと叫んでも、取り消したいと訴えても、どうすることも出来ない、過ぎ去った時間。

わかつてはいるつもりだった。仕方がないことだと、わかっているつもりだったが、どうしても納得できない自分が居た。

それは信じていた彼が簡単に自分たちの前から姿を消したからか。それともただ単に、寂しかっただけなのか……。それでもあの日から、冬獅郎の中での龍獅郎と言うものが変わっていた。

そして今回、それは確実に固められてしまった。

龍獅郎は変わってしまった。簡単に人の命を奪うような事が出来る奴になってしまった。

人の事を顧みずに、自分の都合だけでどうこうするような最低な奴になり下がってしまった。

……昔は、そんな人じゃなかったはずなのに……。

「あ、隊長やつと帰って来た！！　って一護もいるの？」

突然隊舎を出て行った冬獅郎の帰りを待っていたのだろう。十番隊の門前では、乱菊が大きく手を振りながら立っていた。

一護はそれに「おー！」と返すが、冬獅郎は反応を示さない。

乱菊はそれにも関らず、にこにこ笑いながら冬獅郎を出迎えた。

「お帰りなさい隊長。緊急のお勤めご苦労様です！」

「ああ。お前こそこんな時間に迎えてくれるなんて珍しいな。……

なんか悟ってんのか？」

「へ？　なんかってなんですか？」

乱菊が首をかしげるが、冬獅郎は「いや……」と視線を逸らす。心の底から疑問を見せた彼女の表情を見て、何故か後ろめたい気持ちになる。

正直今回起きたことを、もう何十年と会っていない彼女の姉と会った話を話すべきなのか迷ってしまう。

確かに乱菊と乱華は仲が良く、零番隊に行ってしまった彼女を責めるような事はしなかった。

いくら冬獅郎がそれに対し良い感情を抱かなくても、乱菊は違った。寂しいけれど、と彼女はちゃんと受け入れたのだ。

護廷から王属特務に入るということは名誉だ。そう言って喜んでいたら乱菊。

それでも、素直に喜べなかった冬獅郎。いつしか心を閉ざし、龍獅郎を責めるようになっていた。

何が違うのか、と思う。どうして乱菊は素直に祝福してあげられるのに、自分はこうなのだろうかと思ってしまう。

そうだ、冬獅郎は単純に王家が嫌いなのだ。

何を考えているかわからない。かなりの力を誇っているにも関わらず、傍観しているしかない王家が。

そしてそんな冷酷な隊に行ってしまった龍獅郎が、冬獅郎には許せなかった。

「拳句の果てに黒崎を連れていくだ……冗談じゃねえ」

「……隊長？」

乱菊は漸く冬獅郎の異変に気付き、目を細めた。

しかし冬獅郎はそれに反応を返さず、くるりと踵を返すと隊舎の中に入ってゆく。

乱菊に、さっき目の前で見たこと、聞いたこと、起こしたことを今言えるとは到底思えなかった。落ち着いて、彼女に説明することはできないと思った。

乱菊は慌てて、冬獅郎の背中を追う。

「ちょ、待って下さい隊長！ 何かあったんですか!？」

「……ちよっと、色々な」

一人闊歩してしまう冬獅郎への問いかけに答えたのは一護だった。乱菊は冬獅郎を追うのをやめ、一護を振り返る。

何か思いこむような、沈痛な表情で立ち尽くす一護。
それは今彼らが見てきたことが、ただ事ではないことを物語っている。

「俺、零番隊に勧誘されたんだよ。冬獅郎の兄貴にさ」
「隊長の……まさか、龍獅郎さん……？」

ああ、と一護は頷く。

一護はそのまま話を続けようと思ったが、いつの間に戻ってきたのか、冬獅郎の言葉に遮られた。

「こんなところに立って話す事じゃねえだろ。場所移すぜ」
「……冬獅郎」

険しい表情で、そして冷めきった声で言う冬獅郎。

一護は思わず彼の名を呟くが、冬獅郎は気にせず踵を返してしまった。

一護と乱菊は黙ってその小さな背中を追う。

正直、今更龍獅郎に対して憤っても仕方がないと思っていた。
最近では考えないようにしていたため、怒りも和らいでいた。それなのに今回の仕打ちはなんだ。

一護を連れていく？ 冗談じゃない。家族も命もある奴を王属特務に就かせるなんて、そんなこと言える奴じゃなかった。

昔は仲間の事を考え、その為に動く優しい人だったのに――……。。

がらり、と執務室の扉を開ければ、早朝の静謐な空気が、冬獅郎の頬を撫でる。

だからと言って感情が落ち着くわけでもなく、冬獅郎は机まで闊歩してゆくと、乱暴に腰掛ける。

乱菊と一護はソファに腰掛け、不機嫌オーラ丸出しの冬獅郎を心配そうに見ていた。

「冬獅郎……」

冬獅郎を案ずるように、名を呼んだ一護。冬獅郎はそれを一瞥し、感情を落ち着かせるために息を吐く。

「ああ……取りあえず松本、黒崎が零番隊に勧誘されたという話だが……お前はどっ思う？」

「へ？ どう思っつて……て言うか一護が王属特務ですか？ 護廷でもないのに？」

「ああ。あいつらは黒崎の今ある人生を剥奪してまで、王属特務に入れようとしてやがる」

その言葉に、乱菊は息をのむ。

冬獅郎の表情はどこまでも冷たく、口調も淡々としたものだ。

「それをアイツはすすめるっていうんだぜ？ ……笑い話にもなら

ねえよ」

「……それで隊長はどうしたんですか？」

「こちらが反対しても引く気はねえらしい。だから俺も戦闘態勢に入っただが、そこで乱華さんが入ってな」

「え、お姉さんがですか？　ていうか隊長、お姉さんにまで会ったんですか！？」

その名前を聞いたのが嬉しかったのか、何処か嬉々としながら身を乗り出す。

冬獅郎はその反応を見て思わず苦笑した。

こちらがここまで憤っているのに喜ぶなんて、流石だ、と思う。それに乱菊は姉の事が大好きなんだということも知っている。

やっぱり乱菊は、昔から変わらないのだ。昔も今も、乱華は乱華として見ている。

王属特務だろうがなんだろうが関係ない。自分の大好きな姉として、やはり慕っているのだろう。

そう思えることが、なんだかうらやましかった。

冬獅郎はあの時の乱華の言葉を思い出しながら、苦笑する。

「兄弟喧嘩を止めに来たって……相変わらず気楽というか……」

「そう……ですか。あの、お姉さん元気そうでした！？　……ってこんなことを訊くのもどうかと思いますけど……」

「ああ。相変わらず仲良くやってるみたいだぜ。思い切りあいつに抱きついてたしな」

言ってから委縮する乱菊だが、冬獅郎はそれを気にせずに答えた。
乱菊は「そうですか！」と嬉しそうに笑う。

「とにかく奴らはまた来るに違いねえんだ。だったらやはり俺が戦わなくちゃならねえ。……黒崎はあくまで死神代行だ」

「……だけど冬獅郎、やっぱりさっきみたいに刀を抜くのはどうかと思うぜ？」

「なにを悠長な事を言ってるやがる。こちらの意思に反抗してくるならば、あいつらも敵だ。それに黒崎にとって、確実に悪影響になるじゃねえか」

「敵……か」

一護は呟き、俯く。そんな彼が何を思ったのか、言いそうなことは大体予想がつく。つくからこそ、居たたまれなくなる。

冬獅郎は深くため息をつくと、席を立った。

正直、色々あり過ぎて頭が混乱している。数十年ぶりに会った兄。そして、王属特務に勧誘された一護。

……一度に多くの衝撃的な事があり過ぎて、頭の中を整理できない。

「悪いが少し休んでくる。……疲れた」

「あの、その前に一つ聞いていいですか？」

執務室の扉に手をかけながら言う冬獅郎を、乱菊が止める。
冬獅郎は何も言わずに振り返った。

「……本当に、戦うんですか？」

「……黙って見過ごすわけにもいかないからな。向こうが刃向かってくるというのならば、俺は躊躇わずに戦う」

「そうですか……」

乱菊は小さく答え、俯く。

冬獅郎にはわかつている。彼女は、二人と冬獅郎が敵対するのが嫌だということだ。

それでも、戦わなければならない。向こうが引かないというのならば、力を掲げてどうにかするしかないのだ。

向こうも無理矢理刀を向けて来るといふのならば、それに抵抗するしかないのだ。戦うほかにないのだ。

乱菊は顔を上げると、何事もなかったように笑った。

「とにかく隊長、始業までまだ4時間はあるので、ゆっくり休んでくださいね！」

「……悪いな」

冬獅郎はそう言って、執務室を後にする。それが何に対しての謝罪なのかは正直わからなかった。

乱菊と一護は、彼が完全にこの場から離れたことを確認すると溜め息をつく。

そして一護がおもむろに口を開いた。

「ホント、驚いたぜ。冬獅郎に兄貴がいるなんて思いもしなかったし、俺が零番隊になんて……」

「あたしも何でアンタが零番隊に呼ばれるのか甚だ疑問だわ。あんた何したのよ？」

「いや、なにもしてねえけど……つーか冬獅郎と龍さんって、昔から仲悪いのか？ 冬獅郎が一方的に嫌っているようにも見えたけど」

一護は目の前のローテーブルに肘をつきながら尋ねる。

乱菊は昔の事を思い出しながら、首を左右に振った。

「昔はね、隊長もお兄さんが好きだったんだけどね……あの人が零番隊に行っちゃってから変わったのよ。隊長、零番隊嫌いだから」「そっか……（それにしても兄貴のこと、そう簡単に敵だなんて言えるのかよ……）」

一護はそのまま俯き、目を伏せる。

「あの人、そんなに悪い人なのかよ……」

「……隊長のお兄さんだもの。……すごくいい人よ」

「だよなあ……」

一護は呟き、更に顎をテーブルにつける。

ひんやりとした冷気が顎を冷やすが、先程から感じていた眠気が薄れることはない。

「悪い、俺も最近碌に寝てないから疲れた……休ませてもらっていないか？」

「構わないわ」

乱菊が答えると、一護は「さんきゅ」と頷き、ソファに横になる。

正直言つて疲れた、というより衝撃的すぎて目が冴えてしまった乱菊は、一護のオレンジ頭を見守りながら、腰を上げる。

そして自分の机につくと、筆を手を取った。

——寝付けない。

あの場の空気に居たたまれなくなって、私室に逃げて来たはいいが寝付けずにベッドでゴロゴロと寝返りを続けていた。

銀色の髪が枕の上に散り、似たような色彩でも明らかに違う輝きを見せている。

寝返りを打つたびそれは窓から差し込む朝日を反射し、ちかちかと瞬く。

羽織が皺になろうと、冬獅郎は気にしなかった。

只、気になるのは龍獅郎の事。そして、何故向こうが一護なんかを勧誘しに来たのかということ。

確かに一護の力は強大だ。霊圧だって隊長格に匹敵、下手したらそれ以上かもしれない。

しかし彼はあくまで死神代行で、しかも鬼道すら使えないのだ。

……そんな彼が王属特務だなんて、おかしい。

「……っか、王家って一体何してんだよ」

先陣切って虚を討伐するわけでもない。瀟霊廷が危機に陥ったら助けてくれるわけでもない。

しかも総隊長すら、霊王に会ったことがない。

その全貌は、零番隊に身内がいる冬獅郎にすら明かされていない。

得体のしれない部隊。

あまりにも、謎が多すぎる。

「……やっぱり俺は、王家は嫌いだ」

呟く。

誰に向けるでもなく、訴えるでもなく。

別に自分が王家を嫌っているということは公表することじゃない。

誰かに言うつもりも、ない。

恐らく、それを知っているのは乱菊と雛森くらいだろう。知っているからと言ってどうなるわけでもないのだが。

それにしても、隊長格以上の力を持っているその連中は、一体何を

している？

何のために王属特務は存在する？ 霊王とは一体何者だ？
そして、何のために一護を必要とする？

何もわからない。何もかもが納得いかない。

……考えるだけ、もやもやが増えて気分が悪くなるだけだ。

冬獅郎は溜め息をつく、上体を起こして添えつけのテーブルに腰掛ける。

机に乗った本を手に取り、ページを開いたが全く集中できなかった。

何をしても頭の中をぐるぐる回る王属特務。あいつの顔。一護を王属特務へと勧誘する、あの言葉。

家族がいるのに気にしない。おかしいと止めたのに、冬獅郎の言葉を聞いてくれない。

——『上の命令は絶対なんだよ』

そんな理由一つで、黒崎一護の一生を奪おうとしているあいつが、
どうしても許せない。

04：昔の兄と、今のあいつ（後書き）

冬獅郎のお兄さんなら、絶対に優しい人だと思っただけです。ね。
というか、雛森の事何も考えてなかったけど…どうにかかりますよ
ね（笑）

05：嫌いじゃないけど

静霊廷においても、王家においても、隊舎の構造に大差はない。
現世から零番隊に戻った龍獅郎と乱華は、現在執務室で向きあう形
になっていた。

自分の執務机に腰を落ち着け、思いつめたように頭を抱えている龍
獅郎。

乱華は、そんな彼に茶を差し出しながら問いかける。

「どう？少しは整理できた？」

「まあ、何とかな…柄にもなく取り乱してた、っていうことはわか
った」

深くため息をつき、天井を仰ぐ。

乱華の言つとおり、らしくなかったかもしれない。

そして、冬獅郎があそこまで怒る理由もよくわかった。

「何を言っただんだかな…冬獅郎の言つとおりだ…一護を連れて来
るって事は全てを剥奪するって事…アイツを殺すということなのに
な」

「わかったのならよろしい。あと、シロを継がせるって本気？あの
子は十番隊を何より大切にしてるわよ？」

「……俺は冬獅郎の意思を尊重するつもりだ」

先程の冬獅郎との会話を聞いていたら、全てが矛盾していると思う

だろう。

しかし今の龍獅郎の言葉に、偽りは何もなかった。

紛れもない本心。優しい冬獅郎に、王属特務は似合わないと思う。冬獅郎に王属特務は重荷だと思う。

そして何より、冬獅郎は王属特務を嫌っているのだから。

現に龍獅郎だって、時々折れそうになる時がある。

王属特務には、護廷と違って理不尽なところがある。非情なところがある。

…それが、龍獅郎にとつては辛いところだった。そしてそれは、乱華にしてもそうなのだろう。

だが彼女だけは、そういうことを表に出さない、どれだけ辛くてもいつも明るく華やかに笑っている。

だから龍獅郎も、弱音なんて吐かない。

「とにかく、お前が来てくれて助かった。ありがとう、乱華」

「当たり前でしょ、あたしは零番隊の副隊長。日番谷龍獅郎の副官。

…それに龍とシロは絶対に戦っちゃいけないと思うわ」

「でも冬獅郎は、これから俺と戦う気なんだろうな」

零番隊に入ってからというもの、冬獅郎が自分に対していい感情を抱いていないということは知っていた。

もともと、王属特務に対しては良い印象を持っていない冬獅郎。そんな部隊の隊長をやっている自分は、冬獅郎にとつてあまりいい印象は抱かない事はわかっている。

だけど龍獅郎には、どうしても零番隊に居なくてはならない理由がある。

乱華は、俯く龍獅郎を見て溜め息をつく、気合いを入れるようにその背を叩いた。

正直、彼女の力は常人の十倍程がある。今のも当然、かなり痛かったため、小さく唸りながら机に突っ伏した。

「ら、乱華！いきなりなにすんだ！！」

「辛気臭いオーラ丸出しよ。…とにかく、シロも話がわからない子じゃないし、話せばきつと理解してくれるわ」

「……そうだよな」

龍獅郎が王属特務に入ってからというもの、冬獅郎とは全くと言っていいほど会っていない。

話す機会なんか全くないため、すれ違ってしまえばそのままだ。冬獅郎が龍獅郎に対して何か誤解を抱いていたとしても、弁解のしようがない。

…だけど、話せばわかってくれる。冬獅郎はそういう子だ。それは兄貴である龍獅郎がよくわかっている。

出来るのならば、抜刀は無くして話しあいたい。

冬獅郎と本気で戦うなんて、龍獅郎にはまっぴらごめんだ。

龍獅郎は溜め息をつく、「よし」と自分に気合を入れながら立ち上がる。

「とにかく靈王のところに行ってくる。…一護について話さなければならぬ」

「その必要はないわよ」

龍獅郎に答えた、乱華ではない第三者の声。

この場所には龍獅郎と乱華しかいなかったはずだ。だとすれば突然現れ、誰にも気付かれずにここに居たことになる。

しかし彼らもそれには慣れているのか、全く驚いた様子など見せず
に、黙って声の主を見る。

高いところで結わえられた黄金の髪は、ふわふわとやわらかい印象
を醸し出す。

目を細めて笑うその仕草は、悪戯好きな少女のようにも見えた。

身長が150センチ程度の、小柄な女性。

大人な雰囲気醸し出している乱華とはちがった、まだあどけなく
幼さすら見てとれる。

しかしその悪戯な笑みは「無邪気」とは若干遠かった。

「孤成^{コナリ}、お前何も言わず入ってきて話だけ聞いているのやめろって言
ってるだろ」

「そーよ、気味悪いわ」

「何言ってるのよ今更。それより龍ちゃん、黒崎一護取り逃がして
きたんだって？」

孤成と呼ばれた女性は悪びれもせず。笑みをたたえたまま言う。

それをみて乱華は苦虫をかみつぶすが、龍獅郎は顔色を一切変えず
に「ああ」と答えた。

「取り逃がしたんじゃない。あいつは、王属特務には入るべきではない」

「へー、珍しいわね、霊王さまに忠実な龍ちゃんがそんなこと言うなんて。…それともシロちゃんとなにかあった？」

心底楽しそうに、笑みを深める孤成。

霊王直属の部下、孤成くるみは多少厄介な死神だった。

人の感情を読み取り、それを弄って楽しむ、多少性質の悪い趣味を持ち合わせる。

そしてその人の性質、考え方なども完全に見極め理解している、とんでもない女だ。

その中でも彼女のお気に入りは龍獅郎らしく、時々こうやって現れてはちょっかいをかけていく。

…市丸ギンのような性質を持った奴だ、と龍獅郎は思う。

そして彼よりももっと厄介。…龍獅郎も乱華も、彼女が苦手だ。

「…冬獅郎は関係ない」

「あ、そ。まあいいけど。で、どうするの？このまま黒崎一護放っておくつもり？」

「…アイツは人間だ。護廷ならばともかく、まだ人生も終わっていない。…冬獅郎に怒られたよ」

「あー、やっぱいい？龍ちゃんよりシロちゃんの方が頭カタイからね。それは仕方がないわよ」

肩をすくめ、おどけて見せる孤成。

こう、いちいち人を逆なでするような仕草が駄目だ、と乱華がぼやいていたのを思い出す。

実際今も絶えているのにやっとなのか、視線で龍獅郎に訴えていた。そして喋り方も、いちいち癪に障るらしい。

「…で、お前は何しに来たんだ？」

「何って黒崎一護について聞きに來ただけよ？他意はないわ」

「靈王の命でか？」

「勿論」

腕を組み、何処か勝ち誇ったように言う孤成。

龍獅郎は表情を変えず、そんな彼女を見る。

そもそも、彼女の聞き込みなんて言うのは靈王の命令以外にはありえない。

個人的な用事でやってくることは決して珍しくないが、それ以外の者の意思で動くことはない。

孤成は、龍獅郎以上に靈王に忠実な部下だ。そしてそれに逆らうものを、許さない――…。

「さて龍ちゃん、今回貴方に課せられた任務はなんだったかしら？」

「黒崎一護を連れてくる。…だが俺は、あいつは王属特務には適さないと判断した」

「龍ちゃんの判断だけで置いてきちゃったのね？」

「いいえ。龍はシロと戦おうとまでしたけど、あたしが止めたわ」

一方的に糾弾される龍獅郎。

それを見かねたのか、乱華が進み出る。

「これはあたしたち二人で決断したことなの。龍の独断じゃないわ」
「ま、いいけどね」

責めるように、孤成を見下ろす。

乱華が口をはさむまでずっと湛えていた笑みは、もう消えていた。
そして髪の毛をふわりと揺らしながら踵を返すと、部屋の扉に手をかける。

「わたしも龍ちゃんは嫌いじゃないから見逃してあげる。龍ちゃんがここからいなくなるなんてわたし寂しいもの。でも、なるべくそういうのは控えてね？」

「…任にもよるな。もう一度言って来いと言われても従わないぜ」
「だよ。大丈夫よ、その事についてはわたしが話しておいてあげるから」

いつの間にか戻った笑みを浮かべながら、ひらひらと手を振って出ていく。

乱華はその姿が完全に見えなくなったのを認めると、思い切り机を叩いた。

「龍！あの子なんなのよ！！て言うか何しに来たのよ感じ悪い！腹立つ！」

「落ち着け乱華…。アイツがああ言ってるんだ、どうにかしてくれるだろう」

「って龍、孤成のこと信じるの！？あの子なんな事を言って絶対何か企んでるわよ！ーもーやだ、どうにかならないの！？」

軽くヒステリックを起こす乱華のすぐ横を、銀色の何かが飛ぶ。

そしてすぐ後ろで、何かが壁に刺さる重い音。

…恐る恐る振り返ると、龍獅郎が投げた文鎮が壁に突き刺さっていた。

「お・ち・つ・け」

「…あ、当たったらどうすんのよ」

いくら死神でも鉄の塊が頭に直撃したらそれなりのダメージは受けるだろう。

龍獅郎は何事もなかったように席につくと、積みあがった書類を一枚手に取った。

「孤成が何をするかわからない、というのには同感だ。だけどアイツもそこまで性悪ではないだろ」

「…そうだいいけど。っていうかあたしは龍が人良すぎると思うんだけど」

「勝手に言ってる。口ばかり動かしてないでも動かさないとこも十番隊みたいになるぞ」

乱菊と違って、乱華はきちんと事務をこなす。

その為、龍獅郎が冬獅郎のように声を張り上げることがめつたになかった。

元々、龍獅郎は冬獅郎ほど怒鳴ることはないのだ。それはまだ冬獅郎が子供だからなのか、性格によるものなのかは分からない。

「それならそれでいいわよ。怒鳴って注目されて恥かくのは龍だし――」

「オイ、それはいつも冬獅郎が恥かいてると言ってるようなものだぞ」

「シロは許されるの。龍はダメ」

「なんだそりゃ……」

肩を落とす龍の横で、自分の席に座って筆を持つ乱華。毎日繰り広げられる、零番隊の日常。

そんな光景を、窓の外から見ている者が居るなんて、彼らは思いもしない。

「悪いわね龍ちゃん、あなたは嫌いじゃないから責めはしないけど、黒崎一護を諦める気はないわ……」

ふわり、と太陽光による光を孕んだ髪が揺れる。

その手は、腰に帯刀された斬魄刀にかけられていた。

06：らしからぬ心配

「はあ！！？」

思わず怒鳴った瞬間、びくん！　と一護の身体が跳ね上がった。

時刻は午前の6時になるうとしている。結局あの後も、冬獅郎は寝付く事が出来ずに部屋でグダグダと過ごした。

そして6時になるうとしているところで執務室に戻ってきたが、突然の一護の言葉に思わず感情的になってしまったのだ。

あり得ねえ。正直言って、過剰な驚きを見せる一護を前に日番谷は苛立ちを隠せない。一護はよほど怖かったのか、胸を押さえながら目を丸くしている。

「てめえ、今の状況わかって言ってるのか？　悪いがお前じゃアイツには敵わねえ」

あいつ、とは勿論龍獅郎の事。一護を王属特務に入れようとしている彼は、いつまた一護をさらにやってくるかわからない。

だったらやはり、一人で現世に戻らない方がいい。一護は学校があるから帰らなければならないと言うが、冬獅郎は反対だ。

……もし、授業中に龍獅郎が乗り込んできても、放課後待ち伏せしていたにしても、一護と龍獅郎じゃ力の差が大きすぎる。

どんな状況下であれ、一護が龍獅郎に敵うはずがないのだ。どれだけ拒んでもあがいても、結果は最悪の方向へ進展する。それはしっかりと目に見えていた。

それなのに一護は、一人で現世に帰ると言い出したのだから、声を上げたくなるのも無理はない。

冬獅郎はため息をついて少し気を落ち着けた。

「一日学校に行かないのと、一生行けなくなるとじゃ天と地ほどの差がある」

「そう、だけどさ……でも、冬獅郎は少し神経質だと思う」

冬獅郎の翡翠色を真っ直ぐ見据えながら、一護は言う。

「龍さんもさ、そんな悪い人じゃねえよ。多分ちゃんと話せばわかってくれるって」

「そんな保障ねえよ。それに俺は、アイツによってお前が苦しむのが嫌だ」

今でも、龍獅郎が冬獅郎の兄だということは変わらない。

いくら滅多に合わなくても、嫌っても、血縁関係までは絶ち切れない。

冬獅郎は、自分の親族が、仲間を傷つけることが嫌だ。しかもよりにもよって一護を。

一護はそれを聞いて、多少困ったように、天井に視線を這わす。そしてニツと歯を見せて笑った。

「大丈夫、龍さんは何もしねえよ。ちゃんと自分の兄貴信じてやる

うぜ？」

「……何でお前はそんなに樂觀的なんだ？」

大体、一護は龍獅郎の事などよく知らないはずだ。

そもそも冬獅郎に兄が居る事さえ、数時間前までは知らなかったのだ。それをそう簡単に信じ切って、余裕の表情を見せるなんて、あまりにも浅はかだ。自分には到底できない考え。

しかし一護は、笑みを崩さない。

「根拠は一応あるからな」

「根拠……？」

「だって冬獅郎の兄貴だろ？ 信じる理由なんてそれだけで十分だと思うぜ？」

その一護の言葉に、偽りなんていうものは全くないのだろう。そして彼の意見には、一人机で筆を動かしていた乱菊も頷いている。

一護の表情は、自信に満ちているようにも見えるのだから恐ろしい。

冬獅郎の兄貴だから？ なんだその理由は。そんな簡単なモノでいいのか？

勿論冬獅郎は納得がいかになく、思い切り目を細めて一護を睨む。そんな笑顔を向けられたって、頷けるはずがない。

そこが、樂觀的だと思った。冬獅郎は冬獅郎で、龍獅郎は龍獅郎。たとえどちらがいい奴だったにしても、片方は正反対の性格をしているという可能性があるではないか。

それでも彼は、冬獅郎の兄だから大丈夫だ、と尚自信満々に言う。

「だけど隊長、一護の言うこと間違つてないと思いますよ？ お兄さん、本当に優しい人だったじゃないですか」
「……」

ふと、筆を止めて乱菊が言った。その表情は、柔らかくとても優しくかった。

確かに、記憶の中の龍獅郎は、悪だとか非道だとか、そう言う言葉には程遠い人だった。
だけど今となつては、そんな龍獅郎を信じられない自分が居る。
それを今更信じろだなんて……。

あり得ねえだろ。そう思いつつも、何故が一蹴することができない。信じられない。そう心の中では決まっているのに、何を今更考えているんだ。

乱菊は、黙り込んだ冬獅郎を尻目に、勝手に話を収拾する。

「という訳で、帰りなさい一護。単位落としてあたしたちの所為にされちゃたまらないしね」

「別に乱菊さん達の所為にはしねえけど………ま、そう言うことで俺帰るな！ じゃーな冬獅郎！」

「ちよつと待てつつつてんだろバカ野郎！！」

一護は踵を返し、元気よく執務室を出て行こうとする。しかし、冬獅郎が咄嗟に這縄で一護の足をからめとったため、一護は思い切り倒れ、顔面を打った。

冬獅郎はそれを手繰り寄せ、ずるずると引きずる。

床と顔が摩擦され、正直熱いし痛かった。

一護はなんとか顔をあげて、涙目になりながらも怒鳴る。

「と、冬獅郎てめえ何しやがる！！」

「俺も行く」

「は？」

ぽかん、と口を開けて冬獅郎を見る一護。

それを見返す冬獅郎の瞳には、先程のような険しさは感じられないが、何処か不安を映しているようにも見えた。

「やっぱり心配だからな。学校まではいかねえが、送る」

午前六時ともなれば、日も昇り辺りはすっかり明るくなっている。

二時間ほど前までは無人だった外にも、書類を抱えた隊士たちがまばらに見られた。

冬獅郎は一護の横に並んで歩き、何も言わない。

先程から警戒しているのか、その表情は心なし固く、肩にも力が入

っているようだった。

それを一護は、何だか複雑そうな表情で見ている。

「……冬獅郎さ、何でそんなに龍さん嫌うんだよ？」

「何だ、突然」

「いやだつてさ……お前らの間になにがあつたのかはわからねえけど、普通躊躇いなく抜刀しねえだろうし、そこまで兄貴を警戒するかなーってよ」

ポリポリと頬をかきながら、一護は言う。

おそらく「兄貴」の立場に居る一護には冬獅郎の気持ちはわからないだろうと思う。

二人の妹を持つ兄貴として、龍獅郎の事はわかるのだろうが、冬獅郎の事はわからないはずだ。兄としての気持ちは理解しても、弟としての気持ちはなんてわからない。

しかしだからこそ、この男はそれを聞こうとしているのだとも思う。わからないのなら聞く。……賢明で妥当な判断だ。そして何より、一護らしい。

「……敢えて言うなら、俺が警戒しているのは、アイツじゃねえよ」

「へ？　じゃあ乱華さんか？」

「……俺は、王家が嫌いなんだよ、昔から」

すれ違った隊士には聞こえないよう、声のトーンを落として冬獅郎は言う。

恐らくこれは、大声では言えないことだろう。王族を嫌う護廷の隊

長なんて、何を言われるかわからない。

だが逆に、全く意に介されない場合もある事にはあるだろう。

……とにかく王家は嫌い。それだけは確かだ。

「何をしているのかわからない、誰がどんな窮地に陥ったって、絶対に護廷の前には現れねえ。得体の知れねえもんなんて、気味が悪いだけだ」

「……だからって冬獅郎は龍さんまで嫌うのかよ？」

「とんだ偏見だということは理解しているつもりだ」

しかし、一度しみついてしまった印象は簡単には拭えない。一度抱いてしまった嫌悪は、簡単には覆せない。

そんなこと、冬獅郎に限らず誰だって一緒だろう。

腹立たしくもしつこくまとわりつく感情、それによって葛藤することにはもう疲れた。

「それに、アイツは簡単にお前を連れていくって言ったんだぜ？
それが拍車をかけた」

「……それは、そうだけどさ」

何も言えなくなったらしい一護は俯き黙り込んでしまう。

冬獅郎はそんな彼を横目で見ると、空を仰いだ。

昔は、優しくて頼りになる龍獅郎が好きだったことを、勿論覚えて
いる。

護廷に入った時に色々と教えてくれたのも龍獅郎だったし、辛いことがあったときに側にいてくれたのも龍獅郎だ。

優しい兄貴、それは否定するつもりはない。なかったモノにするつもりはない。だけどそれは既に過去の話なのだと、冬獅郎は思っていた。

……彼が変わってしまった事が、何だか辛い。

変わってしまったこの関係が、変わってしまった自分の感情が辛い。……一護までもが龍獅郎を信じようと言うのに、何故自分にはそれができないのだろうか？

「……昔に戻れたら、という感情があるのも事実だ」

黙り込んでしまった一護のフォローをするように、冬獅郎は呟く。

一護は俯けていた顔を上げ、冬獅郎を見た。

「やっぱり昔みたいに、気兼ねなく話せたらと思うぜ。だけど無理だと思ってる自分もいる。……矛盾だ」

「……戻ろうと思って戻れないことはないと思う」

その答えは、冬獅郎の想像を全く裏切っていなかった。

まさに一護なら言うであろう言葉。想像通りの、一護の返し。だからと言って文句を言うこともなく、彼の言葉に耳を傾ける。

「冬獅郎が思うなら、龍さんも同じ気持ちだと思っぜ？」

「……お前、俺が思うこと全てアイツも同じだと思ってんなら大間違いだぞ？」

「わかってるって。……諦めなければ不可能なことはねえぜ」

ふわり、と風が巻き起こる。

いつの間にか建物は全くなり、周りには草木が植えられるだけになっていた。

さわさわと流れる草。ざわざわとこすれる木の葉。

一護は空を仰ぎ、言う。

「もう一度言っぜ冬獅郎、俺は、お前の兄貴なら絶対にいい人だと思っ」

「……言ってる」

冬獅郎は、思わず苦笑する。

自分の兄貴だからいい人だ、なんて正直どんな理由だ、と思っ。そしてそんな一言で納得されるのも、正直不服だ。

「て言うか冬獅郎、何処行く気だ？ 穿界門こんなところにあるのかよ？」

周りを見渡せば、そこにあるのは木、木、木。

完全に瀟靈廷の外れであるそこは、心なしに冷たく暗い雰囲気を出している。

冬獅郎は辺りを見回しながら苦笑すると、諦めたように溜め息をついた。

「そうだな、やっぱり誤魔化しは利かねえか」

「へ？ どういうことだよ？」

「どうやら俺は、どうしてもお前を現世には返したくないらしい」

それは自分でもよくわからない、抑えられない胸騒ぎ。そしてらしくないよな、と自嘲してしまう。

真っ直ぐに一護を見据えながら言えば、彼は驚いたように目を見開いた。

このまま一護を現世に帰してしまったら後悔するような気がしていた。

このままでは終わらない。きっと向こう側はまたやってくる。そして彼らに、一護では敵わない。

だから自分が彼の側にいて、彼を王族から護りたいのかもしれない。

相手が自分の兄ならば自分が彼を阻止する。そう思っていた。

「悪いが時間稼ぎに無駄な道 came。穿界門なんて、何処に居ても開けるんだけどな」

「……そんなに、俺の事心配してくれてんのかよ？」

「そうだな、心配だ」

素直に答えれば、ますます目を見開く一護。

それはよほど以外に見えるのか、彼は驚きを隠そうとはしない。

無駄な時間を経過させて、始業時間が過ぎれば一護も諦めると思っていた。

しかしそう言う策略は、自分には合わないらしい。進むと同時に、どこか自己嫌悪が湧いてきたというのも否めない。

虚を突かれたような表情で冬獅郎を見ていた一護は、やがて「何言ってるんだよ」と口角を上げた。

「俺の心配なんてらしくねえんじゃねえの？ 大丈夫だって、俺が簡単に拉致されるとか思ってたのか？」

「いや、だが……」

「大丈夫だ、ありがとな冬獅郎！ とにかくもう帰んなくちゃ学校間に合わねえから、頼む、穿界門出してくれ！！」

パン、と手を合わせて懇願するように言う一護。

冬獅郎はためらうようにそれを見ていたが、ここで一護が引かないということもわかっている。

そしてやはり、彼なら大丈夫なのだろうと思ってしまった。

「わかった。悪かったな、無駄に足止めして」

「別にかまわねえって。学校終わったらまた来るぜ」

冬獅郎は地獄蝶を放ち、穿界門の解錠をする。

現れた襖はゆつくりと開き、そこから現世へと続く道が露わになる。

一護は、軽快に門をくぐると、手を振りながら走ってゆく。
やがてその姿は見えなくなり、門は空気に溶けるように消えていった。

一人になった空間で、冬獅郎は溜め息をつく。

一護ならああ言って一人で帰ることは想像できたはずだ。

それでもそれを考えずに、ここまで来てしまったのだから、案外自分も色々と弱っているのだろうと思う。

少なくとも、龍獅郎にまた会うことになるなんて、思っていなかったから。

ざわ……と木々がざわめく。早朝だというのに、その爽やかさは全く感じず、むしろ気味が悪かった。

まるで今の冬獅郎の気分のように、はつきりしない不安定な空気が漂っている。

「……」

冬獅郎は辺りを警戒し、後ろを気にしながら歩く。

太陽は雲に隠れ、心なし暗鬱な空気を醸し出している。

刹那、何者かが冬獅郎の背後に立ち、彼の口許を手でふさいだ。

07：偽りの少年

考えたら、地獄蝶を連れて断界を歩くのは初めてかもしれない。

ここを通るたびに襲ってきた壁は、きつちりと両端に収まり、襲ってくるような気配はない。

地面も、壁も、安定しているとここまで安心して歩けるのか。一護はそう思い、軽く感心する。

そう言えば初めてやって来た時は、もつとすごいモノに襲われた。正直言って断界にはいい思い出がなかったが、これで少しは印象が変わりそうだ。

やがて見えてきたのは、空座町へと続く入口。一護はそれを認める と駆け出し、一気に入口をくぐりぬけた。

「はー、なんかいつもと違って清々しいぜー!!」

いつも断界を出れば空中で、落下していたモノだが今はちゃんと地面に設置されていた。

それも、丁度よく家の前なのでなんだかうれしい。思わず歓喜の声を上げながら、大きく伸びを試みる。

一護はそのまま消えてゆく門を見送った後、跳躍して屋根の上に登った。

今回は代行証を使ったため、身体の中にコンは入っていない。

一護はあけっぱなしだった部屋の窓を乗り越え、ベッドに横たわる身体の中に戻った。

数時間ぶりの、自分の肉体。一護は腕を回しながらベッドから這い

出る。

時計を見れば、午後の7時を示していた。いつもの起床時間には多少早い。しかし、もう一度寝るには目が冴えきっていた。

一護は無造作にTシャツを脱ぐと、制服に着替え始める。

確か今日は英語の時間に小テストがあつたはずだ。一時間近く時間に余裕があるが、その勉強をしていればいいと思う。

しかしここで、ある事に気がついた。

ドドドドド……とけたたましい音を立てながら、何かがこちらに近づいてくることに。

こんなの、日常の茶飯事だ。今更何の音だと動揺することでもない。そう、この音の原因は――

「グッモーニンっイッチゴ――!!!!」

父、一心が毎日仕掛けてくる傍迷惑な朝の挨拶だ。

一護は飛んできた一心の足をひよい、と避け、カバンの中から英語の教科書とペンケースを取り出す。

一心は、その勢いにあらがうこともままならずベッドに突っ込んだ。

「うつっ、一護め、とうとう父ちゃんの朝の挨拶までを拒絶するようになったか……!」

「何が挨拶だコノヤロウ。挨拶ならもつと爽やかにしやがれ」

「やあ、おはよう一護くん! 清々しい朝だね!!」

「……出てけてめえ」

こいつに、爽やかなって言うんじゃない。正直言ってその反応はかなり気持ち悪く、そしてウザイ。

一護は、朝っぱらからハイテンションな一心を一蹴すると、机の椅子に腰かける。

正直、朝っぱらからコイツの相手をするのは疲れる。このおやじは、無視するのが無難だ。

一護は教科書を開くと、ぶつぶつと呟きながら単語を頭に詰め込み始める。

後ろで一心が「無視しないでよぉ!」「第二撃行くぞ——!!」と騒いでいるのがウザかった。ウザすぎて腹が立ち、勉強に集中できないのだ。

「いつ、せーのー……」

「うっせーんだよ!! こっちは勉強よ、ぶふっ!!」

勉強してんだ。そう続けたかったのだが、それは飛んできた一心の足によって阻まれてしまった。

第二撃行くぞーと言っているのは聞いたが、本当に来た。

一護は顔面を押さえながら唸り、「ほらみろ——!!」と仁王立ちしている一心を睨みつけた。

「朝っぱらからウザったいんだよこのクソ親父!! さっさと失せやがれ——!!」

「おおっ……朝から近所迷惑だぞ一護……」

「てめえの所為だ！！　つか、てめえの方がよっぽど迷惑だわ！」

怒鳴ると同時に、ボキン！！　と手に持っていたシャープペンシルが折れる。

一心は再び「うおお……」と唸ると、後ろ歩きに部屋を出て行った。そのまま階段から落ちた凄まじい音が聞こえる。「お父さん何してるの！？」という遊子の驚きの声が聞こえたが、取り敢えず放っておこう。

一護は溜め息をつくくと、折れたペンをゴミ箱に放り投げ、背もたれに身をもたせる。

一心の登場だけで、今日一日のエネルギーを半分以上消耗した気分だ。

一護は再度溜め息をつくくと、無造作に教科書をカバンへと放り込む。今ので、すっかりやる気が失せてしまった。

そのままベッドへと倒れこみ、ごろんと寝返りを打つ。

只真っ白いだけの天井。それを見ながら思うことは、やはり日番谷兄弟の事だった。

王家が嫌いだと言っていた冬獅郎。そんな彼に刀を向けられれば、応戦しようとしていた龍獅郎。

あの二人の間で何があったのか、多分よほどの事がなければ、あんな風にはならない。

一護だったら、血のつながった兄弟に刀なんか向けられない。

「俺だったら、兄貴の事すっげー慕うのにな」

自分が兄貴だからこそ、思った事がある。自分にも、兄か姉がほしいと。

兄貴という存在が居ないからこそ、憧れるのかもしれないが、少なくとも簡単に嫌うことはできないだろう。

それに、あの冬獅郎の兄貴が、弟に嫌われるほど酷い兄だとは思えない。

「で？ お前なら慕うから何なんだ？」

「うわあっ！！」

突然視界に入ってきた、銀髪の少年。一護は悲鳴を上げながら上体を起こし、彼を見る。

彼は翡翠色の双眸を丸くしながら、驚愕に目を見開く一護を見ている。それは「そこまで驚くことか？」と言っているように見えた。

「と、冬獅郎！！ 何で居んだよ！？ つーかいつ入ってきた！？」

「ついさっきだな。なんでも何も、用があるから来たんだが？」

あっけらかんと、冬獅郎は言う。

用があるから来た。それはそうだ。しかし本当に気配も何も感じなかったのだ。物音も、気配も何も感じないとなれば、彼は脅かしに来たのではないかと思う。

しかしやはり彼自身には悪気が全くなかったのだろう。きょとん、

とこちらを見られると、どうも文句を言う気が失せてしまう。

一護は「何だよ……」と頭をかきながら、ベッドから降りる。

「で、用って何だよ？ やっぱり心配だから追ってきたとか言うんじゃないだろうな？」

「いや、それはもういいんだ。ちょっと厄介なことになってな……俺一人じゃ困難だから、手を貸してほしい」

「厄介な事って……？」

冬獅郎がそう言うのだから、よほどの事なのだろうと思う。

学校があるからと戻って来たのに、態々一護に助けを求めてくること事態が何だからしくないのだ。だとすれば、やはり何かとんでもない厄介事に巻き込まれたのだろうと思う。とにかく、一護に拒絶する理由はなかった。

「その事については現場を見た方が手つとり早いな……ついてきてくれるか？」

「まあ、構わないけど、時間かかるのか？」

「悪いが」

「わかった」

一護はそう言うのと、机の引き出しから、安眠していたコンを取り出す。学校に行けないのは仕方がないだろう、と既に割り切っていた。とにかくノートはとれないだろうが、出席数を稼ぐだけでも意味がある。

突然起こされたコンは「一護てめー、俺様の安眠妨害するとはどう
いう見だコラァ!!」と暴れ始めるが、全く相手にする気はない。
むしろ五月蠅いから無視するのが賢明だ。
無理やりその口到手を突っ込んだ一護は、丸薬を取り出すと丁寧に
それを拭いた。

「……拭く必要があるのかよ?」

「汚ねえだろ。それを口に入れるんだぜ?」

冬獅郎のそんな些細な疑問に答えながら、丸薬を飲み込む。
肉体を離れた魂は、袴を翻しながら冬獅郎の横に立った。

「つーわけでコン、俺ちよつと出てくるから、ちゃんと学校行けよ
な」

「な、なんだよ突然! 授業とか面倒……」

「出るだけでいいから。ノートはチャドに言えば貸してくれるしな」

一護は自分の肉体に入ったコンに告げると、窓枠に足をかける。
正直、コンに学校へ向かわせるのも不安だが、出席日数が危ういの
も事実なのだ。

とにかく学校に行けば居眠りしてようが、授業を聞かなさうがど
うでもいい。

……女子達にちよつかいを掛けられるとなるとまた別問題だが、そ
れはチャドや織姫達が止めてくれると信じている。

一護は「よろしくな、コン」と言い残し、窓を乗り越えた。日番谷

もそれに続く。

「な、なんだよー、大体学校ってどうやって行くんだよコノヤロー……」

「で、厄介事って何だよ？ 虚関連か？ それとも王族側が何かしてきたのか？」

「わからん」

「わからんって……随分と無責任だなオイ!!」

屋根を飛び越えながら、一護は冬獅郎に問いかける。虚が何か厄介事を引き起こしたのか、それとも、王族の方が何かをしかけて来たのか。しかし冬獅郎はあっさりと「わからん」と答えてくれた。

そんな返答はないだろう……予想もしなかった言葉だっただけに、思わず声を荒げてしまう。現場に行かなければ状況は説明しようがないと言っても、それぐらいはわかるモノだろう。

一護は前を見たまま振りかえらない冬獅郎の背を見ながら、溜め息をついた。

「でも俺を呼ぶからには、よほど大変なんだろ？」

「そうだな、むしろお前じゃないといけねえんだ」

「俺じゃないと……？」

聞き返すと、冬獅郎は「ああ」とだけ答えて黙り込む。今の状況について、あまり詳しく話す気はなさそうだ。

諦めた一護は「まあ、いいけどよ」と言いながら視線を下に向ける。

一護の通う学校は、比較的家から近いため、早く出る必要はないが、なんだかんだでもう登校時間だ。

制服を着た学生が多くみられ、その中にサラリーマンやOLも混ざっている。

見慣れた自分の高校の制服を着た生徒もその中には居た。

「……なあ冬獅郎、もしも俺が学校に通えなくなったらどうなると思う？」

「何だイキナリ」

「いや……もしも王属特務に入って、学校に行かなくなったらほかの連中はどうするのかなって」

自分の抜けた穴など全く気にせず普通に過ごすのだろうか。

それとも皆、寂しがるのだろうか。ふと、そんな事を疑問に思う。

そんなこと、今まで考えたことはなかったが、万が一通えなくなる、と思うと考えてしまうモノだ。そして考えようによっては、空しさすら覚えてしまう。

冬獅郎は、一護を一瞥すると真剣な表情で答えてくれた。

「どうするも何も、お前の記憶がそいつらから消えることになる。

……王族に行くということはそう言うことだ」

「でも、龍さんが王属特務に入っても、冬獅郎は龍さんのこと覚えてたろ？」

「死神と人間とじゃ違うだろ」

冬獅郎はぶつきら棒に答えて、溜め息をつく。

そしてイキナリ立ち止まると、一護の腕をつかんだ。

「え、ちょ、何この手」

「飛ぶぞ」

「飛ぶって……うわぁっ!!」

突然巻きあがった風が、一護の全身を叩く。

そのまま身体は日番谷に引かれて上昇し、その風圧で目が開けられない。

かなりの距離を飛んでいるだろう。その時間は、とても長く感じられた。

そのスピードは段々と緩み、やがて足が地面につく。

掴まれていた腕も離され、一護はゆっくりと目を開いた。

ここは雲の上なのか、それともまた違った世界なのか、床には真っ白い雲が密集し、辺りは真っ青だ。

初めて見る光景。それを前に、一護はぽかんとしてしまっ。

「冬獅郎、正解して飛んだ方が早かったんじゃない？」
「そこかよ」

まるきり観点がずれている一護の言葉に、冬獅郎は呆れたのだろう。思わず、といった様子で溜め息をつかれてしまった。そしてそのまま一護を放って歩き出し、その前に立つと促された。

目の前に立つのは、瀨霊廷の門よりずっと立派なモノ。

この先にあるのは瀨霊廷ではないことを、一護は理解した。

冬獅郎は一体、一護を何処に連れて行こうとしているのか。一体、何がしたいのだろうか。

「……冬獅郎、何処だよ、ここ？」

「この先が王家の敷地だ」

「え……？」

背を向けたまま答えられたその言葉を疑ってしまう。

王家。つまり冬獅郎は、王属特務へと一護を差し出そうと言っのか？ 龍獅郎が迎えに来た時はあんなに感情的になってまで拒否していたのに。

一護の事を考えて、一護の考えを尊重して、戦おうとまでしてくれたのに、どうして今更……？

呆然と立ち尽くす一護。

冬獅郎は、嘲るように鼻を鳴らす。

「逃げんのかよ、黒崎一護。悪いがここまで来たからには、帰れねえぜ？」

「冬獅郎、お前……どういことだよ……？」

08：幻滅

音も気配もなく現れたモノは、冬獅郎の背後に忍び寄った。

のばされる手と、長い指。それは彼の口元をふさぎ、まるで拘束するように引き寄せる。

周囲の不気味な気配が、冬獅郎の戦慄を叫び、背中の中輪丸に手をかける。

……しかし冬獅郎に触れたのは豊満な胸のやわらかい感触と、聞きなれた声だった。

正直、それだけで自分の後ろに忍び寄ってきたモノが誰なのかわかってしまった。というより、こいつしかないだろう、と思う。

「あ……目塞ぐつもりだったのに口ふさいじった……」

「……松本てめえ、隊長の背後とって何を考えてやがる」

「あたしごとしに後ろ取られるなんて、これが敵だったらどうするんですか？」

冬獅郎の背後に立つ彼女、松本乱菊は、何事もなかったように言う。

……冬獅郎には、彼女の行動の意味が全く理解できなかった。というか、紛らわしい。

冬獅郎は溜め息をつく、呆れたように彼女を仰ぎ見た。

「で、何してんだよ、お前は」

「ほら、やっぱ色々あったから追ってたんですけど、隊長も一護も全く気付かなかったから」

「……俺は残って仕事してると言っただが？」

朝の気温が低いせいではない。確実に、乱菊の体感温度が2度ほど下がった、筈だ。何しろ霊圧を高めたのだから間違いない。

それに危機感を覚えたのか、乱菊は両手を顔の前で振りながら「やだなー！」と仰々しく言ってきた。

「あたし副隊長ですよ？ 隊長の背中を護るのが仕事ですよ？ なんか良くないこと起こりそうな気がして不安だったんですよ！」

「よくないこと……か……」

相変わらず、彼らの周りを囲む木々は不気味な雰囲気醸し出し、ざわざわとゆれている。

乱菊の言葉は場を誤魔化す出まかせではないかもしれない。……実際に冬獅郎も、何か嫌な予感がするのだ。

やっぱり、一護を一人にしておくのは不安だ。

龍獅郎も王属特務、勿論その力は護廷より、冬獅郎より優れており、想像を絶する行動に出るかも知れない。

だったらやはり、今の状況で一護を一人にするのは危険ではないか。

冬獅郎は舌打ちをすると、穿界門を呼び出す。何処からやって来たのか、彼の小さな肩に地獄蝶が止まった。

「た、隊長！？ どうしたんですか！？」

「黒崎のところに行ってくる。……やはり放っておくわけにはいかないかもしれない」

「だ、だったらあたしも……」
「お前は隊舎に戻ってろ」

乱菊の言葉を遮り、肩越しに振りかえる。

「黒崎を連れてすぐ戻ってくるから、今度はちゃんと仕事してろよ」

時刻は既に午前の8時を回っている。どういう訳か、尸魂界から現世に来るまでにかなりの時間がかかったのだ。

正直言つて、それは前代未聞であり、かなりの問題だ。しかし完全に焦りを覚えている冬獅郎には、そんなことを考えている余裕はなかった。

冬獅郎はなりふり構わず、閉ざされた一護の部屋の窓に手をかける。確か、この時間一護はまだ家に居るはずだ。

幸い、鍵は閉められていないらしく、カラカラと単調な音を立てながら開いた。

そして視界に入ったのは、制服を着たままうつ伏せになっているオレンジ色の頭。

冬獅郎はそれを踏まないように飛び越え、フローリングに着地する。取りあえず姿を見て安堵した。そしておもむろに名を呼んで起こそうと試みる。

「黒崎」

「……………」

うつ伏せになったまま、一護は答えない。どうやら制服を着たまま、しかもこんな状態で熟睡しているようだ。

色々あったから疲れてしまったのか。それは仕方がないと思うが、うつ伏せは苦しくないのだろうか。

しかも学校があるからと帰ったのに、これでは遅刻してしまうだろう。

冬獅郎は溜め息をつく、ベッドに身を乗り出し、肩を小さくゆする。

「オイ黒崎。黒崎！」

「うつせーぞこのクソガキ！！ 俺様の安眠を揺るがしやがって！！」

ガバァー！！ ともものすごい勢いで顔を上げた一護は、目を向いて怒鳴りつける。冬獅郎は、かつてない一護の剣幕に圧されてしまった。翡翠色の目をまん丸に見開き、多少のけぞってしまう。一護はそんな冬獅郎を気にせず、怒鳴るばかりだ。その様子は、呆れるほどに必死だ。

「もう少しでなあ、井上さんと乱菊姐さんの神々の谷間が炸裂する

ところだったんだぞ！　そこにてめえが入ってきやがって、どーしてくれんじゃコラア！！」

「……」

あらぬ言葉を口にする一護に、最早啞然とするしかない。

というか人格も完全に変わっているように思えた。思えたというか、絶対にこいつは一護じゃない。

冬獅郎の知る一護は、絶対にこんなことを言うはずがなかった。

それもそうだ、何しろ彼は一護ではなく、コンなのだから。取り敢えず冷静に考えて、それを理解する。

あのエロぬいぐるみ（と乱菊が言っていた）ならば納得の行く反応だ。

取り敢えず冬獅郎は、思い切り凄んで来るコンから視線を外すと、天井に視線を這わす。

やがて、散々騒いで気が済んだのか、やっと落ち着いたコンは溜め息をつくと、ベッドの上に胡坐をかいた。

「一護なら居ないぜ」

「あ……？」

「つーかさっきお前が連れてったんだろーが」

ガシガシと頭をかきながら、大きな欠伸を漏らす。

お前が連れてった、つまり、冬獅郎が一護を連れて出たということ。しかし当然冬獅郎にはそんな覚えはない。

自分は先ほどまで尸魂界におり、そして今初めて彼が心配でやってきたのだ。あまりにおかしすぎる彼の言葉に、呆然と呟いてしまう。

「……俺が黒崎を連れてっただと？」

「あ？ 何だよお前、覚えてねえって言うのかよ？」

覚えていない、というより、一護を連れてゆく理由がないのだ。
むしろ、冬獅郎が現世にやってきたのは今だ。そのため一護を連れていくといっても、それは不可能だ。
だったらコンの言っていることは一体どういうことか。

……冬獅郎は、一瞬でその意味を悟り、表情を陰しくした。

「……それで、黒崎は何処に行った？」

「あん？ しらねーよそんなの、只とにかくお前についてった……
って何でお前がそんなこと聞くんだよ？」

コンも漸く、冬獅郎の質問に疑問を覚えたらしい。
一護の琥珀色の瞳を訝しげに細め、冬獅郎を見る。

やはりか、と思う。やはり一護は、自分の偽物に連れ去られたのだ。
そして、冬獅郎の姿を偽った王属特務の者が彼を連れて行ったから、
現世に来るのにも時間がかかった。
つまり、その途中では合わせないように時間稼ぎをされた、ということだ。

「くそっ！ あいつ、穿界門にまで細工してやがったってことか！

！
」

「は？　つーかどういことだよ？　もしかして一護の野郎、また面倒な事件に巻き込まれてんのか？」

思わず声を荒げる冬獅郎に、身を乗り出したコンが尋ねる。

面倒、なんて言う生易しいモノではない。彼の一生を決める、重大な事件だ。

このまま王属特務に入れられ、二度と現世に帰ってこれなくなれば、彼の人生はそこで終わる。

これからは王属特務の死神としてメノスグランデの討伐などに当たらなければならない。

……しかしメノスグランデが出てきて、王属特務が援護にきたためしは一度もなかった。

だから冬獅郎は、奴らは何をしているのかと思う事がある。だから冬獅郎は、彼らにいい印象を持たない。

そしてどちらにしても、色々と犠牲にしないでならない事のある王属特務に、一護は向かない。

「……お前、もしも黒崎が二度と戻ってこなかったらどうする？」

「はあ？　何言ってるんだよアンタ？」

それは、咄嗟に口をついた質問だった。

もしも黒崎家から一護が居なくなったら、この家の者はどうするのだろうか。いや、どうするのかなんて聞いただけ野暮だった。

家族なんてかけがえのない存在だ。

そんな大切な者が突然目の前からいなくなったときの絶望感と、空白感とも何とも言えない虚しさを、冬獅郎はよく知っていた。

今まで当たり前のように近くに居た者が居なくなることは、平常心で居るには多少辛すぎる。あまりにもキツすぎる。

それでもそれを繕おうとしていた冬獅郎は、いつしか完全に心を閉ざして嫌いだと思い込むようになっていた。

嫌いだと、もうどうでもいいと思ってしまえば、いくらかマシだった。

しかしその反面、同じような位置に居て素直に受け入れている乱菊を見て、自分が虚しくなったこともある。

コンは鼻で笑うと、腕を組んで言った。

「バカ野郎、一護が帰ってこねえとかあり得ねえだろ。アイツは地獄に落ちても這いあがってくるだろうぜ。あー、ウザいうざい」

「……その通りだな」

冬獅郎はそう答えると、窓枠に手をかける。

とにかくそうときまれば、自分がやるべきことは只一つだった。

このまま絶望感にさいなまれていても、怒りの炎を燃やしているだけでも、何も始まらない。

そうしている暇があるのなら、無理に乗り込んででも一護を連れ戻さなければならぬ。

「待つてろ、黒崎は絶対に俺が連れ戻す」

「あーそうかい。よくわかんねーけど頑張ってきな」

他人事のように、コンは言い捨てた。

一護の事なんかどうでもいいというように、むしろ戻ってこないと言えど「それはそれでうるさいのが居なくなつて清々するぜ！」とでも言いそうだ。

……そう言う傾向が自分にもあつたからか、彼の思っている事がよくわかり、何だか笑みがこぼれてくる。

冬獅郎は、窓枠に乗り出すと足に霊圧を込めて板を蹴った。

取りあえず向かう先は十番隊舎。そこで、取ってこなければならぬものがある。

むしろ、それがなければ、乗り込むと言つても不可能だろう。

「……本当に強硬手段に出やがるとはな……見損なつたぜ」

一護が頑なに龍獅郎を信じると言うのだから、少しは信じてみようと思ひ始めていたのに。

その矢先にこれとは、龍獅郎はつくづく己の事を幻滅させることが好きみたいだ。

一体何が、彼をそんな風にしたのだろうか。そう思い、舌打ちをする。

やはり龍獅郎は変わってしまった。それが事実なのだろうと思う。あの頃の龍獅郎はもういない。どんなに求めたところで戻ってはこない。

それは完全に真実として固められてしまった。

冬獅郎は断界をひたすら瞬歩で走る。

早く取りに行くものを取りに行つて、早く一護を迎えに行かなければならない。

そしてこれは、誰の手も借りずに一人で行くつもりだった。

王属特務は、護廷よりずっと強いことは知っている。

乗り込むのには危険すぎるところだということにはわかっている。

だからこそ、他の者は巻き込みたくなかった。

自分の兄が起こした問題に、部下たちを巻き込むわけにはいかない。乱菊にも、置き手紙だけを残して何も言わずに出ていくつもりだ。

「……てめえが、そう簡単に変わるような奴だとは思ってなかったぜ。……兄さん」

前方に見えてきたのは瀨霊廷の光。

思わず目を細めてしまったのは、それが眩しかったからか、兄を思つてかは本人にもわからなかった。

09：俺の目は誤魔化せねえ

「冬獅郎お前……どういうことだよ……？」

手を貸してほしい。そう言うからついて来れば、連れてこられたのは王家の門だった。

つまり彼は、一護に王属特務に入れと言っている。

龍獅郎に刀を向けてまで拒んでいたのに、彼自身が一護をこの場所に連れてきた。

にわかには信じられない展開。一護は呆然と立ち尽くす。

「どうもこうも、ここに来たからにはわかる筈だぜ？」

「わかるから聞いてんだよ！ どうしてだ！ お前が俺に行くなって止めてくれたんじゃないのか！！」

——『黒崎は渡さない』

そう言っていた時の、冬獅郎の冷たい視線と声音。

そして、涼やかな翡翠色の奥にある激情の炎。それは、今でもはっきりと覚えている。

なのにこの少年は、あの時と正反対の事を言うというのか。

それが信じられない。受け入れられない。

そして思った。コイツは、本当に冬獅郎だろうか？

「とにかく、今更後悔しても戻れねえよ。悪いな、黒崎」
「……てめえ、冬獅郎じゃねえだろ」

一護は俯き、低く言う。その手は、背中の斬月にかけられていた。そうだ、コイツは冬獅郎じゃない。冬獅郎ならやはり心配だからとやってきても、感情を覆してこんなところに連れてくるわけがない。手を貸してくれとやって来ても、一護の意思を無視してこんなところに連れてくるわけではない。

……コイツは、冬獅郎の姿をした別の者だ。

相手は、一護の発言に驚いたように目を丸くしている。まさかこんな早くにばれるとは思わなかった。そう言うように。そしてクツ、と喉を鳴らし、楽しそうに目を細めた。隠すつもりはないらしい。

「へえ、わかるんだ？」

「冬獅郎が俺をこんなところに連れてくる筈ねえからな……だからてめえは冬獅郎じゃねえ」

「意外ね。コレ、よっぽど信じてないと見抜けないわよ？」

悪戯な笑みを浮かべながら、冬獅郎——彼女は背中の斬魄刀に手をかける。

形はよく知った、氷輪丸。しかしその実態は、全く別の斬魄刀なのだろう。

一護は斬月の巻き布を外し、構える。彼女は、やはり楽しそうに一護を見ていた。

「悪いけど、俺の目は誤魔化せねえよ」

「意外と洞察力、すごいんだ？　だから霊王さまもキミを引き入れたいのかな？」

「俺は王属特務に入る気はねえ！」

恐らく、一護が零番隊に入することを望む者はいない。

そして一護自身も、零番隊に入る気は毛頭ない。

冬獅郎が必死に自分を止めていた。そして仲間を護りたいのに、それすらままなくなることが嫌だ。

一護には、死神代行で十分だった。それ以上にも、それ以下にもなる気はない。

死神代行黒崎一護。その名でずっと、やって行くつもりなのだ。

「何者だアンタ。もしかしたらと思ったけど、龍さんではねえな？」

「そうね。龍ちゃんは関係ないもの」

すらり、と伸びてゆく四肢。白銀の髪は、僅かに色づき、黄金に輝く。

伸びきった髪の毛は風に煽られて、ふわりとゆれた。

現れたのは、黄金の髪を高い位置でまとめた、小柄な少女。

「あたしは龍ちゃんの部下じゃないしね。霊王さまのご意思にしか従わないわ」

「ちっ……完全に冬獅郎に化けてたのかよ……」

一護はその姿を認め、忌々しげにつぶやく。そして思った、戦いにくい、と。

このまま、無理に彼女を倒して現世に帰る気だった。しかしこんな少女相手では、良心が疼く。

只の少女相手に、どうやって本気で戦えというのだろうか。

「そうね、まずは名乗るところかしら。あたしの名前は孤成くるみ。斬魄刀の能力はご覧のとおり、自由自在に姿を変えることができるわ」

「だから完全に冬獅郎の姿を偽ることができたのか……」

しかし、口調までが完璧だったと思う。

それこそ、ここに来るまでずっと、彼女の口調に違和感を覚えなかったのだ。

冬獅郎だと思い込んで、油断して、ついてきた。だとすれば孤成は、冬獅郎の事を知っているとしか思えない。

「とにかくここまで来たからには、帰さないわよ。あなたには、霊王さまの前に来てもらわなくちゃ」

「悪いけど、俺は現世に帰らなくちゃならねえんだ。俺は、死神代行だからな」

斬月を握り直し、一護は真っ直ぐ孤成を見つめる。

しかし瞬間に、目の前から孤成の姿が消えた。
ハッと目を見開き、身体を反転させる。そして飛んできた鬼道を、
斬月で受け止めた。

「すごい、受け止めちゃうんだ」

「何なんだよ、てめえ……」

動きが全く読めなかった。

今のも辛うじて受け止めたが、それはまぐれに過ぎなかった。

口元に余裕の笑みをたたえ、一護の正面に立ちはだかる孤成。

……おそらく次攻撃をされたら、避けることもままならない。少なくとも今の一護では、彼女の動きを目で追うことはできなかった。これが王属特務の力か、と思う。今まで戦ってきた死神や、十刃の比ではなかった。

そしてやはり、自分に王族はレベルが高すぎる。自分は、王属特務に呼ばれる器ではない。

「……霊王は、どうして俺を引き入れようとするんだ？」

「さあ、連れてこい、と言っただけで理由までは聞かされていないわ。とにかくあなたが必要なんだって」

「どうしてだ！ 理由がねえなら尚更行く訳にはいかねえ！！」

理由なく家族を捨てることなんてできるはずがない。理由なく仲間を捨てることなんてできるはずがない。

理由がないなら尚更、自分は死神代行をやめるわけにはいかない。

そして理由もなくして、あんなに一生懸命になっってくれる日番谷の思いをないがしろに出来るはずがない。

だったらやはり、一護は力ずくでも帰らなければならなかった。

一護は軽く深呼吸すると、斬月の柄に両手を添える。

……きつと始解のままでは、満足に戦うことも出来ないだろう。

「卍・解!!」

一護の周りを、霊圧の柱が覆い尽くす。

急上昇を見せた一護の霊圧は、爆風を巻き起こし、一護の袴を、孤成の髪の毛を巻き上げる。

やがて一護が天鎖斬月を右に払うと、それらは霧散し、一護の姿が露わになる。

「天鎖斬月」

「……いきなり卍解なんて、強引なんだから」

孤成は動揺一つ見せずに、仕方がないわねとでも言うように言った。そして刀を鞘におさめ、溜め息をつく。ここで一護の卍解は、多少やり過ぎに見えたのかもしれない。

一護はそれに対しては言葉を返さず、力強い瞳で彼女を見据えた。

「悪いけどアンタはすっぱー強いよ。正直、俺の卍解スピードでも

ついて行けるかどうかからねえ」
「よくわかってるじゃない」

次に聞こえてきた孤成の声は、真横からだった。
いつの間にか一護の隣に移動した孤成は、やはり笑みを浮かべながら一護を見上げている。

「だけど、たとえばあたしのスピードについて来られたとしても、あなたは現世には帰れないわ」

「どういう……ことだよ……」

「シロちゃん」

楽しそうに、孤成は名前を口にする。

シロちゃん……それが冬獅郎の事をさしているのだということは、すぐにわかった。

そして思う、コイツは、冬獅郎に何をしようと言っただろうか。どうしてここで、冬獅郎の名前を口にする？

「ほら、霊圧が揺れた」

「……てめえ、冬獅郎に何かしたのか？」

「ふふ、どうだろうね。少なくとも今あなたが逃げると言うのなら、あの子の安全の保証はしないわよ。……どうする？ 逃げてもいいけど」

恐らくこう言われれば、一護も従うしかないとわかっているのだろ

う。だからこそここまで余裕に笑っていられるし、そんな事を言える。そしてそれは、確かに当たっていた。
そして思うのだ、恐らく冬獅郎でも、彼女には敵わない。

「あたしはシロちゃんに直接会ったことはないけれど、良く知っているわよ。何をすればあの子が壊れちゃうのかもね」

「冬獅郎には手を出すんじゃないねえ!!」

一護は、怒鳴らずには居られなかった。

自分の所為で冬獅郎が苦しむことになるだなんて、一護には絶対に耐えられないことだ。

護るべき仲間を、自分の所為で苦しめるなんて、そんなの絶対に嫌だ。だったら自分が、おとなしくついて行くほかにないだろう。

しかしそうすれば、冬獅郎は何と言う？　きっと一護が王族に連れ去られたと知れば、冬獅郎は助けに来る。

そして冬獅郎の為に態々連れられて来たなんて知れば、彼は激昂するに違いない。

どうする、どうすればいい？　このまま逃げて冬獅郎のところに行くか？

それとも大人しくついて行って、冬獅郎の安全を保証してもらうか？
そんな二択、天秤にかけることすら難しい。

だったら……。

「好きにしろよ」

「なんですって?」

「冬獅郎に何かするっつーんなら好きにすればいいぜ。……俺がさせねえから」

だったら、自分が冬獅郎を護る。

「アイツに何かするというなら、俺がそれを阻止してやるぜ。あいっには手出しさせねえから」

呆氣にとられた表情で、孤成は一護を見つめている。
一護は彼女から視線を逸らすと、スツと踵を返した。

どちらにしろ負担をかけるくらいなら、自分が側にいて護ってやった方が確実だと思った。

その方が確実に、冬獅郎を護る事が出来るだろうと思った。だから一護は、冬獅郎を護るために現世へ帰る。

「参ったなあ……」

瞬間、首筋に衝撃が走った。

同時に聞こえてくる、孤成のおどけたような声。……彼女が、一護の首に手刀を入れたのだ。

一護はそのまま、彼女の腕にくずれ込む。軽々と一護の身体を担ぎあげた孤成は、門へと進んでゆく。

「勇ましいのね。悔しいけどかつこいいよ、キミ。でもそう言われるとは、正直予想外だったわ。……ごめんね？　こんな力づくで」

重い音を立てて開いた門の奥に消えてゆく黄金と橙。
孤成は、一度溜め息をつき、黙って歩みを進めた。

「龍！　龍！　リユーーーーウ！！！」

零番隊隊舎を、一人の女性が走る。

己の隊長の愛称を連呼しながら執務室の扉を解放すれば、彼の人は鬱陶しそうにこちらを見た。

いや、実際鬱陶しく思ったのだ。人が懸命に仕事をしているのに、ドタバタと走ってくるなんて。お陰で集中がキレたではないか。おまけに若干文字が乱れたが、そこまで文句を言うつもりはなかった。とにかくうるさい。

「騒がしいぞ乱華……どうした？」

「霊王さまからお呼び出し。龍何かした？」

「あー……一護の事じゃないか？」

龍獅郎は動かしていた筆を止め、溜め息をつく。

そして椅子から降りると、壁に立てかけてあった斬魄刀を手にとった。

氷輪丸と酷似した斬魄刀。鰐の部分は六枚の花弁をもつ華のようだ。龍獅郎はだるそうにため息をつく、仕方がない、と思わず呟いた。

「ま、とにかく行ってくるよ。それやつといてくれたら助かる」

「りょーかい。お説教頑張れー」

「何も説教と決まった訳じゃないだろ……」

自分と入れ替わるようにして机につく乱華を横目で見ながら、龍獅郎は溜め息をつく。

斬魄刀を腰に帯刀すると「それじゃ頼んだ」と言いながら、執務室を後にした。

10：俺は冬獅郎の、兄貴なんだから

かつて十番隊は、隊首から四席まで、日番谷と松本で埋め尽くされていた。

隊長、日番谷龍獅郎。副隊長、松本乱華。

第三席、日番谷冬獅郎。第四席、松本乱菊。

そんな俺たちは、護廷の中でもとりわけ有名だった。

別に一つの隊に血縁関係を持ったものが集まってるから、という理由だけではない。隊首をはじめ、十番隊の実力は護廷の中でも突出している、という理由で特に注目されていたようだ。

その中でも特に、天才と言われてきた俺と兄さんは、総隊長からも期待を寄せられていた。

日常生活において特に目立っていたのは、兄さんが更木に絡まれているところ。つまり、かつて更木にとって黒崎的位置に居た奴が兄さんだった、ってことだ。

とにかく度々更木に追われていた兄さんは、息を切らして隊首会から帰ってくるというのが日常だった。

それを毎日懸命に、そして隊首の帰りを嬉しそうに出迎える隊員たち。俺は愚痴を聞かされ、その横で乱華さんと松本が笑っている。

とにかく十番隊は全員の仲が良く、明るい隊だった。そして実力が高く、任務にも失敗なしの功績を誇っている。それは今の十番隊も大した変わりはないが、それでも任務の成功率が若干落ちたことは確かだ。

それほど、当時の十番隊は相当の力を持っていたということ。とにかくその頃の十番隊は「負け知らずのエリート」だった。

俺が隊首になった途端落ちぶれたのか、と思うほど優秀だったよう

に思う。

「なあ龍兄、メノスグランデって、王属特務の管轄だよな？」

「あ？ 何だよイキナリ、つーか帰って来たなら一言……ってどうした冬獅郎！？」

ある日俺は、兄さんにそんな事を訊ねた。

その日は、現世に出た虚の討伐を任せられ、一人で遠征に出向いた。その質問が、その戦いで抱いた疑問。

そしてその任を終え、帰ったのだが、傷だらけの俺を見て兄さんはかなり焦っていた。そりゃあ傷を放って、平然と隊長の前に顔を出した俺も俺だったと思うが、多少驚きすぎではないのだろうか。

そう思ったが、特に口にするのではなく質問に答えたのを覚えている。

「どうしたもこうしたも、メノスが出たんだよ。そんな話聞いてねえけど」

「め、メノス？ もしかしてメノスをお前一人で倒して来たのか……？」

慌てて執務機の椅子から降りた兄さんは、俺をソファに促しながら尋ねる。

その頃俺は、怪我をすることなんてほとんどなかった。だからこそ、兄さんも驚きの表情を見せたんだと思う。

怪我が少なかったのは、俺がまだ三席だったからかもしれない。やってくる任務は全て簡単なモノで、余裕でこなしていたんだ。隊長となった今は、それなりに強い敵と遭遇することも少なくないし、部下をかばって切り傷を受けることもある。

しかしその時は、怪我をするような任務は一切なかった。もしかしたら、俺は既に三席以上の実力を持っていたのかもしれない。

とにかくその時はメノスを相手にすることは初めてで、辛うじて倒したものの、結構な怪我を負ってしまった。

全て深いと言っても、急所となるものは皆無だったのが幸いかもしれない。

「倒すしかねえだろ。援護呼んでる暇もねえし、だからと言って王属特務が来るわけでもねえ」

「……お前、よく生きて帰って来たな」

俺の傷口に手をかざし、苦笑する。淡く暖かな光が傷口を包み込み、痛みが和らいでいく。

基本メノスグランデの討伐は王属特務の管轄だ。勿論護廷の隊長格でも倒せないことはないが、巨大なうえにその力はかなりのモノだ。それに滅多に出てくることがないため、王属特務に振り分けられているのだが、その時奴らは出てこなかった。

このときからだ、俺が王属特務に不満を抱くようになったのは。

「王属特務も何やってんだか……これでお前死んだら俺一気に反逆者へと変貌するぞ?」

「バカ野郎。あつちに逆らって乗り込んでも取り押さえられるのがオチだろ」

眉根を寄せながら言う兄さんを一蹴する。

この時既に、俺にとつて王属特務は「未知なる存在」だった。メノスグランデを討伐するのに動くことは知っている。しかし、実際に討伐に向いているのを見たことはない。

それは、兄さんも同じだと言っていた。兄さんだって、このときまでは王属特務を見たことがなかった。

「なにになに？ 三席怪我したんですか？」

「何やってるのよシロ、らしくないわね」

「……お前らは仕事もしないで何処行つてやがった」

突然ソファの後ろから顔を出したのは、乱華さんと松本だった。

兄さんは盛大に溜め息をつき、俯きながら低く言う。いつも俺が松本に言っているようなセリフだ。

昔から乱華さんと松本の仲が良く、彼女達はいつも一緒に居たのを覚えている。そして松本と乱華さんは、姉妹というより双子なんじやねえかというほど、趣味も思考も容姿も酷似していた。

むしろ恐れすら抱くほどに、この二人は何もかもが酷似している。

「何よ、別にいいでしょ、書類は片付けちゃったんだから。アタマ硬いわね」

「だから三席もがっちがちなんですよー」

「誰がガチガチだコラ」

唯一、松本と違うことと言えば、脱走するときには事務処理を全て済ませてから出て行った、ということだろうか。

松本の場合、事務処理を面倒臭がるから、それから逃れるために逃亡する。乱華さんの場合、やることが無くなり、隊舎に居るのも暇だから、松本を連れて逃亡する。

どちらかというと、後者の方が俺的には助かる気がする。

「で、本当にどうしたんですか？ 三席が怪我するなんて珍しいじゃないですか」

「メノスグランドだよ。これで生きて帰ってくるのも奇跡だよな」

「龍兄さつきからそればかり言ってるが……危篤状態で帰って来た方が良かったか？」

「やめろよ縁起でもない……」

こうして軽口を叩きあうのも、当たり前の日常。それが俺にとって、松本にとっても当たり前で、毎日が楽しかった。

当たり前だからこそ、一生続くモノだと信じていた。それは松本も、他の奴らも同じだっただろう。

だけど、一生なんて言うものは無かったんだ。信じていたモノは、簡単に崩れていった。

正確な日付までは覚えていないが、人事異動が活発化する春先の話だった。

俺はいつもどおり始業の一時前前に起床し、準備を済ませると、まず執務室に向かう。

この時間は、皆起きていても自室で各の過ごし方をしていることが多い。時間になってから、皆動き始めるのだ。

俺の過ごし方と言えば、執務室で兄さんと会話を交わす事が、気まぐれに購入してきた書物に目を通すくらいだった。

一応ドアをノックし、適当に挨拶しながら部屋に入る。いつもならソファに腰掛け、本でも読んでいるはずだった。

筈だというのは、その時そこに、兄さんの姿が見えなかったからだ。

「……龍兄？」

窓から差し込む朝の陽射しが、机を照らし出している。勿論そこに座って仕事をしているでもない。その部屋から、霊圧も感じなかった。

（緊急の任務でも入ったのか……？）

その時俺は特に気にせず、そのまま執務室を後にしようとする。しかし、ソファーに添えて置かれたローテーブルの上に、何か載っているのを見つけて、足を止めた。

縦長の紙におさめられた、達筆な文字。それは俺の名前だということに気付くのは、時間はかからなかった。

その時は、それが俺たちの今後を変えるなんて思いもせず、多少訝

りながらも手に取る。

兄さんの文字だということは見ただけでわかった。しかし俺に置き手紙を残した理由が、全くわからなかったんだ。

何故態々俺に残していくのか。乱華さんじゃいけなかったのか。しかしそこで、乱華さんの霊圧も十番隊舎にない事に気がついた。だからこそ、俺は油断していた。隊長と副隊長が二人で任務に出ることは何もおかしいことではない。むしろ俺にとっては、松本を連れて出ることは多々ある。

それだけじゃない、それを三席である俺に言い残していくのも当たり前だった。俺だって大概は、三席に告げて隊の事を任せて行くか、居なかった場合は近くの奴に伝言を頼む。

「んなもん態々手紙にしねえで起こしてもよかったのに……」

俺はそう呟き、手紙を開く。

その何気ない動作が、数分後には俺を奔走させていた。

態々総隊長を問い詰めに、一番隊へ。そのあと俺に隊長を継げなんて言われて、緊急の隊首試験を行った。

結果は勿論合格だったから、俺も今隊長をしている。そして同時に、松本も副隊長になった。

結果的に日番谷と松本。その二人が隊首だということに変わりはない。只、それが俺達弟と妹に交代されたということだ。

そしてその日から俺は、完全に王属特務に嫌悪を抱くようになっていった。

あまりにも唐突すぎるじゃねえか。理不尽じゃねえかって。
そして一言も言わず、只手紙だけで済ませた兄さんも、薄情なんじ
やねえかって。

日番谷龍獅郎は前触れなく姿を消し、そして日番谷冬獅郎が隊長と
なった。

幸い、俺も隊の奴に嫌われていたわけでもないからすぐに受け入れ
られた。

そして、同じく姿を消した、乱華さんの代わりに副隊長となった松
本。

いつしか、俺たちがツートップとして、当たり前になっていた。

門番に気付かれないように、霊圧を隠しながら、隊舎の門をくぐる。
他の部下たちにも気付かれないように瞬歩で自室に行くと、一つ溜
め息をついた。
全く、どうしてこんなことになってしまったのかと思う。

冬獅郎は部屋の奥にまで歩を進め、箆笥の引き出しを開けた。
何も入っていない、空白の引き出し。冬獅郎は一度目を伏せ、呟く。

「……解」

瞬間、パンっ！ と中の空気がはじけた。

思わず腕で顔を覆った冬獅郎はそれをゆっくり離すと、中に入っていたそれを取り出す。

先程までは無かったはずの、革張りの箱。それを机の上に持つていき、ふたを開ける。

中から出てきたのは、少しだけ黄ばんだ古い手紙と、黄金の塊。

冬獅郎は手紙を手にとると、おもむろにそれを開いた。

あの時、龍獅郎が冬獅郎宛に残して行った手紙。それと一緒に、この箱も残されていた。

—— かなり唐突な話だが、今回俺は王属特務への昇格となった。

正直、俺も二日前に聞かされたものだから実感があまりない。

俺が王属特務なんて、あり得ないだろ？ 十番隊隊長として、ずっとお前らと一緒に居るつもりだったから寂しいという気持ちもある。しかもそれを蹴るうにも色々事情があつて不可能みたいだ。参ったな。

冬獅郎、お前は、王属特務が嫌いだと言っていたな。正体がわからなくて、気味が悪いと。

そんな気味が悪い部隊に兄貴である俺が入るってどんな気分だ？

やはり嫌悪を覚えるか？

多分、いい気はしないんだろうな。いくら周りから名誉だと言われたって、お前は納得するような奴じゃないしな。

周りには流されず、自分の意思をしっかりと持つ。それはお前の長所だからそれでいい。

王属特務に所属すれば、護廷の連中にはなかなか会えないようだ。剣八に追い回されなくてすむのは助かるが、お前らに会えないのは

きついな。

だけど、もしも冬獅郎や乱菊に手にも負えないような危険が迫ったら、俺は無理やりにもお前らを助けに行くつもりだ。

零番隊の者であると同時に、俺は日番谷龍獅郎。冬獅郎の兄貴だ。大切な弟を、護らなきゃならない。

それだけは、いつまでたつても変わらないからな。俺は十番隊長だろうが、王属特務だろうが、冬獅郎の兄貴だということだけは忘れないでほしい。

俺から十番隊隊長という位置を剥奪できても、お前の兄貴だという事実は誰にも変えられない。

本当はこんなことしたら処刑台行きなんだろうが、敢えてお前に残しておきたいものがある。

見つかったらその時点でお前も糾弾されるだろうから、見えないように結界張ってかくしておけよ？

使う時まで、絶対に封印は解くな。まあ、いつどうやって使うのかはわからないけど……もしかしたら使うことなんてないかもしれない。

だがもしも何かあったら、これを使って俺のところに来い。むしろこれがなかったら、王族の敷地に入ることは不可能だ。

今俺に出来る事がこれだけだというのも不甲斐ないが、許してほしい。

唐突でごめんな、冬獅郎。これから大変だろうが、元気でやってけよ。

お前はすぐ抱え込んで無理するから、正直心配だ。たまには、肩の力を抜くことも必要だぜ？

あと、怒鳴ってばっかでそのうち血管切れても知らないぞ。

言ってたらキリがないから、この辺で切る事にする。

ごめんな、冬獅郎――

過去にもこれを読んで、いたたまれなくなつて、隊舎を飛び出した。しかし今はどうだ、あの時が嘘のように感情が冷めきっている。悲しいとも、寂しいとも思わない。只、無感動に近かった。

冬獅郎はそれをたたんで箱に戻すと、中の金塊――王鍵を取り出した。

「まさかこれを使う時が来るとは、俺だつて思わねえよ……」

そしてまた、この手紙を読み返す時が来るなんて。冬獅郎は暫く王鍵を見つめた後、ぐっと、握りしめた。

10：俺は冬獅郎の、兄貴なんだから（後書き）

もう完全に捏造ですね。十番隊の事とか色々…。

おそらく捏造はこれだけにとどまらないと思います。温かく受け入れていただければ嬉しいです^^；

11：共に行く仲間

流石に朝方と比べて、昼間の隊舎は幾分にぎやかだった。

朝には眠りについてた隊士たちも起床し、それぞれ自分の仕事に取り掛かっている。

書類を抱えて走り回る者がいれば、虚討伐の援護を頼まれたという者。また、格下の隊士に指示を下す者。暇ができたのか、廊下で雑談を交わす者もいた。

そんな中でも冬獅郎は執務室で一人、筆を動かしていた。

流石に執務室の付近で雑談をするような、非常識な者はいない。誰かがあわただしく走る音を聞きながら、冬獅郎は手元のモノに集中する。

廊下を走る部下の足音。それぞれ任務の内容を確認し合う部下の声。入隊して間もない隊士に指示を下す、世話係の声。これはいつもの作業中BGMだ。

そして、そんな日常の最中だった。

「十番隊第七席、竹添です。日番谷隊長はいらっしゃいますか？」

「ああ。入れ」

皆があわただしく扉の前を過ぎてゆく中、一人だけ立ち止まる者がいた。冬獅郎は顔も上げずにそれに答えると、彼は「失礼します」と扉を開く。

竹添がその場に膝をついても、冬獅郎は視線を紙に落としたままだ。彼はその姿に若干戸惑いを覚えながらも、なんとか用件を口にする。

「あの、松本副隊長の姿が見えないのですが……」
「あいつはまたどこかへ行ったんだろ……戻って仕事してると言
ったのに……」

乱菊の机に積み上がった書類を横目で見ながらため息をつく。こ
ういうことは決して珍しくない。むしろこれが日常茶飯事だ。

竹添もそれを見ながら苦笑をこぼし、何かに気がついたように冬獅
郎を見た。

「そう言えば隊長も外出なさっていましたよね？ いつ戻ってい
らしたんですか？」

「先ほどな……悪いが、今日はまた出なければならぬ」

「そうですか。お疲れ様です」

用件は乱菊の居場所を聞くことだけだったのだろう。

竹添はそう言つて頭を下げると、執務室を後にしようとする。しか
し冬獅郎はそれを呼びとめた。

扉を閉めようとしていた彼は、手を止めて冬獅郎を見る。なにがそ
んなに恐ろしかったのか、自分を見る竹添は怯えているようにも見
えた。

そしてふと気がつく、多分今自分は、あまりに真剣に考えすぎて冷
たく感じるほどの無表情をしているのではないか。

冬獅郎は時々、恐ろしいほどの無表情になるらしい。

何考えてんだよ？ 何かそんなに思いつめるようなことでもあるの
か？

いつしか、一護がそんなことを言っていたのを思いだした。

竹添が息を呑みながら自分を見ているのもそのためだ。冬獅郎は少しだけ申し訳なさそうな表情をする。

そして普段に増して落ち着かせた、むしろ意識して声を抑えて言った。

「もしも兄さんが……日番谷龍獅郎が反旗を翻したらお前は どうする？」

「え……龍獅郎……隊長がですか？」

龍獅郎が隊長だった時代にも十番隊に所属していた竹添は、隊長としての彼の事をよく知っている。

勿論三席だった頃の冬獅郎も知っており、彼ら兄弟の関係も目で見てしっかりと把握していた。

恐らく昔からずっと十番隊に居る者は、龍獅郎と冬獅郎の仲が良かったことをよく知っている。

冬獅郎は竹添の表情が少しだけ愁いを帯びたのを見て、視線を逸らす。

先ほどから自分は彼を困らせてばかりだ。

「悪いなんでもない。とにかく松本の事は気にしねえで仕事に戻れ。伝言があつたら伝えておく」

「あ、いえ大丈夫です。ありがとうございます！」

そう言つて頭を下げながら、竹添は執務室をあとにする。

バタバタと廊下を駆ける音。それを聞きながら冬獅郎は瞑目した。

竹添も他の隊士たちも、皆文句を言わずに隊長となつた冬獅郎を受け入れてくれた。

それは冬獅郎だったから受け入れられたことなのかもしれないし、もしかしたら誰でもよかったのかもしれない。

しかし龍獅郎の名を出せば、揺れない者は誰一人としていなかった。龍獅郎が戻ってくることを望まない者はいなかった。

それはきつと、今も同じだろう。

そんな者に対して龍獅郎が反旗を翻すなんて、何を言っているんだ、自分は。

あの元隊長は、自分が隊士たちに慕われていることを知っているのか。いや、まさかそれに気付かないような奴ではない。

冬獅郎はため息をつく、記していた文章を「。で区切り、筆を硯に置く。

そしてつらつらと文字が並べられたその紙を乾かすと、四つに折り、用意していた封筒に入れる。

そこに宛名を書こうと再び筆を握り、動きを止めてしまった。こんなところで、嫌なことに気がついた。

やろうとしていることが、まるで龍獅郎みたいだ。

あの時手紙を残して姿を消した龍獅郎みたいに、冬獅郎は乱菊に手紙を残して行こうとしている。

「……大丈夫だ、俺は帰ってくるから」

自分に言い聞かせるように呟く。
そうだ、置き手紙という方法は同じでも、自分はちゃんとこの場所に帰ってくる。それは龍獅郎との大きな違いだ。
冬獅郎は一度止めた筆を握り直し、それを封筒に滑らせる。
乱菊の名前の横に、さっきまでは書かないつもりだった言葉を小さく添えて。

——松本へ。 すぐに帰ってくるから心配するな——

瀟靈廷には一つだけ、誰も使わない門がある。実際には使う機会がないのだ。
零番隊の敷地へ行く道につながる大きな門。冬獅郎は氷輪丸を背中に担ぎながら、それを見上げていた。

今から冬獅郎はこの門の向こうに行こうとしている。副官も連れずに、たった一人で。

囚われている一護を連れ戻すために。たとえ龍獅郎と本気で刃を交えることになっても、冬獅郎は一護を連れ帰るつもりだった。

兄貴だから戦えない。そんなの関係ない。こちらに危害を加えるのならそんなの兄貴だなんて言えない。

兄貴なら、もつと考えて行動すべきだ。兄貴つてのは、後に生まれ た弟や妹を護るためにいるんだ。度々、一護がそう言っていたのを

思い出していた。

そして冬獅郎はずっと、龍獅郎のしていることは少なくとも「兄貴」とはかけ離れていると、そのようにして自分を言い聞かせていた。

冬獅郎は一度瞑目すると、もう一度それを見上げて歩を進める。

門に手を添えたところで、よく知った霊圧が感覚に触れた。

「そうやって一人でやりきろうとするクセ、いい加減直してください」

「まつ……もと……」

反射的に振り返れば、視界に入っただのは蜂蜜色の髪を持った女性。彼女だけではない。その横には恋次とルキア、白哉までもがついていた。

冬獅郎はその面子を見回すと、視線を地面に落とす。そして少し間を置いてから彼らに背を向けた。

「随分と目ざとく嗅ぎつけてきたものだ……一緒に来るというのなら断るぜ」

「言うと思いました。けどあたしたちも隊長を一人で行かせるわけにはいきません」

乱菊はその冷たすぎるともいえる拒絶に動揺など全く見せず、断言した。

それに続いて、ルキアと恋次も頷いている。

「話は聞きました。俺たちも行きます、日番谷隊長」

「一護は私たちにとって仲間です。放っておくわけにはいきません」

恋次とルキアもそれぞれ前に出て、言う。

もしかしたら乱菊はすぐに追ってくるかもしれないと思っていた。しかしこの二人までが来るだなんて、正直予想外だ。

冬獅郎は肩越しに振り返りながら彼らを見る。白哉は無感動に立っているだけだった。

はたして彼らを王属特務の元へ連れて行って大丈夫だろうか。

卍解を会得している恋次や、隊長である白哉ならともかく乱菊やルキアは？

王属特務の者は皆護廷の隊長格と同じくらいか、それ以上の実力を持っている。

勿論皆卍解を習得しており、技術もかなり卓越している。そんな者ばかりの危険な地へ、彼らを連れて行って大丈夫だろうか？

今回冬獅郎が一人で行こうとした理由は、誰にも迷惑をかけたくないのと同時に、怪我をさせたくないからだった。

王属特務が相当の力を持っていることは知っている。自分だって怪我の一つや二つ、負うことくらい覚悟していた。

だからこそ冬獅郎は、他の者を連れていきたくない。自分の兄が起こした問題に仲間を巻き込むのは嫌だ。

しかし一護が心配だと。助けに行きたいという気持ちはよくわかる。彼らの仲間を思う気持ちは、相当の物だ。

そしてそれを、冬獅郎はどこかうらやましくも思う。その強く固められた絆が、どこか眩しく感じることもある。

それが、冬獅郎を葛藤させていた。

「それともあたしたちじゃ足手まといですか？」

「そう言う訳じゃない。だが王属特務の連中はかなり厄介だぞ？」

「わかっています。だからこそ俺たちも行くと言っているんです」

乱菊も恋次も、引かない様子だ。ルキアも力強く頷いている。

きつと何を言っても、彼らは引かない。自分も割と頑固な方なんだと冬獅郎は思っていたが、彼らも似たようなところがある。

いや、仲間の事となると頑なになる。冬獅郎の周りに居るのものは皆、仲間思いの奴ばかり。

それは一護を中心に、恋次やルキアまで繋がっている。

恐らく拒む権利は自分にはないのだろう。冬獅郎はそう思い、瞑目する。

「……わかった。それじゃあ一緒に、黒崎を連れ戻しに行ってくるか？」

「勿論です。そのつもりで参ったのですから」

凧と告げるルキアの言葉に続いて、恋次も頷く。冬獅郎は顔を上げると「そうか」と頷き返した。

大した奴だ、と思う。恋次やルキアがじゃない。一護がだ。

基本彼は誰かを助ける側の、護る側の奴だ。しかしそんな彼も、いつも安全地帯に居るわけではない。

そしてそう言うときに率先して助けてくれる奴がいるということは、

それだけ一護が皆から大切に思われているからだと思う。

そしてやはり、王属特務という未知の隊に立ち向かえる彼らもすごい。やっぱり彼らの絆は凄い。

王属特務は強いから、自分一人で行くべきだ。そう思っていた自分が恥ずかしくなってくる。

「そうときまったら早く行くぜ！ 一護の野郎にも一喝入れてやらねえとな！」

「一角？ 一角がどうしたの？」

「斑目じゃねえよ……」

なんだかよくわからない聞き間違いをしてしまったらしい乱菊。恋次は勢いをそがれたように肩を落とし、冬獅郎が呆れ交じりにツッコミを入れる。

ルキアは苦笑しながらそれを見ていた。

「一喝っすよ一喝！ あいつ攫われるようなタマか!？」

「ああ、そう言う意味か……確かに一護らしからぬ」

憤る恋次に相槌を打ったのはルキアだ、恋次は「だろ!？」と更に冬獅郎や乱菊にも同意を求める。

乱菊はしきりに頷いているが、冬獅郎はなんだか微妙な気分だった。

確かにそう簡単に連れて行かれるなんて一護らしくない、だが相手が相手だ。

冬獅郎に化けて一護を連れ去った時点で、敵はかなりの実力者だ。それにその実力は冬獅郎自信目の前で見てよく知っている。

相手はあの龍獅郎だ。冬獅郎より昔から天才と謳われて来た龍獅郎。

どんな形であれ、一護にはかなわなかった相手だ。

龍獅郎が強いのだということは冬獅郎も乱菊もよく知っているはずだった。

「大丈夫ですよ隊長」

「……ああ」

「それにあたし、一護を連れてったのはお兄さんじゃないと思います」

冬獅郎の隣に立ち、励ますように言う乱菊。

そして一護を連れて行ったのは龍獅郎じゃないのではないかというその言葉に、冬獅郎は俯けていた顔を上げた。

乱菊は冬獅郎を見ずに、真っ直ぐ門を見つめている。

「あの人がそんな強硬手段に出るとは思いませんし。きっとお兄さんは今も昔も変わっていませんよ？」

「……実際時は人を変える」

それは体験したから言っているのか、それとも自分の勝手な偏見なのかは、冬獅郎にはわからなかった。

人が変わらないことはない。時の流れは何らかの形で影響を与える。王属特務に居る中で、龍獅郎だってそこに染まってしまったに違い

ない。

……龍獅郎はもう、昔の龍獅郎じゃない。そう思うことで冬獅郎は兄に立ち向かおうとしていた。

大好きだった兄は変わってしまった。あの人はもういないのだと……。

多分何かの間違いだなんて信じていたら、自分は龍獅郎と戦うことはできない。

心のどこかで、やはり兄貴として龍獅郎を大切に思う部分はある。信じたいと思う部分がないわけではない。

だからこそ自分を言い聞かせる必要があった。

「だけどあたしはやっぱり、お兄さんを信じたいです」

「……おまえがそう思うのなら、俺はとやかく言つつもりはない」

そうあって欲しいと思う。変わらないままの兄を求めている部分はある。

しかしその望みは薄いだろうから、冬獅郎は考えないことにした。もしも、もしもあの時のままの兄貴が傍に居たらどれだけいいことか。それを望みはするが、口にはしない。

本当に、あの日々が戻ってくるとは思っていない。期待は、しない。既にあの日常は、過去だから。

それらを固めるように、右手に持った王鍵を握りしめる。

「それじゃ行くぜ皆あー!!」

一向に動かない冬獅郎にしびれを切らしたのか、いつの間にか恋次が仕切り始め門を押しあげた。

ルキアと乱菊もそれに頷き、門と向き合う。冬獅郎は一度目を伏せると、開き始める門を見上げた。

本当に大きい、そしてその先に、よく知った、いや、よく知っていたはずの兄貴が居るのだ。

そして一護はどうしているだろうか？ 彼の事だから暴れて牢にでも入れられているだろうか。

もしかしたらその牢の中でも暴れて脱獄している可能性もある。

一護になら十分考えられることだ。冬獅郎は思わず苦笑する。

「日番谷」

全く口を開かず、黙って見ていた白哉がここでやっと、口を開いた。冬獅郎は振り返り、全く動こうとしない彼を見て怪訝を隠さずに、目を細める。

「どうした？ 来ねえのか？」

「ルキアと恋次、兄に任せる」

「っててめーは只の見送りかー!!」

思わず声を荒げてツツコンでしまった。

白哉はそれに全く動じることなく、平然と頷く。

てつきり白哉もついてくるモノだと思っていた冬獅郎は思わず頭を抱えてしまう。

自分は乗り込まずに、旅立つ義妹と部下を見送る……確かに、白哉らしいと言えば白哉らしいが、正直拍子抜けする。

冬獅郎はため息をつきつつ、白哉の目を見て言った。

「心配するな。皆そろって帰ってくる」

とにかく冬獅郎に言えることはそれだけだ。信じて待っていてくれる人に、そう誓うことしかできない。

白哉はそれに対し、小さく頷いただけだった。

「それでは、行ってまいります兄様！」

「隊長やっぱりついてこねえのかよ……」

「たあいちょー！ 置いていきますよー！！」

向こうから乱菊が呼ぶ声が聞こえる。

冬獅郎は白哉に頭を下げると、門をくぐった。

ここから彼らの戦いが本当に始まったのだ。

一護を連れて瀨霊廷に帰ることができるのか。それとも王属特務にはかなわないのか。

それはまだ何もわからない。只一つ言えるのは、彼らも簡単にはやられない。それだけだ。

12：それでもアンタは…

王属特務の隊長を務めている以上、靈王から呼び出されることは決して珍しくなかった。

その用件は重要な話だったり、かなり些細なことだったり、靈王の個人的な用事など、さまざまだった。

しかし今回はきつと、一護の事についてだ。龍獅郎はそう確信していた。

長い廊下を只歩く。床は綺麗に磨かれており、汚れ一つ見当たらない。歩くのが少し躊躇われるくらいだ。

すれ違う者は誰一人としていない。目の前には只長い廊下が続いていた。

龍獅郎は只ひたすら、あとの事を考えながら靈王の待つ部屋へと歩を進める。

この後自分はどうするつもりなのか。一護を零番隊に入れることに対して、自分はどう思っているのか。

それをちゃんと伝えなければならなかった。

勿論それらは簡単に受けれてもらえるようなことではないだろう。しかし龍獅郎も簡単にあきらめるわけにはいかない。

……護廷十三隊から離れてしまった今、自分が冬獅郎にしてやれることはこれだけだろうから。

それも、冬獅郎の訴えを聞いて、冷静に考えてやっと持てた感情なのだから、偉そうなことは言えないのだが。

「零番隊隊長、日番谷龍獅郎です。お呼びでしょうか、靈王様」
「来たか……入れ、龍獅郎」

敵かな、それでも低く耳になじむような声がそれに応える。

龍獅郎は引き戸を開けると、椅子に腰かけた男性を見て深々と頭を下げた。

小さいながらも立派な空間は、漆塗りの家具で統一されている。シンプルにまとまったこの部屋は、龍獅郎も嫌いではなかった。

龍獅郎は顔を上げると、じっと自分を見据える霊王を、翡翠色の瞳に写す。

「どのようなご用件で」

「わかっているだろ？ 今回のお前の失態についてだ」

失態……そのように思われているのか。

龍獅郎は内心ため息をつき「黒崎一護、ですか」と確認を取る。

霊王はそれに頷くことも、相槌を打つこともせず只黙って龍獅郎を見ていた。

「……お言葉ですが霊王様、彼はこちらに連れてくるべきではないと思います」

「何故そう思う？ お前がそう言うのならそれなりの理由があるのだろうか？」

「黒崎一護は死神として戦っていると同時に人間です。命を落として死神になった訳でもない。彼にはまだ現世に居場所がある」

冬獅郎はそう言って、一護を王属特務に入れることを拒絶した。一護は死神であると同時に人間だ。しかもまだ高校生だ。人生だつてこれからだし、家族だって友達だっている。

そんな者が王属特務に入るだなんて、言語道断だ。今考えれば、冬獅郎の言っていた事は常識だ。いくら我々王属特務でも、一人の人間の一生を奪うことは許されない。

どちらが悪者なのかと言ってしまえば、当然こちら側が悪になってしまふ。

王属特務とは「悪」ではないはずだ。

「……龍獅郎、お前は何を言っているのかわかっているか？」

「そのお言葉、そっくりそのまま貴方にお返しいたします。今俺たちがやるうとしていることは、本来あるべき王属特務の姿じゃないということに、お気付きになってください」

霊王は切れ長の双眸を細め、龍獅郎を威圧するように睨みつける。多少霊圧をぶつけられても、龍獅郎は動じなかった。

「それに黒崎一護は、数少ない貴重な者ですから」

「……どういふことだ」

「今俺が言ったことを一番最初に口にしたのは、冬獅郎です」

そう、わざわざ現世にやってきて自分を拒絶したのは冬獅郎だった。恐らく冬獅郎がいなければ、龍獅郎は一護をここに連れて来ていた。冬獅郎がいなければ龍獅郎は間違いを犯すところだった。

そして龍獅郎は初めて見たのだ、他人のためにあそこまで一生懸命になる冬獅郎を見たのは。

霊王は驚きを隠せない様子で、龍獅郎を見ている。やがて目を伏せると、小さく息を吐いた。

「それじゃあお前は、冬獅郎に感情を動かされて戻ってきたのか？」
「貴方はご存じないかもしれませんが、あいつはあまり感情を表に出すような奴じゃありません」

昔からそうだ、あまりに感情の起伏が乏しいから「龍ちゃんに比べてシロちゃんは冷たいよー」とよく雛森がぼやいていた。

外見は昔からよく似ていた。しかし冬獅郎は昔から小柄で、それは今でも変わらない。きっと体型に変わりがなかったら、双子にしか見えなかっただろう。

冬獅郎が内にどれだけの激情を秘めているのかも知っている。

しかしそれを表に出すのは、冬獅郎が本当に大切に思っている者のためであり、普段は欠片も見せないのだ。

クールで、冷静で、そのくせ家族思いで優しくて……兄バカかも知れないが真っ直ぐな奴だと思っていた。

少しひねくれている、それをフォローできるくらいに、冬獅郎は優しい。

「そんなあいつがあんなに感情的になって、刀までを抜いた」

『黒崎は渡さない』

そう言っていた冬獅郎の声音は、こちらが戦慄しそうになってしま
うほど、底冷えのするモノだった。

刀を抜く冬獅郎を止めていた一護に向けた一喝も忘れない。あの時
の冬獅郎は、一護のために必死だった。

「……そんなこと、私には関係ない。たとえ冬獅郎が何を言おうと
私は考えを改める気はないな」

「アンタ、それでもあいつの父親か？」

その一言に、霊王の形の良い眉が上がる。

「たとえあいつがアンタの存在を知らなくても、アンタは冬獅郎が
自分の息子だってちゃんと分かっているだろう？ それとも息子の
気持ちまで汲み取れないほど、俺たちの父親は非情な男なのか？」
「……………」

霊王は何も言えず、黙り込んでしまう。

窓から差し込む太陽の灯りに照らされて輝く、白銀の髪。

重たい沈黙の中で、龍獅郎の、そして霊王の銀髪がちかちかと瞬い
ていた。

忘れたとは言わせない。昔のあの出来事だって、龍獅郎はしっかりと
覚えていて。幼心ながらも、物心はついていた、幼い日の事件。

冬獅郎と何気なく遊んでいた日常が、突然非日常に変わったあの事件。どうしてあの時、この男は動かなかったのか。それは今でも理解できない。

「俺は、あんたを許したわけじゃない。今だってアンタの元にいるのは、冬獅郎のためだからだ」

「……………」

重たい沈黙。冷たい視線を向ける龍獅郎を、靈王は只じっと、無感動な目で見つめるだけ。

「てめえ、放しやがれっ!!」

そしてその沈黙を破ったのは、靈王でも龍獅郎でもない。
扉の向こうから聞こえてきた怒鳴り声はだんだんと近付き、バン！
と勢いよく扉が開かれた。

「ただいま靈王さまっ！ 黒崎くん、連れてきました!!」

「うるせー！ 放せて言っただこの野郎っ!!」

「…………… 孤成…………… 一護……………」

そう、明るい声でやってきたのは金色の髪をポニーテールでまとめた少女。そして彼女に担がれて必死にもがいている橙色の髪をした

青年。

龍獅郎は二人を認めると、今までの勢いが萎えたように呆然と立ち尽くした。

「りゅ、龍さん！！　　どういことだよこれ！？　この女何者だ！？」

「もー、五月蠅いよ黒崎くん。少し落ち着こう？」

「お、落ち着ける状況じゃねえよ！」

懸命にわめく一護は、龍獅郎に助けを求めているように見えた。霊王は一護を静かな瞳で見据え、目を伏せる。漏れたため息は「騒がしい奴だ……」と呆れているようだった。

龍獅郎は苦々しげに目を細める。まさか孤成が、一護を連れてくるなんて。

「孤成お前、どういっつもりだ？　元から裏切るつもりだったのか？」

「裏切ってなんかいないわ。あたしは霊王さまと話すと言っただけで、黒崎一護には何もしないとは言っていないもの」

ちっ、と反射的に舌打ちをしていた。確かにその通りだ。

それにしてもこの女は、どうしてこつも軽々とこのようなことを口にできるのだろうか。

だから乱華だって孤成を嫌うのだ。そう心の中で毒づくが、仕方がないことはわかってる。

孤成は一護を下ろすと、縛り付けていたロープをほどいた。

「聞いて龍ちゃん、この子ね、結構勇ましいのよ！　びっくりしちゃった」

「俺はあんたのその態度に驚きを隠せないよ……」

無邪気に話しかけてくる孤成に、思わず頭を抱えてしまう。きっと乱華だったら孤成に掴みかかっているところだろう。

一護は龍獅郎と孤成を見たあと、霊王を見て目を見開く。

……色彩が冬獅郎や龍獅郎と同じだ。そのことに対して一護は驚きを隠せないらしい。

それもそうだ、霊王が冬獅郎の父親なんて考えもしないだろうから。

「な……何者だ、アンタ……」

「その人は霊王だ。そして俺たちの父親でもある」

「ち、父親！？　冬獅郎と龍さんのオヤジってことか！？」

嘘だろ……！？　と尚更驚愕に目を見開く一護。

彼の一々過剰な反応が興味深いのか、孤成は楽しそうに一護を見ていた。

「龍ちゃん、黒崎くんって面白いしかっこいいし、あたし気に入っちゃったな」

「……………」

龍獅郎は孤成には答えず、只厳しい目を、靈王に見せていた。それに対し、靈王は龍獅郎には見向きもせず、只じつと一護を見据えている。それに威圧されているのか「な……なんスか？」と尻込みしている一護。

……冬獅郎がこの光景を見たら、なんと言うだろうか。そして一護がここに来たということは、冬獅郎は……。

「龍獅郎」

靈王に名を呼ばれて、龍獅郎は無言で彼を見る。

それと同時に、一護が戸惑いを隠せない表情で龍獅郎を見た。

一体靈王は一護に何を言ったのだろうか。そして自分はこれからどうすれば良いのだろうか。

王属特務に反旗を翻してでも、一護を現世に返すか？

それとも彼らには悪いが、来てしまったからには仕方がないと、諦めてしまうか？

そして冬獅郎は間違いなく、自分に敵対心を抱いてやってくる。

きっと彼を刃を交えることも余儀なくなってしまう。

……一体、どうすればよいのだろうか。

「黒崎一護の世話はお前に任せるぞ、龍獅郎」

「……どうしてまた？ 隙を見て逃がすことにもなりかねませんよ？」

それを聞いて、一護が目を見開く。
霊王は「構わんさ」と瞑目した。

「お前の好きにすると良い。しかしそう簡単にこちらに抵抗できる
とは思わない方がいい」

「一体、なんなんだ、あの女」

零番隊舎に向かう途中、一護はそんなことをぼやき始めた。
あの女、とは孤成の事だろう。龍獅郎は「あの女は少々厄介だ……」
とそのまま思ったことを答えてやる。

孤成に連行されていたときは必死に抗おうとしていた一護も、相手
が龍獅郎では全く抵抗を見せなかった。

むしろどこか安心していているようで、その喋り方も表情も自然だ。

「あいつ、冬獅郎に化けて俺ん家まで来たんだぜ!? しかもモノ
マネ上手いんだよ!!」

「孤成は、洞察力が恐ろしいほど超越しているからな……話を聞い
ただけでもそいつがどんな性格なのかわかってしまう奴だ」

「うわ……怖えなそれ……」つか洞察力とか、そう言う問題なのか

よ？」

一護は露骨に顔をしかめて呻く。

龍獅郎も「だから乱華も気味悪がるんだよ……色々」と苦笑した。

それにしても、この青年は仮にも「敵」である龍獅郎に対して恐怖心は抱かないのだろうか。

たとえ龍獅郎に彼らに危害を加える気がなくとも、やはり零番隊の隊長、という位置に居る自分は警戒されるものだろう。

しかも最初に一護を勧誘しに行ったのは龍獅郎だ。それにも関わらず彼の態度は自然すぎる。

「お前、少しは警戒した方がいいんじゃないのか？」

「え、何でだ？ 龍さん別に何もしねえだろ？」

心底ふしぎそうに訊ねる一護は、本当に警戒など必要ないと思っているらしい。

それには龍獅郎もあつけにとられ、思わず口を開けてしまう。

この気楽さは何だ。そして何なんだ、この妙に信頼されている感覚は。我に返った龍獅郎は思わず目を細めた。

「悪いけどお前、孤成と戦って頭おかしくしたんじゃないのか？
大丈夫か？」

「何でだよ。当たり前じゃねえか。だって龍さん冬獅郎の兄貴だろ？」

「は？」

「冬獅郎の兄貴なら龍さんだって良い人だって。そうだろう？」

ニツと笑って見せる一護に、龍獅郎は再び呆気にとられてしまう。
何なんだその理屈は。そしてその妙な自信はどこから湧いてくるの
だろうか。

一護の感性が正直言っただけでわからなくなった。

冬獅郎の兄貴。それだけを理由に、こいつは自分を信じるというの
か？ 何なんだ、その素直すぎる考えは。

龍獅郎は思わず頭を抱えてしまう。頑固な弟がいるからか、こう言
う単純で一直線な者を見ると調子が狂う。

彼のこれには冬獅郎も度々振り回されているのではないだろうか。
そんなことを思ってしまった。

「オマエなあ……俺だから平気なものを、他の人だったら大変だぞ
？」

「大丈夫だって。誰に対してもこんな理屈振り回してるわけじゃね
えから」

その琥珀色に嘘はない。素直に思ったことを真っ直ぐ伝えている。
どうやら彼の言葉はそれだけのようだ。

どう育てばここまで真っ直ぐな考えを持てる？ しかも高校生の男
子にしてこつも穢れがないと、逆に心配になるくらいだ。

……冬獅郎も、すごい奴と知り合ったものだ。

「俺、冬獅郎が本当に良い奴だって知ってるからな。そんな冬獅郎

の兄貴が悪い人なわけ、ねえだろ？」

つまり冬獅郎を信頼しきっているから、彼と血のつながった自分もその対象だというのか。

冬獅郎がああだから、自分もそうだというのか。それは、全く屈折のない、単純すぎる考え。

だけどこの真っ直ぐすぎる言葉が、なんだか後ろめたい。

13：侵入者と脱走者

門をくぐってからの道のりも、意外と長いモノだ。

瀨霊廷を出てから一体どれくらいの時間がかかっただろうか。ようやく見えてきた王家に繋がる門を見据えながら、冬獅郎は思う。

それにしても、王家の敷地へと繋がる門は初めて見たが随分といった構造をしている。

瀨霊廷と流魂街を隔てる門も、穿界門も正直地味だと言ってしまうは地味だ。

しかし目の前に立ちはだかる門はまさに荘厳と言って良い、それなりに飾られていても全く派手な感じがしない、敢えて言うなら気品を漂わせているような、そんなものだった。

「アレっすか？ 王家の門って」

「見ればわかるじゃないの。なんかすごいわねー」

恋次と乱菊がそれぞれ呟き、ルキアは黙って頷く。

この先に一護はいる。そしてこの先の土地に、龍獅郎は住んでいる。一体この先はどうなっているのだろうか。瀨霊廷と変わらない街並みか、それとも王族と言うだけに、もっと飾られた土地なのか。

そんなどうしようもないことを取りとめもなく考えている自分に気がつき、冬獅郎は思わず苦笑する。

自分は一護を連れ戻しに来ただけ。只それだけなのだ。

地形は把握しておいた方がよいのだろうが、街全体の雰囲気はどうでもよい。

「それにしても、門番とかいないんですかね？ 随分不用心だわ……」

「普通王家に乗り込もうなんていう命知らずなことを考えるバカはいねえからな……それでも過信しすぎだろ」

「て言うか俺たちがその「命知らずなバカ」ってことっすか？」

そう言うことになるな。恋次の質問に、冬獅郎は躊躇いなく頷く。命知らずなバカ。まさにその通りだ。

それに元々、王家の門をくぐるには『王鍵』が必要だ。いくら王属特務の隊長が何かあったらいつでも来い、と鍵を残しても、本当に来るバカなど居はしないだろうと思う。

冬獅郎は微妙な空気を醸し出す三人を気にせず、瞬歩で門の前に立つ。そして懷にしまっていた王鍵を取り出し、振り返る。

「松本、阿散井、朽木。外側に門番が居なくても、流石の中には見張りがいる。俺が門を開けたら一気に駆け抜けろ」

「て言うか隊長、王鍵なんてどこで手に入れたんですか？」

冬獅郎について後ろに立った乱菊が、思い至ったように訊ねる。そうやって言ってしまうと、ルキアと恋次だって同じような疑問を持ったのだろう。そう言えば、と顔を見合わせた彼らも不思議そうに冬獅郎を見た。

冬獅郎は「ああ……」と呟き、手の中で王鍵を転がす。太陽光を孕んでちかちかとまたたく金色が目を刺激した。

「零番隊の隊長が残して行っただ」

「お、お兄さんがですか!？」

冬獅郎の事だから、乱菊には考えられないような方法で手に入れた
と思っていたのだろう。乱菊は身を乗り出し、心底驚いたような声
を上げる。

その事実には恋次とルキアも驚いたらしく、彼らも目を大きく見開
いていた。

冬獅郎もコロコロとそれを弄びながら、思ったことを口にする。

「あいつも、何を考えているのかわからねえんだけどな」

「そ、それって相当すごいことなのでは……零番隊長殿が日番谷隊
長に残して行っただということですか？　しかし何故また……」

「バカ野郎、ルキア知らねえのかよ」

「な、何がだ……?」

ふう、とため息をつき、少し呆れたように言っただのは恋次。

ルキアは戸惑いを隠しきれないらしく、自分よりはるかに長身の赤
髪を見上げる。

彼はそんなルキアを見ながら、得意げに胸を張った。

「零番隊隊長、日番谷龍獅郎。日番谷隊長の兄貴だ」

「ひ、日番谷隊長お兄様がいらしたのでですか!？」

驚きも隠せない、というように身を乗り出し、思わず大声を上げてしまう。

かなりの反応だ。冬獅郎は思わず苦笑しながら「一応な……」と答えた。

知る人ぞ知る「日番谷龍獅郎」当時は有名だった十番隊の天才二人も、龍獅郎が抜けてから何十年とたった今では名も薄れている。

只冬獅郎だけがその名を残し、龍獅郎は忘れられた存在となるつつあることに、冬獅郎は気がつく。

なんだか少しだけ胸が疼いた。

あのころは、ルキアだって既に入隊していたはずなのに。忘れていいのか、単純にルキアが知らないだけなのか。

「決定です」

「何がだ？」

突然言いきった乱菊に疑問を抱いた冬獅郎は、思わず目を細めながら訊ねる。

それもそうだ。突然「決定です」なんて言われて「そうか」と内容を理解して答えるなんて無茶な話だ。

「一護を連れて行ったのはお兄さんじゃない。確信しました」
「……」

しきりに頷きながら、乱菊は再度詳しく言う。冬獅郎はそれには答えずに、ゆっくりと王鍵を鍵穴へと差し込む。

どちらにしろ、もうすぐ戦いが始まる。それは万が一龍獅郎ではなかったにしても、彼ら王属特務の者が一護を連行した時点でそれは避けられないこと。これを開けた瞬間に、龍獅郎と冬獅郎は完全に敵だ。

油断は許されない。少しでも気を抜けば、確実に捕らえられる。そうなればわざわざ王族にまで乗り込んで来た意味がない。

「行くぞ、さっき言ったとおり、扉が開いたのと同時に瞬歩で駆け抜ける。門番につかまったらひとたまりもねえ」

「はい！」

冬獅郎の声を合図に、三人は頷く。

穴にぴたり刺さった鍵を回すと、冬獅郎は視線で乱菊に合図を寄越した。

——どんな結果になっても、絶対に揺らぐな。

その思いが伝わったのか否か、乱菊はキツと表情を引き締めると力強くうなづいた。

多分この戦いに、乱菊は冬獅郎以上に辛い思いを押し込みながら臨もうとしている。それに巻き込んでしまうことが申し訳なかった。

きつちりと閉じられた扉に力を込めると、門はゆっくりと開かれる。この先に見えるのは、未知の王家。戦いの舞台。

その土地の中を駆け抜ける三人に続いて、冬獅郎も瞬歩で扉の隙間を抜けた。

「っ……！」

まるで何事もなかったように、執務室は静かだった。静かすぎて、筆を握ったまま船をこいでいたほどだ。

まるで平和を想わせるその穏やかさが龍獅郎を眠りに誘っていた。しかしとある霊圧を感じて、龍獅郎は弾かれたように顔を上げる。間違いない、この霊圧は……。

「来たか、冬獅郎」

筆を硯に置きながら、龍獅郎は呟く。既に予想していたことだ。別に驚きはない。むしろ来ない方が不思議だと思っただけなのだ。

ため息をつくと筆を硯に置いた龍獅郎は、席を立つ。そしてそのまま廊下に出て自室のすぐ隣にある、個室と向かう。今そこには一護が居るはずだった。

霊王は、一護の事を龍獅郎に任せると言っていたが実はどうすればよいのかわからないところがあった。

恐らく一護は、今すぐにも現世に戻ると言うだろう。仕方がないからこのまま王属特務に入れと言っても断固拒否するだろう。

確かに今すぐにも返してやりたい。しかしそれは霊王や孤成が何らかの形で阻むであろうことはよくわかっていた。

——『冬獅郎の兄貴なら龍さんだって良い人だって』

なんだかよくわからないが、自分が冬獅郎の兄だからと言って信頼していた一護。

その時の言葉を思い出すと、自然とため息が漏れてしまう。

何なんだその妙な理屈は、と思う。なんていう単純な考えなんだと思う。

そしてきつと一護が信頼しているのは龍獅郎ではない。冬獅郎だ。冬獅郎を信じているから、龍獅郎に対してもそのような感情を抱けるのだ、そう思う。

「……一護？」

部屋の扉が開いていることに気がついて、龍獅郎は眉を寄せる。まるで出て行ってまま閉め忘れた、或いは慌てて飛び出したかのような光景。

更には、念のために見張らせておいた隊士たちが扉の前で伸びている。その光景が意味するものを一瞬理解することができなかった。

「……………やってくれたよ、あいつ」

思わずため息が漏れる。手のひらで額を覆った。それは一護の行動への呆れか、自分の浅墓さを嘲ての事かはわからない。とにかくやられた、と思った。

確かに一護は龍獅郎が危害を加えることはないと言っていたが、それがここに留まる理由にどうして繋がるのか。

油断していた。ああ言っていたのなら縛り付けなくても、牢に閉じ込めなくても逃げることはないだろうと、高をくくっていた。何かを履き違えていた。

龍獅郎は額を押さえたまま舌打ちをすると、床に倒れた部下たちを介抱してやる。恐らく皆、鳩尾を突かれただけなのだろう。誰にも怪我はなかった。

「乱華！！ 乱華っ！！」

隊士たちをベッドに寝かせた龍獅郎は、どこかに居るであろう乱華の名を呼びながら隊舎を走る。

そう言えば彼女の姿が見当たらないが何処に行ってしまったのか。

一護を追って出て行っただか、またどこかで寛いでいるか。

いずれかだろうと考えるが、それは後者だった。

「何よ龍、そんなに慌てて」

「一護が逃げた」

背後から声を掛けられて、振り返った龍獅郎は率直に用件を告げる。乱華は一瞬目を丸くしたが、すぐに視線を天井に向けて「ああ、一護ね……」と呟いた。

「ものすごい暴れてたわよね。動きが鮮やかだったから見とれちゃ

った」

「止めるよ！！！」

あつけらかんと言う乱華だが、どうやら脱走を試みる一護を傍観していたらしい。事情は知っているだろうが。だったら止めるのが普通ではないか。

流石は松本乱華。「普通」なんて彼女には通じない。……なんて感心している場合ではない。龍獅郎はため息をつく、「仕方がねえな……」と諦めたように頭を搔く。

侵入者となった冬獅郎を追うべきか、一護を追うべきか、普通なら考えることなのだろうか、龍獅郎の答えはもう決まっている。

「放っておくか……一護の方は」

「あ、やっぱり弟の方が大事？」

「いや……一護より冬獅郎の方が暴れてるようだから……」

なんだか外が騒がしい。それも「小さい隊長が出たー！！」「チビ龍だー！！！」との声。……これは絶対に冬獅郎が奇襲をかけたあとだろう。つーかチビ龍って。

それとも門を抜けた瞬間に、その情報が一気に行きわたり「小さい龍獅郎」として名が挙がってしまったのかも知れない。

あの少年が龍獅郎とは別人だとどうして考えないのだろうか。確かに昔から自分たちは似ているが、そのくらいはわかっていいモノだと思う。

それにしても、場所が特定できないのが厄介だった。門を抜ける瞬間には感じた冬獅郎の霊圧が、今は全く感じられない。恐らく隠して行動しているのだろう。

「それに、一護も冬獅郎に気がついて飛び出したはずだ。あいつなら大丈夫だよ」

「そう、それじゃあたしは、かわいい妹を迎えに行こうかしら」

乱華はそう言つて龍獅郎に背を向ける。彼女も、冬獅郎と一緒にやってきた乱菊の霊圧には気がついていたようだ。戦う気は全くない。むしろ彼女は、冬獅郎たちの味方につくつもりだ。

それについて龍獅郎に異論はない。龍獅郎は「まあ、そうしてやりな」とだけ言いながら乱華の背中を追う。

とにかく冬獅郎と話をして、一通りの騒ぎを押さえようと思う。そしてそのあとに冬獅郎と話し合つて無事に返してやる。一護も、冬獅郎も、その仲間たちも皆無傷で。

「それにしてもチビ龍ねー、確かにシロは龍の幼少時代そっくりなのよね」

「お前何で俺の幼少時代なんて知ってるんだよ」

「龍の事は何でも知ってるわよ」

「言つてろ」

ため息をつきながら、すたすたと乱華の前を通る。

とにかく早く冬獅郎を見つけて安全を確保してやりたい。早く向こうに返してやりたい。

しかし自分の足で冬獅郎を探して見つかるだろうかという不安もあ

った。

基本、龍獅郎は冬獅郎よりも力がある。頭だつて龍獅郎の方がいくらかキレる。しかし一つだけ、冬獅郎にかなわないことがあった。それは昔からそうで、恐らく今でも変わらない。恐らく今もそれで、皆を惑わせているのだらう。

「あいつとんでもないくらいにすばしっこいからな……ちっこいだけに」

思わず苦笑が漏れる。実を言つと、この間現世で合つた時に、相変わらずの冬獅郎の小ささには驚いた。

恐らくは、十三隊を抜けたときと何も変わっていない。変わったことと言えば、「十」の羽織を冬獅郎が着るようになったことくらいだろうか。

思わずもれる笑み。乱華に「気持ち悪い」と言われながら龍獅郎は隊舎の門をくぐつた。

14：致命的な甘さ

只ひたすら斬魄刀を振り回す。それも鞘から抜かずに、只それで相手を殴っていた。

不覚にも門番を巻いているうちに乱菊たちとはぐれてしまった冬獅郎は苦々しい思いで向かってくる死神たちを倒してゆく。

斬るつもりはない。血を流すような怪我をさせるつもりはない。自分分は誰かを傷つけるために来たのではない。自分は、一護を連れ戻しにここにやってきたのだ。

それに今自分に向かってくる彼らは皆、龍獅郎の部下だ。そして彼らには何の罪もない。

小さい龍獅郎が暴れている。小耳に挟んだその噂に拳がつている人物は恐らく自分だ。それもよくわかつている。

まさに冬獅郎は龍獅郎をそのまま小さくしたような容姿をしている。それは随分と前から自覚している事だった。

「ほ……本当に、小さい隊長が………というか隊長なのですか？」
「悪いな、俺はてめえらの隊長ではねえよ」

狼狽する隊士にも容赦せずに気絶させる。それを合図に、周りに居た者も向かってきたが冬獅郎はひるむことなく倒してゆく。
この程度ならどうってことない。もう少し挺子摺る覚悟をしていたが大したことがなかったことに軽い安堵をおぼえる。

「くそ……このガキ只者じゃない……！」

「貴様は一体何者だ!!」

最後に残った二人は、地面に横たわる仲間たちを横目に見ながら、冬獅郎を警戒する。

王属特務の者が護廷十三隊に怯えていてどうするんだ。そう呆れを覚えるが、ため息を押し殺す。

「俺の名は日番谷冬獅郎。護廷十三隊、十番隊隊長だ」

龍獅郎の弟だ、とは決して答えなかった。

それはそう言わずとも名前だけで彼らがわかんと思ったからか、そう名乗るのが嫌だったからかはわからない。

只とにかく、「弟」という言葉も「龍獅郎」という言葉も決して口にはしなかった。

案の定、彼らはそれだけで龍獅郎にとって、冬獅郎はどのような人物かを悟ったのか、驚愕に目を見開いた。

恐らく龍獅郎に弟が居ることなど考えたこともなかったのだろう。

そしてその弟がこのようにして反乱を起こす。そのことについても信じられない、そんな表情だ。

「どうりで強い訳だ……。どうする、前内」

「え、どうすると言われましても……」

「日番谷隊長の弟さんを、俺たちが止められると思うか？」

前内と呼ばれた男は、先輩であろう死神の顔をじつと見つめていたが肩をすくめて首を横に振った。

それは自分たちではかなわない、と言っているようなそぶり。それを見て冬獅郎は心底呆れた。

何が王属特務だ。何が零番隊だ。こんなの護廷十三隊と全く変わらないではないか。護廷より高い位置に居ると言うが、何がそんなに偉いのか、冬獅郎にはよくわからない。

護廷よりも優れているというのなら、一体何がだらうか。そんな疑問すら、ふと脳裏をよぎる。

冬獅郎は舌打ちをすると、彼らから逃げるように瞬歩で屋根に登った。これ以上彼らと戦っていても、時間と体力の無駄だと思ったのだ。

彼らはそれに気がついていようだが、追ってくることはしない。とにかく向かってくるモノが居ないのならば、あとは一護を探すだけだ。

こんなところに居ても、一護の垂れ流しな霊圧はバンバン感じる。そして案の定、彼は脱走して逃げているようだった。

とにかくそうなれば、一護と合流することが先決だ。

「居たぞ！ あの少年だ！！」

また性懲りもなく、何処からか追ってきた隊士が声を上げる。

冬獅郎はそちらに視線を向けながら思わず舌打ちをした。

その数は先ほどの比じゃない。更にその霊圧は、その何倍もの高さだ。

これは十三隊と全く変わらないから大丈夫だ、なんて悠長なことは言っていられない。恐らく舐めてかかったら一発だ。

先ほと思ったことを撤回し、本気で彼らの動きを見定める。冬獅郎は氷輪丸を鞘から抜くと、振り下ろされた刃を受け止めた。一撃がかなり重い。

「想像以上に酷似しているな、まさに日番谷隊長をそのまま小さくした感じか……………」

「どいつもこいつも、同じこと言ってんじゃねえよ！」

全身の体重を刀に乗せて、相手の刀を弾く。男はその小さな体のどこにこんな力があるんだ、とでも言いたげな目で冬獅郎を見ていた。しかしすぐに体制を立て直し、冬獅郎に向かってくる。刃を避けながら隙を窺うが、流石に先ほどまでの奴とは違う。一向に隙らしい隙を見せなかった。

「何かの陰謀で日番谷隊長が小さくなったのだと言う者もいるのだが……貴様、隊長の弟と言ったところか」

「だから何だ」

誰かによって龍獅郎が小さくなった？何だそれは。

龍獅郎が聞いたならば一体どんな発想をしてるんだよお前は、と苦笑しそうな話だ。

冬獅郎は後ろにもう一つの霊圧を感じて、上空に飛び退ける。しかしそれを合図に、待機していた者が一斉に襲いかかってきた。

無数の刃が冬獅郎を襲う。辛うじてそれを避けていくがこちらに攻

撃する暇はないようだ。

斬魄刀を解放する気はない。そんな甘いことを言っているのは恐らくやられてしまう。

「霜天に坐せ！ 氷輪丸っ！！」

大きく跳躍し、叫びながら氷輪丸を振り下ろす。

水と氷の龍は一直線に死神たちへと向かってゆくが、それはいとも簡単に粉碎された。

一人ひとりの力が強いだけではない。彼らは相当のチームワークがある。恐らく誰か一人だったらその攻撃は届いていたのだろうが、全員で龍を攻撃されては氷輪丸だって敵わない。

かなり厄介な相手だ。やはり王属特務というからには、それなりの実力がある。冬獅郎は本日何度か知れない舌打ちをする。

そして碎けた氷の隙間を縫って、一本の這縄が冬獅郎に向かってきた。

それに気がつくことができなかった冬獅郎は、簡単に氷輪丸をからめとられてしまう。

「しまっ……」

「悪いな弟。いくら日番谷隊長の弟さんでも、侵入者は侵入者だ」

氷輪丸に気を取られているうちに、先ほどの男が冬獅郎の背後に回る。

冷たい汗が、頬を伝う。目の前には白刃が迫ってくる。

こんなところで自分がやられて何になる？

一護を連れ戻したくて、乱菊達まで連れてやってきたのに、自分が捕まっでいてどうなる？

こんなところで簡単にやられる訳にはいかない。一護を向こうに返すまでやられる訳にはいかない。

「赤火砲！！」

冬獅郎は咄嗟に鬼道を放つと、逃げるように駆けだした。

すぐ下の地面には、支えの無くなつた氷輪丸が光っている。それを拾いに行く余裕は無いだろうと思つたが、氷輪丸をなくしては戦うこともままならない。

鬼道だけで、素手だけで戦うには、彼らは強すぎる。

冬獅郎は多少の怪我を覚悟して、氷輪丸を取りに行く。それを待つていたかのように向かつてくる死神たちがほくそ笑んでいるように見えた。

顔のすぐ横を通過する白刃。その峰を肘で叩き、氷輪丸の柄を握つた。

「は、派手にやってるな、あいつ……………」

目の前に広がる光景を見ながら、龍獅郎は呟く。

誰一人として、立っている者はいない。死神と斬魄刀で埋め尽くされている地面。全員殴られただけなのか、血の色は見られなかった。

冬獅郎がかなりの実力の持ち主だと言うことを、龍獅郎はよく知っている。それもそうだ。いつも彼を稽古づけていたのは自分だし、虚討伐に出かけるときだって殆ど冬獅郎が一緒だった。

卍解を習得したときだってそう。中途半端ながらも卍解を会得した瞬間に一緒に居たのは龍獅郎だった。

目を瞑れば昨日の事のように思い出される、十三隊時代の思い出。冬獅郎と過ごした日々は夢にだって見ることが多い。

龍獅郎にとつて今でも、護廷十三隊で過ごした時間は宝物だった。

「みなうちか……見事に一発で急所をついている」

そして昔と比べて、大分実力が伸びていることも分かった。

隊士の容体を確認し、気絶しているだけなのだということを認めるのと立ち上がる。冬獅郎なりに配慮したのだろう。彼らは放っておいても問題ない。

龍獅郎は無言で歩を進める。先ほどから感じる懐かしい霊圧。これが冬獅郎のモノだということは、考えなくてもわかる。

そしてふと地面に視線を向けて、息を呑んだ。点々と続く赤い斑点。その周りにはやはり隊士たちが横たわっているが、いずれも血を流すような怪我はしていない。

その中には砕けた氷も散らばっていたが、氷輪丸は彼らによって簡

単に砕かれてしまったのだと言うことが分かった。
壁に龍がぶつかった形跡もなければ、誰かがそれに飲み込まれた形跡もない。

「冬獅郎……………」

間違いない。龍獅郎は、これを見た瞬間に湧きあがった不安を確信に変え足を前へ前へと進める。
何処までも続く、まるで居場所を教えているかのような赤い印。それをたどってゆくにつれて冬獅郎の霊圧はだんだんと近くなってくる。

王属特務の死神相手にみねうちなんて甘いことを考えているからこうなるのだ。龍獅郎は内心そう、彼を叱りつける。

時に、冬獅郎の優しさは本人を一番追い詰めると思う。他人ばかりを気遣って自分の事については全く配慮しない。それによって冬獅郎がどんなに傷ついても彼はそれを改めようとはしない。

そこが、龍獅郎が冬獅郎を見ていて一番心配なところだった。

「まだ直ってないのか、そういうところ……………」

思わずため息が漏れる。

正直、部下たちが倒れているのを見た瞬間より、これに気がついてしまった今の方が不安でいっぱいだった。心配だった。

結局自分は部下より弟の方を取るらしい。自分を慕ってくれる、頼ってくれている部下たちよりも自分に好意は決して抱いていない弟

の方を優先するらしい。

「冬獅郎！」

やがて前方に見えてきた「十」の文字に向かって、龍獅郎は声を上げる。

かつては自分が背負っていた文字を背負った少年は、その言葉に反応し足を止めると、背に収めた斬魄刀に手をかける。そしてゆっくりと振り返った。

「……やっと出てきたか」

「冬獅郎、おまえ……」

言葉が続かない。冬獅郎は何を勘違いしたのか、赤く染まった自分の羽織を一瞥し、龍獅郎に視線を戻す。

その表情は無に近かったかもしれない。とにかく真っ直ぐな光を放った翡翠色だけがしつかりと龍獅郎をとらえていた。

「安心しろ、これはてめえの部下たちの血じゃねえよ」

「そんなこと……！」

「お前は」

冬獅郎は何か言おうとした龍獅郎を遮って、言葉が続ける。

「お前は部下を本当に大切にする人だったから……それは変わっていないと信じてい」

「だから不利だとわかっていても斬魄刀を使わなかったのか」

そう言う冬獅郎は瞋目し「ああ」とだけ答える。変なところで氣を使う。そう思った。

あれだけ嫌っていた王属特務の連中を前にそんなことを言えるものだろうか。そんなところに氣を使えるだろうか。……これは、日番谷冬獅郎だからこそできることなのだ。龍獅郎はそう思う。

そしてこれがヒトの心情とでもいうのか、正直言つて部下たちが怪我をすることよりも、冬獅郎の血を見る方が辛いかもしれない。

馬鹿な弟だ。あれだけ龍獅郎を嫌おうともそんなところに氣を使う。自分が怪我をしてまでそれを庇う。

「俺だつて一応隊長だ。部下たちが隊長にとってどんな存在なのかくらいよくわかつてい」

「だからって敵を庇つて自分が怪我してどうするんだ？ 優しいを通り越して甘いよ、それは」

「甘い……か。そうかもな」

まるで自嘲するように冬獅郎は口角を上げる。不意に、その身体がよろめいた。

龍獅郎は咄嗟に彼を支えようとしたが、逆に拒まれてしまう。龍獅郎から飛び退け、壁に寄り掛かった冬獅郎は、自嘲的な表情を崩さないまま龍獅郎を見た。

「いつも言われていたな、『龍兄』に」

まるで過去を思い出してそれにすぐるように。龍獅郎は何も言えず、追憶する冬獅郎を見据える。
何も、言えなかった。

「お前は優しすぎるんだって、そして甘いんだって……事あるたびに言われていた」

ふ、と瞑目し、龍獅郎に反応する暇を与えないまま、冬獅郎は喋り続ける。

「流石に、王属特務は強いな……一太刀入れられちまったぜ」

「冬獅郎」

「来るなら来いよ。一応これでも戦うことくらいはできる」

氷輪丸を引き抜こうと動かされたその腕を、龍獅郎は掴んで止める。咄嗟に瞬歩で前に出たのだ。

その動きが全く読めず、突然目の前に現れたように見えたのだろう。冬獅郎は一瞬目を見開いたが、すぐに目を細める。

「黒崎の野郎は、逃亡したみたいだな」

「ああ。気がついたら居なくなってたよ。乱華曰く、動きが鮮やか

で見惚れてしまったんだそうだ」

「あいつらしいな……」

ふと、口元を緩める冬獅郎。龍獅郎は、なんだか複雑な思いでそれを見る。

冬獅郎の腕から手を放すと彼もあっさりと斬魄刀から手を下ろし、そのまま地面に座り込む。

先ほどまでは戦う気は大いにあったのだろう。しかしその追わされた傷も、案外軽いモノではないのかもしれない。

これは早く戻って治療してやらなければならないと思う。

「一言言っておくぜ」

「ああ、何でも聞いてやるから、大人しく俺についてこい。その怪我どうにかしよう」

「……黒崎はどうなっても、てめえらのいいなりにはならねえぞ。

捕まっても黙ってねえ奴だからな」

それはなんとなく今回でわかった気がする。まさにそんな感じだ。きつとこれからいくら彼を牢に入れようとどうにかして脱獄しそうな気がする。

そして彼はきつと、捕まったり助けられるタイプではない。彼は「護る」タイプだ。

思わず苦笑しながら「あいつはそんな気がする……」と言うと、冬獅郎は小さく頷いた。

「とにかくついてこい、怪我、治さないと一護どころじゃないだろ」

「……」

冬獅郎は何も答えず、その場から動こうとしない。こんな怪我をしていても、敵を目前に座り込むようなことになっても、冬獅郎は龍獅郎を拒み続けた。

それはまるで子供の幼稚な反抗のようで。拗ねた子供のわがままのようで、思わず苦笑が漏れる。

「仕方がない、無理矢理にでも担いで……」

「お、お待ちください!!」

恐らく今の冬獅郎は抱きあげても抵抗はできない。半ば強硬な手段ではあるか、このまま放っておくよりはずっとましだろう。

そう思い、冬獅郎の前に屈みこんだその時だった。

緊張した、こわばった女の声が響く。二人はその声に顔を上げた。

見知らぬ顔。漆黒の髪が風になびいている。必死に走ってきたのか、彼女はその小さな胸を上下させていた。

「どうした？ お前、見ない顔だが……」

「朽木……?」

龍獅郎がそう尋ねようとした時、冬獅郎がそれを遮って呟く。その言葉で龍獅郎は理解した。

この少女は冬獅郎と一緒にやってきた、彼の仲間なのだと。

15：隠された思い

突然現れた黒髪の少女は、緊張に表情をこわばらせ、龍獅郎を見ている。その光景を、冬獅郎はどこか呆然としながら見ていた。

冬獅郎以外にも、複数の護廷の死神がやってきたことは龍獅郎も知っていた。恐らく彼らは一護と相当親しいのか、冬獅郎の部下か、そのどちらかかと思っている。

目の前の少女は、記憶をたどってみればどこかで見たことがあるような気がした。しかしそれがなんだったのか、上手く思いだせない。

「大丈夫ですか日番谷隊長……！？」

「朽木……お前、松本たちはどうした？」

龍獅郎を押しつけるようにして、少女は冬獅郎の前に屈みこむ。

朽木。冬獅郎がそう呼ぶのを聞いて、龍獅郎は思い出す。朽木ルキア、確か、六番隊隊長、朽木白哉の義妹だ。

「驚いたな……まさか白哉の義妹が来てるなんて」

「こいつは、黒崎を死神にした奴だから……こんなことを聞いて放っておけるわけがねえだろ」

ああ、そうか。それを聞いて、自分は随分抜けていたんだ、と龍獅郎は思わず苦笑する。

それもそうだ。死神代行黒崎一護という存在が生まれたのは、現世

に派遣された一人の隊士が、彼に力を分け与えたことから始まったんだということは有名な話だ。

それにまた、その死神にかなりの才能があつたのか、短期間でかなりの成長を見せている、ということも知れている。

その、力を譲渡した隊士が十三番隊所属の朽木ルキア。あの、朽木白哉の義妹。それは龍獅郎に限らず、誰もが知っていることのはずだった。

龍獅郎はじつとルキアを見つめる。それに気がついた彼女は、少しだけ困ったように視線を這わせてから、キッと龍獅郎を見返した。

「貴方が、やったのですか？」

「え？」

「貴方が、日番谷隊長にお怪我を負わせたのですか？」

思いもよらぬ彼女の言葉に、龍獅郎は目を見開く。それには冬獅郎も驚いたらしく、何を言っているんだ、とでも言うように彼女を見ていた。

自分が冬獅郎に怪我を負わせた？ああそうか、この状況ならばそう思われても仕方がない。傍から見れば、龍獅郎が冬獅郎を攻めているようにも見えなくもないかもしれない。

自嘲ともななんとつかない、投げやりな笑いがこぼれる。

自分が、冬獅郎に怪我をさせた。滑稽な言葉だ。今まで考えたこともなかったその言葉は、聞いているだけで妙な気分になる。

そしてそう思われる状況をつくっていることがなんだか情けない。

このまま肯定してしまおうか。

普段なら考えないであろうことを考えてしまう。

そしてそう答えたら、彼女はどつすると言っのだろうか。冬獅郎はどんな表情をするだろうか。そう思った、その時だった。

「そいつは何もしてねえよ……」

そう答えたのは、冬獅郎。その声音は驚くほどに穏やかだ。顔を俯けていた龍獅郎は反射的に冬獅郎を見る。ルキアも、ハツとして彼を振り返った。

「これは本当に、俺がしくじっただけだ。そいつは何もしてねえ」

「ですが日番谷隊長……」

「逆に、介抱してくれようとしてたんだ、そいつは」

ルキアにも龍獅郎にも視線は向けずに、冬獅郎は言う。それは自分に言い聞かせているようにも聞こえた。誰も何も言えず、その場はしんと静まり返る。

「とうし……」

「だけどこれとそれとは話が別だ。俺はてめえのところには行かねえよ」

龍獅郎の言葉を遮って、彼の口から紡がれたのはやはり拒絶の言葉。このくらいでは心は開けない。かたくななまでに、一度抱いた感情を崩そうとはしない。

仕方がない、冬獅郎なのだから。どこか寂しく思いながらも、龍獅郎はそう割り切る。

「……悪い朽木、松本たちの居場所はわかるか？」
「はい」

彼女が頷いたのを見て、冬獅郎は壁に手をついて、立ちあがろうとする。

それは立ちあがることだけでもやつのように見えた。ルキアは慌ててそれを制し、彼を座らせた。

龍獅郎はそれを何も言わずに見ているだけだった。何も言えなかった。何を言えればいいか、わからない。いや、何も言うべきではない。

龍獅郎の知らないうちに、冬獅郎は良い仲間にも恵まれたんだ……その光景を見ながら、そんなことを思う。

考えてみれば、あのころの冬獅郎は十番隊以外の者に自分から近付こうとはしなかった。

相手の方から来るものがあっても冬獅郎からは決して話しかけようとはしない。どこか自分から距離を置いていたのを覚えている。

やっぱり自分の知らないうちにいろいろと変わっているんだ、それを見ながらそんなことを思う。

「とにかく、怪我をどうかしましょう。私が治しますから……」
「ああ、悪い」

ルキアはそう言つて、懷を探る。

その瞬間、龍獅郎は見た。彼女の手元で煌く白銀を。

刹那、鋭い金属音がその場に響いた。

突然目の前で起こったことに驚いたのか、冬獅郎は翡翠色の双眸を大きく見開いている。

龍獅郎は、ルキアの手握られた刀を、自分の斬魄刀で受け止めながら苦々しく呟いた。

今日の前で起ころうとしたことが信じられない。今自分がこれを受け止めなかったら、目の当たりになるところだった光景を考えるとゾッとする。

……何なんだこれは？ 一体、どうしてこんなものが今出てくる？

「どういうことだ……！」

「……」

「お前は冬獅郎の仲間じゃないのか！？ 今、その刀を何処へ向けようとした！？」

龍獅郎に向けるルキアの瞳は、背筋が泡立つほど冷たい。

咄嗟に反応出来たから良かったものの、少しでもタイミングが遅れたらどうなっていたかわからない。

何故今ルキアは冬獅郎に刀を向けようとしたのか、その理由がわからない。一体、何が起きているのか龍獅郎にはわからない。

その時、呆然としたまま、冬獅郎が呟いた。

彼には珍しく、動揺して僅かながらかすれた声。

「お前、誰だ？」

「え？」

「朽木じゃねえだろ……よく考えたら、霊圧の質が僅かに違う……。だったらお前は何者なんだ……？」

呆然とした状態から抜け出せない。それでも、冬獅郎の言葉はしっかりとした疑問を持っていた。

彼女は氷のような冷たい瞳で冬獅郎を見ている。朽木ルキアじゃない、朽木ルキアに化けた誰か。

そう考えて、龍獅郎は納得する。

とんでもないことになったかもしれない。厄介なことになったかもしれない。

考えてみればそうだ、元々一護を連れてきたのは彼女であり、それを邪魔する者は、彼女にとって消し去るべき存在。

そして誰かに化けて、違和感なく演じる者など、龍獅郎の記憶上一人しかいない。いや、一人だけ、居る。

「……孤成」

「……………」

「お前、今冬獅郎を殺そうとしたのか？ 朽木ルキアのふりをして、傷を治すふりをして、冬獅郎を殺そうとしたのか？」

彼女がこちらにとって敵だと言うことはわかっていた。だけど殺そうとまでは思っていなかったのだ。彼女が、そこまで理不尽な事をするとは思っていなかった。

しかし今彼女が冬獅郎に向けていたのはまぎれもない、殺意。殺意のこもった、冷たい刃。

冬獅郎は、呆然自失状態の龍獅郎を見て目を細める。

「そこまでして、お前らは一護を手に入れたいのか？」

「……さあ、どうだろうね」

ス、と合わさったままの龍獅郎の斬魄刀から、白銀のそれを離し目を細める。

その中にうつすらと浮かぶ笑みは、やはり何を考えているのかわからなかった。どうしてだろうか、今日の孤成は、いつになく冷たい印象を与える。

今日の孤成は、自分にかつてないほど冷たい目を向ける気がする。

「殺すことはしないよ？　だって龍ちゃんの大切な弟さんだもん。そんなことしたら、あたし龍ちゃんに嫌われちゃう」

「……おまえは、何がしたいんだ？　正直、今のお前の行動は目的が読めない」

靈王の命令に従って、彼女は一護をここに連れてきた。しかしそれだけではない気がするのだ。

彼女には、もっと別の、特別な理由がある気がする。靈王など関係ない、孤成個人の理由が。

孤成は微笑を浮かべながら「そうだろうね」と頷く。その笑みに載せられたいつもの無邪気さは、どこか薄らいでいた。

「龍ちゃんにはわからないだろうね。今の龍ちゃんにはわかりつこないもの」

「話してくれるならちゃんと聞くよ。どうしてお前は、一護をここに連れて来たんだ？」

その言葉に反応したのは孤成ではない、冬獅郎だった。

神妙な表情で二人のやり取りを見ていた冬獅郎は、その翡翠色を大きく見開き、孤成を見る。

失言だったか……。その反応を見て、龍獅郎は後悔した。

「黒崎を拉致したのは、兄さんじゃねえのか……？」

「そうよ。龍ちゃんはこのことに関与していない。むしろ手を引こうとしていたんだもの」

駄目だ、これ以上孤成と冬獅郎に会話をさせては。駄目だ、これ以上冬獅郎をここに居させては。

今の状態では、絶対に冬獅郎は氷輪丸を抜く。そして怪我をした冬獅郎では、絶対に孤成にはかなわない。

孤成と冬獅郎を戦わせてはいけない。冬獅郎に、刀を抜かせてはならない。冬獅郎では、孤成に敵わない。

「そう言えば、黒崎くんは言っていたわ。冬獅郎には手を出すんじゃないって。……わかるかな、この意味」

「やめろ孤成、挑発するな」

「黒崎くんは、キミの事が大切みたいだね」

「孤成っ!!」

何を考えているのかわからない。ここで挑発して、冬獅郎に刀を抜かせる気なのだろうか？

彼女に冬獅郎と戦う理由はない筈だ。冬獅郎と戦ったって、彼女には何のメリットもないはず。

やっぱり、彼女が考えてることがわからない。

「……つまりそれは、あいつは俺の事を考えてここに来たということか？」

「止せ冬獅郎」

「あいつがここに来た原因は、俺か？」

緊迫した空気の中、龍獅郎は二人を止めることしかできない。

冬獅郎が立ちあがる気配を感じながら、龍獅郎は冷静を務めて止める。

しかし龍獅郎の言葉は、冬獅郎の耳には入っていないようだ。ぎゅ、と斬魄刀の柄を握るその手に力が込められる。

本来真っ白いはずの羽織は、血を吸って赤黒く変色している。そんな状態でまだ刀を握ると言うのだ。それは無茶苦茶なことだと龍獅郎は思う。

そして相手は、あの孤成。乱華でも警戒するほどの実力者を相手に、今の冬獅郎は、絶対に敵わない。

「向かってくると言うなら相手してあげるよ」
「止せ！！ そいつは怪我をしてるんだぞ！！」

孤成は不敵な笑みを浮かべながら、冬獅郎が刀を振るのを待ち構える。

止めるしかない。止めなければならない。龍獅郎は身を乗り出し、声を張り上げる。

しかしその思いは、冬獅郎には届かなかった。

鋭い金属音が耳の奥でこもり、ワンワンと唸っている。一気に上昇を見せた冬獅郎の霊圧は、冷氣となって辺りの気温を氷点下にまで下げる。

そんな緊迫した空気の中でも、孤成は決して笑みを崩さなかった。

それは、この小さな少年では敵わないとわかっているから。

そして、決して読みとれない、心の奥の策が上手く行っていることへの優越感。

孤成は、何が目的でこんなことばかりをするのだろう。彼女の意味が全くわからない。

彼女が一体何を考えているのか、龍獅郎には全くわからない。

「てめえは、黒崎に何を言ったんだ！？ 俺をダシに脅して、ここに来なければならぬよう仕向けたのか！？」

「脅してなんかいないわよ。只、キミの名前を呟いただけ。それだけで霊圧乱しちゃうんだもん。びっくりしちゃった」

再び振り下ろされる斬魄刀。孤成はそれを軽々とかわし、冬獅郎の懷に潜り込む。

それは冬獅郎には一瞬にしか見えなかっただろう。飛び退ける暇もなく斬魄刀は弾かれ、戦う術を失う。

見ていらなかった。思った通りの結果。今まで見たこともない、追い詰められた冬獅郎の姿。

咄嗟に動かない自分の足が、非常に腹立たしい。何を動揺しているのか、龍獅郎の身体の反応が鈍っている。

孤成は、斬魄刀を薙ぐことはせずに、握った手を腰の横に下ろす。あいた方の手は、冬獅郎の髪の毛に埋まった。

そして何かを追憶するように、目を細める。

「シロちゃんなら、ちゃんと気付いてくれたのかな？」

「どういうことだ……？」

「シロちゃんなら、覚えていてくれた？」

何を言っているんだ。孤成が口を開くたびに、龍獅郎は混乱する。

彼女の一挙手一投足に目を凝らしても何もわからない。彼女の言葉を聞けば聞くだけ、意味がわからなくなる。

冬獅郎は、只彼女の言葉を訝り目を細めるだけだ。髪の毛を撫でる華奢な指を、払うことすらしない。

「ホント、兄弟より双子って感じよね」

「何の話だ？ てめえはさっきから何を言っている？」

「シロちゃんにはわかりっこないわ」

す、と頭に載せられた彼女の手が宙に浮く。
刹那、ものすごいスピードで宙を切ったその拳は、冬獅郎の鳩尾を突いていた。

「ぐ……！？」

「冬獅郎！！！！」

ものすごい勢いで吹っ飛ばされる冬獅郎の身体。
それまで呆然と立っていた龍獅郎は、咄嗟に反応し壁にぶち当たりそんな弟を抱きとめる。

それを見つめる孤成の瞳は、酷く冷めている。初めて見た彼女のその表情は、龍獅郎を戦慄させるには十分だった。

「孤成……！ お前は一体何を……！」

「龍ちゃんの所為だよ。全部、龍ちゃんが悪いんだから」

そう言う孤成の瞳には、やはり温度は戻らない。いつもの笑みは、どこにもない。

この少女は本当に孤成だろうか？ 龍獅郎は、それさえも疑った。

腕の中の冬獅郎はぐったりとして動かない。今の彼女の一撃は、冬獅郎の意識を飛ばすには十分の威力を持っていたのだろう。
龍獅郎は腕の中にある重みを感じながら、歯噛みする。

「あたしもいい加減、耐えられないもの」

「言いたいことがあるならはつきりと言えればいい。悪いけど俺は、そんな回りくどい言葉を理解できるほど聡明じゃない」

「ウソツキ」

孤成の答えは早かった。

「龍ちゃんの嘘つき。貴方は十分人の言葉を理解する能力を持っているはずよ。人の心を理解できる優しい人のはずよ。只、それをあたしには發揮してくれないだけ」

「……」

「もういいよ。これ以上追いつめたくないし。あたし、暴力は好きじゃないんだ。後でシロちゃんには謝っておいて？ 巻き込んだやつてごめんねって」

そう言つて、姿を消す孤成。龍獅郎は暫くその場に立ちつくし、誰もいなくなつた空間を睨みつける。

訳がわからない。一体、何が起きているのだろうか。孤成は自分に何を訴えようとしているのだろうか。

自分は、孤成の何を読み取るべきなのだろうか。何を理解するべきなのだろうか。彼女の一連の言葉には一体何が隠されているのだろうか。

考えても、龍獅郎には答えが見つけれ出せない。訳がわからない。

冬獅郎を巻き込んでまで、彼女が訴えたいことはなんだ？ 誰かを傷付けてまで気付いてほしこととはなんだ？

「全部俺が悪いつて言うのかよ……」

訳がわからない。自分がなにをしたと言うのか、全く覚えがない。少なくとも、孤成には何もしていないはずだ。

何も、悪いことをした覚えはない、むしろ、何もできやしない。しかし相手は確かに、何かあったと言っているのだ。それなのに、自覚がない自分が腹立たしい。

それ故に冬獅郎を傷つけた。冬獅郎だけじゃない、一護だって、乱菊だっていま大変な思いをしているだろう。……自分は一体、何をしているのだろうか。

「……最低だね、ヒツガヤ隊長」
「っ!?!」

突然声をかけられて、龍獅郎は冬獅郎に下ろしていた視線を上げた。霊圧の先、目の前にある建物の屋根の上。冬獅郎に負けなくらい小柄なシルエットが龍獅郎を見下ろしている。

逆光の所為でその容姿は伺えない。しかしその声とシルエットだけで、誰なのかはわかった。

「双葉？」

「クルミがあそこまで訴えかけてんのに、まだ気付かないのかよ？ 最低だよ、ヒツガヤ隊長」

スタ、とネコのような身軽さで目の前に降り立った少年は、ネコのような目で龍獅郎を見る。

木下双葉。靈王直属の部下の一人であり、孤成を慕う少年。ネコのような身軽さと、くるりとはねた茶色の毛。猫目の双葉は、やんちゃなイメージを醸し出している。

見た目通り彼は活発で、いつもどこかを飛び回っているような少年だった。

「気付かない、ってどういうことだ？ お前は孤成の言いたいことがわかるのか？」

「当然。だってクルミの事だもん。なんだってわかるよ」

双葉は、頭の後ろで腕を組み、ニツと無邪気な笑顔を見せる。

「それにしてもヒツガヤ隊長、結構酷いね？ 罪のない弟くんまで巻き込んだじゃってさ、クルミに暴力振るわせちゃって見てらんないよ、全く」

「ずっと見ていたのか」

「まあね」

双葉はそう言っただけで肩をすくめ、おどけて見せる。そして龍獅郎の懐の冬獅郎を見て、目を細めた。

「ねえヒツガヤ隊長、一つ交渉があるんだけど？」

「交渉？」

「うん、交渉。……弟くん、こっちに渡す気無い？」

16：マリオネット、脱却

「弟くん、こっちに渡す気ない？」

目の前の見知った少年は、悪戯な猫のように目を細め龍獅郎に言う。冬獅郎を渡せ。……何故この少年、双葉がそんなことを言うのか、龍獅郎にはわからない。

そして勿論、その交渉は決して頷けるものではない。それにこれは交渉ではない、一方的なモノだ。

思わずため息が漏れたのは、みんなしてその目的がわからない事をしようとするからか。孤成といい、双葉といい、訳がわからない。とにかくなんだか、疲れてくる気がする。

「何を考えているのかはわからないけど、それは無理だな。……一体、何をする気なんだ？」

「クルミの手助け」

双葉の背から迸る銀色の光が目刺激する。龍獅郎は咄嗟に斬魄刀を抜き、振り下ろされたそれを受け止めた。

こんなに小柄でも、一撃はかなり重い。冬獅郎といい、双葉といい、この小さな体のどこにそんな力があるのだろうか。そんなことを思う。

「孤成の手助けだと？ お前は、孤成が何をしたいのかわかってるのか？」

「言ったでしょ？ オレはクルミの事は何でもわかるよ。……ヒツガヤ隊長とは違ってね」

振り下ろされた刃は、冬獅郎を狙ってくる。龍獅郎ではなく、その小さな体を龍獅郎に預けるしかない、冬獅郎を。

龍獅郎は冬獅郎を抱く手に力を込め、振り下ろされる白刃をかわす。しかし双葉はすぐに龍獅郎の後ろに回り込み、第二撃を繰り出してきた。

双葉や冬獅郎みたいな、小柄な死神は何よりもスピードに長けている。それも、零番隊の隊長である龍獅郎を凌ぐほどだ。

十番隊に居たころだって、スピードを養うために冬獅郎を相手に修行をしたことが何度かある。

それでもやはり、彼らの素早さには、龍獅郎でもついて行くのがやっつくだ。

「くっ……！！」

鋭い金属音が耳を刺激する。自分は片手、相手は両手で刀をぶつけたため、力も僅かに向こうが勝っていた。

スピードも、力も相手の方が上。こんなの、卑怯じゃないか。そんなことを考える自分の甘さに気付き、自嘲気味な笑みが浮かぶ。

必死に足元に体重をかけ、押し出されないように踏みとどまる。やはり冬獅郎を庇いながらの戦闘はかなりのハンデだ。

しかし自分が彼を支えていなければ、どうなるかわからない。今は

大切な弟を護るべき時だ。龍獅郎はそう思う。

「そうだ、ヒツガヤ隊長、オレの斬魄刀、知ってましたっけ？」

「さあな。お前が斬魄刀を解放したところなんて一度も見たことない」

「そっか。それじゃあ、見せてあげるよ」

その言葉と同時に、龍獅郎は飛び退ける。

一体何が来るのだろうか。相手の斬魄刀は遠距離型か、近距離型か。鬼道系か直接攻撃系か、それすらもわからない。

とにかくなんとしてでも、冬獅郎を護らなければならない。それだけは確かだった。

龍獅郎は斬魄刀を構えなおし、何があっても話さないように、冬獅郎を抱きしめる。

足をもがれようと、腕を斬られようと、冬獅郎だけは護らなければならない。

今まで辛い思いをさせてきた分、命をかけてでも護りたかった。

双葉は、その様子を見て笑みを深める。

「後悔するよ、弟くん抱いたままだと」

「悪いな、その一言で納得するほど俺も馬鹿じゃないんだ」

「……まあ、いいけどさ」

ガチャリ、と双葉の手に握られた斬魄刀が音を立てる。それと同時に、龍獅郎も構えた。

とにかくどんなものが来てもかわせるように、反応できるように全神経に集中する。

ここまで緊張感のある戦いはいつ以来だろうか。ここまで不利な戦いはいつ以来だろうか。

最近の記憶を探っても、誰かと戦った記憶すら出てこない。

しかも最近刀を向けた者が冬獅郎だと言っただから、それもなんだか皮肉に思えてしまう。

「……踊れ」

来た。

「『遊傀儡』」

辺りの空気が変わった。龍獅郎は斬魄刀の動きに目を凝らし、じりと地面を踏みしめる。

斬魄刀の形状に変化はなかった。それどころか、何かが起こる気配もない。

只、その場はしんと静まり返り、めばしい変化は全く見られなかった。異常がないのが、逆に異常に思えるほどだ。

双葉は遊んでいるだけなのだろうか。それともフェイクか？この状況を訝らない訳にもいかず、龍獅郎は益々警戒心を強める。

いったい、何が起きているのだろうか。何がどうなった？

緊張により、一筋の汗が頬を滑り落ちる。

「……何も起こらないとか思ってるんだろうね」

「いや、お前の事だから何か裏があるんだろう。油断はしないさ」
「残念。十分油断しているよ、ヒツガヤ隊長」

猫のような笑みを浮かべながら、双葉はくい、と指を動かした。その仕草が、龍獅郎にはなんなのかわからない。しかしその目的は、すぐに思い知らされることになった。

突然、がっしりと掴まれた、斬魄刀を握った右手。その手は自分の懷から伸びており、辿ってゆけば冬獅郎に行き当たる。

目を覚ました、そう言う訳ではない。だったらこの状況はなんなのか。それを理解するには時間が必要だった。

「と……冬獅郎………?」

取り敢えず気を落ち着けるのに名を呼ぶ。しかし冬獅郎は、反応を見せてくれなかった。

まるで、その声が聞こえていないというように。無視しているのではない、冬獅郎に、この声が届いていないのだ。

「だから言っただじゃん、油断しちゃだめだよって」

「まさか……」

「最早オレと弟くんは見えない糸で繋がった。悪いけどヒツガヤ隊長、容赦はしないから」

冬獅郎の手が、龍獅郎の腕に爪を立てる。

完全な敵意。しかしそれは冬獅郎のモノではない、双葉のモノだった。

今の冬獅郎は、双葉の操り人形。マリオネットと同様。自分の意志では決して身体を動かすことができない。

龍獅郎は咄嗟に冬獅郎から離れると、思わず舌打ちをした。

「最悪だ……」

「だろうね。ヒツガヤ隊長は、自分の弟に刀を向けられるほど冷酷じゃないもんね」

ひゅ、と腕を振り上げれば、冬獅郎は瞬歩で先ほど孤成に弾かれた氷輪丸の元へ行く。

ちよつとした指の動きだけで、冬獅郎は自分の意志とは関係なく動く。

何処をどうすればこんな細かいところまで操れるのだろうか。冬獅郎の手はしっかりと氷輪丸の柄を握った。

動きが、全く読めない。手の操作がわかればなんとかなるのだろうが、それは困難だろうと思う。

それにたとえそれがわかつとも、龍獅郎には刀を振ることができない。冬獅郎に、これ以上怪我を負わせることはできない。

「操作を読もうたってそうはいかないよ。そう簡単には攻略法なんて見せないんだから」

冬獅郎が氷輪丸を振り上げる。龍獅郎も斬魄刀を構えて、その刃を受け止めた。今の龍獅郎の斬魄刀の役目は、防御のみ。

その一撃は、やはり決して弱くはない。抑えつけるのがやっとなその威力は、双葉の斬撃の重さと酷似していた。

今の冬獅郎の身体は、双葉のものと同等だ。双葉の思いどおりに動く、忠実な操り人形。

どこでどうこうなったのか、じつと龍獅郎を見据える翡翠色の双眸には、いつもの真っ直ぐな光が見られない。

どうすればいい？どうすれば、冬獅郎を双葉の能力から解放してやることができる？

どうやって、冬獅郎を救ってやればいい？

下手に攻撃をすれば冬獅郎を傷つけることになる。只でさえ怪我をしているのに、これ以上深手を追わせるのは何としても避けたい。しかもなりふり構わずハードな動きを繰り返しているため、新たな血が、冬獅郎の衣服を染め上げていた。

眩暈がしそうなほどの、鮮やかな赤。それが冬獅郎のモノだと言うことが、かなり辛い。

「くそっ……!!」

龍獅郎は齒噛みする。

ここに来たことで、冬獅郎はどれだけ辛い思いをしているのだろうか。

今までの状況が、冬獅郎をどれだけ苦しめたのだろうか。

自分はどれだけ、冬獅郎を苦しめたのだろうか。
自分をもっとしっかりしていれば、こんなことにはならなかったの
に。

「双葉、お前は冬獅郎を、それこそ罪のない奴を巻き込んでまで何
がしたいんだ？」

「オレは、クルミのために動いているだけだよ」

「だからそれはなんなんだ！ 孤成は一体何を望んでいるんだ！？」

どこにでも孤成が繋がってくる。冬獅郎たちがここに来ることにな
って理由をたどっても、孤成が関係してくる。

更には、双葉が動く理由にまで、孤成が関係してくる。

孤成は一体何を考えているのだろうか。何を訴えたいのだろうか。
それがわからない自分が腹立たしい。

「少なくとも、冬獅郎を巻き込む理由はないはずだ！！ 俺に言い
たいことがあるなら、俺だけに向かってくればいい！！」

「だけどヒツガヤ隊長、真面目にクルミと向き合おうとしねーじゃ
ん」

突き放すように、双葉は言う。

そのうちにも冬獅郎は双葉によって動かされ、龍獅郎に襲いかかっ
てくる。

刃を受け止めながら考えることは、沢山あった。孤成が何を考えて
いるのか。どうすれば、冬獅郎を助けることができるのか。

双葉に、双葉だけに直接攻撃を与えることはできないのだろうか？

「六杖光牢！！」

言い終えるかその前かの間に、どこからか現れた六対の帯が冬獅郎を拘束する。

今まで双葉の思うように動いていた冬獅郎も、完全に拘束され刀を振り上げることも出来ない。

双葉は、縛道すら冬獅郎に向けつて放つことができないと思っていたのだろつ。一瞬、目を見開いたがすぐに余裕の笑みを浮かべる。

「へえ、やるじゃん。正直オレあんたを甘く見てたよ」

「これ以上はやめた方がいい双葉。……俺が、キレないうちにな」

ガシャリ、と双葉に向けられた斬魄刀が音を立てる。

そして龍獅郎は、緊張をほぐすかのように息を吸うと、大きく言い放った。

今の冬獅郎は、縛道によって動くことができない。双葉の手によっても、冬獅郎自身に意思があっても。

だったら、危惧することはない。こちらが攻撃して、双葉が冬獅郎を盾に使うことは決してない。それが確信となったから龍獅郎は叫ぶ。

「虚空を穿て『万龍』！！」

瞬間、刀身から炎の龍があふれ出し、双葉を取り囲んだ。

柄の尻から伸びる鎖の先、そこには冬獅郎のような月型の刃は繋がっていない。只、鎖だけがこすれあって涼しい音を立てる。

ぐるりと双葉を囲みながら、轟々と燃え続ける炎は決して双葉を焼き殺そうとも、やけどを負わせようとしている訳でもない。

ただ単に、ここから逃げるために作った壁だ。時間稼ぎのために作った壁だ。龍獅郎は露骨に斬り合いをするつもりはない。

出来るならば、誰にも怪我をさせないでここを去りたかった。恐らくここから離れれば、冬獅郎にかけられた能力も解ける。そう踏んでの行動。

そしてあわよくば、見えない糸とやらが万龍の炎で切れるのではないか、そう思った。

炎の壁の中から、取り乱した様子もない、落ち着いた声が呼び掛ける。

しかしそれどころか、呆然としているように聞こえなくもなかった。

「……ヒツガヤ隊長、あんたの斬魄刀って炎熱系だっけ？ オレ、黒崎一護と対峙した時は氷だって聞いたけど」

「いや、万龍は炎熱系でも、氷雪系でもない」

静かに、龍獅郎は言う。

「元々俺たち日番谷家の者は『龍』を操る傾向があるらしい。冬獅郎は『氷』だが、それも氷の龍だ。そして俺は、火、水、雷、氷……あらゆるものを龍として、自在に操ることができる」

「……すごいや、流石『龍ちゃん』だ」

コロコロと笑いながら、双葉は言う。この状況で、龍獅郎をからかっているらしい。

この余裕は流石双葉だとも思うし、少し不気味なモノも覚える。

そう言えば龍獅郎は、この少年が焦っているところを一度も見たことがない。泣いているところなんてもつてのほかだ。

いつも無邪気な笑顔を浮かべながら、楽しそうに屋根を飛び回っているところを見る。

体型が冬獅郎に似ているのに、性格は正反対なんだな、確かそれが、第一印象だった。

只、泣かないところだけは、冬獅郎と同じだ。何があっても泣かないところだけは。

どんなに辛くても感情を押し殺すところが似ている。いつも笑っているのか、完全に押し込んで無感動のようにいるか、その我慢の仕方が違えども。

「だけどミスしたね、そこで炎を選んじゃうなんて」
「なに？」

「炎と氷って、どっちが強いのかな」

刹那、後方から飛んできた氷の龍が、双葉を取り囲む炎の龍を呑みこんだ。

氷の龍——氷輪丸は完全に炎の威力を吸収し、万龍ともども砕け散ってしまう。その光景を龍獅郎は只呆然と見ていただけだった。

この状況で何故冬獅郎は氷輪丸を使うことができるのか。いや、何故双葉が、氷輪丸を使えたのか、それが解せない。

そして炎が氷に劣った。いや、炎熱系ではない万龍の炎が、冰雪系最強の氷輪丸の氷に劣ることは当たり前かもしれない。

この少年には理屈がない。どこかで、そんな話を聞いたことがある。双葉に理屈を追求したってどうしようもない。いつしか、そんな話を聞いたことがあった。

どうやら本気で彼と戦わないといけないらしい。

本気で彼と戦わないと、冬獅郎は救えない。そう思うと、自責の念に押しつぶされそうになる。

「悪いけど、万龍の炎じゃ冰雪系最強の氷輪丸にはかなわないんだよ」

「うん、見てたらわかるよ」

冬獅郎を拘束していた縛道はいつの間にか解けている。俯けたその表情はうかがえない。

氷輪丸の切っ先は龍獅郎の方に向けられており、完全に戦闘態勢だった。

何故縛道が破られたのか。勿論、意図的に解いた訳ではない。何もかもが、不可解だ。

「弟くんを連れて戻りたいなら、まず弟くんをどうにかしなくちゃね」

腕を振り上げる。それとほぼ同時に、龍獅郎の真横で風が巻き起こった。

しかしどういう訳か、先ほどまで、嫌味なほどに視界の中できらめいていたはずの刃がどこにもない。

冬獅郎はどこに消えた？ 上か、後ろか？ そうして視界を巡らせ後ろを見たとき、龍獅郎は目を見開くことになる。

「な……」

「え……な、何？」

「……」

双葉も、状況が理解できていないようだ。只一人、双葉の背後で切っ先を向ける冬獅郎だけが、全てを凍てつかせるような表情で立っている。

澄みきった翡翠色のその瞳を、しっかりと双葉に向けながら。そしてゆっくりと紡がれる、ひどく落ち着いた声。

「本当に、てめえの命令で氷輪丸を解放したとでも思ってるのか？」

「な……ま、まさか。ウソだろ？」

「悪いが、いつまでも操り人形になってるつもりはねえんだ。……」

俺を操るうなんて、百年早い」

双葉はここで初めて、追いつめられた表情を見せた。

自分と身長がさして変わらない少年に刃を向けたまま、冬獅郎は表情を変えない。

息を呑むほど、落ち着いた翡翠色。その奥に見える激情の光。それは龍獅郎に向けられることなく、只敵だけを見据えていた。

「……ウソだ。信じられねえ。……アンタ何者だよ？」

「別に何物でもねえよ。てめえらと同じ、死神だ。そんなこと、お前らにとつては取るに足らないことだろう？」

ちっ、と双葉が舌打ちをする音が聞こえる。

斬魄刀の能力が効かない。そうなれば舌打ちをしたくなるのも無理はないだろう。動揺するのも無理はないだろう。

実際龍獅郎も、目の前に光景をどこか信じられない気持ちで見ている。冬獅郎が意識を取り戻し、自分の意思で敵に刃を向けたことが信じられない。

考えもしなかっただけに、驚きは大きい。そして驚愕の中で、ひそかに安堵している自分がいた。

やはり冬獅郎は冬獅郎だ、そう思う。転んでも、ただでは済まない。

「……なんか悔しいなあ……弟くん、オレとさして年齢変わらないつしょ？　なのに圧倒的に弟くんの方が強いんだろうね。流石、ヒツガヤ隊長の弟くんだよ」

双葉は、諦めたようにそう言うと、突き付けられた刃をゆつくりと下ろす。

冬獅郎は、それに対して特に抵抗しようともせず、自分の腕が下ろされるのを黙って見ていた。

双葉は、マイペースで自己中心的な部分があるが、決して悪い奴ではない。負けたと思えば、それをしっかり受け止める。

決して悪あがきはしないのが、木下双葉だ。

「いいや、ここは弟くんに免じて帰る。だけどヒツガヤ隊長、これ以上クルミを傷つけるんならもう容赦しないから」

「……一つだけ聞いていいか？」

「クルミが何を訴えているのかなら言えないよ。その答えはあんたが自力で見つけ出してやらなくちゃ意味がないから。オレが教えてもクルミは喜ばない」

双葉は肩越しに振り返り、笑みを浮かべると瞬歩で姿を消した。

龍獅郎は、思わずため息をつく。自分が気付くべきことは何なのか。その答えとやらを見つけられるのならば苦労はしない。

そして視界の端で、冬獅郎が倒れそうになっていることに気がつき、龍獅郎は慌てて彼を支えた。

完全に傷は開き、新たな血で袴が汚れている。龍獅郎の手にまで赤いそれがつくほどだ。

「冬獅郎……」

「大丈夫だ。大丈夫だけど、最悪だな……」

ああ、最悪だ。龍獅郎は心の中で、冬獅郎の言葉に相槌を打つ。
最悪だ。この状況も、どうにもできない、何もわからない自分も最悪だ。

「やっぱり、冬獅郎もそう思うか？」

「最悪じゃねえかよ……何で、てめえの世話にならずにやらねえんだ」

話がかみ合っていない事にも気付かずに問えば、返ってきたのはそんな返事。

それは、自力で歩くには無理があることを自覚しての一言なのだろう。

どこか投げやりで諦めきった言葉。龍獅郎の世話にならなくてはならない状況が不服だと言う感情がにじみ出ている。

しかし先ほどみたいに「世話にならない」と拒絶することだけはしないようだ。

それは本当にそうしなければ自分は持たないと思っているか、もう龍獅郎に対する嫌悪は薄れたのかはわからない。

只、ここは前者だと思うことにしておこう。

「俺としては願ってもない状況だけだな」

「……くそ」

抵抗することすら億劫なのか、やたらと軽く感じる冬獅郎を担ぎあげれば、舌打ちが聞こえた。

17：アンタは偽物だ。

時々、大の字になって伸びている死神が居る。時々、壁がへこんでいる部分がある。時々、複数の死神が路上に積み重なっている。

現在逃亡中のこの男、黒崎一護は、目の端にいろいろなモノを入れながら王族敷地内を走り回っていた。

どういうわけだろうか、ここに居ると、道の感覚がわからなくなる。今の自分は、いわゆる「方向音痴」の状態だろう。

剣八かよ。一護は心の中でツツコミを入れながら、取り敢えず走る。

ふしぎと、追手はこなかった。

思い切り門番の死神たちを殴って逃亡してきたのだ。流石に龍獅郎も焦って追ってくると思っていたのだが、その気配を全く感じない。むしろ彼は、冬獅郎の方を優先したようだ。それは先ほどから感じている霊圧のおかげでよくわかる。

「だから言っただじゃねーかよ、冬獅郎」

ザマーミロ。なんだかものすごく楽しくて、自然と口角が上がる。

冬獅郎は龍獅郎を拒んでいたが、それも間違いだったと気付いたのだろうか。

逃亡者を無視して冬獅郎を優先するのだ。それだけ龍獅郎にとって、冬獅郎は大切な存在に違いない。

あの二人が、再びわかり合えればいいと一護は思う。一度張ってしまった氷を、冬獅郎はちゃんとかすことができるかと思う。

龍獅郎は本当にいい人だ。一護の印象は、最初から変わらない。龍獅郎は、決して悪いヒトではない。

「つーか、冬獅郎と龍さんが合流したなら俺走ってる意味ねえし……だからと言って戻るのもなー……道わかんねえし」

ぼやきながら、一護は走るのをやめない。

冬獅郎の無事を確保できたのなら、一護に走る理由はもうなかった。いや、よく考えれば、自分はまだ護らなければならない者が居た。乱菊、恋次、そしてルキア……。日番谷と一緒にやってきた三人の霊圧も、一護は勿論確認している。

だったら今は、あの三人を探そう。今度はあの三人のために走ろう。

「る……うおっ!!」

ルキアの名を叫ぼうとしたその時、正面に何か赤いものが現れ、一護にぶつかった。

相手もかなりの勢いで走っていたのだろう。二人とも、見事に吹っ飛ばされ地面に尻もちをつく。

かなり大きな壁だ。ちなみに胸板にあたった顎がジンジンと痛む。

一護は尻よりも顎の痛みに唸りながら、顔を上げた。

「痛てえ……れ、恋次!!」

「くそー、ちゃんと前見やが……一護!!?」

お互いの顔を見合わせれば、二人ともそれぞれを指して立ちあがった。

見知った、赤髪の男。その顔は、見知っているなんてものじゃない。完全に一護の仲間だ。

大体、赤い髪をしたやつなんてこの男くらいだろう。一護はその姿を認めると「なんだ恋次かよ……」と安堵のため息をついた。

正直、王属特務の死神だったらどうしようかと思ったのだ。

勿論、彼らに見つかつたら自分は捕まることになる。しかしそう簡単に捕まるわけにはいかないのは当然だ。

とにかく仲間でよかった。それに対する安堵が大きい。

しかしそこでふと、ある予感が一護の脳裏をかすめてしまった。

「……恋次、なんだよな？」

「あん？ 何言ってるんだよ。んなモン見りゃわかるじゃねーか」

確かに、見た目は恋次だ。声も口調も、完璧に阿散井恋次である。しかしよく考えてみる。自分は一度、冬獅郎そっくりに化けた孤成に騙されてはいないか？

孤成に騙されて、一護はここに来てしまったのだ。それに彼女なら、自分が逃亡したと知ってすぐに追ってくる。そんな気がした。

恋次だと決めつけて安心するのはよくない。そんな気がする。

そしてそう思えば思うほど、この男が恋次ではない気がしてくるのだ。

疑えばいたがうほど、怪しくなってくる。……恋次は、こんな顔をしていただろうか？

「……もう騙されねえぞ、孤成」

「は？ 孤成って誰……」

「てめえは恋次じゃねえ！ 恋次はもっとバカっぽかったはずだ！
！」

ビシイ、と目の前の男を指しながら、一護は断言する。

我ながら決まった。どうだ参ったか。俺はもう二度と同じ手にはかからねえ。

相手は、そんなに驚いたのかきょとん、と目を丸くして一護を見ている。図星なのだ。図星なのだろう。

そうして訳のわからない優越感に浸っていると、男は思い切り胸倉を掴んできた。

「んだと一護てめえ！！ 人がせつかく助けに来てやったのになんつー言いがかりだコラァ！！」

「なりきろうつたって無駄だぜ。お前が演技力に長けていることは既にわかってるんだ。俺はもうだ騙されねえ」

「くっそ……てめえ頭おかしくなったんじゃないかねえのか、余計に！！」

「へっ、なんとでも言いやがれ。悪いけど俺はお前を倒して通るぜ。恋次の姿をしてんのが運のつきだ」

「喧嘩なら買ってやらあ！！ 来るなら来やがれ！！」

「やめんか莫迦者ども！！」

少女の一喝が飛ぶと同時に、胸倉の掴み合いを始めた二人の鳩尾に拳が入る。

見事にヒットしたそれは、二人を悶絶させるのには十分だった。

「喧嘩などしておる場合か！ 一護も何を言っておるのだ！！」

「る、ルキア……？ あれ、ということは、本物……？」

「ア・タ・リ・マ・エだこの野郎！！ 人をいきなりニセモノ扱いしやがって、いっぺんくたばれこのたんぼアタマ！！」

目の前で仁王立ちする黒髪の少女を見て、一護は思わず呆然としてしまう。

その隣には乱菊が立っており、彼女も流石に呆れの表情を見せていた。

恋次、ルキア、乱菊。このメンバーがそろっているということは、やはり本物なのだろう。ご立腹の恋次を見ながら、思わず頭を掻く。

「知らなかったぜ……恋次がこんなアホっぽい力オしてるなんて……もう少ししかと思ってた」

「一護てめえ蛇尾丸の餌になるかコラ。そんなに餌になりたいのかてめえ」

「いい加減にしろ……」

ルキアがため息をつく。乱菊も「やっぱり恋次と一護よねー」と何故か関心している様子だ。

とにかく、皆と合流できてよかった。一護は拳を振り上げる恋次を横目で見ながら、ルキアに笑いかける。

「よかった、無事だったんだな。安心したぜ」
「当然だ。それより日番谷隊長の方が心配なのだ……」

ルキアはそう言い、空を仰ぎ見る。

恐らく、彼女も日番谷が戦っている霊圧も、すぐ近くに居る龍獅郎の霊圧も感じ取っていたのだろう。

多分何も知らないルキアにとっては、龍獅郎も敵としか思えないのだ。その証拠に、隣の乱菊はけろりとしている。

「冬獅郎なら大丈夫だ。一回霊圧乱れたけどきつと龍さんが……痛てえな恋次！ いきなり何しやがる……！」

「てめえが人の事馬鹿にするからだ！ 齒ア食い縛れこの野郎……！」

ボコボコにしてや……ぐほお……！」

「やめろと言っておるだろう恋次……！」

「る、ルキアてめえ……あとで覚えとけよ……！」

一護の後頭部めがけて拳を振り下ろした恋次だが、ルキアの逆襲に遭い撃沈される。

乱菊はやはり呆れているようで、それをどこか冷めた目で見ていた。彼女がこんな表情をするのは珍しい。一護も後頭部をさすりながら、思わず苦笑してしまう。

「とにかく、アンタも察してんでしょ？ 隊長がお兄さんと合流したの。……怪我とかしてないといいんだけど」

「ああ。だけど龍さんと一緒なら冬獅郎は大丈夫だ」

そう言うと、乱菊はほほ笑みながら頷く。やはり彼女も、龍獅郎の事は信頼しているのだろう。

今龍獅郎の事が信じられないのは、多分冬獅郎だけ。彼はいつまで、龍獅郎を拒み続けるのだろうか、ふと、そんなことを思う。

「取り敢えず、冬獅郎のところ行くか？ 多分龍さんも通してくれると思うけど」

「だ、大丈夫なのか？ 一護をここに連れてきたのは、その日番谷隊長のお兄様なのだろう？」

おそるおそる、ルキアは聞いてくる。

そうだ、彼女は龍獅郎の事をよく知らない。こうして警戒してしまうのも無理はなかった。

しかし、真実は違う。自分をここに連れてきたのは龍獅郎ではない。

一護はゆつくりと、首を左右に振る。

「龍さんじゃねえんだよ、俺をここに連れてきたのは。人に上手く化ける奴が居てさ、恋次もそいつかと思っただけ」

「警戒するのは構わねえけど、とんだ迷惑だぜ畜生……」

ルキアにがつつり賤けられた恋次は、彼女の横で口をとがらす。

とにかく、ここで立ち話をしても、いつ王属特務の死神が現れて戦わなければならないかわからない。

それに、自分達は一か所に集まってしまったのだから、それだけ見

つかる可能性が高いということだ。

取り敢えず、冬獅郎のところに行こう。一護はそう言って踵を返すが、突然視界が真っ暗になった。

「こんなところに居たのね、あんたたち。探したわよ」

「お……お姉さん!!」

「やつほー乱菊♪ 久しぶり!!」

乱菊が嬉しそうに声を上げるのが聞こえる。しかし視界は全く開けない。むしろ、息苦しかった。

なんなんだ一体。お姉さん？お姉さんということは、目の前に居るのは乱華か？しかし自分の視界を遮っているモノは一体何なんだ？状況がわからず、一護はあたふたする。しかしその後ろで、恋次とルキアの方が慌てている気配を感じた。

なんだ、何が起きている。一護はやり場の無くなった腕を適当に振ってみる。

触れたこれはなんだろうか。なんだかものすごくやわらかい。そしてそんな一護に、新たな悲劇が襲いかかった。

「お姉さん久しぶりーっ!!」

「ホント久しぶりね！ 元気にしてた？」

「ぐえっ!!」

後ろから掛かってきた圧力。一護は完全に押しつぶされ、軽くプレ

スされてしまうのではないかという恐れすら抱く。

なんなんだ、なんなんだ一体！！ 何が起こっている！？ これも敵の仕業か何かなのだろうか！？

というか息ができない。このままだと窒息死しかねない。

「哀れだな、一護……」

「そう思うなら助けてやれよ……」

「いや、私には無理だ……」

恋次とルキアがそんな会話を交わしているが、助けてくれないのか。そしてその様子からすると、今自分はどうしてもない状況に陥っているらしい。そしてすごく、苦しい。

「びつくりしたのよ、最初隊長がお姉さんに会ったなんて言うから！！」

「あたしもシロに逢った時はびつくりしたわよー。全然成長してないんだもの！！」

酷い！！ それは冬獅郎に対してかなり失礼なモノ言いだ！！

頭上から聞こえる笑い声に、一護は最早内心ツッコミを入れる他にない。

て言うかも訳がわからない。ルキアも恋次も、傍観しているようだがどうか助けてほしい。それだけを切実に願う。

「それより乱菊、このオレンジ色のなあに？」

「……あら、何してるのよ一護」

やっと解放された一護は、酸素を求めて顔を上げる。至近距離にあったのは乱華の顔。

そして、自分の手が掴んでるのは、乱華の……胸。

「ぎゃあああああああ！！！！」

「な、何よ失礼ね！ 悲鳴あげることはないじゃないの！！」

一護の絶叫がほとばしる。恋次とルキアは、耳をふさぎながらため息をついた。

成程、今まで一護は乱華の胸に埋まっていたのだ。それも、突然目の前に現れた乱華の胸に。

しかも乱華自身、谷間に一護が挟まっていることに気がつかなかったのだから恐ろしい。

似た者姉妹だ。一護はそう思いながらため息をつく。

そして彼女たちが護廷十三隊に居た時代、冬獅郎はどれだけ苦労したのだろうか。そんなことを考える。

「む、胸に埋まるのは冬獅郎だけで十分だから！！」

「なによそんなこと言って顔真つ赤よ」

「息止まってたんだから当たり前だ！！」

なんだか、冬獅郎になった気分だ。思い切り怒鳴りながら、一護は

そんなことを思う。

いつも冬獅郎は乱菊の胸に埋めながらこんなことを思っているのか。なんだかものすごく、冬獅郎の気持ちかわかる気がする。

「取り敢えず乱菊、一護。こんなことしてる場合じゃないわ」

「いや、アンタの所為だからな」

「ついて来なさい、シロも零番隊に居るから」

乱華は一護の主張など全く聞かぬらしい。思い切り反論する気満々の一護から視線を逸らし、促してくる。

なんだかそれが、いつも日番谷の話を聞かない乱菊を彷彿とさせた。流石姉妹といったところか、容姿だけではなく性格もそっくりな印象を受ける。

だとすれば龍獅郎も日々乱華には悩まされているのだろうか。兄弟そろって苦労人か。そう思うとなんだか哀れになってくる。

「恋次、乱華さんっていつもあんなのかよ」

「いや、俺に聞かれても良くわからねえけど……多分、かなり乱菊さんに似てると思う」

「いや、この場合松本副隊長がお姉様に似ていらっしやるのではないか？」

「姉妹っておもしろー」

彼女たちみたいに性格も容姿もそっくりな、まるで一卵性双生児見たいなきょうだいと、冬獅郎と龍獅郎見たいな容姿はそっくりでも性格は違ふきょうだいとが存在する。

なんだかそれが妙に面白く感じられて、一護は思わず感想を漏らす。乱華と乱菊はやはり双子ではないのか？ さつさと前を歩いてしまふ二人を見て、そんなことを思う。

「なにしているのよあんたたち！ 置いてくわよ！」

「早く隊長に会いたいんだから！ 一護あんた心配じゃないの!？」

「いや、そりゃあ……冬獅郎心配だけどさ……」

終いには声まで同じように聞こえてきた。そして何故あの人たちは自分だけを責めるのだろうか。訳がわからない。

一護は思わず盛大なため息を落としながら、彼女らの背中を追いかけた。

18：全ては、自分次第

数回瞬きを繰り返して、ぼやける視界をはっきりとさせてゆく。なんだか全身が重くて、満足に動かすことが困難だ。全身が妙にだるい。鈍痛が走る。

冬獅郎は、それに耐えながらゆっくりと上体を起こした。

一体ここはどこなのだろうか。ぼんやりする頭で考える。よく見れば、身体の所々に真新しい包帯が巻かれていた。

この場所は、よく知った場所のようで、そうでないように思える。ごく普通の隊舎。ここは執務室だろうか。他の部屋と少し変わった造りも、冬獅郎は見慣れている。

しかしここが十番隊ではないことがよくわかった。

自分の部屋にしては、あちこちに本が積み重なって乱雑だ。そう言えば、龍獅郎は片付けが苦手だった。

何でもできる天才気質の癖に、部屋を整頓することだけは昔から苦手だ。

そのため、いつも自分が彼の部屋を片付けていたことを思い出す。彼の所持品は今でも覚えていた。

（あいつの部屋か……ここは）

ものすごく、懐かしい匂いがする。ものすごく懐かしいものが沢山並んでいる。

冬獅郎は、ゆっくりとベッドから降りると、床に落ちていた一つの冊子を手を取った。

少し黄ばんだ、10ページ弱の古い絵本。これは流魂街に居た時代から、龍獅郎が気に入ってるものだ。

幼い兄弟が冒険する、子供にとっては憧れであろうその物語。冬獅郎も一度読んで、面白いと思った記憶があった。その弟の生意気なところが、冬獅郎に似ている。龍獅郎にそう言われて、苦笑いしか返せなかったことも記憶の中では鮮明だ。その時の、龍獅郎の嬉しそうな笑顔までもが。

「いつまで絵本なんて持つてる気だよ、あいつ……」

思わず苦笑が漏れる。幼いころは、每晚この本を読んでから寝ていた。祖母が本を読んでくれると言ったとき、決まって龍獅郎が持つていくのはこの本だった。

まさか今でも、每晚これを読んでから寝ているのだろうか。そんなことを思うと笑いがこみあげてくる。いつまで子供なんだ、あの兄貴は。

冬獅郎は絵本を机の上に置くと、部屋を見回してため息をつく。読みかけの本が積み上がる乱雑な部屋。流石に衣服が放りっぱなしだと言っほほどだらしなくはないが、それでもこの汚さは気になってしまう。

そう言えば、昔は『掃除屋三席』なんてふざけた称号を付けられた。いつからだろうか、それを全く聞かなくなったのは。

「こりゃ掃除屋復活しかねねえだろ……」

ため息。足場がほとんどないほど本が散乱しているのだ。これは暫く掃除していかないのだろう。

乱華だって、掃除くらい自分でやれなきゃ隊長なんてつとまならない、とか言いながら龍獅郎の部屋は無視する。

こう言うところだけ、乱華は龍獅郎より大人な気がしていた。変なところで大人だ。それは乱菊と似ているところでもあると思う。いや、乱菊が乱華に似ているのか。

とにかくすごく、懐かしい。過去を思い出すことが、なんだか楽しい気がしてくる。

だかららしくないこんな一言も飛び出してしまうのかもしれない。

「掃除屋冬獅郎、いきまーす」

「……何言ってるの、オマエ……」

「うっ……」

後ろから聞こえてきた声に、思わず唸ってしまう。

冬獅郎だって、たまには一人で妙なことも口走ってみる。しかしやりにもよってその決定的瞬間を目撃されてしまった。もう恥ずかしくて気がどうにかなりそうだ。最悪だ。

「大丈夫か？ さっきの戦闘で頭おかしくしたか？ 結構出血量多

かったしな」

「うるせえ！ 何しに来やがったてめえ！！」

何しに来たも、ここは龍獅郎の部屋だ。彼がここに来るのは当たり前である。

もうこの状況、何を言っても穴に深く落ちてゆくだけだ。笑いを抑えている様子の龍獅郎を睨みつけながら、冬獅郎はベッドに腰掛ける。

全く何をしているんだ自分は。こんな自分がものすごく腹立つ。そして恥ずかしすぎていたたまれない。

龍獅郎は冬獅郎の様子を見て、ふわりとほほ笑んだ。

「元気そうでよかったよ。傷はどうだ？」

「痛むことには痛むが、大した事ねえよ」

「そうか。待つてろ、包帯取り替えてやるから」

龍獅郎はそう言うと、器用に本をまたぎながら戸棚の方へと向かう。ずっとこの部屋で過ごしているのだろ、その足取りはものすごく慣れているように見えた。

よくこんな部屋で平気で過ごせるものだ。それは呆れもするし、逆に関心すらする。

しかも思い切り躓いて転びそうになっているのだ。我が兄ながらかなり情けない。

更には端っこに積み上がっていた本が雪崩れ、慌てている。……なんなんだ、このアホな奴は。本当に龍獅郎か？

「部屋、汚いだろ。掃除してくれる奴がないからこの有様だ」
「自分で片付けろよ、いい加減」

「いや、頑張ろうと思うんだけど、あるだろ？　どうしても苦手なモノって」

苦笑しながら、本を積み上げる龍獅郎。丸められたその背中からは、見ている方も情けなくなってくる。

それでも「天才」と言われるのだから、世の中って言うモノはふしぎだ。掃除ができないのに他の事にん関してはずば抜けているなんて、ふざけていると思う。

だけど冬獅郎は、そんな龍獅郎が嫌いじゃなかった。嫌いじゃない、はずだ。

「ほら、冬獅郎がどうしても高いところ届かないみたい」

「全然違うだろうが！！　身体的問題だこれは！！」

「身長伸びるよ、いい加減」

「余計な御世話だ！！」

バン、とベッドを殴った瞬間、腕に鈍痛が走った。

思わず小さなうめき声を上げながら、そこを押さえてしまう。

そう言えば、先ほどいろいろなところに怪我を負ったんだ。もうどこだったかわからないくらいに複数の場所を。

そんな上体で、自分はお戦おうとしていたのだから、冷静に考えてみればそれは無茶苦茶だった。

龍獅郎は肩越しに振り返ると、憂いの表情を浮かべる。

そして横に置いていた包帯を掴むと、散乱した本を放置して冬獅郎の方へとやってきた。

「ごめん、一応鬼道で治そうと思ったんだけど、治しきれなかったんだ」

「別に……」

謝られても困る。それにあれだけの傷を、ここまで癒してくれただけでも感謝すべき事だった。

龍獅郎は愁いの表情を崩さずにじっと自分を見つめている。それに気がついて目を細めれば、彼はゆっくりと口を動かした。

「ごめんな、冬獅郎」

「……」

「ごめんな、辛い思いさせて」

冬獅郎は何も言わない。只じっと、その翡翠色で龍獅郎の翡翠色を見返す。

今更何を言っているのだ、このヒトは。何故今更、自分は謝られなくてはならない。

何もかも今さらだ。今更、そんなモノどうでもいい。だけどまだ、まだ少しだけ、時間が欲しかった。

「……」

冬獅郎には、やはり何も言うことができない。まだどこかで、龍獅郎を拒絶している自分が居る。

あれだけ助けられておいて、真実を知っておいて、冬獅郎はまだ、龍獅郎に対して抱いた偏見を払拭することができない。

頑固だとはよく言われる。しかしこれはきつと頑固とも何かが違う。多分これは、自分が弱いだけだ。

「俺がもつとしっかりしてたら、こんなことにならずに済んだのにな。本当に、済まない」

「もういい、謝る必要はねえから、やめてくれ」

それは冬獅郎の精いっぱい、ひそやかな拒絶だった。

多分心の内では、龍獅郎が一番傷ついているのではないかと思う。

昔はあんなに大好きだった兄を、ここまで嫌うのだから。

龍獅郎は何も悪くないのに、冬獅郎は偏見で彼を傷つけている。それがなんだか申し訳なくて、そしてそう簡単に、昔のように接していいなんて思えない。

自分に、そんな権利があるのだろうか。そんなことを思ってしまった。

そして冬獅郎には、まだ心の整理をする必要があった。

龍獅郎は悪くない。龍兄は、龍兄のままだ。そうとわかっている自分と、まだ疑っている自分とが居る。

この、疑いの心を完全に退治するまでは、冬獅郎には真っ直ぐ彼と向き合うことができない。向き合う資格がない。

「冬獅郎」

「悪いが、暫く一人にしておいてほしい。……構わねえか？」

龍獅郎が何かを言おうとしたが、冬獅郎はこれ以上彼の言葉を聞いてはいけないと判断した。

心配そうに冬獅郎を見つめる龍獅郎。そしてその視線を、手元の包帯に落とす。

きつと、怪我の事を案じているのだろう。そして包帯を取り替えると言っておきながら、それはまだ済んでいない。

冬獅郎は、龍獅郎の手からそつと包帯を受け取る。

「このくらい自分で出来る。……頼む」

「……わかったよ。只、何かあったら呼べよ。すぐに駆けつけるから」

龍獅郎はそう言って、部屋を後にする。

冬獅郎は、彼の靈圧が遠くなるのを感じながらため息をついた。感情が安定しない。自分のその感情を素直に吐き出していいのかわからない。

どうやって、感情をまとめればよいのかわからない。……こんなに悩んだのは、きつと久々だ。

冬獅郎はため息をつく、そつと死覇装の襟に手をかける。しかしその腕を、後ろから掴む者がいた。

氷に覆われたその手に触れるだけで氷点下の温度を感じる。それだけでこれが何者かわかるのだ。冬獅郎は動揺もせず、振り返る。

いつも自分のそばに居るこの靈圧に、警戒する必要はないのだ。

「なんだよ、氷輪丸」

「貸せ、我がやる」

「別にこれくらい一人で」

「我にやらせるのだ、主」

命令？ 日番谷は少々納得のいかない表情を浮かべながらも、包帯を氷輪丸に手渡す。

いつの間に包帯の巻き方なんて覚えたのか、氷輪丸は手慣れた様子で、傷口に包帯を巻いていく。

龍獅郎は鬼道で治療したが治しきれなかったと言っていた。しかし完治はしていなくても、決して浅くはなかった傷が殆ど治りかけている。これだけで十分な治療だと思った。

これはもう、包帯なんか巻く必要はないのではないだろうか。そう思っ
て氷輪丸を見上げたが、彼の真剣な表情に口をつぐんだ。

「久々だな、兄上と言葉をかわすのは」

「ああ……お前も、万龍と話したのか？」

「無論だ。龍獅郎殿も、万龍の兄上も変わらぬ」

「そうか」

素直にそう言える氷輪丸がうらやましい。

冬獅郎と龍獅郎が兄弟ならば、当然のように氷輪丸と万龍も兄弟だった。

死神と斬魄刀の魂は繋がる。だったらその血縁関係も、斬魄刀に繋がるのだろつ。

それは初めて知った時は驚いたものだが、今となっては当たり前の理屈だった。

「なあ、氷輪丸」

「なんだ」

「俺は、今更あいつを信じていいと思うか？」

今更。自分でそう口にして、改めて納得する。

そうだ今さらだ。あの日から今日までずっと、龍獅郎に対して決しいい感情を抱いていなかった。それを今更、信じるなんて都合のいい話だ。

氷輪丸は何も言わずに、只じつと冬獅郎を見据える。そしてやがて、ため息をついた。

「済まぬが、それは主が決めることだ。主自身の気持ちの問題なのだ。……只我は、信じることに今更もないと思う」

ほどいた包帯をたたみながら、氷輪丸は言う。

包帯の表面には、うつすらと血の跡が見えた。痛々しい切り傷が広がる皮膚上からかぶされる白が、生々しい赤を隠す。

「信じたいのか、信じられるのか。主が龍獅郎殿を信じたいと思うのなら信じればよい。それができぬのならば、何も考えなくても良い」

「そうか……」

信じたいと思う気持ち。それは、冬獅郎の中にしっかりとある。だけれどどこかで納得できないと言う矛盾。

自分は一体どうしたいのだろうか。また、あのころに戻りたいのだろうか。まだ、兄貴を慕う気持ちは残っているのだろうか。

恐らく今までもずっと、心の奥にそれがあつたからあそこまで感情的に考えることがあつたのだ。

信じていたからこそ、大好きだったからこそ裏切られた気持ちが膨らみ、それが悔しかった。

それが、偏見に拍車をかけた。

「只、龍獅郎殿は望んでいると思う。それだけは覚えておいた方がいい」

「ああ……わかってるつもりだ」

本当に見捨てられたのなら、裏切られたのなら彼は自分にあんな手紙を残さなかったはずだ。

多分今回も、自分はこうして一護を助けに来ることができなかった。

結局は寂しかったのだ、きっとそれだけだったのだ。そう思う。

「主、苦しくはないか？」

「ああ、大丈夫だ。ありがとう」

包帯を取り替え終えた氷輪丸は、俯く冬獅郎を覗き込み言う。

冬獅郎は、脱いだ袴を着直しながら、少しだけ寂しそうに、ほほ笑んだ。

19：素直な気持ち

自分の部屋に比べて、執務室は大分片付いている。それは、汚いのは嫌だと乱華が片付けるからだ。

しかし龍獅郎の部屋の面倒まで、乱華は見てくれない。隊長が片付けも出来ないんですか！　そう言うときだけ、彼女はしっかりとした副隊長の顔で龍獅郎を叱りつける。

いい年して、しかも兄貴で隊長なのに掃除一つ出来なくてどうするの！　そう叱られるのだから、龍獅郎も苦笑しながら受け流すしかなかった。

掃除ができない、なんて龍獅郎の大きな欠点だ。それも、副隊長に怒られるほど重度。

冬獅郎と乱菊には絶対にならない日常なんだろうな。ふと、そんなことを思った。

「俺のあれは、性質なんだよ」

机に積み重なった書類を一枚つまみ上げながら、龍獅郎はひとりごちてみる。

昔から、掃除だけは全く出来なかった。昔から、部屋の掃除は冬獅郎の役目だった。

特に冬獅郎はそれを苦に思っていないようだったし、周りからやじが飛ぶこともない。それが当たり前だったから、特に覚える必要のなかったこと。

しかし冬獅郎がいない今としては、掃除だって出来なければならな

い事だった。

勿論、自分から率先してやろうとしたことはある。しかしどうすればこんなことになるのか、部屋は余計に汚くなるばかりだった。

本棚に並べられた本が頭上び降ってきたり、立てかけてあるモノが倒れたり、それはもう悲惨だ。

不器用だなんて言う問題じゃない。これはある意味才能なんじゃないか。そう思ってこぼれるのは、自嘲の笑み。掃除も出来ないなんて、凡人以下ではないか。

「天才」の唯一の「欠陥」乱華はそれをそう言うが、面白いことを言うモノだ、と龍獅郎は思った。

しんと静まり返った部屋に、紙の上を筆が滑る音だけが静かに響く。空気を満たす、墨の匂い。護廷十三隊も、王属特務も執務室の匂いだけは一緒だった。

ふと、龍獅郎はある霊圧に気がついて顔を上げる。

そして遠慮なく、前触れもなく開かれる執務室の扉。そこに目を凝らしていると、ひょっこりと乱華が顔を出した。

「ただいま龍。一護たち、連れて来たわよ」

「ああ、脱走者のご帰還か」

一護のオレンジ頭を認め、少しだけ意地悪に言ってみる。一護は、龍獅郎を見ると気まずそうに苦笑した。

そしてそのあとに続く恋次と、乱菊。懐かしい顔ぶれだ。そして黒髪の少女、朽木ルキア。

先ほどの孤成と比べると、成程まとう雰囲気が少しばかり違った。

神経質そうな、しかししっかりとした意思を宿した瞳。その立ち姿は凜としている。

斬魄刀は冰雪系だろうか。どこか冬獅郎と似た氷のスツとした気配を感じるが、冬獅郎ともなんだか違う。

なんというのだろうか、どこか、穏やかな涼しさというか、表現するには少し繊細すぎる何かがある気がする。

そんなことを思いながら、龍獅郎は視線を一護へと戻す。

「冬獅郎は俺の部屋に居るよ。行ってやってくれ」

「へ？ あ、ああ。龍さんの部屋何処だっけ？」

「冬獅郎の霊圧探せばわかると思うぞ」

「あ、成程な。流石龍さん頭いいな！！」

一護はそう言っつて、一目散に駆けてゆく。どうやら彼も、すぐに冬獅郎に会いたかったようだ。

その姿を、どこか微笑ましげに見送る乱菊とルキア。恋次はここに居ることが落ち着かないらしく、なんだかそわそわしている。

ものすごく新鮮だ。護廷の死神たちを執務室に通すことなんて滅多にあり得ないことだから、それだけになんだか不思議な気分にもなる。

「取り敢えずそんなところに立っていないで入ってきたらどうだ？
茶、出すから」

入口付近に突っ立ったままの三人を中に通す。

恋次とルキアは戸惑い顔を見合わせたが、その一言に乱菊は緊張をほぐしたのだろう。
ぱあ、と護廷に居たところと変わらない笑顔を見せると、二人の手を引いて入ってきた。

物の配置が変わらない。所有物は何一つ増えていないし、減ってすらいらない。しかしそれらがどのように置かれていたのか、記憶が抜けていた。

それほどの月日が経っているのだ。それほど長い間、今まで当たり前みたいにすぐそばにいた兄と遠く離れた場所に居たのだ。

それにしても、どうして床に放っているのに痛むことすらしていないのか。古いことには古いが、目立つた傷のない本を手に取り、冬獅郎は苦笑する。

一体どのくらい、部屋をこのまま放置しているのだろうか。いずれのモノも、表面は埃で汚れており、息を吹きかけると顔に襲いかかってくる。

まさか王属特務に來たその日からこのままということはないだろう。だったらどれだけ永い時間、この乱雑な部屋で過ごしたというのだろうか。

そんなんじや病氣になっちまうだろ。そう呟き、ため息をつく。

それよりも、零番隊には龍獅郎の面倒をみる奴がいないのだろうか、ふと、そんなことを思った。

昔から、兄貴は掃除が駄目だった。昔から、掃除だけは自分がやってきた。多分これからもずっと、龍獅郎は「掃除」というモノと仲良くできないだろう。

そこまで無頓着な性格をしているわけではないのに、昔から掃除や洗濯といった家事の類はダメだった。それが、冬獅郎の記憶にも残る日番谷龍獅郎だ。

ここには、そんな彼の苦手を代わってくれる者がいない。あの完璧なヒトの、唯一の欠点を補ってくれる者はいない。

駄目じゃねーか。またもそう呟き、そして今度は幾分深いため息をつく。

「乱華さんは絶対にやらねえしな……どうすんだよ」

全く、ダメな男だ。いまだき掃除も出来なくてどうするのだ。

冬獅郎は、手に取った本を棚に戻し、両手をパンパンと払う。汚ねえ部屋。そう、何度呟いただろうか。

ぐるりを辺りを見回せば、まだまだ大量の本が部屋の隅に積み重なっている。そのいずれにも埃がたまっているのだ。全く、仕方がない奴だと思う。

せめて埃を払うくらいはできないモノだろうか。

「わざわざ俺が来てやるわけにもいかねえしな……」

全く、悩ましい限りだ。どうにかして彼のそれを克服してやることのできないものだろうか。

まさか冬獅郎自身が定期的にこちらにやってきて掃除屋になる訳に

もいかない。徹底的に指導してやるほど、暇でもない。

冬獅郎だって、十番隊の隊長だ。自分が隊を空けることによってどれだけ負担になるのか、それはよくわかっている。

冬獅郎はふと、ある霊圧に気がついて顔を上げた。良く知った、よく馴染む霊圧。

そしてずっと心配で仕方がなかった男。冬獅郎はドアのところまで駆けてゆくと、思い切りノブを引いた。

「黒崎っ!!」

「うおっ!!?　び、びっくりした……って何してんだ冬獅郎?」

扉の前に立ち、扉を開こうと手を出していた男、黒崎一護は、ものすごい勢いで駆けてきた冬獅郎に驚いたようだ。

一護は、冬獅郎の姿を見て眼を丸くする。それもそうだ、今の冬獅郎は袖を紐でくっつけた完全掃除スタイル。これは、一護にも見慣れない格好だろう。

そして胸元から覗いている真新しい包帯に気がついて、目を細める。久々に顔を合わせて早々、忙しい奴だ。コロコロと表情を変える一護を見ながらそんなことを思う。

「怪我したのかよ?」

「大した事ねえよ。それよりお前は、怪我はねえのか?　大分派手な脱走劇起こしたみたいだが」

見る限り、目立った傷はないようだ。一護は「俺は何ともねえよ」

と言うがそれがなんだか不満そうだな。
恐らく、冬獅郎が怪我をしておきながらまた強がってるんじゃないかと、そう思われているのだと思う。

いつだって一護はそうだ。

いつだって彼は、些細なことを重要視してやたらと冬獅郎を心配してくる。本当に平気だと言うのに。少なくとも龍獅郎が治療してくれたから、平気だ。

日番谷はため息をつく、一護に背を向けた。取り敢えず掃除を再開しよう。

「まあ、傷はそれなりに深かったようだけどな。治してもらったから大分良くなってる」

「なら良いけど、無理すんじゃないぞ。て言うかこの部屋、すげえ汚ねえな……」

きよろきよろと部屋を見回しながら入ってくる一護は、露骨に嫌そうな表情を見せていた。

そう言えば、一護自身の部屋も大分片付いていることを冬獅郎は思い出す。元々性格自体は几帳面と言うか、しっかりしているためか、部屋を汚すと言うことをこの男は知らない。

なんだかイメージとのギャップがある気もするが、性格を考えればそういうところはしっかりしているのが黒崎一護だ。

一護に出来て龍獅郎に出来ないこと。そう思うと、なんだかすごく複雑だ。

「なあ、ここ誰の部屋？ 物置か？ 冬獅郎物置に放られたのか？」

「ちげえよ。兄さんの部屋だ。あいつ、昔から掃除が苦手なんだよ」
「え……すげえ意外……」

確かに、それを聞けば皆意外だと言う。あんなしつかりした人が掃除も出来ないなんて。しかしそう言うのは単なる偏見だ、と冬獅郎は思っていた。

たとえば「こんなに小さいのに隊長だなんて思わなかった」と冬獅郎はよく言われる。

ヒトはよく、見た目やイメージでその人を決めつけるモノだ。そしてそれは、自分にだって当てはまる。

仕方がないことなのだろう。当たり前性の性なのだろうが、だからこそ冬獅郎はそれを打ち破ってやりたい気もする。

「取り敢えず手伝え黒崎。俺一人じゃ手に負えねえ」

「お、おう。て言うかホントすげえホコリだな、これ……。何年放置してんだ？」

「やつぱりこれは年単位の埃だよな」

「俺、こんなの初めて見た」

高く積み上がり、冬獅郎には届かないところの本を手に取り、一護は言う。

確かに、こんな埃なんてなかなかお目にかかれないし、それよりもこんな部屋で過ごす龍獅郎が何よりも珍しい。

よく、こんな部屋で毎日寝られるものだ。そしてよく、こんな部屋に怪我を負った弟を寝かせることができるモノだ。
そう思うと、思わず苦笑してしまう。

本当にあの人はこの部屋を使っているのか？ それすら疑わしくなってきた。

「だけどこれ、多分読んでない本を放置してるだけなんだろうな。あとは割と綺麗だぜ」

「当たり前だろうが。使っているものまで汚れてるとか、何だよ、それ」

積み上げた本を棚に戻しながら、一護に伝える。一護は「そりやそうだけどよ」と苦笑したようだ。

「冬獅郎の部屋ってここまで乱雑じゃねえだろ？ 龍さんだけがこれ」

「むしろ昔は、俺がこいつの部屋を掃除してたんだ。今じゃ俺も居ねえから、放置するしかねえんだろうな」

「じゃあ冬獅郎、来てやれよ」

「冗談じゃねえ。只でさえ忙しいのに、兄さんの面倒なんか見てられっか」

他人事だと思つて、そう言つと「じゃあ俺も手伝つてやるよ」と笑う。

何事もなかったように交わす会話は、なんだか安心する。何より非日常と言えるこの場所で、一護の声を聞くだけで日常なんだと錯覚してしまう。

また、一護と二人で面倒なことに巻き込まれたんだ、そんな何気ない日常の感覚。非現実的なこの状況が、一護と会話を交わすだけで

「当たり前前のいつもの事」に変わる。
それがなんだか滑稽に思える。

いつから、一護が居ることが「日常」になったのだろうか。
考えてみたらいつの間にか一護が傍に居ることが当たり前になり、
こうした会話が安心できるモノになっていた。

いつから、いつから自分の中で一護が「傍に居ることが当たり前な
人物」になっていたんだ……？

「龍さん、いい人だよな」

「は？」

いきなり、そんなことを言い出す。冬獅郎は手を止め、訝しげに一
護を見やった。

彼の琥珀色は、本に据えられたままこちらを見ようとはしない。何
も考えずに只思ったことを口に出している。彼の表情はそう言うモノ
だった。

冬獅郎は何も言わずに、只じっと一護を見据えてみる。一護は、暫
くしてそれに気がついたのか、顔をこちらに向けると苦笑した。

「いい人だよ、龍さんは。流石冬獅郎の兄貴だぜ！」

「……そうか。お前がそう言うなら、そうなんだろうな」

——『俺は、お前の兄貴なら絶対にいい人だと思う』

一護は、最初からそう言っただけで譲らなかった。そう言っただけで譲らなかった。一護が、簡単に連れさられた。

そら見たことか。そんな甘いことを言っているから、こんなことになるんだ。そうやって拉致されるなんて、柄にもない状況に陥ってしまうのだ。

最初はそう思っていた。そうやって呆れを覚えていた。仕方がない奴。そう思っていた。

だけど真実は違う。一護は、自分に化けた孤成によって連れ去られた、それも、自分のために。

結局龍獅郎を信じる一護に間違いはなかったのだと思う。結局最初から最後まで、間違っていたのは自分だったのだと思う。

情けない話だ。そしてやっぱり一護は、悔れない。いつも一護の信じる先には、それなりの結果が伴ってくる。

それはわかっていたはずなのに、それでも自分は、心を閉ざしていたのだろう。

「お前、俺に偽物に騙されて連れてこられたんだってな。あり得ねえだろ」

「あ？　だって冬獅郎だぜ！　冬獅郎相手に警戒する必要なんかねえし、そもそも孤成もすげえそっくりに演じるんだよ。あれはホント、してやられたぜ」

「俺は、その孤成に挑発されたと聞いた。『冬獅郎には手を出すんじゃない』　どういふことだよ、これは」

どうしてこんなに責めるような言い方になっているのだろうか。自分の口調がきつくなっていることになって、冬獅郎は目を細める。一護を責めるつもりは、冬獅郎にはない。むしろ、責められるのは

自分の方なのだろうと思う。

だけど心の奥で、すぐ自分なんかのために熱くなる一護に腹を立てているのだろう。自分なんかどうでもいいのに。大丈夫なのに。

一護は表情を無くすでもなく、また怒っているようにも悲しんでいるようにも無く、きょとん、と目を丸くしていた。

そして天井に視線を彷徨わせ、首をかしげる。

「そのままだろ？ 何言つてんだよ、冬獅郎」

「てめえがここに来たのは俺のためなのかって聞いてんだ。本当は振り切ろうと思えばできたんじゃないかねえのか？」

だとしたら、ものすごく腹が立つ。一護ではない、自分がだ。

一護の足手まといになったであろう、騒動を大きくする存在でしかなかったであろう、自分が。

しかし一護はこんどこそ「はあ？」と不愉快そうな表情を見せた。

「悪いけど、孤成は本当に強かったぜ。「冬獅郎に何かすると言うなら勝手にしろ。俺が阻止してやる」そう言い残して俺は帰ろうとしたけど、後ろから襲われて意識飛ばしちまった」

全く、凶暴な女だぜ。一護はそう言いながらため息をつく。

冬獅郎も、それを聞いて思わずため息がこぼれた。何ともこの男らしい言葉だ。

自分が護るから、それを止めるから好きにするといい。覚悟と、自信に満ちた黒崎一護らしい言葉。

「あり得ねえ…… やっぱ黒崎、てめえは馬鹿だ」

「冬獅郎ほどじゃねえよ。俺が拉致られたって知って、真っ先にやつてくる冬獅郎も馬鹿だと思うぜ？」

「うるせえ。放っておけなかったんだよ」

龍獅郎が一護を攫ってきたのだと思っていたから、それがどうしても許せなかった。

龍獅郎が一護に害をなすと思うと、耐えられなかった。そしてものすごい怒りを覚えた。

今はそれが冷めつつあるのは、龍獅郎は関係なかったと思ったからか、それとも別の理由があるからか。正直、はつきりしない。

「……冬獅郎、龍さん信じてやれそうか？」

「……………」

「やっぱり龍さん、嫌いかな？」

「……………」

一護は訊ねてくるか、すぐには答えられない。しかし一護も、このまま流させる気はないらしく、手を止めたままじっと冬獅郎を見ていた。

冬獅郎はそれを一瞥すると、手に取った本を見ながら言う。真っ直ぐ、一護の目を見て言う自信はなかった。

「……どうだかな。少なくとも、以前みたいに嫌いにはなれねえ」

素直な気持ち。閉ざしていた心をちゃんと開いて、自分が本当はどうしたいのか、それと真正面から向き合う。

嫌いになれない。そうだ、あんなに大好きだった兄貴を、どうしていきなり嫌いになれるのだろうか。

それでも素直になれないのは性分で、はっきり言うことができない。

それでも一護は、満足そうに笑みを浮かべた。

それなら、よかった。その声を聞きながら、冬獅郎は目を伏せる。

20：兄離れ

「そ、それって相当厄介じゃないの!!」

バン！ と机を叩いて、乱華が立ちあがる。テーブルの上にあがった人数分の茶が揺れ、波紋が浮かぶ。

龍獅郎は、予想を裏切らない乱華の反応に、思わず頭を抱えた。

あのあと龍獅郎は、乱華達をソファに促した。孤成のことも、今まであったことも全て彼らに話した方がいいと思ったのだ。

そして孤成の話を聞いて黙っていられないのが、案の定乱華だった。他の者は話の内容がよくわからないらしく、むしろ大怪我を負ったという冬獅郎の身を案じているらしい。

乱菊など特に気にしているようで、先ほどから落ち着かないようだ。

乱菊が冬獅郎を大切に思う気持ち。それは昔から全く変わらないのだと、彼女の様子を見ていて思う。

そして恋次とルキア。冬獅郎は、良い仲間恵まれた。つくづくそう思うし、何よりそれは、冬獅郎の兄貴としてとても嬉しいことだ。

「なによ、結局全て孤成の所為だって言うの!?」冗談じゃないわ

！ しかもシロまで傷つけて、もう黙ってられない!!」

「待て乱華！ どこに行く!？」

「孤成のところよ。あたしの水豹の餌食にしてやる!」

「きゃー！ お姉さんかっこいい!!」

刀に手を添えながら立ちあがる乱華と、手を叩きながら黄色い声を上げる乱菊。恋次とルキアは呆然とそれを目で追い、龍獅郎は思わず頭を抱えた。

孤成のところに行つてどうすると言つんだ。正直乱華では敵わないだろうし、何より今の孤成は何をするかわからない。

しかし今の乱華は、誰が何を言おうと止められないだろう。それは今までの経験からよくわかつてるし、何より乱華の性格上、そういうモノだ。

無理矢理鬼道で縛り付けてやろうか、そう思い立ち上がった時だった。何やら鈍い音が響き渡わたり、何かが地面に横たわったような、更に重く鈍い音が木霊す。

瞬間、はしゃいでいた乱菊も黙りこみ、恋次とルキアは戸惑っているようだった。

ひょっこりと扉の隙間から顔を出したのは、冬獅郎。

「なあ、雑巾どこ……………何してるんスカ乱華さん」

「うつつ……………やるわねシロ……………このあたしを倒そうだなんて」

「……………黒崎」

「お、俺の所為かよ！　つーか大丈夫かよ乱華さん！！」

どうやら乱華が出て行く前に、冬獅郎が向こうから扉を開いたらしい。見事乱華は顔面を強打し、床に倒れ込んだのだ。

それを見下ろす冬獅郎は驚くほど冷静だ。お前本当はわざとやったんじゃないのか。そう疑いたくなる。

一護に起こされる乱華を見下ろしながら、冬獅郎は申し訳なさそうに頭を掻いていた。そして龍獅郎に視線を戻し、再度用件を伝える。

「で、雑巾どこにある？」

「雑巾って、隊長何してんですか！？　て言うか大丈夫なんですか怪我！？」

「あ？　別に、どうってことないが」

今までソファに座っていた乱菊が立ち上がる。冬獅郎に訊ねるその表情はかなり必死であり、冬獅郎も若干驚いているようだ。

胸元から覗いている包帯は、やはり周りから見ても痛々しい。恋次やルキアも心配そうに見ていることに気がついた冬獅郎は、龍獅郎を見て苦笑した。

いつもこうなんだ、そうとでも言うように。その光景がなんだか微笑ましくて、龍獅郎は思わず噴き出した。

「つーかなに、お前その格好。まさか掃除してた？」

「見りゃわかるだろうが。黒崎に手伝ってもらってた」

「強制的にな。龍さん部屋汚いんだって！　すげえびっくりした！」

「黒崎でも部屋は片付いてるのにな……」

「どういう意味だよ、それ」

さあな。一護の言葉を受けて、冬獅郎は飄々とそれを受け流す。今までに見たことない彼らの会話が、なんだかとても微笑ましい。

そして何気に、龍獅郎に対してもこの弟は毒を吐いている気がした。が取り敢えず気にしないことにしておこう。

冬獅郎は「それで、どこなんだよ」とどこかいらしたように自分を見上げてくる。完全に掃除屋スイッチが上がっているらしい。

あれから何年もたっているのに、そのスイッチだけは健在のようだ。錆びることもせずに。

何十年も続けてきたモノは簡単に無くなりはないのだろうか。なんとなくそんなことを思う。

「部屋に置いてなかったか？」

「雑巾まで放置してんのかよ……最悪」

「龍さん……俺もそれはどうかと思う」

「いや、そうじゃなくて、一応部屋に掃除道具箱設置してんだけど……」

恐らくこのチビっこは、部屋にそのまま雑巾を置いていると勘違いしたのだろう。露骨に嫌な表情を見せ、その声音までが感情を表に出していた。

確かに読んだ本をそのまま放置して積み上げているが、流石に雑巾まで床に放置したりはしない。

掃除は苦手だ、苦手なのだが、そこまでだらしくはないつもりだ。

しかしそれでも、彼らはつついてくる。

「部屋に掃除道具箱……？ それおかしいと思っぜ？」

「うん、おかしい。学校かよ」

「……なあ、こいつらいつもこんななのか？」

何を言ってもそろって反感を返してくる。どうしようもなくなった龍獅郎は、二人を指しながら乱菊たちに訊ねる。

この二人にかかれれば何を言ってもボロクソ言われそうな気がする。そしてそれに対して何も言えない。何なんだ、この妙な仲の良さは。そして妙なコンビネーション。思わずため息が漏れる。

なんとか復活し立ち上がった乱華は、ニツと笑みを浮かべた。

「良いじゃない、なんか微笑ましいわよ。て言うか龍！ あんたまだ掃除も出来ないの!？」

「だ、だから俺は本当に掃除とかそういう類が苦手なんだって！冬獅郎に頼るしかないことよく知ってるだろ!？」

「お兄さん、昔からそうですね。隊長時々高いところ掃除しようとして台から落っこちて脳震盪起こしたの知ってます?」

「ちょ、松本それいつの話だ!！」

「わー、冬獅郎間抜け!……」

この平和がいつまでも続くといいのに。出来ればこのまま、また護廷に居た時のような生活に戻りたい。

そう願っても、叶わないんだということにはわかっている。しかしそれを夢見てしまう自分がいた。

護廷の記憶は今でも鮮明に思い起こすことができるし、それらの記憶は本当に眩しかった。

失くしてからこそ気付くことがある、とはよく言う。

しかしこの場合、失くしてからこそ余計に想いが強くなった、と言う方が正しい。

二度と戻れない日常だからこそ夢見るし、それを望むのだろう。

十の文字を背負った冬獅郎。目の前に居る弟の姿はそれなのに、記憶の中の冬獅郎は三席のままでった。

そして時々、本当に幼い、あどけない表情で自分を見上げてくる。物心のついていなかった、いつも自分についてまわっていた、自分の姿が見えなくなるとすぐに泣きだしてしまった幼い冬獅郎。

冬獅郎が物心つく前は帰る家も無く、龍獅郎はいつも冬獅郎を抱きかかえて流魂街を歩きまわっていた。

霊力のある魂魄は、食べ物がなければ生きていくことができない。当時幼かった龍獅郎は、もっと幼い冬獅郎を護りながら命をつなぐことに苦労していた。

ある夏の暑い日、照りつける太陽にやられて、冬獅郎が倒れた。

いつも自分の腕の中で元気にいろいろなモノへと、好奇心に輝かせたその翡翠色を動かしていた幼い弟。腕の中の重みに焦り、泣きたくなりながら、龍獅郎は助けを求める。

このまま、冬獅郎が死んでしまったらどうしよう。自分は、どうすればいいんだろう。誰か助けて。冬獅郎だけでもいいから、助けてください。

何を叫んでいたのかは、正直覚えていない。只必死に、慟哭するように助けを求めているのを覚えている。

そしてそうするうちに龍獅郎も歩けなくなり、そこで視界は真っ暗になった。只、地面に倒れながら冬獅郎だけは庇うことを忘れずにこのまま死んでしまうのなら、冬獅郎だけはしっかりと抱えていよう。確か最後に思ったことは、それだった。

次に目を覚ました時は、ひんやりと冷たい空気に全身がさらされていた。目をあけると、夜になってしまったのか辺りは薄暗かった。誰かが助けてくれたんだ、ぼんやりする頭で考える。そして次には、弾かれたように身体を起こしていた。ずつと腕の中にあつたはずの重みが、どこにもない。

冬獅郎は、冬獅郎はどこに居る。弟は無事なのだろうか。冬獅郎の事だけを考えて、部屋を見回した。

不意に、袖に感じる突っ張った感覚。 にい。 隣から聞こえる、したつたらずな、幼子の声。

くいくいと袖をひっぱりながら、昼間自分の身になにが起きたのかなんて知らないような表情で自分を見上げる翡翠色。

にい。 にい。 自分に呼び掛けるその声と、必死に見上げてくるあどけないその顔を見て、一気に緊張が解けた。

とにかく泣きたくなつて、必死に自分を求めてくる幼い弟を抱きしめて、声を殺して泣いた。

——あ、おばあちゃん！ あの子たち、目を覚ましたみたいだよ！！

向こうから差し込んだ、一筋の光の帯。その奥から聞こえる、まだ幼い少女の無邪気な声。

パタパタと走る音が聞こえて、やがて少女に袖を引かれながらおばあさんが顔を出した。

——良かった、目が覚めたんだね。気分はどうだい？ 弟さんは、すっかり元気みたいだから大丈夫だよ。

それが、祖母と、雛森との出会い。帰る家のない自分たちを受け入れてくれた、家族との出会いだった。

優しい祖母と、龍獅郎を本当の兄のように慕い、冬獅郎を本当の弟みたいに可愛がってくれた少女、雛森桃。

彼女たちは今でも変わらずに家族だと思うし、きっとその思いは、冬獅郎だって変わらない。とにかくそのあとの生活は本当に楽しかった。

冬獅郎が生意気盛りのころ、よく雛森と二人で悪戯を仕掛けてきた頃の記憶だって鮮明だった。

昔から言葉遣いは少しばかり乱暴で、そして少しだけ感情が乏しいところがあった。

それでも昔から優しい子で、何より祖母が大好きで、そして家族思いだった。多分それは、今でも変わらない。

変わらぬ優しさで、冬獅郎は十番隊を支えているのだらうと思う。

だから冬獅郎は何事も我慢して、そして辛いはずなのに、涙を流さない。

自分が泣いていると皆が心配することを知っていたから。大好きな家族が、悲しむことを知っていたから我慢してたのを龍獅郎は知っている。

泣けないのではない、泣かないのだ。家族を思うからこそ、泣けないのだ。そんなバカな奴どこに居るだらう。

潤林安の外で出会った少女の世話を一人でしているときもあった。冬獅郎にも雛森にも、祖母にもそのことは言わずに、食べ物を持借して、その子のところに行っていた。

どうして言わなかったのだらう。今となれば、あの時何を考えていたのかよくわからない。只、放っておけなかったのがよく覚えてい

る。

——どこ行くんだよ、龍兄。

こっそり窓から出ようとする自分を目ざとく見つけ、仁王立ちしながら言っていた冬獅郎。

声も表情も、不機嫌さをあらわにしていた。だけど決して行くなとは言わない。昔から、わがままは言わない子供だった。

——桃が心配してんだぜ、最近龍兄は何をしているんだろうって。悪い奴らに脅されてんじゃねえかって心配してる。

——何でもないよ。

今考えれば、あれがはじめての隠し事だっただろう。今まで冬獅郎に隠し事などしなかったのに、それだけは違った。

子猫を拾ってこっそり飼っているのと似たような感覚だったかもしれない。

ただ、一体どこからやってきてどこに帰っているのかわからない、雛森と同じ年くらいの少女に食事をわけて、そして遊んでいた。

それから、何年後かはよく覚えていない。とにかくその日から、龍獅郎はその少女に会っていない。多分、ずっと。死神になることを決めたあの日から、ずっとだ。

別に、寂しくなんかねえよ。真央霊術院に入学する自分を見送りながら強がる冬獅郎は、しっかりと祖母の服を握っていた。

それから数年たって雛森が入学し、その時も冬獅郎は同じようなことを言っていたらしい。

二度と戻ってくんな。そんなことを言われたと笑いながら話していた雛森。

そんなこと、微塵も思っていない癖にと二人で笑った。

休みの日には一緒に家に帰り、その時決まって扉を開けてくれるのが冬獅郎だった。

それからすぐに龍獅郎は卒業して、護廷十三隊に入隊。最初のころは忙しくて、ろくに帰ることができなかった。

そして同じころに冬獅郎も霊術院に入ったらしいが、龍獅郎はそれを全く知らなかった。

家に戻れば必ず冬獅郎が縁側に座っていたし、霊術院のレの字も言わない。

実際龍獅郎が冬獅郎の入学を知ったのは、冬獅郎が卒業してからで新人を隊に招く時だった。

ふと、目にとまった名簿の文字。あの時は既に龍獅郎が十番隊の隊長で、総隊長から渡された十番隊に入る新人の名簿を一番に目にするのは龍獅郎だった。

その時に、一番目にとまった、見覚えのある名前。

——日番谷……冬獅郎……？

まさかと思った。霊術院にさえ入学していない弟が、死神になれる筈がない。

何かの間違いだろう。同姓同名の誰かだろうか。しかし冬獅郎の名

前が珍しいんだと言うことは良くわかっていた。

何かのサプライズだろうか。総隊長もこんな冗談を用意するなんて、人が悪い。そう思って、最初は信じなかった。

しかしそれは、サプライズでも何でもない、真実だったのだ。

——日番谷冬獅郎です。よろしくお願いします。

自分の前に姿を現した、翡翠色の瞳と、白銀の髪を持った自分にそっくりな少年は、そう言って深々と頭を下げた。

呆然とする龍獅郎を見つめる瞳は真っ直ぐ前を見据え、澄みきった光を宿している。

いつの間に、髪型を変えたのだろうか、今までは下ろしていた髪の毛が、上がっていた。

家に戻るたび、冬獅郎の顔つきが変わっていくな、とは思っていた。だんだんと力強い光を放つようになっていく。そして冬獅郎が纏う霊圧が、安定していた。

しかしそれは、やはり幼い彼が成長していからだと思っていた。

——いつまで呆けてんだよ、龍兄。いくらなんでも驚きすぎだろ。

——だ、だってお前、いつの間に？

——龍兄に内緒で霊術院通ってたんだよ。いきなり龍兄のところに入隊して、驚かせてやろうと思ってな。

あの時の、冬獅郎の滅多に見せない悪戯な笑みは今でも忘れない。

やっと追い付いてやったぜ。そう言つて笑つ冬獅郎には、本当に驚かされた。

そしてそれからというもの、暫く瀨靈廷内は龍獅郎の弟が入隊したらしいと噂がたち、またたく間に日番谷冬獅郎の名は知れ渡った。

道を歩いているだけでも指を指される、そんな存在。それでも冬獅郎は何事もなかったかのように無視するのだ。

正直、龍獅郎では気になって仕方がなかっただろうし、いたたまれなかっただろう。しかし冬獅郎は、それを意にも介さなかった。

冬獅郎は驚くべきスピードで力をつけ、気がつけば三席にまで上り詰めていた。

隊首、日番谷龍獅郎。副隊長、松本乱華。副官補佐、日番谷冬獅郎。そして四席の松本乱菊。

多分このメンバーでやってきた時間が長かっただろうし、そしてこのメンバーで日々仕事をこなしてゆくのが楽しかった。

——そう言えば冬獅郎って、どうして死神になつたんだ？

ある日、龍獅郎は何気なく冬獅郎に訊ねた。

死神になんて俺はならねえ。冬獅郎は、口癖のようにそう言っていたのに。いつの間に、その意思が覆つたのか。

そして冬獅郎が簡単に意思を変えた理由、それに興味があつたのかもしれない。

そしてその理由を聞いて、絶句した。

副官の妹との出会い。そのきっかけを与えてくれた彼女。

その話を聞いて、驚愕しないはずがなかった。なにしろそれが、龍獅郎の理由と似ていたから。

龍獅郎が死神になろうと決めたのは、乱華が導いてくれたからだっ
た。

このままだときつととあんた、損するわよ。多分龍獅郎に言ってい
た乱華の口ぶり、冬獅郎に乱菊が伝えた口ぶりとはそっくりだっ
ただろう。

とにかくその出会いは不思議だった。こんな偶然、滅多にないだろ
う。冬獅郎と二人で感心した。

——結局ばあちゃん、寂しい思いさせちまったな。俺だけはずっと
ばあちゃんのところ居ようと思っていたのに。

冬獅郎は、実に不服そうにそう話していた。これじゃあ、結局ばあ
ちゃんに寂しい思いをさせちまうだけだ。
だから龍獅郎は、こう答えた。

——だったら休みの日には一緒に帰ればいいだろう。桃も一緒にな。

結局その約束は、今となってはろくに守れてはいない。零番隊にや
ってきたあの日から、祖母のところには帰っていない。誰にも会っ
ていない。

今彼女は何をしているのだろうか。変わらず、元気にやっているの
だろうか。そう考えても、結局会いに行く、ということは出来ずに
いる。

今の自分に、会いに行く権利はあるのだろうか。時々、そんなこと
まで考えるのだ。多分今更会いに行っても、自分は受け入れられな

いんじゃないか。

優しい祖母は、何年も会わなかっただけで拒絶したりはしない。それはわかっていても、やはり引っ込んでしまう自分がいた。

「……まだ寝ないのかよ」

過去の記憶を思い起こしながら、窓の外を眺めていると不意に声をかけられた。

冬獅郎と一護のおかげで綺麗になった龍獅郎の部屋。久々に姿を現した木目の床に布団を敷いて、冬獅郎は眠りについていた。

しかし不意に目が覚めて、じつと電気もつけずに外を眺める自分に気がついたのだろう。さつさと寝ろよ。その表情はそう言っている。

「寝ずに見張ってたってんなら、そろそろ俺が変わるから寝ろよ。いざとなった時動けねえなんて情けねえだろ」

「いや、眠れなかったただけだから。それに流石に靈王も孤成達も、夜中には襲ってこないだろう」

結局冬獅郎と一護が部屋の掃除を終えたのは、日が沈んでからの事だった。今から瀟靈廷に帰るには少し危険だ。

一日泊まっても、襲われることはないだろうから今日は休もう。龍獅郎の提案で、冬獅郎たちは今日ここに泊まっている。

本当は一人ひと部屋ずつ与えたかったのだが、一部屋足りなかったのだ。だったら龍獅郎の部屋でいい、と冬獅郎は立候補し、ここで寝ている。

何年振りだろうか、冬獅郎と一つの部屋で寝ることは。そして一つ

の布団で寝ることなど、かなり長い間ない。

一緒に寝るか。そう言ったのに「もうガキじゃねえんだ」と拒絶されてしまった。

「ホント今日はいろいろあつたよな。……まあ、日付変わったけど」「いろいろありすぎて疲れたぜ。前代未聞だろ、俺不法侵入したんだぜ?」

そんなことまでしなきゃならねえってどういうことだよ、と冬獅郎はため息をつく。確かに、王族に不法侵入なんて、常任には出来る事じゃない。

しかも何百人という王属特務の死神を相手にして刀を振るいまくったのだ。冬獅郎の侵入により零番隊も混乱を極め、いろいろと大変だった。

そして王属特務をそこまで振り回す冬獅郎が、すごいと思う。

「まあ、俺の所為か、それは」

「ああ、てめえの所為だ」

「少しは気使ってくれよ……」

ズバリ言い捨てる冬獅郎は、冗談も容赦もない。

しかもそう言つと「しらねえ」だ。相変わらずだ、この弟は。

「大丈夫だ、明日からはちゃんと日常に戻れるから」
「日常……か」

意味ありげに、冬獅郎は呟く。

証明だけがぶら下がる、何もない天井。冬獅郎はそこをじっと見上げ、何も言わない。

何かに、記憶を這わせているのだろう。何も言わないまま、数分の時間がたつ。

壁に立てかけられた時計が時を刻む音だけが龍獅郎の耳に触れる。自分の呼吸の音まで、大きく聞こえてきた。

「そうだな、もう、これが日常なんだもんな」

「へ？」

「兄さんの居ねえ生活が、いつの間にか俺にとって日常になってたんだろ」

そう言っで、冬獅郎は背を向ける。まるで龍獅郎の言葉を全て拒絶するように、丸められた小さな背中。

確かに、冬獅郎のそばにはいつだって龍獅郎がいた。護廷に入ったときだって、結局冬獅郎は追いかけてきた。

だけどきつと、もう冬獅郎は追いかけてこない。瀟靈廷で、十番隊で居場所を見つけ、ずっとそこに居るつもりだろう。

兄離れ。ふと、そんな言葉が頭をよぎる。世間一般的に言えばきつとその状態だ。

そしてそれを寂しく思う自分は、弟離れ出来ていない。

それもそうか、今まで自分が、唯一血のつながった冬獅郎の親みた

いなものだっただから。

「多分俺は今の十番隊で満足してるし、兄さんを追いかけるために今の仲間を捨てようなんて思えねえんだ。同僚たちも、部下たちも松本も黒崎も、俺にとってはかけがえのない仲間だから」

自分のあとをついてまわっている冬獅郎も、いつしか自分以上の存在を見つけてそこになじむのだろう。

必死に自分を追い求めてくるほんとうに小さい冬獅郎を見ながら、思ったことがある。その時が来たのだ。

そう思うと、嬉しくもあり、また寂しくも思う。

あの時の幼い冬獅郎を記憶の中に呼び出しては、寂しさばかりを募らせる。だけどそれを、否定するわけにはいかないのだ。

「……それなら良かったよ。やっと、お前にもそう言えるモノが見つかったんだな」

「ああ……」

そうとだけ答え、冬獅郎は黙りこむ。

なんだかんだ言っただけで自分ばかりを求めていた彼は、龍獅郎なくしては生きていけないのではないだろうか、そう思い、冬獅郎の今後を心配したこともあった。

元からなかなか人には心を開かない冬獅郎には、無理なのではない

だろうか。そう思ったこともあった。

しかしきつと、その考えは間違いでしかなかったのだ。

冬獅郎は龍獅郎が思うよりずっと大人で、ちゃんと、それを見つけ出す力を持っていた。

しかしもしかしたら、これは冬獅郎たちの信頼を裏切るような行為があったからこそ、冬獅郎を変えたのかもしれないと思う。どちらにしろ、これで良かったのだ。

「俺、数時間前までずっと勘違いしてた」

「え？」

「きつと、一番つまらかったのは松本でも、俺でもねえ、兄さんだったんだろうな」

何の話だろうか。にわかには冬獅郎の言っている意味が理解できず、龍獅郎は目を細めて冬獅郎を見る。

丸められた背中では、相変わらず言葉を拒絶するようだ。そして、黙って自分の話を聞いてほしい。そう言っているようにも思えた。

「黒崎に叱られたんだぜ、ちゃんと自分の兄貴信じてやれって。…」

…黒崎にとっては当たり前的事なんだろうが、俺にはそれができなかった」

「……」

「多分俺は、今でも昔でも、兄さんが好きだ。だからこそ、俺は許せなかったんだと思う」

今だから言えること。そうとでも言つように、冬獅郎はいつになく多く語る。

滅多に口にしない自分の感情を、言葉を詰まらせることもない、いつもの何気ない会話のように、淡々と。

恐らく冬獅郎も、わかつていいるからだろう。もう二度と言う機会がないと思つて、口にしている。

「ごめんな、龍兄」

久々に聞いたその呼び名は、どこか切なさを帯びていた。

21：避けられない結末

空には鮮やかな橙色の陽が浮かび、四角く切り取られた日射しが部屋を照らし出している。

冬獅郎はまだ寝ているらしい。背中を自分に向けたまま、それが規則正しく僅かに上下している。

龍獅郎はベッドから出ると、冬獅郎の寝顔を覗き込むように、目の前にしゃがみこんだ。

ピッタリと伏せられたまつ毛。昔と変わらないそのあどけない寝顔を見て、思わず口元がほころんでしまう。

跡がついてしまうんじゃないか、と思うほど深く刻まれた眉間のしわも、眠っている状態では姿を現さない。昔から、そうだった。

何をそんなにストレスを感じてそうになっているのか、それとも別の理由からそうなってしまったのかわからなかったら癖は、未だに健在のようだ。

龍獅郎は、思わず伸びてしまった手をひっこめると、スッと立ち上がる。

「薄情な兄貴でゴメンな……冬獅郎」

何故、いきなりこんな言葉が口から飛び出したのかはわからない。只本当に、申し訳なかった。

多分俺は、今でも昔でも、兄さんが好きだ。その言葉が、すごくうれしかった。

こんな自分でも、あれだけ傷つけたであろう自分をまだ好きだと言ってくれることが、嬉しかった。

恐らくこれで、自分たちは二度と顔を合わせることはなくなる。もう二度と、自分たちは会うことはないだろう。

護廷十三隊と王属特務。両者は近いようで、かわりが滅多にないとなれば、十番隊の冬獅郎と零番隊の龍獅郎は疎遠になる。

たとえ隊長でも、どちらかを行き来することは決して許されない。昔は毎日顔を合わせていた、誰よりも近い存在だった自分たちは、二度と触れ合いがなくなる。

それは、自分たちが選んだ道が正反対のモノだったからだ。

同じようで、正反対。それが、護廷と王属特務。零番隊の死神になつてから、龍獅郎が痛感したこと。

そして今回こうして再び出会うことができたのは、本当に幸福だと思う。

「ちゃんと、無事に返すから。お前も一護も、乱菊たちも」

それが、冬獅郎にできる最後の事。彼を護つて、無事護廷に返す。それは自分がどうなろうと、貫くつもりだ。

恐らく冬獅郎が目覚めますまではまだ1時間はある。龍獅郎は部屋を出ると、朝のひんやりとした空気が満ちる廊下に出る。

幾つもの窓から差し込む四角い朝日の光が、点々と廊下を照らし出している。

その一つの枠に両腕を乗せ、橙色を更に鮮やかに染めている者が一人いた。

（一護……？）

自分には気づいていないのだろう。橙色の髪の毛をそよ風に躍らせながら、何かに浸るように窓の外を眺めている一護。

こんな朝早くにどうしたのだろうか。龍獅郎はふしぎに思いながら、彼に歩み寄る。

「おはよう、一護。早いな」

「あ、龍さん、おはよう」

龍獅郎の声に振り返った一護は、笑顔で答える。龍獅郎は、何も言わずに彼の横に並んだ。

二人が並んでも、十分のスペースがある窓枠。中心に立っていた一護は、少し端にずれて場所を空けてくれる。

「龍さんも早いな。冬獅郎はやっぱまだ寝てるのか？」

「可愛い力オして、なんて言ったら兄バカか？」

「っーかあいつが何言つかわからねえよ」

笑いながら、一護は言う。

確かに、可愛い力オして寝てた、なんて言ったら気持ち悪がられるのは必至だろうし、何より冬獅郎自身の機嫌が悪くなるだろう。

気持ち悪い。そう言う冬獅郎の表情が鮮明に浮かんで、思わず笑ってしまふ。それは一護も一緒だったのだろう。

「で、あいつどうだった？　まだなんかうだうだ言ってるなら俺、一喝入れてくるけど」

起きろトーシロー！　そう怒鳴りながら、冬獅郎の毛布をめくる一護が想像できる。

そのあと冬獅郎に怒鳴られるであろうことも、容易に想像つくことだ。

なんだか、一護が冬獅郎に対することは全く遠慮と言うものが感じられなく、それほど気兼ねなく接しているんだということがわかる。冬獅郎は、一護に出会えて本当に良かった。心からそう思った。きつとこの少年なら、冬獅郎を大切にしてくれる。支えになれる。

冬獅郎自身も、この少年には心を許している部分があるのではないだろうか。

だからこそ、龍獅郎は一護に言えることがある。

「……冬獅郎が、お前に出会えてよかったと俺は思う」

「え、な、何だよ、いきなり……」

「あいつは昔から感情が乏しくて、友達を作るのが下手で、俺について回ってるような奴だったから」

龍兄。

物心がつく前だって、そのあとだってそうだった。

ちよっとした事があれば彼の口から出てくるのは自分の名前。ある

程度大きくなれば何でも一人でやっていたが、結局龍獅郎の背中を追っていることには変わりなかった。

恐らく、冬獅郎にとって龍獅郎以上の存在はいなかった。友達もないから、兄貴にすぎるしかない。

普段からついて回るわけではなくても、ちょっと姿が見えなければ探す。

冬獅郎にとって、龍獅郎が居ないと言うことは不安でしかなかったはずだ。

一護は、そんな自分に等しい存在になりつつあるような気がする。少なくとも、彼のために一生懸命になれるほど、冬獅郎の中では大きな存在だ。

「多分、今まであいつを支えてきたのはお前だったんだと思う。違うか？」

「……俺は、何もしてねえよ。しつこく冬獅郎のところに行つてさ、怒られるくらいだぜ？ 迷惑な奴とは思われてるだらうけどな」

あとよく、猪突猛進だとか単純バカだとか、台詞がクサイとか罵られる。

一護は、そう言いながら笑う。その表情にも声にも、嫌な気は全くなかった。

ああ、こいつらは単純に仲がいいんだ。一護のその言葉を聞いて、そう思う。

冬獅郎が一護の事を嫌っているのならば、その時点で全て無視するだろう。そんな彼を罵倒することすらしないはずだ。

嫌いなモノはとことん嫌い、相手にすらしない。それが、冬獅郎の性質。

だが一護に対しては、そんな感情は全くないのだろう。

本人は無自覚でも、彼が傍に居ることを心地よく感じているのではないか。

「一護、そんなに普段から冬獅郎に絡むのか？」

「んー、まあ、それなりに仲良いんじゃないか？　つーかわり者が多い中で、冬獅郎は常識人だから一緒に居て苦じゃねえんだよね。なんか楽しいし」

確かに、護廷の死神連中は変わり者が多い。それには龍獅郎も力強くうなづける。

その中でも冬獅郎は冷静だし、時々うるさく思えるほどしっかり者だ。常識だってちゃんと持っている。

非常識な連中が多い中で、彼らの変な行動を冷めた目で見つめる（それも遠くから）その光景はよく見たモノだ。

——『龍兄、護廷ってこんな奴らばっかなのかよ』

十三隊に入りたての頃、何かを見て、冬獅郎がそう言っていたのを思い出す。

あの時の、かなり呆れたような、げんなりした表情。ここになじめるのか、正直不安だ。そんなことまで言っていた。

だがそんな個性派ぞろいの護廷にも慣れてしまえば、冬獅郎はツッコミ役としてそこにきちんと馴染んでいた。

「それとさ、冬獅郎って何かと何でも我慢するじゃねえか。だから俺がなんとかしてやりたいとかさ」

「そうか……ありがとな」

「いや、俺が勝手に思ってることだから」

一護はそう言っ、はにかむ。少しだけ陽が昇り、濃かった橙色もだんだんと薄くなってゆく。

今では、一護の髪の毛の色の方が鮮やかだろう。

「一護、冬獅郎の事、頼むな」

「へ？」

「あいつは誰かのために危険を賭してまで、こんなところにやってくるようなバカだから」

ああ。それを聞いて、一護は何かを納得したように呟く。

恐らく、言いたいことは一護だってよくわかっている。わかっているから、そんな声が出るのだろう。

そして一護は、龍獅郎を見て首をかしげた。

「龍さんは、護廷に遊びに行ったり、それこそ故郷に帰ったりしねえのか？ 冬獅郎流魂街出身だけど、勿論龍さんだってそうだろう？」
「王属特務の隊長となれば、そんなこと許されないからな。王族の敷地内ならともかく、流魂街に行くなんて絶対に許されないんだ。多分もう二度と、冬獅郎には会えないよ」

祖母にも、雛森にも。それを覚悟したうえで龍獅郎はここに居るのだ。今更それを嘆いたりはいしない。

それに今回、また冬獅郎に会えただけで、冬獅郎に謝ることができただけで十分だった。

まして冬獅郎が自分の事を理解し、偏見を破ってくれたこと。それ以上に嬉しいことはない。本当ならば、それすら望めぬことだったのだ。

龍獅郎は、もう何も望んではいけない。

「俺は、あいつが幸せならそれでいいよ。まあ、もしもまた今回みたいなのがあったら、黙ってないけどな」

「……ホントに良いのかよ、それで。悪いけど俺も兄貴の立場だからよくわかんた。自分を頼ってくる妹や弟ってのは、いつまでたっても傍で護っていてやりたい存在だ」

「ああそつえばお前には妹が居るんだつたな」

良い兄貴なんだろうな、自分みたいに、妹たちを裏切ったりしない。こうして話しているだけで一護はいい奴だとわかる。だからきつとそうなんだろう、とも想像できた。

そして恐らくその妹たちは、一護の事が好きだろうし、一護だつて彼女たちを大切に思っているのだろう。

そして一護は、窓の外に目を向けながら言う。

「俺が龍さんだったら、何があつても冬獅郎の傍に居てやった。だ

って冬獅郎、龍さんの事大好きだろ？」

「ああ。俺だって冬獅郎の傍にずっと居てやりたかったよ、護廷十三隊から離れる気はなかった。だけどそうせざるを得なかったんだよ」

過去を思い出し、それを愁えうように、龍獅郎は微笑を浮かべる。
ああするしかなかった。冬獅郎が、護廷十三隊に居続けるには、ああするしかなかった。

冬獅郎に王属特務はまだ早い。護廷十三隊で学ぶべきことは、あの時の冬獅郎にはまだまだたくさんあった。

そして冬獅郎の性格上、零番隊は向いていない。

だから龍獅郎は、ここに居るのだ。そして誰にも明かさなかったその真実を、今一護に話そうと思う。

「本当は王属特務が欲しかったのは俺じゃない。冬獅郎だ」

「……冬獅郎が、零番隊に入っていたっていうことか？」

「ああ。だけどあいつは王属特務には好印象を抱いていなかったし、あいつの事を考えるとそれは決していいことじゃなかったからな」

だから龍獅郎は、冬獅郎の代わりにここに居る。乱華まで、巻き込んで。

当時王属特務には氷雪系が居なかったらしい。天才児と呼ばれる、氷雪系最強の斬魄刀を持つ冬獅郎は当時の彼らにとって本当に手にしたい人材だっただろう。

だが龍獅郎が、その話を冬獅郎に持っていくこともせずに拒んだ。

自分は氷雪系ではないが、万龍なら氷だって扱える。自分が冬獅郎の代わりに入るから、冬獅郎は放っておいてくれ。その話を、蔭で聞いていたのも、乱華だ。

龍がここを出ると言うのなら、あたしだって出る。龍についていく。彼女はそう言っ、聞かなかった。

一護はその話を聞いて思うことがあったのだろう。もう窓に視線を向けようとはせず、自分を見ている。

「……龍さんが、冬獅郎の代わりに犠牲になったって言うのかよ」

そう言う一護の表情は、実に不愉快そうだった。

眉間に深々と刻まれた皺。顔に影ができそうなほど細められた琥珀色の瞳。

正義感の強そうな一護の事だ、このような強制的なことは許せないのだろう。

そういうモノに対して、仲間のためにも自分のためであっても必死に抗うタイプ。一護はきっとそんな奴だ。

そんな一護だからこそ、冬獅郎と仲よくしてやって欲しいと思う。

「俺は、冬獅郎が幸せならそれでいいんだ。お前も兄貴ならわかるはずだろ？」

「だけど、あまりにも理不尽だろ。俺はそういうのはあまり好めねえよ。つか納得いかねえ」

「仕方がなかったんだ」

そう、仕方がなかった。どちらに転んだって、二度と冬獅郎に会えなくなることは必至だった。

だったら冬獅郎から仲間を奪うより、自分が犠牲になった方がいいと思った。自分一人が彼の傍から居なくなる方がずっといいと思った。

だけどそうすることによって、乱華まで巻き込んでしまった。それがものすごく、申し訳ない。

彼女だって護廷に居たかったはずなのに。乱菊と仕事ができる。それがとても嬉しい。そう言っていたのに。自分が、それを奪ってしまった。

「今更悔いたってどうしようもないし、何かが変わる訳じゃないから。気にしないでくれ」

「そんな話聞いて、気にしねえで居られるかよ」

一護はやはり不機嫌そうだった。恐らく、怒りを覚えているのだろう。

他人のためにこうして感情的になれる一護がすごいと思う。本当に、心から。

随分真っ直ぐな奴だな。一護と話たび、その印象がどんどん色濃くなってゆく。

「取り敢えず、もう6時になるから、そろそろ皆起きる頃だろ？」

この話はやめにしよう」

「龍さん」

龍獅郎の話も聞かず、真剣な表情で一護は龍獅郎を呼ぶ。

真っ直ぐ見据える力強い瞳。龍獅郎は真っ向からそれと向き合い、勤めて笑顔を見せる。

何か思いつめているようにも見える。とにかく、一護の表情は真剣だった。

「もしも戻れるんなら、たまには冬獅郎の所に顔を出してやれよ」

「出来るなら……な」

「絶対そうしてやってくれ。俺に冬獅郎を頼まれても、護ることはできたって兄貴にはなれないから。冬獅郎にとってアンタは唯一無二の兄貴だってこと、忘れちゃいけない」

バカ野郎。咄嗟にそう怒鳴りたくなった。何を今さらそんなことを言っているんだ。

薄情なのは龍獅郎じゃない。確かに、薄情なところがあつたかもしれないが、それは簡単に龍獅郎に偏見を抱いた自分にだって言えたことだ。

布団の中で寝たふりを決め込みながら、冬獅郎はイライラする感情を抑えずに考える。

のばされた手の気配も感じていた。自分に触れることなく、戻されたそれ。

別に撫でられたって反抗はしないのに。どこか壁を作っているのは龍兄の方ではないか。そう思うと、イライラに拍車がかかった。

上体を起こし、時計を見れば時刻はまだ五時だった。起きるのにはまだ少しばかり早い。

しかし完全に目が覚め、もう一度眠ることも出来ないだろう。この時間を、どうやって潰そうか。

取り敢えず冬獅郎は布団から出ると、部屋を見回してみる。昨日掃除した時に、興味深い本がいくつかあった。それを読ませてもらうか。

冬獅郎は棚から本を取り出すと、先ほどまで龍獅郎が眠っていたベツドに腰掛ける。

まだ、龍獅郎の体温が残っていて温かい。その温度が心地よかった。

「なんか、懐かしいな」

本当に小さい頃、龍獅郎の膝の上で本を読んでいたことを思い出しでは、苦笑が漏れる。

あの時は本当に子供だったのだろう。物心ついていから間もないころだっただろうか。絵本を持ちだしては、彼の膝に座り、自分で読んだり、読んでもらったりしていた。

じかに触れる体温と、シーツから触れる温度は違ったが、それでも温かいことに変わりはない。

ふと、後ろの窓から風が吹き入り、冬獅郎の銀髪を揺らす。

窓を空けっぱなしにして行ったのか。背中にやわらかい風を浴びながら、ため息を落とす。

しかしその風が鬱陶しいとは感じなかったため、特に閉めようとは思わない。後ろは、決して振りがえらなかった。

22：兄貴

隊舎の門をくぐることにここまで緊張するのは初めてかもしれない。毎日やっていることなのに、何かが違う。

それもそうだ、隊舎から一步外に出れば、全てが敵。靈王の意思に抗って一護を帰そうとしている自分は、反逆者に等しいはずだ。そう考えれば、この緊張もふさわしいモノのはず。これで意気揚々と出るなんて、不謹慎極まりない。

しかしもしかしたら緊張しているのは自分だけかもしれない。いや、乱華が気楽過ぎるだけか？

やたらと気が抜けるような声で、先ほどから陽気な彼女は言う。

「それにしても、本当に何もなかったわねー、あっさり終わってびっくりしたわ」

「門をくぐるところで一気に攻めてくる気かもしれないぜ。気抜くなよ、乱華」

「わかってるわよ。龍にそんな説教されなくてもわかってますー」

おどけたように、乱華は言う。そんな大人げない彼女を見て、龍獅郎は思わずため息を落とした。

他の者たちは皆、少なくとも緊張の表情を見せていると言うのに。まあ、これも乱華らしいと言えば乱華らしいので、いいとしておう。

一護は、そんな乱華を見て苦笑している。その後ろでは、恋次とルキアが会話を交わしていた。

「でも確かに、何事もなく拍子抜けしたぜ。意外とあっさり終わったもんだな」

「そうだな……しかし龍獅郎殿の言うとおり、完全に瀟靈廷に戻るまで何が起こるかわからぬ、下手こなよ、特に恋次と一護」

「へいへーい」

恋次はそんな気の抜けた返事を返すが、一護が全く話を聞いていないようだった。

まるで何事かを考えるように、ずっと空を見上げている。一体どうしたのだ。そう、心配するように冬獅郎がその様子を見ている。

一護のその様子は、何か言いたげだった。そしてふいに冬獅郎を見ると、その腕を、彼の肩に回した。

突然の事に、冬獅郎は驚いたのだろう。一瞬肩が揺れたが、すぐに怪訝そうな目を一護に向ける。

「まあ、龍さんの言うとおりだよ、冬獅郎」

「は？」

「随分、あっさりと終わったもんだよなあ、冬獅郎」

うつすらと浮かぶ笑み。冬獅郎はそれを訝るように、一護を見ている。怪訝の表情は、色を濃くする。

それは龍獅郎から見ても、なんだか異様な雰囲気。冬獅郎の肩から首にかけて回された腕が、不自然だ。

そして言い方がなんだか、とてもわざとらしい。まるで、試すような。

「けどさ、本当にそううまくいかな、冬獅郎」

「……黒崎？」

「油断、しすぎだろ」

冬獅郎の瞳が、驚愕に見開かれる。ルキア達も、息をつめて彼を見ていた。

何か、何かがおかしい。一護は一体何を言っているんだ？ そう思ったのは龍獅郎だけではないだろう。その場に居る全員が皆、同じことを思ったに違いない。

誰もそれについて言葉を発することができない。緊張の上に緊張をかぶされた分厚い緊迫感。

そんな中で、やっとの事声を出したのはルキアだった。

「い、一護、貴様何言って……」

どんな冗談だ？ 冗談であって欲しい、そんな願いさえにじみ出ているような呟き。

確かにここで、そんな簡単に帰せるとは龍獅郎も思っていなかったが、まさか一護に何かされたなんてそんなこと……。

それとも、この一護自信が偽物なのか？ 一護自身に何かされているのか？ それすらもわからない。

冬獅郎の顔を覗き込むようにしていた一護はルキアを見る。その口角が、ニツと上がった。

「なんてな！　こう言ったら黒幕っぽく見えるか？」

「はあ！？」

咄嗟に避難の声を上げるルキアと恋次。冬獅郎からぱつと離れた一護は、やはり屈託のない笑顔を浮かべている。

何の冗談だ。龍獅郎も、思わず肩を落としてしまった。正直、かなりひやひやしたのだ。本当に、一護が偽物か、誰か……それこそ双葉にでも操られたのかと思ってしまうた。紛らわしい。思わず、深いため息が漏れる。

「ば、莫迦者！！　何かと思ったではないか！！」

「全くだ！　紛らわしいんだよこのアホ！！」

「ほんつと、信じられない」

罵声を浴びせる、ルキア、恋次、乱菊の三人。無理もない、皆緊張した空気の中で、あの冗談はないだろう。

こればかりは、龍獅郎もフォローしかねた。乱華も「あらま」と口を開けて罵倒されている一護を見ている。

冬獅郎を見れば、彼は無表情で一護を見ていた。呆れのあまり声が出ないのか、それとも空気を読まない一護に怒りを覚えているのか。只、怒っているのならばそれは本当に怖い。そう思うほど、冬獅郎は無表情だ。冬獅郎の静かな怒りは想像を絶するほどに怖い。一度、それを経験したことのある龍獅郎は自信を持って言える。

だからこそ、龍獅郎は止めようとした。

「お、オイ冬獅郎、落ちつけよ？　こんなところで喧嘩なんかしてる場合じゃないからな？」

「わかつてる。十分落ち着いてるさ」

「じゃあ氷輪丸から手を放せよ！！」

刀の柄に手をかけておいて、今にも一護を斬りますと言うようなオラを発しながら言われても、全く説得力がない。

そのどこが落ち着いていると言うんだ。思わずため息をつきながら、刀を握るその手の上に自分の手を乗せる。

しかしそれは咄嗟に、自分の斬魄刀を掴むことになった。

「……え？」

鋭く木霊す金属音。喧嘩を勃発しつつあった一護達も、こちらに集中し息を呑むのがわかった。

引きぬかれた氷輪丸は、龍獅郎に向かって振り下ろされた。龍獅郎は、咄嗟に万龍を抜いて対抗したが、訳がわからなかった。……理解できるはずがない。

まさか冬獅郎まで一護に便乗して嫌な冗談を言っているとは思えない。何より、冬獅郎の自分へと据えられた瞳は真剣だった。

基本、冬獅郎は悪ふざけと言うものができない。誰に似たのか、それほど生真面目な性格をしていた。こういう緊迫した雰囲気ならば

なおさらだ。

だからこれが冗談だと言うことは、決してありえなかった。しかし本気だというのもありえない。だったら一体何なんだ？

「ちょ、何してんだよ冬獅郎っ！！」

「隊長！？ 何してるんですか！ 一護のバカのまねなんていけませんよ！？」

辛うじて、驚愕の中から声を発する乱菊と一護。他の者は既に声すら出ないようだった。

冬獅郎の目は決して動かない。ただ冷めきった表情で、一同を見回し、龍獅郎に戻される。

龍獅郎の頭には、一人の男の名が浮かんでいた。

「双葉……か？」

「……」

答えない。昨日、冬獅郎は双葉によって操られたばかりだった。

辛うじてその能力から抜け出したわけじゃない。自力で無理矢理に破ったようなものだ。

それが再び猛威をふるっているのだと言うのなら、そうすれば、この状況も説明がつく。

説明できるが、最悪な状況に違いなかった。

やがて、無表情を崩さなかった冬獅郎の口元が、弧を描く。

「残念。木下くんはまだ寝てると思うよ？ あの子お寝坊さんだからね」

「孤成！！」

一護が声を上げる。隣で、乱華が息を呑んだのがわかった。

「孤成……お前、いつの間に……？ 冬獅郎は？」

「だって、あまりにも無防備なんだもの。放っておいたら危ないって、考えなかった？」

どうして、平気だって確信づけちゃったのかしらね。龍獅郎の失態を面白がるように、孤成は言う。

考えもしなかった展開に、一護は呆然と目を見開いていた。多分彼が悪ふざけをしたのも、本当に何事もなく帰れると確信していたからだ。

それが、いとも簡単に崩れ去った。この騒動は、まだ終わっていない。冬獅郎を巻き込んで、また新たな困難と立ち向かわなければならぬ。

それよりも、今まで一緒に居たのが孤成ならば冬獅郎はどこに行った？

いつから、彼女は冬獅郎になりすましていたんだ……？

「まさか今までずっとお前だったのか？ 夜に言っていたことも全

て、お前か？」

「……」

「いつから、いつからお前だったんだよ、孤成！！」

自分でも驚くほど必死だった。否定して欲しい。あれは本当に冬獅郎だったのだと言ってほしい。

これからは安心して零番隊の隊長として働くことができる。あれが冬獅郎の本心ならば、とても嬉しかったのに。兄として誇りに思えることばかりだったのに。

冬獅郎が自分以外に大切だと思える者を見つけれられたのならそれでいい。そして何よりも、再び自分を受け入れてもらえたことが嬉しかった。

しかしそれも全て、孤成による演技か？ 自分は、孤成に騙されたのか？

冷たい目で、龍獅郎を見つめる孤成。不意に一護が龍獅郎の前に立ち、視界を遮った。孤成の視線はもうぶつかってこない。

「一護……？」

「冬獅郎はどこだ、孤成。てめえはあいつに何をした？」

怪我でもさせたなら容赦はしねえ。落ち着いた声にしっかりとにじみ出たそんな感情。龍獅郎は呆然と一護の背中を見る。

恐らく今は、自分よりも一護の方がずっと冷静だ。

「どうしてこんなことばかりするんだ？ そこまでしてあんた等は

俺を必要とすんのかよ？」

「関係ないわよ。……もう、黒崎くんは関係ない」
「なに……？」

龍獅郎は、思わず目を細めた。恐らく一護だって同じ表情だろう。
一護は関係ない。だったら孤成は何故冬獅郎になりすますような真似をした？ 一体、何を考えているんだ？
昨日は聞きそびれたこと。龍獅郎は、一護の隣に立ち、冷静を務めて孤成を見る。

「いい加減話してくれないか、孤成。お前は何を望んでいるんだ？
俺に何が言いたい？」

「まだそんなことを言うの？ 龍ちゃん。まだ気付いてくれないの？
思い出してくれないの？」

思い出す？ 何を？ 思わず目を細めると、孤成は「やっぱりどう
でもいいんじゃない」と龍獅郎を睨みつける。

今まで向けられたこともない責めるような視線。少なくとも、自分
の前でこの少女はいつも笑っていたはずだ。

それなのに、昨日から何かが違う。彼女は一体何を思っているのだ
？ 自分は、彼女に何をした？

何も言えずにいると、孤成はそのまま、背を向けた。また、逃げら
れる。

「孤成っ！！」

「お屋敷で待つてゐるわ。そこにシロちゃんも居るはず。それまで、ちゃんと答えを見つけて。あたしが今一番望んでいることはそれよ」

見つけれなかったら……孤成はそういういかけて、躊躇うように口をつぐむ。そのまま、瞬歩で姿を消した。

孤成が何を望んでいるのか、深みに行こうとすればするほど謎が深まってしまふ。

一護はもう関係ない。だったら彼女は何を望む？ 何を思い出せと言っているのだ？

それに何故だか、それは違う気がした。「もう」関係ないのではない。孤成は元々、一護などどうでもよかったのではないだろうか？

孤成には冬獅郎をこちらに連れてくる理由があつたのだとしたら。

そしてそのために、最初から動いていた。一護を連れてくれば冬獅郎もやってくるだろう。そういう計算。

しかしそれは根も葉もない憶測。無駄なことを考えている暇があるのなら、すぐにでも孤成を追つた方がいいのかもしれない。

一刻も早く、冬獅郎の安全を確保した方がいいのかもしれない。

しかしまた拒絶されたら？ あれが全て孤成だつたのなら、冬獅郎は自分を許していないことになる。

あれが冬獅郎の本心だと信じ切つて安心したのに。嫌われていても仕方がないと言う、その覚悟を完全に壊してしまったのに。今の龍獅郎には耐性がない。

そんな龍獅郎の葛藤に気がついたのか、不意に一護が言う。

「大丈夫だぜ、龍さん。あれは冬獅郎だつた」

「！？　どういう……」

「今のは孤成だったけど、寝る前までは確かに冬獅郎だった。それは保障する」

そうだと、いいと思う。しかしそう言いきれぬ証拠はどこにもない。確かに違和感は無かったが、あれが孤成の演技だったと言うのなら当然だった。演技は、孤成の得意分野だ。

だから一護がそう言っても納得することができない。黙りこんでいると、一護は少し困ったようにこちらを見た。

「確かに俺の感覚だから、それこそ信じられねえかも知れねえけど、確かだと思う。信じてくれ」

「一護が言っただから本当よ、お兄さん。一護、隊長の事となるとかなり敏感なんだから」

「そういう訳じゃねえけど……」

なんだか誇らしげに、乱菊は言う。一護が言っただから、これは信用に値することだ、と。

どうすればいいのかわからなくなってしまう、乱華を見れば肩をすくまれた。私にもわからないわ、と言うように。

そして恋次とルキアはそれぞれ笑いながら頷いている。

「とにかくさ、早く冬獅郎のところ行こうぜ？　悩んでる暇はねえだろ」

「だが……」

「冬獅郎は龍さんを拒んだりしねえよ。俺が、がつつり言っておい

てやったからな」

さて行きますか！　そう言って、一護は強引に龍獅郎の手を引く。それには正直驚き、そしてぐいぐいと引っ張るモノだから前につんのめってしまった。

一護は、決して歩を緩めようとはしない。

「おい、一護！！」

「兄貴はしっかりしねえとな。兄貴仲間として、そこは叱咤してくぜ、冬獅郎の兄貴」

非難の声を上げれば、顔だけをこちらに向けてそう言う。そして思わず呆然としてしまった自分の顔を見ると、ニッと歯を見せた。

23：思いの波に乗る

強引に押し込まれた部屋の中でやることも見つけられず、只窓の外を眺めているだけだった。

監禁されているにもかかわらず、ベットや机、本棚までもが揃っているごく普通の部屋。冬獅郎は、ベッドに座りながら窓枠に肘を立てていた。

ここから見る外の風景は、まるで日本庭園だった。大きなコイが何匹も泳ぐため池。あちこちにずっしりと構えているだけの岩は、正直見ても面白くない。

しかしそんな面白くないものを視界に入れながら考えることは沢山あった。

一体奴らは、自分を拉致して何を考えている？　そしてこうも簡単に連れてこられた自分が腹立たしい。

何事もなく帰れば、それですべてが片付くはずだったのに。余計な試練を作ってしまったのは自分だ。

きっと皆ここに来るだろうし、戦いだって起こるだろう。自分がここに連れてこられることさえなければ、起こるはずもなかった戦い。思わず、ため息が漏れた。

「うわー、弟くん、大きなため息だねー。幸せ逃げるよー」

一人の空間、そう思っていた場所に、いきなり聞こえてきた第三者の声。

ハッとして振り返ると、昨日の少年が扉の隙間から顔を出していた。

確か双葉、と龍獅郎が呼んでいた少年。

双葉は部屋に入ってくると、冬獅郎を見て何故か首をかしげた。

「弟くん、随分大人しいね？　って殺氣石張り巡らされてちゃ無理もないか」

「何しに来たんだ。また操り人形で遊びに来たのか？」

「うわぁ、言い方きつついなぁ。ヒツガヤ隊長はもうちょっとやわらかいよ？」

俺だつて一応「日番谷隊長」だ。そう言いたくなつたが、それを言つたところでどうこうなると言う訳でもないのでやめておく。

無駄なことはしたくない。いつだつてそうだが、今は特に顕著だつた。それは殺氣石による影響かもしれないし、気分的な問題かもしれない。

とにかく気分が悪い。それだけは定かだ。

なんだか話していて腹が立つ。冬獅郎は、双葉から視線を外し再び窓の外に目を向ける。

どこを見ても、面白くないのは確かだが、双葉の顔を見ているよりはいくらかマシかもしれない。

双葉に対してこんなに嫌気がさすのは、昨日の事があつたからだろうか。

そんな冬獅郎の様子を見てか、双葉はため息をつくと、腰に手を当てながら近寄ってくる。

「冷たいなー弟くん。仲良くしようよ」

「断る。敵と仲良くなれるほどバカじゃねえんだ、俺は」

「オレは木下双葉！ よろしくな弟くん！」

「聞け」

こちらがどれだけ冷たく当たろうと、双葉は全く気にしないようだった。

更に近付き、ベッドの上によじ登ってくると、後ろから手を差し出してきた。冬獅郎は目を細め、鬱陶しく思っつのを隠さずに双葉を見る。

にこにこと無邪気な笑顔を向ける双葉は純粋に仲良くなろうとしているのかもしれない。いつしか、こんな笑顔を見たことがある気がした。

それは一体、どこだっただろうか。考えて納得する。

——『黒崎一護だ。よろしくな、冬獅郎！！』

そう、出会ったばかりのころ、一護はこれとよく似た表情で手を差し出してきた。

旅禍としか認識していなかった頃の黒崎一護。その時の彼は正式な「死神代行」となっていたが、初めて顔を合わせたため漠然とした認識しかできていなかった。

とにかく随分と馴れ馴れしい奴だ。そう思っただのを今でも覚えている。

今の双葉の表情は、その時の一護とそっくりだった。悪意のない、純粋に仲良くしたいという気持ち。

昨日攻撃してきたときはあまりに裏腹すぎるそれに、呆然として向けられた笑顔に毒気を抜かれてしまう。

そのまま、数秒の間が空く。ぼちゃん、と池の鯉がはねた音が響いた。

何も反応しないでいると、双葉は「そっか」と言って姿勢を正す。

「その前に、昨日の事謝るのが先なのか？ うん、ごめんね？」

「何なんだ、お前は……」

ちょこん、と首をかしげる双葉をやつと振り返り、思わず目を細める。落ちたため息は呆れと疲れが入り混じっていたように自分でも思った。

昨日は敵意をむき出しにして斬魄刀を向けてきたはずなのに、今日は仲良くなるうと手を差し出す。それを考えれば、素直に頷けるはずがなかった。

また、何を考えているのだろうか。しかしこれが罠だとは何故か思えなかった。

全く警戒を解こうとしない冬獅郎に、双葉は困ったように眉を下げる。

「オレ、元々弟くん嫌いじゃねえもん。まあ、クルミのためなら何でもするけどさ、個人的には仲良くしたい！」

「変な奴だな、お前」

「よく言われる」

ニツと齒を見せて無邪気に笑う双葉。何だか一護が子供になったようにも見えて、苦笑する。

いや、流石の一護もここまで無邪気ではないか。只、この少年を見ていると本当に敵対心や嫌悪というモノを忘れる。

敵だということを忘れさせられてしまう。

「いいのかよ、お前。それって上に逆らうことになるんじゃないか？」

「ん？別にレイオーさま、仲よくなっちゃだめとか言っていないもん。弟くん嫌？」

「……もついい」

そういう問題じゃないと思うんだが。そう思うが、発言してみたところでのこの双葉とかいうあまりにも無邪気すぎる少年は聞かないだろう。

自分の思いがままに、自由気ままに生きる、そんな束縛を感じさせない少年。完全にペースに乗せられてしまったことはわかるが、もう嫌悪感はいだけない。

「つーか弟くんてのやめろ」

「だって名前知らないんだもん。……兄貴がリュウシロウだから、リュウゴロウとか？」

「……冬獅郎だ」

知らねーのかよ。それも突っ込みたいし、リュウゴロウだとかいう

妙なネーミングセンスに対しても一言言いたい。

しかし突っ込みたいことがあまりに多すぎて、それ自体を断念してしまう。

それにしてもリュウゴロウ。名前と言うものは一文字変えただけでこつもダサくなってしまうものなのか。

龍獅郎がもしもリュウゴロウなんて名前だったら……もしくは自分がそうだったら……そんなことを考えてみるが、あまりに悲惨だったため打ち消す。

そして双葉は、その発言に軽く悩まされている冬獅郎など全く気にせず、何故か納得したように手を合わせた。

「そつか、だからクルミに「シロちゃん」って言われてたんだ！

ヒツガヤ隊長は「リュウちゃん」なのにトウシロウは「トウちゃん」じゃねえんだな！」

「そんなこと黒崎でも言わなかったぞ……」

どうも調子が狂う。なんだか一護よりもバカだ。そんな印象を受ける。

そして戦闘を前にしなければこの少年はこんなにも子供らしいのか。なんだか妙な気分だ。

双葉は何を思ったのか、「そつか、そうだよな」と自分を納得させるように呟き、ニツと笑って見せる。

また、何を言ってくれるんだ？　そう構えていると、案の定双葉は妙なことを言う。

「じゃあオレ、トウシロウの事トウちゃんって呼ぶな！」
「頼むからそれだけはやめてくれ」

即答だった。何だその父親に向けるような呼称は。

確かに間違っているのだが、そのあだ名は正直「シロちゃん」よりも嫌だった。

「シロちゃん」で慣れきってしまったているからか、それともっと別の理由があるのか。とにかく、やめてほしい。

双葉はその名で呼ぶ気満々だったらしく「えー何でだよー」と思い切り口を尖らしていた。この少年には、冗談も何もない。

何でもなにも、嫌なモノは嫌だ。それなら「シロちゃん」と呼ばれた方がずつといい。

双葉は勝手に「トウちゃん」を気に入ったのか「何でだよー！」と嘆きながらポカポカと肩を叩いてきた。

とてもじゃないが、昨日龍獅郎を相手に戦っていたあの少年だとは思えない、子供くささ。思わずため息を落としたところで、部屋の扉が開いた。

「あれ、起きてたんだ木下くん。しかもこんなところに……何してるの？」

「おっ帰りークルミー！ー！」

扉の隙間から顔を出したのは、孤成くるみ。双葉は彼女の姿を認めると、ベットから飛び降りた。

嬉しそうに孤成に駆け寄るその姿は、まるでご主人様を待ちわびた飼い犬のようだ。

尻尾が生えているような気がして、冬獅郎は思わず目をこすった。
……幻覚だ。

「オレ、仲良くなろうと思ってさ。酷いと思わねえ？ こいつ「トウちゃん」って呼ばせてくれないの」

「……木下くん、シロちゃんをお父さんにしてどうするの？」

きよとん、と目を丸くする孤成。無理もない、いきなり「トウちゃん」と言われて「父ちゃん」と変換する時点で、訳がわからないだろう。そしてその思考は普通だ。

そのままこちらにも視線を向けられたが、ため息をつくしかない。双葉は、そんな孤成の反応を見て頬を膨らませた。

やっぱりガキだ、こいつ。その様子を見ていて思う。

「父ちゃんにしてどうするんだよ！ トウシロウだからトウちゃん！」

「あ、そういう意味か。あまりかつこよくないよ、それ？」

「マジで？ じゃあシロでいいや」

な、シロ！ 孤成の一言で見事に掌をひっくり返した双葉は、思わず転げそうになる冬獅郎を満足げに見る。

どれだけ冬獅郎が批難しても、全く聞かなかったのに。この少年はどうやら孤成の言うことなら何でも聞いてしまうらしい。

そういえば、自分はクルミのためなら何でもする、と言っていた。その「クルミ」が孤成の事だと今知ったのだが、確かに彼は、孤成になっっているようだ。

それを、優しく受け止める孤成。それは今までと違った印象を抱かせる。

そして、「クルミ」というその名に、聞き覚えがあるような気がした。だがいつ、どこで聞いたのかが思い出せない。

もしかしたらそれは単なる思いすごしなのかもしれない、とまで思う。むしろそうして納得しておかないと、キリがないように思った。

「それよりシロちゃん、おなか空かない？ 朝ごはん食べてないもんね」

「食つような気分じゃねえ。それより、てめえには聞きたいことが沢山ある」

「うん？ 何がしたいのだとか、龍ちゃんにどうして欲しいんだとか、言わないよ？」

つまり何にも答えない、と言っているようなものだ。

冬獅郎が聞きたいのは、彼女は何を思つて一連の行動を起こしているのか。そして龍獅郎に、何を求めているのか。いや、何を、思い出して欲しいのか。

そして冬獅郎はその疑問を、今晴らそうとする。

「龍兄は何を思い出すべきなんだ？ お前はそれを望んでるんだろ？」

「！！」

躊躇いのない真っ直ぐな質問。疑問を隠すこともなく、ストレートに問いかける。

孤成の目が大きく見開かれた。どうやら、凶星のようだ。

——「シロちゃんなら、覚えていてくれた？」

あの時の言葉の意味を、冬獅郎はずっと考えていた。

まるで過去を思い出すように、まじまじと自分を見つめる彼女。シロちゃんなら。龍獅郎とよく似た自分に、何かを求めるような口調。龍獅郎は、孤成の事について何か大切なことを忘れている。そして孤成はそれを思い出すことを望んでいる。

龍獅郎は何を忘れてしまっている？　そして孤成は、一体何者だ？　俯いていた孤成は、顔を上げてほほ笑む。それは、今にも泣きそうな、切ないほほ笑みだった。

「シロちゃん、聡いなあ……貴方が龍ちゃんだったら良かったのに」
「……」

「反則だよ、龍ちゃんとそっくりな顔しちゃって……」

どうしてこうなるかなあ……。初めて聞いた孤成の弱気な声に、冬獅郎は何も返すことができなかった。

辛うじて涙は見えないが、このままでは泣いてしまうことがわかった。冬獅郎の周りには、祖母や雛森、そして乱菊など、女性が多いからか、そういう変化が良くわかった。

このまま孤成を泣かせてしまったら、自分は最低な男になるのか？

そう思いながら、多少反省していると、突然視界が暗くなった。：
双葉が飛びかかって来たのだ。

「シローー！ お前クルミを泣かせたな！！」

「や、やっぱ俺が悪いのか……」

「拳骨がいい？ 平手打ちがいい？ それともみねうち？」

「いいよ木下くん。シロちゃん悪くないから」

正直、ものすごい迫力の双葉に圧されていると、後ろから孤成が止めてくれる。その声音は、先ほどから柔らかかった。

優しい、双葉を見るその瞳。それらを見ながら、冬獅郎は納得する。双葉はあこがれなのか、単純に大好きなのかはわからないが孤成になつき、孤成はそんな双葉を弟を見るような感じで接している。それが、二人の関係だ。

そういえば、双葉ほど激しくはなかったが、自分もこんな風にして憤ったことがある。今も昔も変わらない基本。雛森に何か害をなすものがいれば、そいつは自分の怒りに触れる。

怪我をさせたり、泣かせたり、些細なことで悲しませても、わいてくる感情はいつも一緒。

今でも同じ感情で動く自分は全く成長していないのだろうか？ ふと、そんなことを思う。

いや、今はそんなこと、関係ない。

冬獅郎はため息をつき、気を改めると真っ直ぐ孤成を見据えた。聞くなら、たぶん今だ。

「まだ話せねえか、孤成。龍兄の事については」

「……」

「無理強いはいねえが、話してもらった方が助かる。どうする？」

なんだかおかしいことになってきたぞ。自分は本来何のためにここに来たのだっただろうか？

それを思っ、内心苦笑してしまう。自分への嘲笑も混ざっているだろうか。そして今自分は、何を考えている？

孤成は迷うような眼差しで、冬獅郎の翡翠色を見返す。

昨日までとは全然違う、儚さすら感じさせるその雰囲気。しかし彼女はすぐにそれを隠し、口元に弧を描いた。

「どうしようかな。いくら似てても、シロちゃんはシロちゃんだもの。龍ちゃんじゃないでしょ？ シロちゃんには関係ないことなのよね……」

「そう言うなら、構わねえけどな。確かに俺には関係ねえ」

クスリ。

孤成の返しに対してそう答え、視線を窓に移すと、後ろで孤成が笑った気配を感じた。

全く、何なんだこの女は。それには呆れも覚えるし、正直それを通り越してすごいと思う自分も居る。

「場合によっては話してあげるけど？」

「……全く、いい性格してるな。正直呆れるぜ」
「ありがと」

気付いていない訳ではないのだろう。とにかく嫌味にも動じず、孤成はほほ笑んで答えた。

思わず、ため息が漏れる。さて、これからどうしようか？

24：「怒り」

昨日はあんなに多くの死神が至る所で見張っており、姿を見るなり一斉に襲ってきたのに。そんなことを思いながら、一護は無人の道を歩いていった。

こう見るとここも瀟霊廷とあまり変わらないが、自分とともに歩く者を見てここは違うんだ、と実感させられる。

すぐ目の前には、龍獅郎の背中が見えている。先ほどから龍獅郎は押し黙り、何も言わなかった。

どうして次から次へと、こんなことが起こるんだろうな……目の前の「零」の文字をじっと見つめながら、一護は思わずため息をついた。

なんだが、全体的に空気が重い。ルキアと恋次など、何も言えないらしく先ほどから二人でちらちらと顔を見合わせていた。

乱菊と乱華、龍獅郎は無言。気分的に沈んでいるのか、それとも周りを警戒し、集中しているのか、それは一護にはわからなかった。

一体、いつになったら向こうに帰れるのだろうか。ふと、そんな事を考えてため息を落とす。

そして周りの暗い空気に自分も吞まれているような気がして、思わず感情的になってしまった。

その場に立ち止まった一護は、ダン！　と思い切り地面に足を叩きつける。

「あーもう辛気臭え！！　何なんだよみんなして！！　そんなウジウジしてたってどうにもならないっつーのー！！」

「うっさいわね！　うじうじしてんじゃなくて緊張してんの！　空

「気読みなさいよ!!」

空気に耐えられない。そんな感情を爆発させ、怒鳴ると逆に乱華に怒鳴り返されてしまった。

彼女のそれを引き金に、一同は一斉に一護へと視線を集中させた。それも、みなして非難の目を向けてくるのだ。只一人、龍獅郎を除いて。

しかし彼も彼で呆れているのには違いなく、思い切り苦笑している。

一護は思わずたじろぎ、後退する。一斉にそんな目を向けてこなくてもいいではないか。

ここでビシイ! と構えてしまうあたり、一護はバカだろう。

「な、何だよ、やるか!？」

「一護……貴様はどこにいても騒がしい奴だな」

「全くだぜ、ホント、そういうところバカだよな、一護は」

「なんだと!!」

恋次に言われたくねえ! 思わず喧嘩腰になり、身を乗り出したが龍獅郎に止められ、一護は黙りこむ。無理矢理気を落ち着かせると、ため息をついた。

全く、どうしてこんなことにならなければいけなかったのか、本当にそう思う。そしてどうして冬獅郎ばかりが、あんな目に遭わなければならぬのか。

それを考えるとこちらまでもが憂鬱になり、ため息を落としてしまう。だめだ、これでは悪循環だ。

「龍さんさ、本当に心当たりねえの？ 孤成は龍さんに何かを求めている、それは確かなんだぜ？」

「心当たり……か」

そう、孤成は龍獅郎自信が何かを思い出すことを望んでいる。彼女のあの言葉を聞いていれば、それは確かだった。

しかし何を思い出すべきなんだ？ 龍獅郎は、何を忘れているんだ？ そして孤成がそこに求めるモノとはなんだ？

龍獅郎自信がわからないものを、一護がわかるはずがない。孤成が何も言ってくれないと、何もわからない。

一体、自分たちはどうするべきなのだろうか？ 今の自分にできることは何なのだろうか？

いくらそれを考えても、答えが見つけれ出せない自分が腹立たしい。

「多分孤成は、元から一護なんかどうでもよかったのね」

「へ？」

突然の乱華の言葉に、一護は目を丸くする。乱華は、一護を振り返ると目を細めた。

「あの子は凄く計算高い子なのよ。まあ、あたしはそこが苦手だったりするんだけどね。何を考えてるのかわからないところとか。……これも全て、龍の気を引くためだったら？」

「……そこまですることなのかよ、その「思いだして欲しいこと」って」

関係ない者を巻き込んでまで求める記憶。それは一体何なのだろうか、と一護は考えるがやはりわからない。

そして孤成は何かを計算して動いているということは、元々孤成は霊王の命令を利用したというのか？　そして霊王自身は今それをどんなふうに見ている？

何も繋がらない。全ての点がばらばらで、それを繋ぐ線さえも見つけない。

いい加減途方に暮れた一護は、再び深いため息を落とした。

しかし龍獅郎が、それよりも大きなため息を落とす。

「結局は俺が悪いんだな。冬獅郎にも、一護にも迷惑をかけている。関係ない奴らを巻き込む羽目になったのは、俺自身が弱いからだ」

「でもそれは……」

「元々俺が、霊王の命令に従ってお前のところに行かなければ、こんな戦いはせずに済んだ。冬獅郎も隊舎で仕事をしていただろうし、一護だって普通に学校に行っていただろう？」

「……」

返す言葉が見つからず、一護は黙り込んでしまう。確かに事の始まりは、龍獅郎が現世に来たことだったと思う。

彼がやってきたからこそ冬獅郎は感情を乱し、孤成が動き出し、一護もここへ連れてこられる羽目になった。

しかし一護自信も、自分が簡単に攫われて来なければ、と考えるの

だ。龍獅郎は自分に非があるというならば、一護だつて然りだ。

結局、どちらが悪かった、なんて、誰が悪かった、なんて決めつけられない。

「……仕方がねえんだよ、龍さん。どちらにしろこれはいずれ避けて通れなかったことだと思うぜ。そしていずれは、龍さんは冬獅郎と会って話さなければならなかったと思うから」

それに、余計な騒動がついてきてしまったただけだ。そうやって言い聞かすが、龍獅郎は納得しない様子だ。

こんな温い慰め、聞くわけがねえか。一護は上手い言葉が言えないことにいら立ちを覚え、俯いてしまう。

とにかく、誰も悪くない、そう言いたいのに。

誰も、言葉を見つけ出せないのだろう。再び重い空気がその場を支配してしまう。しかし一人だけ、それを打ち破った奴がいる。

「呆れたぜ、流石日番谷隊長の兄貴だな」

「れ、恋次……？」

ため息をつき、呆れを隠す様子もなく言ったのは恋次だった。ルキアはそんな恋次を戸惑いの表情で見、龍獅郎を見る。

乱菊も驚いたように恋次を見ており、一同の視線は完全に赤髪の男へと集中している。

恋次は、皆の視線も場の空気も一切気にせず言う。

「自分が悪いと思ったらどこまでも自分を責める。あの人だってそういうタイプだ。そう思わねえか、一護」

「へ？ お、おう……確かに冬獅郎はそうだな……」

「その所為でいろんな奴が悲しい思いをしたことがある。その所為で日番谷隊長は、一護に怒られたことがある。アンタにも同じような傾向があんのかよ」

恐らく恋次は、あの時の事を言っているのだろう。冬獅郎のかつての級友、草冠宗次郎が尸魂界に攻めてきた時の、あの騒動。

一護だって、あの時の事は忘れない。そして他人を頼れない冬獅郎に対して、どこまでも自分を責める冬獅郎に対しての、怒り。

恋次もあの時の事はしっかりと記憶に焼き付いているらしい。いっになく真剣な恋次の表情を見ながら思う。

「誰もアンタが悪いなんて思っちゃいねえよ。とにかくそんなこと考えている暇があんならさっさと日番谷隊長助けて、帰ろうぜ。……って何で一護が言わねえんだよ、このセリフ」

「嫌、俺からしたら何で恋次がそんなこと言いだすんだって感じなんだけど……」

「一護も、自分の所為だとか考えたからだろ」

図星だ。言われてみれば、確かにそう思っている自分がいたからこそ、言葉が見つからなかったのではないか。

思わず黙り込み俯くと、恋次は呆れたようにため息をつく。そして

つかつかと、こちらに歩み寄ってきた。

「一護、顔上げろ」

「な、なんだ……へぶっ！！！」

言われたとおり顔を上げると、思い切り張り手を喰らわされた。思わず間拔けな声が上がってしまう。

なんだ、いきなり何をするんだ、こいつは。こんなところで喧嘩でもするつもりなのか？

ひりひりと痛む頬を抑えながら恋次を睨みつければ、彼もまたこちらを睨みつけている。

「いきなり何すんだよ！！！」

「てめえがそんなことを考えているからだろ。日番谷隊長がいない今、俺がてめえに気合を入れてやったただけだ」

うじうじしてるてめえを見てると腹が立つんだよ。恋次は冷たく言い放つと、さっさと進んでしまった。

ルキアも乱菊も例外なく、一同は立ち止まったまま呆然と恋次の背中を目で追う。

誰も追ってこないことに気がついたのか、恋次はぱつと振り返ると青筋を立てて怒鳴った。

「なんだよ！　ぼさつと突っ立ってねえでついて来やがれ！　日番谷隊長のところ行くんだろ！？　どいつもこいつもフヌケた面して

んじゃねえよ腹立つなクソが!!」

「お、おう……」

やはり、呆然とした状態から抜け出せない。彼なりに気合を入れたらしいが、正直言つてこの勢いに驚いてしまった。

本当にこいつは恋次なのか、と思うほど静かだったのに、彼は彼なりに考えていたらしい。

彼らも見た目の割に大人しい奴だとか思っていたのだろうか。乱華と龍獅郎も、お互い顔を見合わせると肩をすくめた。

「ほら、行くぞ」

「な、何なのよあいつ……何をあんなに興奮してるの？」

「さ、さあ……私にもサッパリ……」

「いいんじゃないの？　なんか恋次らしくてよ」

思わず口角が上がる。そうだ、言い方がなんだか、ものすごく恋次らしい。

一護は、相変わらず呆然としているルキアと乱菊に構わず恋次の後を追うことにした。

彼の言うとおりだ。自分は、なんだかんだいって自分の所為だと責めている部分があった。それを恋次に気付かされるなんて。

「お前もたまには言っな」

「たまにはって何だよ、たまにはって。喧嘩売ってんのかてめえ」
「いや」

ギロリと睨みつけてくる恋次を軽く受け流し、とにかく前へと進む。目指すは、冬獅郎の居場所。

とにかく冬獅郎を助け出した後で色々と考えればいい。孤成のことも全てだ。

それを伝えたくて龍獅郎を見れば、彼も力強く頷いた。

「うつわすげー、赤髪の兄ちゃん随分と威勢いいね」
「だ、誰だ!？」

その時だった。突然、覚えのない霊圧を感じたのは。そして、聞き覚えのない声。

一護は警戒しながらあたりを見回す。恋次やルキアも同じく斬魄刀に手をかけ、周りを睨みつけるようにしていた。

只一人、龍獅郎がその正体を知っているように目を見開く。

「その声……双葉か？」

「当たたりー！ よくここまで来たね、ヒツガヤ隊長。まあ、死神たちは待機させているからスムーズに来れるのは当たり前だけどね」

手を頭の後ろで組み、無邪気に笑う少年。その背は、冬獅郎と同じくらいか少し大きいくらいだ。

その姿に見覚えはない。しかし王属特務の死神だということは確からしく、そして龍獅郎の知り合いだ。

双葉。そう言えば先ほど孤成の時も、その名を口に使っていた気がする。

「……龍さん」

「気をつけるよ一護。こいつの斬魄刀は厄介だ。それに動きが俊敏だから油断したらすぐにやられる」

「やだなあヒツガヤ隊長。オレ、戦いに来たわけじゃないんだけどね」

コロコロと無邪気に笑う少年。なんだか子猫みたいだな。そんな印象を持つ。

そして双葉は、一護を見ると「あ」と何か面白いものを見つけたように声を上げた。

その表情はなんだかとても嬉しそうだ。双葉は、一護に駆け寄ると満面の笑顔で見上げてきた。

「もしかしてキミがクロサキくん？」

「え？ お、おう……黒崎一護だ」

「へへー、オレ木下双葉って言うんだ、よろしくな」

な、何なんだ……？ 突然よろしくなどと言われて、戸惑ってしまふ。龍獅郎も、双葉のその行動には驚いているらしく目を丸くしてこちらを見ていた。

双葉はそんな一同には全く構わずに、一方的に喋る。

「あのクールなシロが懸命になるほどの奴ってすごいよね。キミた

ち、そんなに仲いいの？」

「……シロって、冬獅郎の事か？ 随分馴れ馴れしく呼ぶんだな、お前」

「まあね。だってもうあいつオレのトモダチだもん」

嬉しそうに目を細め、双葉は言う。トモダチ。本来ならば敵のはずの冬獅郎をトモダチと呼ぶ。

何なんだ、この少年は？ 一体何者なんだ？ そして冬獅郎とこの少年はどんな関係があるんだ？

一護が驚くよりも、龍獅郎がそれに対して言いたいことがあったらしく身を乗り出した。

珍しく、感情的になりながら。

「何なんだ、トモダチって。まさかお前、昨日の事忘れたわけじゃないよな？」

「昨日？ ああ、あれね。それがどうしたの？」

すぎたことなんかどうでもいいじゃん！ 双葉はそう言うように笑いながら返した。

しかし龍獅郎にとってはそれこそが重大な事だったのだろう。翡翠色の双眸を今まで見たこともないほどに細め、怒鳴る。

「どうしたじゃねえだろ！ あんな怪我を追った冬獅郎を利用して無茶させて、あれだけ辛い思いさせておいて何を言ってるやがる！？」

「やべ、すげー怒ってる……」

いつにない龍獅郎の剣幕。ずっと笑っていた双葉も、怯えるように肩を震わせて龍獅郎を見る。

一護も思わず目を見開いて龍獅郎を凝視してしまった。冬獅郎と違って、随分と落ち着いた口調。それが怒気を含むことによって、冬獅郎が喋っているような錯覚に陥ってしまう。

本当に、怒っているのだ。龍獅郎がここまで怒るようなことを、この双葉という少年はしたのだろうか。

「と、とにかく落ち着いてよヒツガヤ隊長……昨日の事は謝るからさ……それにあいつ自身が許してくれたんだよ？」

「どういう意味だ……？」

「まあ、すぐにわかるよ、ヒツガヤ隊長」

ごめんね？ 何故か謝った双葉は、ニコリ、と笑みを浮かべる。それさえも、今の龍獅郎には怒りの対象になったのだろう。

普段温厚な人ほど、怒らせると怖いとよく言うが、龍獅郎はまさにそういうタイプだ。

そう言えば昨日、冬獅郎が言っていた記憶がある。兄さんだけは、怒らせない方がいい。それは掃除をしながらの会話だったのだろうか。それを今まさに目を前で見て納得する。こんなふうに声を荒げない龍獅郎だからか、本当に怖い。

正直触れたくねえな。そう思いながら見てみると、隣に来た乱華が呑気な声を上げた。

「わ……龍がキレたの何年ぶりかしら……数十年ぶり？」

「あの時も隊長絡みだったわよね……お兄さん、相変わらずだわ……」

松本姉妹はこの光景に慣れしまっているのだろうか。そう思うと苦笑が漏れてしまう。

とにかくだ、とにかくなんだが、居たたまれない。

取り敢えず、どうしようか、そんなことを考える。どうしよう、どうすればいいんだ？ 助けてくれ冬獅郎。俺にはどうすればいいのかさっぱりわからねえ。

……彼が現れたのは、そう思った直後だった。

「バカ野郎、あれほど龍兄は怒らせたらヤバいって言っただろうが」「人の忠告くらい聞きやがれ」

二つの、同じ声。しかし確実に別の個体が放ったその言葉。その光景を目にした一護は、目を見開かずにはいらなかった。

25：冬獅郎の逆襲

「シロちゃん、龍ちゃん見なかった？」

「はあ？ 龍兄また消えたのかよ？」

何十年も前の話になるのだが、俺は当時の事をすっかりと覚えてい
る。物心がついたときからずっと、俺の近くには、雛森とばあちゃ
ん、そして龍兄が居たこと。

物心ついたころからずっと、なのだからそれは俺にとって当たり前
だった。当たり前すぎて、誰か一人が居なくなるなんて考えな
い。

とにかく俺と雛森、龍兄はいつも一緒に行動して、そして単独で外
に出ることがあっても、必ず誰かに行き先を告げることが常だった。
龍兄が甘納豆を買いに行く、と言うときは俺も雛森も、当然の如く
ついていったものだが。それもそれで、ばあちゃんが微笑ましそう
に見ていたのも覚えている。

しかし一時期、龍兄が雛森にも俺にも、ばあちゃんにすら何も言わ
ずにどこかへ出かけていしまうことが頻繁にあった。

その前に喧嘩をしたとか、何か引き金となりそうなことがあった
わけではない。更に言うなら、一人で勝手に出て行ってしまうよう
になった、ということ以外はいつもどおりで、特別何かあったとい
うわけではなさそうだった。

只、理由がわからないだけに、皆の心配にも拍車がかかる。

それが2日、3日。終いには1週間、1ヶ月と続き、雛森もいい加

減黙っていらなくなったのか聞いてきたことがある。

俺に聞かれたって、わからないことは沢山あるのに。この時雛森は、俺に聞けば龍兄の事は何でもわかると思っていたそうだな。なんでもわかるって、そんなの無理があるだろ。

「最近龍ちゃん、どうしちゃったのかなあ……今までこんなこと一度もなかったのに」

「龍兄もそういう年頃なんじゃねえの？　いつまでも俺たちみたいなガキに付き合ってられねえって」

「もう！　何でそう冷たいのよシロちゃんは！」

勿論俺だって心配だった。何があっただって。何で俺たちに何も言ってくれねえんだって、寂しくなかったと言えばそれはウソになる。

だけど俺は決して、その感情を表には出さなかった。龍兄にも事情があるんだ、仕方がねえんだって。

俺の我がままに振り回すわけにはいかねえんだって、龍兄を困らせるわけにはいかねえって。

だから俺は、何も言わずに我慢していた。ただ龍兄を心配し、寂しがる雛森を慰めながら、毎日耐えていた。

しかし何も知らねえで待ち続けることはかなり一方的で、正直キツイ。

「どこ行くんだよ、龍兄」

そんな毎日が続ける、ある日の事だった。俺はたまたま、一人出ていく龍兄を見つけて、呼びとめた。

てつきり俺たちの目を盗んで、玄関から出ているモノだと思っていたが「しまった」というように俺を見る龍兄が跨いでいるのは窓枠あるうことか龍兄はいつもこうして外に出ていたんだ。これでは本当に、疚しいことを考えてこっそり出て行っているようにしか見えない。

コソドロか？ いつもならそう言ってからかっていただろう。しかしこの時ばかりは、そのような気分ではなかった。

龍兄は、一体何をしているんだ？ どこに向かおうとしているんだ？ 俺は思わず、目を細める。

龍兄の腕には、片腕で抱えるくらい大きな巾着が収まっていた。

俺はそれを一瞥してから、焦りの表情を崩さない龍兄の目を見る。

「桃が心配してんだぜ、最近龍兄は何をしているんだろうって。悪い奴らに脅されてんじゃねえかって心配してる」

悪い奴らに脅されている。雛森がそう言い始めたときはまさか、と思ったが、今龍兄の腕の中にあるそれが、嫌な予感を起こさせる。中身が何なのかはわからない。只そういう奴らに脅されて、無理矢理それをそいつらに持っていかなければならねえとか。よくある話だが、だからこそあり得なくはない。しかし龍兄は、言うんだ。

「何でもないよ」

穏やかにほほ笑みながら、龍兄は言った。その反応は予想通り。恐らく何を聞いても、今の龍兄は答えてくれない。

今まで雛森やばあちゃんに小さな隠し事をしたことはあったけど、俺にだけはしたことがなかった。俺にだけは、何でも話してくれた。それはちよつとすりむいた、だとか本当に些細な事だったが、龍兄は何があっても俺にだけは隠し事はしない。それは俺にとって本当に嬉しいことのはずだった。

だが今は、そう言う訳にはいかないらしい。もう、俺にすら話せないらしい。

この時から俺は気付いていたのかもしれない。いずれ龍兄は、俺たちの傍から離れて行くって……。

いくら唯一血のつながった兄弟だとしても、いくら同じレールの上を歩いてきても、いずれはわかれ道が来る。そしてその道を、それぞれ歩んでいかなければならない。

今まで俺は龍兄の引いたレールの上を、龍兄の背中を追いかけて生きてきたけど、いずれは自分でレールを引かなきゃならねえんだ。

そうわかっていたはずなのに、おそらく俺はそこから逃避して、拳句自分の道を見殺して、龍兄の背について回っていたのだろう。だから昨日まで俺は、龍兄を許せなかった。

龍兄を頼りきって、そして龍兄は俺を置いていかないって勝手に信じ切っていたからこそ、オレは許せなかったんだ。

裏切られたって、勝手に思っていた。

「心配しなくて大丈夫だって、桃に言っておいて。只の用事だから」

そう言つて龍兄は窓枠から飛び降りる。そのまま、逃げるように走り去ってしまった。
もしも俺の予想が正しければ、もしも龍兄がこの時誰かと会つていたというのならば恐らくは――

Double dragon 25：冬獅郎の逆襲

「とう……しろ……？」

喉の奥からかすれた声が漏れる。今日の前にあるものが信じられなくて、目を見開く。
何かの間違いか？ 幻覚か？ 俺の目がおかしいのか？ そう思つていくら目を凝らしても目の前の光景が変わることはなかった。
勿論、自分だけが催眠にかけられ、幻覚を見せられている訳ではないようだ。ルキアや恋次、龍獅郎たちも同じように目を見開き、目の前の二つの銀色を凝視している。

冬獅郎が、二人。

一護の目に映るその光景はまぎれもない真実であり、そして厄介事には変わりなかった。

恐らく一方は孤成だろう。しかしもう一方は……。

一護はぎこちない笑みを浮かべながら、聞く。いつもどおり、何気

ないように。

しかし心の中では完全に動揺している。

「ちょ、何してんだよ冬獅郎？ 本物当てゲームか？」

「……別に」

「そう言う訳じゃねえよ」

一つの言葉を、二人で分担して。一護は思わず息を呑んだ。

突然現れた二人の冬獅郎。そして間違いなく今冬獅郎は孤成側のいいなりになっている。

それは冬獅郎自身の意思なのか？ それとも何かされているのか？

そう考えて、歯噛みした。

とにかくどちらにしても、自分が止めなければ。衝動的にそう思う。もしも刀を振るうようなことになっても、龍獅郎とだけは戦わせない。

勿論斬月と氷輪丸を交えることも避けたいが、仕方がない、と思った。そう、割り切ってしまう。

「冬獅郎！！」

「うるせえな……お前は少し黙ってる黒崎」

「今俺が話したいのは龍兄だ」

黙ってられるわけがねえだろうが。視線を逸らす冬獅郎達を見ながら、一護は拳を握りしめる。

何なのだろうか、この展開は。冬獅郎は何を考えているのだろうか。

何をしようとしているのだろうか。
今度は一体何だというのだろうか。

冬獅郎は動揺している一同など全く気にせず、龍獅郎だけを見据える。勿論龍獅郎も同様の只中におり、呆然と目を見開いていた。全く、予想もしなかった展開。そして龍獅郎は、只涼しい顔で傍観している双葉を睨みつけた。

「双葉、一体どういうことだ、これは？」

「へ？　どういうことって？　遊傀儡使ってねえけど？」

ほら、と両手を広げる双葉には何もなかった。斬魄刀も、そのほかの道具と見られそうなモノも。

ゆうくぐつ、ってなんだ？　一護は一瞬首をかしげたが、すぐに斬魄刀なのだということを会話から理解する。

その「遊傀儡」という斬魄刀がこのような事象を起こさせるものなのだろう。例えば、簡単に冬獅郎を操ってしまうような。

しかし今の双葉は何も持っていない。その斬魄刀らしきものはどこにもない。

……だとすれば考えられることは只一つ。そしてそれは最悪の状況を意味する。

龍獅郎は、おそろおそろ視線を冬獅郎に向けた。二人いるうちの、どちらが本物なのか見分けがつかないのだろう。

戸惑うように二人を交互に見回した後、俯いてしまう。

冬獅郎達はそれを静かに見据え、そして静かに言った。恐らくこれも、予想済みの展開だ。

「……悪いけど龍兄」

「このまま簡単に帰るつもりも、帰すつもりもねえから」

一つの言葉を二人で交互に。そして完全なる、宣戦布告。

一体どういうことなのか一護には全くわからなかった。冬獅郎が何を考えているのか、考えてもわからない。

この短時間で、冬獅郎に何があったのか。この短時間で孤成は、双葉は、冬獅郎に何をしたのか、何を言ったのか。

龍獅郎は何も言わずに俯いている。言いたいことは、思うことは沢山あるだろう。それなのに何も言わない。恐らく状況が絶望的すぎて何も言えないのだろう。

乱菊だってそうだ。呆然と目を見開き、只じっと冬獅郎を見据えている。冬獅郎はそれを一瞥し、少しだけ申し訳なさそうに目を細めた気がした。

二人の少年は、沈黙する一同に目を向けて、言う。

「……どっちがどつちだか見分けもつかねえだろ」

「それじゃあどうしようもねえよな」

「そんなことはねえよ」

一体何を考えているのかわからない。それは一護だって、ここにいる全員だって同じだろう。しかし一つだけ、一護にわかることがある。何故か一護には、この僅かな誤差がわかる。

只腕を組みながら横に並んでいる二人の冬獅郎。一護は、そのうちの右側の胸倉につかみかかった。ついさっき、乱菊を一瞥した方の、冬獅郎。

「悪いけど俺は、僅かな霊圧の差にも気付いてんだよ、冬獅郎！俺の目を誤魔化そうなんて100年早え！！」

「かまかけか？ 悪いがその手には……」

「じゃあいくらでもシャッフルしてみろよ、絶対に当てて見せっから」

ほらよ。一護は冷たくそう言いながら、冬獅郎の胸倉から手を放す。そう、全てわかっていた。冬獅郎に化けた孤成と冬獅郎自信の僅かな霊圧の違い。そんなモノとうに見破っている。そして先ほどの目くばせが、それを確信づけた。

この手にはもう乗らない。もう引っかからない。そして一護の前で冬獅郎を偽ろうなどと、それほどバカな考えはない。

俺の目は誤魔化せねえぞ、冬獅郎。

声には出さず、目でそう訴える。じつとこちらを見返していた冬獅郎は、不意にため息をつき、フツと懷に飛び込んできた。

瞬きすらしていないのに、気がつけばすぐ近くに冬獅郎の翡翠色があった。澄んだ翡翠色の双眸で、力強く一護の琥珀色を見上げる。

「俺はてめえのそういうところが嫌いだ」
「な……」

ふわり、と身体が浮く。冬獅郎が自分を担ぎあげたのだ。そして次の瞬間に顔に襲いかかってくる突風。一護はそれらに抗うことが出来ずに、なされるがままに目を瞑る。

次々と浮かんでくる文句を言っている余裕もない。問いただしいのに、それすら出来ない。

「ちょ、おまつ……な……かんが……!!」

「んー？ 何言ってるのか聞こえないよ、黒崎くん。すぐそこだからもうちょっと待って？」

自分の顔を覗き込むもう一人の冬獅郎……いや、孤成。

彼女は冬獅郎の容貌をしたまま楽しそうな笑みを口元に湛え、また楽しそうに言う。何でこっちは風圧で上手く喋れないのにお前は喋れるんだ!!

とぎれとぎれにそう言ってみると「いいから黙れ」と今度は冬獅郎に一蹴された。

何なんだ、一体。何なんだこれは。訳がわからない。そして上手く喋れないのがかなりもどかしく、焦らされる。

そんな状況にいら立ちを覚えていると、突然ボスン、と何かの上に投げつけられた。

ここかどこなのか、そんなこと気にしてられない。とにかくどこかのベッドのうしろしく、白いシーツが目に入った。

一護は勢いよく身体を起こすと、仁王立ちしながらこちらを見ている冬獅郎を睨みつける。

「冬獅郎てめえ何考えて……！！」

「全く……侮れねえ奴だなてめえは。俺ですらわからねえのにどうしてわかるのか理解できねえ」

「そんなの……！」

「悪い黒崎。驚いただろ」

目を逸らしながら、謝る。その姿はいつもの冬獅郎そのものだ。

一気に拍子抜けしてしまった一護は喉まで来ていた言葉を呑みこみ、じつと冬獅郎を見据える。

その横から、変身を解いた孤成がひよい、と顔を出した。

「そう言えば黒崎くん、あの時も見破ったわけ？　すごい、本当に今回も見破られちゃった」

「てめえの詰めが甘いんじゃないかねえのか？」

「黒崎くんが異常なだけよ」

確かに黒崎はおかしい。冬獅郎は一護が異常だ、ということとで納得したのか、そう呟くと孤成に向けていた視線を一護に戻した。

「い、行っちゃった……」

一人取り残された双葉が、呆然と呟く。そしてあまりにも展開が異常で、そして何もかもが急すぎて、龍獅郎は呆然と立ち尽くすしかなかった。

帰す気もないが、帰る気もない。龍獅郎にはどちらが本物なのか全くわからなかったが、冬獅郎自身がそう言っているのであることだけはわかった。

しかし何を考えているのか。何が、冬獅郎をそんな結論に至らしめたのか。それが全くわからない。

龍兄。

何事もなかったかのように、自分を呼ぶ声。その声や表情に、昨日までのような冷たさはふしぎと感じられなかった。それも、どちらにも。

孤成も冬獅郎も、全く同じ声音で、同じ表情で喋るのだから厄介だ。そしてそれを簡単に見抜いてしまった一護は何者か。そんなことも考える。

「龍」

ただ立ちつくす龍獅郎に気を使つてか、乱華が沈痛な声で名を呼んだ。

振り返れば、乱華と乱菊、そして恋次とルキアがどうすればいいのかわからない、という表情で横一列に並んでいた。

それもそうだろう。突然起こったこの出来事に、何をどうすればいいかなんて、簡単に決められない。

冬獅郎が何を考えているのか、一体何がしたいのか、それがわからない以上どうしようもない。

しかし龍獅郎は、力なくだが笑って見せる。取り敢えず、大丈夫だと。

「何なんだろうな、次から次へと。冬獅郎はああだし、何だあれ、反抗期か？」

「龍」

「一護まで連れて行かれるしさ、結局冬獅郎が何を考えているのか、聞けなかったしな！」

カラ元気、とはこういうことを言うのだろうか。無理矢理明るく努めようとすると、いつもなら出さないような声が出る。いつもなら出ないような、大きな声。

もしも一護がここにいたら彼はなんと言っていただろうか。そんなことまでもを考えてしまう。そしてもしも冬獅郎がこの場にいたら、彼はどんな表情をするだろうか。

ヤバいな、意外と堪えているかも。龍獅郎はなるべくそれを表に出さないように努めながら再び彼らに背を向けた。

……振り向いた先にいた双葉が複雑そうな表情をしているのはどうしてだろうか。

「双葉……？」

「いい加減本当に、思い出した方がいいよ、ヒツガヤ隊長」

それは双葉なりに気を使った助言。いつになく落ち着いたその声と表情に、龍獅郎は息を呑んだ。今の双葉は本気だ。

本気で色々と考えて、そしてこちらに伝えるべきことを選んで喋っている。こんな双葉は初めて見た。

「このままじゃクルミも、そしてヒツガヤ隊長もシロも辛いだけだよ。貴方は心のどこかで、その時のキオクを拒んでいるんじゃないですか？　だとすれば何故？」

「……その記憶つてのが何かわかったら苦労しないさ」

「オレが教えてあげてもいいけど、これじゃクルミもヒツガヤ隊長も納得できないだろ？　……お願いだから、思い出してあげて」

そう言つて、双葉は背を向ける。こちらが口を開く前に、彼は瞬歩で姿を消してしまった。

後に取り残された龍獅郎たちは、皆そろって何も言えず黙り込んでしまう。今度ばかりは、恋次も言う言葉が見つからないようだ。

思い出すべきこと。記憶。それが何なのかわかったら苦労しない。本当にそうだろう。それがわかっていたらこんなことにはなっていないかった。

「……乱菊」

「へ！？　あ、あたし！？」

「冬獅郎の副隊長としてどう思う？　あいつは、何を思つて行動している？」

乱菊には視線を向けずにそう訊ねる。彼女が考え込む様子が気配からなんとなく感じ取れた。

龍獅郎は黙って答えを待つ。自分には見つけられない答え。そして今一番冬獅郎と一緒にいる時間が長いであろう乱菊はどう考えるのか。

それを知りたかった。それを聞いてから、前に進みたかった。

しばらく考え込んでいた乱菊は、しっかりと通る声で言った。

「多分隊長には、隊長なりの考えがあると思います。じゃなかったらあの人が、あんな裏切るようなことをするわけがない」

「松本副隊長の言うとおりだと思います！」

「俺もそう思うぜ。あの人が、なあ？」

乱菊の言葉に賛同して言うルキアと恋次。乱華を見れば、彼女は黙って頷いた。

ならば答えは一つだ。そして恐らくその原因というモノが、今自分が忘れてしまっているものなのだろうと思う。

迷わずに、追いかける。これが龍獅郎が下した決断。

「行くぞ、乱華、乱菊、恋次、ルキア。俺が原因だというのならば、俺自身で終止符を打つ」

26：一護と双葉

「えー、それはちょっと、龍さん……ええー……」

「やつぱらどうかと思うだろ？ だから俺もこちら側についてどうにか出来ねえかって思ったんだ。間違えてるか？」

「いや……これは、ちよつと、龍さんが悪い」

一体何がどうなって、自分は拉致されたのか。つーか冬獅郎は、何をしようとしていたのか。

そもそも冬獅郎に「裏切る」とかそう言うつもりはないらしい。それを聞いて一応安心はしたが、じゃあ一体何なのかよくわからないままだった。

ひとまず話を聞いた一護は、いろいろな意味で呆然とするしかない。一護を呆れさせたのは冬獅郎ではなく、龍獅郎だということがまた驚きでもある。

とにかく思うのが、もしかして日番谷龍獅郎と言う人物は、何気に天然なところがあるのか？ いや、これは天然とかそういう問題じゃ……。ということだ。

とにかくその内容は、一護でも思わず頭を抱えるようなもの。冬獅郎も呆れきって何も言えないのか、げんなりとした表情を見せている。

一方、彼らが話すその隣で呆然としているのが孤成だった。

「シロちゃん何それ……あたし聞いてないんだけど？」

「言ってねえからな。間違えてるか」

反論できないのか、孤成は黙り込んでしまう。彼女には珍しく、追いつめられた表情。勿論冬獅郎の推測は全て当たっていたのだろう。やがて孤成は諦めたのか、ため息をつき言う。

「もうやだシロちゃん、本当に貴方龍ちゃんの弟？」

「龍兄が異常なだけだろ、普通こんなこと忘れないだろうが」

「そうだよなあ……忘れる方がおかしいよな、これは」

龍さん、本当にアンタは何なんだ？ そう思い、思わず苦笑してしまう。本当に、これはないだろう。

その話を聞くと、被害者は孤成だと言っても間違いではないような気がしてしまう。そして冬獅郎や一護も、巻き込まれてしまった被害者であると言える。

冬獅郎は一護を見るとため息を落とし、それにつられたように孤成もため息を落とす。その所為で、場の空気はどんどん悪くなってしまう。

正直、一護も言葉がでない。本当にこれはどうしたものか。

そうして誰も口を開く事が出来ず、一護も途方に暮れていると、部屋の扉が開かれる。そこからひよい、と顔を出したのは双葉だった。

「ちよつとシロ！ おいてくなんてひどいよ！ ……ってなしたのみんな……？」

どうやら双葉は、一人取り残されたことに憤りを感じているらしい。実際一護も忘れていた。

しかし皆の空気が重いことに気がついたらしい双葉は、怒りを引っ込め首を傾げた。その表情は、戸惑っているようにも見える。

「どうしたもこうしたも……あーもう！ 冬獅郎の所為だ！！」

「俺かよ！！ 元々こんな話しなきゃならねえ状況を作った龍兄が悪いだろ！？」

「龍さんに責任転嫁するのかよ！？ それでもてめえは龍さんの弟か！！」

「知るか！ つーか沈む黒崎も悪いだろ！！」

「お前らが沈んでつから何言えはいいかわからねえんだよ！ 龍さんも龍さんだし！」

「やっぱ龍兄が悪いんじゃないか！！」

「いや、もういいよ二人とも、なんかごめん……」

いきなり痴話喧嘩を始める一護と冬獅郎に、流石の双葉も引いたのだろう。彼はいつになく小さく言いながら、孤成の元へと向かう。

一護も冬獅郎との喧嘩をやめて、部屋の中央に置かれているテーブルに肘をつく孤成を見た。

ちなみに、冬獅郎と一護はベッドの上で胸倉をつかみあっている状態だ。というか、連れてこられたこの個室は何なのだろう。一護は今更そんなことを考えてみる。

双葉は、ひょこひょここと孤成の座る正面に行くと、テーブルから身を乗り出して彼女を覗き込んだ。

「クルミこそなしたの！？ 具合悪い！？」

「シロちゃんが悪い」

「へ……」

双葉がきよとん、とすると同時に冬獅郎も「俺かよ……」というように頭を抱えた。

なんだかものすごい衝撃を受けたように固まっている双葉。一護は、なんか面倒な戦いが起こりそうな気がして、そつとベッドから降りた。

なんだかわからないけど直感だ。そして雰囲気がなんだかやばそうだ、とも思う。

今孤成は絶対に爆弾を投下した。そしてその被害を被るのは、冬獅郎。

そして案の定、その災厄は冬獅郎にふりかかった。

「ねえ、シロ」

「あ？」

なんだかひどく抑揚のない声で、冬獅郎を呼ぶ双葉。そして次の瞬間には、一護の視界から双葉が消えた。

それから瞬きすらする間もなかっただろう。冬獅郎が普段は聞けないような悲鳴を上げ、ベッドが危なっかしい音を立てる。

おそるおそるそちら側をみると、双葉が思い切り冬獅郎にタックルした後だった。

「ねえ知ってる？ クルミに悪影響及ぼした奴は、遊傀儡の餌食になるんだよ？」

「なんだその豆なのか犬なのかわからねえもんを彷彿させる口調は！？」

「ツツコミが長い！！」

「ぐはっ！！」

双葉の拳が、冬獅郎の鳩尾にめり込んだ。……こんな状況に陥っている冬獅郎、初めて見た。

さらに双葉は、泡を吹く冬獅郎の胸倉をつかみ、彼にまたがったままガクガクと振り始めた。冬獅郎はそれに抗えずに、激しく揺さぶられるしかない。

双葉を怒らせると冬獅郎すら抵抗できないことになるのか……目の前の光景を見ているだけでも冷や汗が吹き出す。

そして決めた、絶対に孤成に被害を成すようなことはしないでおう。……というか、今冬獅郎は孤成に何かしただろうか？

恐らく冬獅郎にも覚えがないだろう。訳がわからないままボコボコにされる気分はどうだろうか。というより冬獅郎のプライドがどうなるのか気になる。

正直言つて、冬獅郎が哀れに思えて仕方がない。今すぐにも助けてやりたいのだが、双葉の勢いは一護では止めることができないだろう。それほどだ、今の木下双葉を閉める怒り指数は。

そう思い、ここから逃げようかと思った刹那、何かがキレた音を、一護は聞いた。

ぱつっん、と突っ張ってた何かがとうとうキレた。そんな音に、新

たな嵐の予感がガンガンする。

「さてと冬獅郎、池に飛び込んで死ぬ？ それとも首つり？ リス
トカット？ 切腹？」

「……せ……………」

「へ？ なに？ 背泳ぎしながら沈むー？ あ、安心してね？
ちゃんと遊傀儡で操ってあげるから苦しくはないはずだよ？」

そう言う問題、じゃない気がする。部屋の気温が一気に下がったこ
とに気がついた一護は、更に手が出せなくなってしまった。

そうだ、冬獅郎がいつまでもボコボコにやられているはずがない。
冬獅郎が、大人しく終わらせるはずがない。

しかも彼自身は悪くない、というならばなおさらだ。どうしよう、
今すぐに逃げたい、ものすごく逃げたい。

そして双葉は、それ以上やらない方がいいと思う。

「黙ってないで返事しようね。いい加減火に放りこ……………」

「霜天に坐せ！ 氷輪丸つつ！！！！！！」

「ぎゃあああああつ！！！！」

氷の龍が、炸裂した。

「うつつ、ひつく……なんで、なんでー？ シロ怖いよーふえつ……」

「すごい、木下くんを返り討ちにした人なんて今まで一人もいなかったのに……」

「流石冬獅郎……転んでもただじゃおかねえな……」

いつのまに形勢逆転したのか、気がつけば双葉が地面にへたり込んで泣き、それを孤成が慰めてる、という状態になっていた。

ブチギレた冬獅郎は、近づいてきたら凍らせる、とでも言うように氷輪丸を握りしめ、どす黒いオーラを発している。

どうしよう、宥めようにも近付けない。恐らく今の冬獅郎は一触即発。少しでも触れれば、この部屋は氷の龍に支配されてしまうだろう。

そして少なくとも今自分が振れば、氷に閉じ込められてしまう間違いない。

やはり一護は何もできずにいると、不意に孤成がため息を落とした。

「もう、誰よこんなことになる原因作ったの？ 駄目じゃない黒崎くん」

「元はアンタだろーが！」

冬獅郎が悪い、と双葉に言って、騒動を促したのは孤成だ。思わず力いっぱい突っ込むと、それが怖かったらしい双葉が更に泣く。そしてその鳴き声が鬱陶しいのか、部屋の温度がさらに下がった。これでは悪循環にしかない。

孤成は肩をすくめ、やれやれ、と首を振った。
一護はもう、ため息しか出ない。

「木下くん泣かせた人も初めてよ？ シロちゃん怖すぎ」
「……うるせえ」

今は冬獅郎をそっとしておいた方がいい。それなのに孤成は何事もなかったかのように話しかけるのだ。
彼が動いたたび、氷輪丸が音を立てるため身構えてしまう。今の冬獅郎なら、どんな些細なことにも氷輪丸を解放しそうだ。

「取り敢えず俺たちは外に出ようぜ？ 冬獅郎、一人になりたいだろうし、な？」

「嫌よ。ブチギレたシロちゃんもレパートリーに入れるんだから」

「……俺帰っていいかな」

こいつらと一緒にいると、命がいくらあっても足りない気がする。
話を聞いて彼らに協力するつもりではいたが、一気に帰りたくなつた。

窓枠に肘を載せ、外を眺めている冬獅郎は相変わらず恐ろしい霊圧を纏って（放って）いるし、双葉は泣きやまない。その状況で孤成が全く動じていないのが驚きだ。

そしてちらりとのぞきこんだ冬獅郎の目が、すわっている。勇気を振り絞って話しかけてみよう、と思ったわけでないが、尚更接しにくくなった。

しかしそんな彼にも平気で文句を言うのが、双葉だった。

「寒いよー！ シロのバカー！」

「……俺は初めてあんな屈辱を受けた」

「オレもいきなり凍らされたのなんか初めてだよ！ うわーん！
バカー！ 冷徹ー！ チ……」

チビ。今双葉はそう言おうとした。間違いない。そしてそれが放たれることによってどうなるのか、あまりに鮮明に、そして確実に予想できてしまったため、一護は慌てて双葉の口をふさいだ。

今の冬獅郎に、その起爆剤はダメだ。あまりにも危険すぎる。今度こそ本当に建物が崩壊するだろうし、命の保証ができない。ここに自分が来て本当によかった。いま初めてそう思った。

とにかく、これ以上双葉と冬獅郎を一緒に空間に居させるのは危険だろう。そう判断した一護は、無理矢理笑顔を作って言う。ひきつっている自信があつたが、無表情で言うよりはずっとマシだろう。

「ちょっと外の空気吸って、気分転換してこねえか？」

「嫌だ！ クルミと一緒にいる！」

「今孤成、技の勉強中だから。邪魔しちゃいけないだろ？」

何のよ。孤成はそう反論してきたが、そうではないのか？ ブチギレた冬獅郎を変身のレパトリーに入れる、とかなんとか言っていたクセして。

そして基本的に孤成に悪影響となることは好まない双葉は「行く！」と元気よく立ちあがった。

全く、年のころは冬獅郎と同じくらいに見えるというのに、何なんだ、この性格の違いは、なんて思ってしまう。

冬獅郎はあんなに可愛げがないのに、なんだかものすごくバカっぽくて可愛いぞ。……なんて言ったら怒られるだろうか。

取り敢えず一護は、双葉を連れて部屋を出る。廊下はかなり長かった。そしてあの部屋よりも温かく感じることに苦笑してしまう。

冬獅郎はよくキレているところを目撃するが、先ほどの前代未聞だ。それほど、彼の怒りは凄まじかった。

龍獅郎もキレたら怖いが、冬獅郎もなかなかのものである。やはりこれは、遺伝か？

とにかくこのまま一人考えていても、只無言で歩いていることになる。一護は、若干俯きながら隣を歩いている双葉に訊ねた。

「双葉はさ、知ってたのか？ 孤成と龍さんの事」

「うん……クルミ、俺には話してくれたから……過去にあったこともさ、クルミがヒツガや隊長に抱く感情も」

「……そうか」

孤成が龍獅郎に抱く感情。何だそれ？ と聞いてしまうほど一護はバカでも無神経なつもりもない。

なんだか悪いことを聞いてしまったような気がして、一護は黙り込んでしまった。先に続く廊下はまだまだ長い。

「だけどヒツガヤ隊長、全く気付かないし覚えてもない。それにクルミから話しかけないとあの人全然クルミのこと視界にすら入れないんだよ？ あの人にとってクルミは空気同然。最低だろ？ だからオレ、あの人嫌い」

「……双葉は、孤成の事が大好きなんだな」

勿論！ 双葉が咲かせた笑顔を見て、一護も思わず笑顔になってしまっ

「だけどオレ、シロは好きだぜ！ 怖かったけど、普段はすごい奴。イチゴも気に入った！」

「おう、光栄だぜ」

なんだ、普通のいい子ではないか。なんだか龍獅郎と色々あったらしく、正直いい目では見ていなかったのだが、全然悪い奴には思えない。

むしろ、素直で明るくて、子供らしいかわいらしさがある子だと思う。可愛げと言うモノを少し冬獅郎に分けてやって欲しい。そんなことまで考えてしまう。

双葉は機嫌が直ったのか、にこにこ笑いながら一護を見上げ語る。

「オレ、絶対にいつかヒツガヤ隊長より強くなって、ギャフンと言わせてやるんだ。一番クルミを傷付けてるのはあいつだけど、今のオレじゃ流石に隊長には敵わない」

「だからって冬獅郎使つのはいけねえぞ？ 敢えて言うなら、お前

が孤成にするように、俺も冬獅郎に何かしたらキレる自信あるからな」

「……イチゴ、もしかしてそういう趣味なの？」

「なんでそういう解釈になるんだよ！！」

こええなあもう！！ がしかしと頭を掻きむしりながら言うと、双葉は「冗談だつて！」と笑う。

「そつか、イチゴはシロが大切なんだな」

「冬獅郎だけじゃねえよ。ルキアも恋次も乱菊さんも、仲間みんな大切だ。だからこそ護りたい」

大切な仲間たちは、この刀で何が何でも護る。それが、一護が死神でいる上での志。覆すことのできない、力を持つ意味。

双葉は真剣な表情で一護を見上げ、真剣に話を聞いている。その口が、あんぐりとあいていることに気がついて苦笑してしまった。

「何でそんな間抜けなツラで見るんだよ？ 真剣に言ってるんだぜ？」

「あ、ごめん、別にバカにしてるわけじゃねえんだ……」

そか…… かつこいいいな、それ。聞こえないように呟いたのだろうが、その言葉はしっかりと一護の耳に届いていた。

かつこいい、か。今まで何回も同じことを言ってきたが、そんなことを言われたのは初めてだ。それだけに、なんだか照れくさい。

「そっか…… だけどやっぱオレはクルミが大切だな……」

「だったらそれでいいんじゃないか？ 護りたいものなんて人それぞれだしよ、只自分の護りたいものを守り抜けばそれでいい」

それだけで、双葉も十分かつこいいんだぜ？ 我ながらクサイことを言っているだろうが、それでも双葉は真剣に聞いてくれる。

冬獅郎やルキアならクサイ、と一蹴してくる場面だというのに。それほどの少年は、純粹なのか。

なんだかんだいって人間も護廷十三隊も、まして王属特務も実質的にはあまり変わらないんだろうな、と思う。

最初一護が瀨霊廷に来た時は、死神というモノはもつと堅苦しい組織だと思っていたが、彼らのふれあいには人間のそれと変わらない。

虚が出ない平和なときなど、本当に自分たちが過ごす日常としてなじめるし、楽しい。そしてきっとそれは、冬獅郎が随分嫌っていた王属特務も変わらないのだろう、と思う。

「あ、あのさいチゴ、こんなこと言ったらきつと怒られるんだろうけどさ……」

「ん？ 何だ？ 言ってみろ」

「し、シロみたいに刀解放しない？ 本当に大丈夫？」

しねえよ。もともとあれは冬獅郎が滅茶苦茶なんだって。そう言つと双葉ははにかむように笑い「よかった」と頷く。

冬獅郎の場合、氷だから建物に損傷はなかったが、一護の月牙天衝

は大惨事になるだろう。流石に何があるうとそこは冷静なつもりだ。

「シロさ、帰らなくてもいいのになーって……もつと話したいし、仲良くなりたいたい」

「……引き止めようとか、どうにかしてこちらに留まらせようとか言う考えはあるのか？」

「ま、まさか！ シロ自身がそれを望むなら別だけど、流石に横暴効かせるようなことはしねーよ！」

言ったら、オレは基本好きな奴困らせたくねえんだって。眉を下げながら言う双葉を見てみると、かなり微笑ましい。

王属特務に偏見を持っている者は冬獅郎以外にも居るのだろうか。ふとそんなことを考える。

もしもそんな人たちがいたならば、それをどうにかして解いてやりたい。双葉と一緒にいるとそんなことを思う。

「お前から瀨霊廷に来るとか出来ねえのか？ 一応王属特務の死神なんだしさ、瀨霊廷側は何も言えねえだろ」

「レイオーさまが許してくんねえもん。だからヒツガヤ隊長だって、今までシロに会えなかっただろ？」

「うーん……霊王か……堅そうだもんな」

そう言えばあれが居たんだっけ。アレ扱いしてしまうのは失礼だと思っが、それほど厄介そうだ、と思う。

冬獅郎と龍獅郎の父、というのだから大丈夫なだけだな、とも思うが、龍獅郎のように簡単に信じれるようなイメージは持てない。

そう言えば、あの人は全く動かないが今の状況をどう見てるんだ？

「実際に冬獅郎よりカタイと思うよ、あの人はな」

突然聞こえてきた双葉じゃないその声に、一護は勢いよく振り返った。

その声の主は最早誰なのか考える必要はない。先ほどまで一緒にいたのだから、その声を聞いただけで誰なのがわかる。

「り、龍さん……」

「一護、冬獅郎のところに案内してくれないか？ あいつに話がある。それと、孤成にもな」

振り返れば、静かな表情でこちらを見据える龍獅郎の姿が、そこにあった。

27：少女は過去を語る（前）

「龍さん……」

正直こんなにも早く彼と対面することになるとは思いもしなかった一護は、呆然と龍獅郎を見やっていた。

そんな一護を見返す龍獅郎の眼差しはとても静かだ。そして腕を組んで仁王立ちされると、やっぱり冬獅郎の兄貴なんだよなあ、と今さらなことすら考えさせられそうだった。

そして一護は、てつきり後ろからやってくると思っていた者たちが来ないことに気がついて目を細める。

乱華も、乱菊も恋次もルキアも、後ろから追ってくる気配が皆無だ。

「龍さん、一人なのか？ 乱華さんたちは？」

「すぐ近くで待機中だ。何かあったらすぐ出てきてもらうつよつ言っている」

「……結論は？ 出たの？」

双葉が前に出て龍獅郎に言う。酷く表情のないそれに、一護は思わず目を細めてしまった。

明るい笑顔を孤成や冬獅郎に向けている双葉しか知らない。こんな表情の双葉を、一護は知らない。

それもそうだ、彼とは出会ってから数時間ほどしか経っていないのだから。しかしそれでもこの数時間で笑顔が当たり前だと思わせるほど、双葉は元気のいい少年だ。

龍獅郎は、双葉を見て目を伏せる。

「思い出せないものは思い出せないんだ。わからないならば、聞く」

「龍さん……」

多分何を言っても、孤成は答えてくれないぜ？　そう思っても、それを口に出すことは躊躇われてしまう。

恐らく自分も同じ状況下にいたら、同じ結論を下すだろうと思ったからだ。思い出せないモノを無理に思いだそうとするのも、時間の無駄にしかならないと思う。

だったら思い出すことを諦めて聞けばいいじゃないか。相手がなんと言おうと、それだけは諦めずに聞く。なんとかして、切り開く。

ただど今は、なんて思ってしまうのはやはり自分が該当していないからだろうか。

自分だったらこうするだろうが、客観的に見てしまうと「無理だ」思ってしまう。それに問題はそれだけじゃない。

一護はそれを告げようと、気まずさを表情に出したまま言う。

「今は、行かない方がいいと思う」

「何でだ？」

「……冬獅郎の機嫌が、さ……すぐぶる悪いから」

言いにくいけど、言った！ 我ながらよく言った！ なんて一人感動している一護はバカだろうか。そして龍獅郎は、きょとん、と目を丸くして一護を見ていた。

今の冬獅郎は絶対に危ない。今度こそ建物を破壊しかなないような気がした。

だがそんなことを言っていられないのも確かだ。自分だったら「そんなこと関係ねえ！」と進むところだが、案の定龍獅郎も同じ考えだった。

「それでも構わない。それでも俺は、話さなければならぬことがあるんだ」

「けど……」

「機嫌悪い機嫌悪いってうるせえんだよ黒崎。虫の居所に任せて刀を振り回すほど幼稚なつもりはねえ」

どうしてどいつもこいつも、全く気配を感じさせないでやってくるのだろうか。

苦々しい表情を隠さずに振り返れば案の定、冬獅郎が腕を組みながらこちらを見ていた。そこに、孤成の姿は見られない。

冬獅郎は一護を一瞥すると、じっと彼を見据えている龍獅郎の前に立った。いつになく、緊迫した空気。それは空座町で初めて顔を合わせた時の、あの空気を、彷彿させる。

いや、龍獅郎までもが緊張状態にある分、あの時よりも雰囲気が悪い。

そうして息をつめながら彼らを見てみると、不意に冬獅郎がため息を落とした。

「薄情者」

「……」

「もしかして、あの時の事も覚えてねえのか？ 雛森だつて覚えているはずだぜ、あれは。一番気にかけてたのはあいつだ。ばあちゃんだって、俺だつて心配してた。……それなのに、忘れただと？ 笑わせてくれるぜ」

「どうしてそこで桃とばあちゃんが出てくるんだ……？ あの時つて……」

「わからねえならいい。これ以上話していても意味はねえからな。……ヒントだけは与えてやったぜ」

戻るぞ、黒崎、木下。冬獅郎はそう二人を促しながら、龍獅郎に背を向けた。これ以上話すつもりはない。言うべきことは言った、というように。

しかしその背を、龍獅郎の一喝が止めた。「ちよつと待てよ！ 話はまだ終わつてない！！」この狭い廊下に十分響く、大きな声。冬獅郎はそれを無視する気にはなれなかったのだろう。表情こそ無に近かったが、しっかりと振り返り龍獅郎の目を見返す。

「お前自身は何を考えているんだ？ どうしていきなり、こんな……」

「騒動に終止符を打って瀨霊廷に戻る。最初から目的はそれだけだ」
「だったらどうして……」

「放っておけねえだろ？ こんな騒動を起こすほどなんだ。その原因が自分の兄貴なのに、放っておけやしねえよ」

だからちゃんと向き合ってやってくれ。そう言う冬獅郎は、やはり孤成について言っているのだろう。

しかしそう言われても、龍獅郎は混乱するばかりなのだろう。不可解そうに目を細め、じっと冬獅郎を見つめている。

冬獅郎は、それを見返すことはしない。只背中での視線を受けて、黙って立ち止まっている。

何とも言えない、居たたまれない沈黙。色々な人の感情が絡み合い起こったこの事件は、未だにこの兄弟の前に亀裂を生むというのか。やっと冬獅郎も、素直に龍獅郎と向き合うことができるようになったか。まだ問題を残すというのか。障害になるというのか。

しかし今回ばかりは、それを食い止めるモノが居た。

「もういいよ、シロちゃん。十分だわ」

「孤成……」

「諦めた。龍ちゃんは完全に忘れてる。これ以上言っても何も思い出してくれやしないから。気付いてくれないから」

そう言いながら、長い髪の毛を揺らしてこちらに向かってくるのは孤成だ。

双葉は目を見開いてそれを見ており、冬獅郎は静かに彼女の名を呼ぶ。一護もこの展開は予想しなかった。彼女が、自ら挑んできた。

水面下のバタ足に疲れてしまったのか。それとも完全に諦めて、自分から踏み込もうと決めたのか。

これ以上待つていても、龍獅郎はどうすることも出来ないと思ったのだろうか。待つことに疲れて、自らやってきたのか。どちらにしろ彼女は腹を括ってきたのだろう。

「只でさえ木下くんに迷惑かけてるのにね。シロちゃんや黒崎くんまで巻き込む訳には行かない。……全部、教えてあげるわ。どこから話して欲しい？」

そう言つて首をかしげる彼女は、いつものような余裕はないようだ。いつもなら湛えていそうな笑みすら出てこない。ぎこちなく笑うことすらしない。

それが逆に、一同の緊張を促して重い沈黙を与えていた。それに気付いたのか、孤成は自嘲気味ながらもほほ笑んだのだが。

「その様子からして考えないだろうけど、そうね、まずここから始めようか。あたしは、流魂街の出なんだって話」

「流魂街……？」

「ええ。元々王家の者だと思つていたでしょ？ だけどあたしは貴族でも何でもないわ。身の上話なんてする柄じゃないけど、仕方がないわね」

自嘲気味に笑つて、孤成は語り始める。

元々あたしは、貧しい家に生まれた一人っ子だった。治安が悪くよ
くもない場所に住んでいた訳なんだけど、家自体の経済力がなかつ
たのね。

家族間で霊力があるのは、何故かあたしだけだった。霊力の無い魂
魄はおなが空かないのは皆ご存知の通り。お金がなかったあたし
の家は、無駄なことに投資する訳にも行かず、当然食事もないし、
おながが減ったなんて言えなかった。

誰も、あたしに霊力があるとは気付かない。そしてあたしも、家族
に迷惑をかけることになるんだってわかっていたから、何も言わな
かった。

只必死に霊圧を抑えて、自分が只の人間だというふりをする。それ
が、あたしにとっては当たり前。

飢え死にすることが無かったのは、比較的潤林安に近い土地に住ん
でいて、向こうに行けば食べ物を与える親切な人がいたから。

そう、潤林安。龍ちゃんとシロちゃんならよくわかると思うけど、
西流魂街で一番治安のいい場所。実際にあそこは良い場所だった。
草も木も、青々と生い茂っている。流れる川は澄み切って綺麗だし、
住民も比較的穏やかだった。

あたしは、そこで出会った独り暮らしのお爺さんにいつも食べ物
分けてもらっていた。

毎日当たり前のように潤林安に通って、お爺さんにご飯を食べさせ
てもらって、何事もなかったかのように家に帰る。それが、あたし
の日課だった。

だけどある日突然、そのおじいさんは居なくなっちゃたの。時が来て、人間に生まれ変わっちゃったのね。魂が肉体を持って現世に降り立つのはいつも突然だから、あたしにもおじいさんにも予想がつかなかった事だった。

いつものようにおうちに行ったら誰も居ないんだもの。あの時は本当に不安だった。いつもこの時間ならいるのに、何かあったのだった。

結局近所の人に教えてもらったんだけど、食事を請うようなことはしなかった。幼いながらも、いろいろと遠慮していたのね。よくわからないけど、自分からねだるようないやしいことはしたくない、って思っていた。

だけどそうなれば、おなかは減ってしまう。家に帰らなきゃならぬのに、おなかはぺこぺこで、結局あたしは、歩く気力さえ失ってしまった。

それも、人気がないところで倒れてしまったのよ？ あの時、本気で死ぬのかなあ、て思った。

だけどあたしも運が良かったのね。偶然そこに人が通りかかって、あたしに気付いてくれたの。しかもその人がまた、優しい人だった。

「どうした！？ 大丈夫か！？」

あたしを見て立ち止まって、真っ先に駆け寄ってくれた、銀髪の男の子。心配そうにあたしを見下ろす綺麗な翡翠色の瞳が、本当に素敵だと思った。

年はあたしよりも上。身長も150はあったと思うけど、そう考えたらその人も子供だったのよね。

あたしはそのお兄ちゃんの手を借りてなんとか身体を起こすと、言
った。

「おじいちゃん、居なくなっちゃったから……」

「おじいちゃん……？」

「木村のおじいちゃん。現世に行っちゃったから、もうごはん、食
べられない」

「腹、減ってるのか？」

そう言うとお兄ちゃんは背負っていた風呂敷を降ろして中身を広げ
た。

出てきたのは、桃とか、スイカとか、林檎とか。とにかく沢山の果
物。その子は、あたしにそれを分けてくれたの。

本当は家族に挙げるはずだったんだけど、内緒な、って。そう笑っ
て言ってた。

「帰る家は？ あるのか？」

「うん、ちゃんとあるよ。だけど家族みんな霊力ないから、ご飯出
ないの」

生活が苦しいしね。そう言うとお兄ちゃんは「そう、なんだ」と
言って眉を八の字に下げてしまった。

何もキミがそんな悲しむことじゃないのに。そう笑うと、そうか？

とかなり真剣な表情で返されたわ。

本当に優しいお兄ちゃんだった。

すごく思いやりがあって、家族思いで、その声も、綺麗な目も髪の

毛も好きだった。その人の優しさが、その時のあたしにとって救いだったのね。

あの時、そのお兄ちゃんに会えたから、いまのあたしがあると言っても過言じゃない。ううん、むしろ、その人に会えなかったら今のあたしはここにいないもの。

死神になっていたかすらわからない。最悪死んでいたかもしれない。あたしにとって彼は、そんな命の恩人に等しいの。

「明日から、オレが食べるモノ、持ってきてあげるか？」

「え？」

「だって、食べるモノなかったら生きてけないだろ？ 迷惑か？」

その人は、見ず知らずのあたしに本気で手を差し伸べてくれた。名前も知らないあたしに、生きる力を分けてくれたの。

幼心ながらも、憧れたわ。大好きだった。いつも同じ時間に同じ場所であつて、ご飯を貰つて、一緒に遊んで。おにいちゃんと一緒にいる時間が本当に楽しかった幸せだった。

それ以来あたしは、潤林安に行く時間が待ち遠しかったわ。家にいるのかつまらなかつた。すぐに、おにいちゃんに会いたくなつた。

ある日ね、お兄ちゃんに、弟さんが居るといふ話を聞いたの。生意気盛りで、大変だつて話していたわ。だけど唯一血のつながった本当の家族だから、大切なんだつて、可愛いんだつて言つてた。

思わず思つちやつたわね、うらやましいなつて。このおにいちゃんの本当の家族なんて、うらやましいなつて。それならば、いつだつて一緒に入るんだろうなつて。

あたしみたいに、時間になつたらさよなら、なんてしなくてもいい

んだろうなつて。

「その子と一緒にいてあげなくていいの？ 寂しくない？」

「あー、アイツはそう言う柄じゃないからな……なんて言うんだろう、欲求というモノを知らないというか、あいつのわがママを聞いたことがない」

「なんで？ あたしだったら四六時中お兄ちゃんについて回るよ」

「あはは、ますます駄目だ。人にくっついて回るような奴じゃないもん。何でも一人でやってしまうような奴だから」

えー、もったいない。あたしはそう思ったのを覚えている。こんな素敵なおにいちゃん、自慢して回ればいいのにつて。

口に出したかどうかは覚えてないけど、あの時おにいちゃんは綺麗に笑ったわ。今でもその表情はしっかりと覚えている。

「あたしは一人っ子だから、きょうだいとかわからないんだよね。やっぱり毎日楽しい？」

「そうだな……兄貴として色々大変なことはあるぞ？ まあ、手のかからない弟なんだけど」

「あたしみたいな妹だったらどうする？」

「ん？ ふつうに可愛がるぞ？」

そう言つて優しく頭を撫でてくれた手は、温かかった。こう言う時、再確認させられるの。やっぱりお兄ちゃんが大好きだなあつて。

ただ数年たつてあたしもそれなりに大きくなった頃、いきなりお兄ちゃんとの連絡は途絶えてしまった。そのころは自分でなんとか

食べ物を調達することも覚えてきたから大事には至らなかったんだけど、ある日突然、姿を現さなくなった。病気でもしちゃったのかな。それともあのおじいちゃんみたいに、生まれ変わる順番が回ってきたのかな。

一生懸命、近くの住民に聞いたわ。お兄ちゃんのことを。そしてその答えはすぐに得られた。

お兄ちゃんも霊力がある人だったから。真央霊術院に入学したんだって。死神を目指して、一步踏み出したんだって。それは会えないよね。当然だよ。

そのころからあたしは一生懸命勉強するようになった。死神になりたくて。もう一度、お兄ちゃんに会いたくて。

あたしには元々才能もあったらしくて、授業も簡単だし、鬼道だつてすぐに習得できた。斬魄刀を手に入れるのにも、時間はかからなかった。

だけどここからが予想外の展開。という訳かあたしは、求めたものの、もつと上を行ってしまった。

ある日、あたしは先生に呼び出されて職員室に行った。そこにいたのは、見慣れない死神と、担任の先生。

先生は、あたしを見るなりぱつと笑顔を浮かべて言った。

「喜べ孤成！ かなりの名誉だぞー！」

「な、何がですか……？」

「前代未聞だ。霊術院を卒業してすぐに王属特務に入隊なんてな！」

「王属特務……？」

何で笑ってるの先生？ 王属特務って何？ それ、あたしが求めているモノとは全然違うよ？

そこに、あたしが求めているモノはない。あたしが会いたい人はいない。王属特務がどんなものなのか、勉強したからわかる。

そこに入ってしまったら、一生お兄ちゃんに会うことができないんだって。

だけどあたしは、それを蹴ることができなかった。黙って先生に従って、黙って零番隊に入ることしかできなかった。

その時は、既に諦めちゃったんだ。もう、会えないのねって。おにいちちゃんには、もう会えないんだって。

王属特務に入って数日間、あたしは与えられた部屋に引きこもった。食事を摂る気にもなれず、また、外に出る気にもなれずに。

諦めてはいたけど、哀しかった。お別れも何も言わないまま、二度と会えないというのが辛かった。

本当に、兄もかもが唐突過ぎて。追いかけてようとしたのに、届かなくて。それどころか追い抜いてしまうなんて、笑い話にもならない。そんな時、一人の小さな男の子が、僅かに開いた扉の隙間からこっちを覗いていることに気がついた。

茶色い猫っ毛の男の子。そう、木下くん。

あたしは流魂街出身。だけど木下くんは、元々王属特務の者で、生まれもここだった。

たぶん、寂しかったのね。ここには、木下くんみたいに小さな子がいないから。うん、だからきつと、シロちゃんにもなついたのね。

少し怯えた様子でこっちを見ていた木下くん。あたしはなるべく笑顔を務めて言った。

「どうしたの？ 入っておいで？」
「……」

そう言つと木下くんは、少し躊躇つたあと、ゆっくりと遠慮がちに部屋に足を踏み入れた。覚えてないでしょう？ 本当に小さかったもの。無理はないわ。

「キミもこの子？」

「うん……双葉」

「うん？ 双葉くんっていうの？ あたしは來海。孤成來海。よろしくね」

そう言つて手を差し出すと、木下くんはじつとあたしの目を見たあと、ゆっくりとそれを握り返してくれた。

本当に、大人しい男の子だったわ。いつからだろうね、木下くんがこんな活発に飛び回るようになったのは。今は今で、安心してゐるんだけどね。引つ込み思案で、人見知りで、なんて今の木下くんには考えられないもの。

明るくて、元気な木下くん、あたしは好きだよ？

話はそれちゃったけど、それ以来あたしと木下くんはよく遊ぶようになった。

27：少女は過去を語る（前）（後書き）

ここから過去話が結構続きます。

孤成の過去話終わっても今度は双葉、とか。

2、3本番外編を挟んで日番谷くん出すつもりですが、オリキャラに興味無い方には退屈かもしれません^^；

だからと言って端折るわけにはいかないんですよ……。

28：少女は過去を語る（中）

「クルミつてさ、好きな人とか居るの？」

「へ……？」

ある日突然、木下くんがそんなことを聞いてきた。あたしもすっかり王属特務の生活になれ、木下くんがすっかり心を開いてくれた頃。あたしがここに来てから、2年たったころだったかな。元々明るい木下くんは、このころから活発に動くようになっていった。

それはある日の午後の、何気ないひと時の質問。テーブルの上に広げたお茶とドーナツ。木下くんは、暇つぶしに二人で作ったドーナツをかじりながら、何気ない表情で聞いてきた。

王属特務は、意外とやることがない。こうして時間を持て余すことも、珍しいことではない。

ドーナツの出来は、まあ良かったと思う。少しだけ形が崩れたものもあったけど、味は文句なし。

むしろ木下くんは、そのいびつさが楽しらしく、形を見てはそれを吟味しながら口に運んでいた。

「どうしたの？ 藪から棒に」

「いや……なんとなく……何でもない」

木下くんは顔を真っ赤にして俯くと、ちまちまとドーナツの続きを

齧り始めた。この年の男の子でも、そういう話に興味があるのだろうか。そう思いながら、あたしは木下くんをじっと見つめる。2年前と比べて、身長も少し伸びて、顔立ちも少しだけ大人っぽくなってきた気がする。だけどやっぱりあたしから見たら、木下くんは幼い。

今日までずっと一緒にいて、あたしにとって木下くんはかけがえない存在になっていた。弟みたいな感じ。だけど、家族ともなんだから違う。勿論恋愛対象とも何かが違う。

もしかしたらあのお兄ちゃんも、こんな気持ちであたしの事を見ていたのかな、なんて思うようになっていた。

妹なんだけど、家族とも違う矛盾。そして恋愛感情も抱くわけではない。それがお兄ちゃんにとってのあたしだったのかなって。

あたしはそのお兄ちゃんの事を思い出しながら、木下くんの問いに答える。

「そうね……居たよ、すつごく大好きなお兄ちゃんが」

「居た……？」

「そう。居たの。流魂街にいた頃にね。けどある日突然会えなくなっちゃった。そして今はもう、二度と会うことは許されない」

こっちに来てから、ここがあたしの居場所なんだって思うようになってから、なるべくおにいちゃんの事は考えないようにしているつもりだった。

けどあの人の存在もまた、あたしの中では大きくて、簡単に忘れ去ることができない。気がつけば、今おにいちゃんは何をしているんだろう、とか、死神になっているのかな、とか、だったらどの席

次だろう、とか。

怪我はしていないかな。危険な任務にはついていないかな。大丈夫かなって。お兄ちゃんについて考えることは沢山あって、キリがない。

考えることは沢山あるから、忘れるのは困難だ。

「今でも考えるんだ。今おにいちゃんは何してるのかなあって。ちゃんとご飯食べてるのかなって、いろいろね」

「もう、会えないの……？」

「あたしは王属特務で、あの人は死神だとしても護廷十三隊だもの。会うことは許されないよ」

「そう……なんだ……」

まるで自分の事のように、木下くんは俯き、寂しがった。この子は、何も知らないはずなのに、あたしのためにこうして悲しんでくれるいつもこうだ。あたしと一緒に笑って、泣いて、怒って、悲しんで。この子とあたしってリンクしてるのかな、なんて不思議なことを考えたことがある。

木下くんはふいに顔を上げると、この頃にしては珍しく、大声を出した。

「で、でも大丈夫だよ！ オレが居る！！」

「へ？」

「く、クルミにはオレが居るから寂しくないよ！ オレは、ずっとクルミの傍にいるよ！！」

ね、約束するよ。木下くんは、あたしの顔を見ながら必死に訴えた。自分は何処にも行かないから。いつまでもずっとそばにいる。望んだときにこうして近くに來てあげる。

只必死に、木下くんはそう言った。

「は……」

「？」

「あ、あははははは！……！」

「な、何で笑うんだよう……！」

その姿があまりにも面白くて、可愛すぎて。そして嬉しくて、あたしはおなかを抱えて笑った。あまりに必死なんだもの。一生懸命なんだもの。

耐えられなくて、おなかを抱えて転げたあたしをみて、木下くんは不満げに口をとがらせる。オレ、必死なんだからな！顔を真っ赤にしながら言う姿が余計に可愛くて、笑いが収まらない。

「……もういいもん。そんなに笑うならオレ家出する」

「待つて待つて何処にも行かないで！……うん、嬉しいよ、ありがとう」

「本当？」

「本当本当！今までこんなこと言ってくれる人、居なかったから。ありがとう」

思わず笑っちゃったけれど、嬉しい気持ちは確かだった。随分と小さな勇者。そんなことを思った。
そんな木下くんが愛しくて、可愛くて。あたしは思わずなでなでして、抱きしめたくなくてしまふ。そんなことをしたら、木下くんは「子供扱いすんなよ！」と拗ねるとわかっていたから、しなかったのだけだ。

「そうね。今日までずっと、あたしの近くには木下くんが居たものね。何言ってるんだろ、あたし」

「クルミ……？」

「木下くんがいてくれるだけでも幸せなはずなのになあ……」

お兄ちゃんにもう一度会いたいなんて、会って話したいなんて、思っちゃいけないのになあ……。

その夜、事件は起こった。みんなが寝静まった頃、何者かが侵入したらしい。いつもなら起こされることのない時間帯に、警鐘が鳴る。こんなことは初めてだったから、あたしもどうすればよいのかわからず戸惑ってしまった。

時計を見れば、夜中の2時を過ぎたころ。まだ太陽が昇る気配なんて皆無な、深夜の時間帯。ぼんやりと目をこすりながらカーテンを

開くと、半月が真つ黒な空に浮かんでいた。

半分だけが浮かぶ月。まるで自分の半身を失くしたかのようなそれは、苦手だった。昔誰かにそう言つて、そんな考え方をする奴なんて滅多にいないだろう、つて苦笑いされてしまったのだけでも。だけど半身をえぐり取られるような気持ちつてどんなだろうと考えると、怖くなる。月は真丸だからこそ月だと思ふあたしにとっては、半月とは悲劇の象徴のようなモノだった。

そんな苦手なものが浮かぶ空をぼんやりと眺めていると、何者かのシルエツトが視界に入った。まるで忍者みたいに空を飛ぶ、大柄な男のシルエツト。

思わずぽかん、と口を開きながら見ていると、そのわきに何かが抱えられていることに気がついた。

何なんだろう、アレ。人のようにも見えるけど。やはりぽかん、としながらぼんやりしていると、突然部屋の扉が開いた。

「何をぼんやりしている孤成！！ そいつをつかまえろ！！」

「え！？ な、靈王さま！？」

いつになく声を荒げて、刀を構えるのは紛れもない、靈王さま。かつて見たことのないその様子に、あたしは呆然としてしまふが、一喝されて我に帰る。

寝巻のままだけど、靈王さまがこんなに焦っているんだ、一刻を争うことに違いない。あたしは、寝台に載せていた斬魄刀を掴むと、鞘から引き抜きながら、窓枠を蹴つて飛び出す。

夜の空気は冷たくて、はためた服の隙間からひんやりとした風が

入ってくる。あたしは寒さに耐えながら、男の背後へ、刀を振り下ろした。

ギイン！ と金属音が静まり返った空間に木霊す。後ろに霊王さまの気配を感じて瞬歩で退けると、あたしの居た場所を二匹の龍が穿つ。

龍は男の刀に噛みつき、そこから凍りつく。パキン、と刀が真つ二つになったと思うと、龍は消えていた。

一方は男を狙ってようだが、相手の腕の一振りで、火の粉を散らしながらやはり消えてしまった。

霊王さまは、それに動揺する様子もなく、静かに、しかし確かな威圧感を孕んだ声で言う。

「そいつを放せ。今度は腕ごと持っていく」

「おいおい、アンタこれは違うんじゃないの？」

「……貴様の目には、そう映るかもしれんな」

ガシャリ、と刀を構えて冷たく言い放つ霊王さまと、野卑な笑いを浮かべる男。ふと男に担がれている人影を見ているが、暗くてよく見えない。

只、とても小柄にみえたため、子供だろうとは思っ

「あの時アンタは動かなかったのによお、こいつの時は動くんだな？」

「……だから何だ」

「あの兄弟は、どうでもよかったということだろ？」

最低な話だけどなあ。そういつてくつくつ笑う男に、あたしは意味もなく腹が立った。なんだか言い方が一々嫌味くさくて気分が悪い。そして、なんだか意味深な話をしているけど、あたしにはよくわからなかった。あの兄弟、って誰の事だろう。それに、その口ぶりでは過去にもこういうことがあったような感じだ。

目を細めながら黙っていると、霊王さまがため息を落とした。

「わかっている。私は、最低なんだとはな。今日までずっと悔いてきたさ」

「ほう？」

「だから今回は、見捨てるような真似は決してしない」

霊王さまがそう言うのと、鬼道が男を縛るのはほぼ同時だった。動きが、全く見えない。

しかし男の方も相当の曲者のようだ。気がつけば鎖条鎖縛に縛られたそれは丸太に変わっており、男は柱の上に移動していた。

月明かりが、真つ二つに割れた男の斬魄刀に反射されて眩しい。それも一瞬で、次に目を開けた時にはちゃんと男の全体像が見られるようになっていた。

そして、男に担がれた少年の姿も。

「き……木下くん……？」

あたしは一瞬、目を疑った。辺りが暗い所為で、目が錯覚を起こしたのだろうと。しかしいくら瞬きをしても、目に映るモノは変わらない。

辺りを照らす光が月だけだというだけで、いつもより暗い色に見える茶色の髪。あちこちにはねた猫っ毛。間違いなく、木下くん。

それに気付いてしまった瞬間、心臓が跳ね上がった。この男の正体以前に、この男が、木下くんは何をしようとしていたのか。それを考えると、黒い感情がふつふつとわき上がってくる。

こいつの所為で、あたしの前から木下くんが消えるところだったのだろうか。また、あたしは一人になるところだったのだろうか。

こいつに、全てを奪われようとしているのか。そう思うと、怒りがわいてくる。

気がつけばあたしは、斬魄刀の柄を強く強く、握っていた。

「……貴方、一体何者……？ その子をどうしたいの？」

「アア？ 随分と野暮なこと聞くな、嬢ちゃん」

「答えないならそれでいいわ。……絶対に、このまま返さないけど」

そう言って、あたしは瞬歩で奴らの前から姿を消した。絶対にこいつの好きにさせない。絶対に、木下くんに手出しさせない。

あたしは男の後ろの建物の屋根に立ち、斬魄刀を構える。それは随分と久々の、解放。

「遊べ」

あたしが言うのと同時に、霊王さまがこちらを見る。あたしは構わずに、続けた。

「『化狐』っ！！！」

瞬間、あたしの周りに沢山のあたしが、集まった。まるで分裂したように、それぞれが同じ顔をして、同じ格好をして、同じ刀を構えて。

実際、こっちの方面で解放をしたのは初めてだ。霊王さまも初めて見るであろうこの解放に、目を見開いている。

化狐は、人の目を欺いてからかうのが好きだ。人間に化けていたずらをする、タヌキやキツネと同じような性質。

時には他人に姿を変えてなり澄まし、時には分身して驚かせ、時には姿を消して、からかう。そんな性質の悪い斬魄刀。

けどあたしにはピッタリなんだって、そう思う。どちらかというとあたしも同じような性格の持ち主だからだ。別に人をからかって遊ぶのが趣味というわけではないけど、嫌いじゃない。

それに、人を惑わせるのは得意だ。真意を隠し、おどけて見せて、人を困らせるのも、残念なことに得意だ。

化狐はまさにあたしの性質をわかりやすく持ち合わせた、化身のよきなものだ。

「こ……孤成……？」

「済みません霊王さま、サポートお願いします。あたしは、木下くんを助けない」

霊王さまのあの動きすら見きつてしまっただもの。きっとあたしでは、敵わないから。

そう言うとき霊王さまは静かに頷き、自らの斬魄刀を構えた。男は、簡単にあたしたちを倒せるとは思わなかったのだらう。険しい表情であたしたちを見ている。

実際、この分身解放で敵と戦うのは初めてだから、あたしもどれほど戦えるのかはわからない。だけど、霊王さまが戦いやすくするのとくらいは、出来るはず。

木下くんをこいつの手から救い出すだけの力は、あるはず。あたしはそう、化狐の力を信じる。

「あたし、一度大好きな人を失くしてるんです。死んだわけじゃないけれど……それでも、一生会えなくなってしまうた」

「……」

「もう二度と、あの時みたいな思いをするのは嫌なんです。ここに来た時、あたしは自分が望んだところじゃないのに、って正直拗ねてました。全てを諦めてました」

お兄ちゃんの傍に行きたくて、死神になろうと思ったのに。ここには、あの人の影も形も、何もない。

霊王さまがあの人に見えるような気がしたけど、あの人じゃないから。あたしは、似ているこのヒトで満足できるほど単純な女じゃないから。

それにこのヒトは絶対に、あの人みたいにあたしの心を満たしてはくれないから。大好きだった、あの人とはちがうから。

お兄ちゃんの事を忘れたいからとか、そんなんじゃない。単純に、それを止める力があたしにあるなら、止めたかった。

あの時みたいに、生活に彩りをくれた木下くんを、失くしたくなかったから。

「木下くんのおかげであたしはここを受け入れられた、と言っても過言じゃありませんから」

「……わかった。元々私も、双葉を渡すつもりはない。……あの時のような失態は決して起こさない」

あの時のような失態。それが何なのか、霊王さまは詳しく説明してくれなかったけど。

ただこれだけは言ってくれた。こいつは、王属特務を潰そうとしている厄介な奴だって。王家から生まれた者をこうして攫って後継ぎを経たせようとしている、と。

「何世紀も前から、ずっとだ。私はそれを知っていた癖に、動くことができなかった」

（おまけという名の裏話という名の単なるバカ話）

孤：「あたしの漢字って「孤独」の孤でしょ？」

一：「あ？ ああ、そうだな。んで、それがどうしたんだ？」

冬：「本当は「狐成」になるはずだったんだが、作者の手違いで「孤独」の方になったらしい」

一：「……ええ」

龍：「つーか、それどういう手ちがいだ？」

孤：「単純に漢字を間違えたのね。こへんが狐だと思ったんでしょ」

一：「いや、単なるバカだろそれ！！」

番外編 01：掃除屋三席武勇伝（前書き）

まだ龍獅郎が護廷に居たころの話です。

番外編は、本編と関係ない過去話や、蛇足的な話を書いていきたい
と思います。

番外編 01：掃除屋三席武勇伝

十番隊の隊長は、掃除と言うもの、と言うより家事全般が苦手だ。それは意外と、周知の事実だったりする。

十番隊に就任して、龍兄の部屋を見て、俺は文字通りくらしとした予想どおりだ。いや、予想をはるかに超えている……か？

執務室は乱華さんとの共有スペースのためか、綺麗に片付いている。他の共有スペースも、同様だ。だけど隊首室……つまり龍兄の私室は、とんでもない有様。

読んでいたであろう本は床に散乱し、書棚など何故か縦横滅茶苦茶に本が詰まっている。所々に書類らしき紙が飛び出ているのが、非常に気になった。

机の上は書類でいっぱいになっており、よく見れば使ったままの筆にカビが生えかけている。あり得ねえ。筆にカビだと？ 余程放置しねえと、出来ねえだろ？

いつからあるのか、その横に茶のシミがこびりついた湯呑が置いてあるし、寝間着などしわくちゃのシーツの上に変な形で置いてある。恐らく本人はベッドを整えて、寝間着もきちんと畳んで置いているつもりだ。だが全然形を成していない。

龍兄の整頓能力はゼロ。いや、むしろマイナスだ。それは流魂街に居たところからずっとであり、まさかとは思ったがまだなおっていない。良かったらしい。

「……よくこんなの放っておくよな」

「あ、あはは……だっておねーさんがいじるなって言っただもの」

何となく連れてきた四席……松本乱菊を睨みつけながら、思わず呆れを隠さずに言う。まあ、コイツに罪は無いんだが。

苦笑しながら松本は言うが、これには皆困っているということだろう。しかし副隊長、乱華さんが「隊長が掃除もできなくてどうするのよ」と絶対に手出しさせないらしい。

私たちは隊長のお守役じゃないんだから、身の回りの面倒までみきれんわけないわ。て言うかそんな道理ないわよ？ とのこと。まあ、確かにそうだが龍兄の場合そんなことは言ってられない。

龍兄に至っては、壊滅的だ。無理矢理片付けさせようとすれば余計に部屋が汚れるし、放っておけばそれはエスカレートする。

ばあちゃんのおかげで、流魂街にいた頃は必要以上に部屋を汚すことはなかったが……龍兄に掃除の類をやらせるだけ仕事を増やすことにしかならねえ。

「そのうち虫湧くぞ、コレ」

「ですよねえ……」

実際、一度自分で掃除できるようにならなくては、とばあちゃんも俺も手出しをせず、龍兄の部屋を放っておいた事がある。

自分で掃除もできなくてどうするんだ。そう思うのは乱華さんと一緒だ。と言うか当然だと思う。だからこそ放っておいたのだが、ある日雛森の悲鳴が上がった。

何があったのかは……まあここまで言えばわかるだろう。

「昔から掃除ダメなんですか？ 龍隊長って」

「苦手とかダメとか、そう言う問題じゃねえ。死神でありながら才能がないあまりに始解にも至らねえ。そんな感じた」

「例えがわからないけど……致命的って事ですよね」

まあそう言うことだ。俺は松本にそう答え、部屋の中に入る。

龍兄の部屋を整頓するのは、昔から俺の役目だ。まさか死神になってまで同じことをするとは思っていなかったが、仕方がない。

一人じゃ掃除すらできねえ、全く情けねえ兄貴だ。

「ってアンタなにしてるのよ!？」

「何って見てわからねえのかよ。つーかてめえは四席で俺は三席なんだが。いいのかよその口のききかたで」

「か、可愛くない……」

「結構だ」

表情をひきつらせる松本に背を向け、取りあえず滅茶苦茶な書棚から本を出す。挟まっていた紙がひらひらと落ちてきたが、それが本の落丁なんだと気が付いて目を細める。

38ページ。一体どの本から抜けたページなのか、わからない。探すだけ骨が折れそうな作業だ。

「意外とそう言うの煩いんですねー日番谷三席ー？ お姉さんと龍隊長なんて、躊躇いなくタメ語なのに」

「龍兄がおかしいだけだろ」

「全く、あんな小さかった子供がイキナリ上に就くなんて予想外だね。て言うかアンタ、身長縮んだ？」

「縮んでたまるか！ 確かにあまり伸びてねえけど！！」

「実力ばつか伸ばしてるからですよ。やちるとちびっこ同盟でも組んだらどうです？」

「十一番隊の副隊長と一緒にするな！！！」

何よりも、身長に触れること、子供扱いされる事が俺は嫌いだ。頭に血が上り、思わず書棚を叩くと、中身が一斉に襲ってきた。

天井につくほどの、大きな書棚。その中にみっちり詰め込まれた数百冊の本は、突然牙をむき丸腰の俺めがけて降ってくる。

こんな大量の本を、いくらなんでも避けられるはずがなかった。当然俺はその中に埋まり、目の前が真っ黒く塗りつぶされる訳だが……。

「あれ……？ ちょ、何処行つたのよ冬獅郎？」

アレじゃねえよ埋まってんだよ。助けるよ。つか呼び捨てすんな。

「バカねシロ。龍の部屋をいじらないのは十番隊では暗黙の了解なのよ？」

「……くだらねえルール植えてんじゃねえよクソ兄貴」

「お、俺の所為じゃ……」

「アンタの所為じゃないのバカ龍!!」

あの後音を聞きつけてやってきた十番隊の隊士によって、俺は何とか救出された。本の角が当たったおかげで顔面に青あざができていたり、腕が切れたりしていたが、重傷と言うほどでもない。

「つか松本は、本気で俺が消えたと思っていたらしく（どれだけバカだ）本の山から引き上げられる俺を見て「そんなところに居たんですか」と本気で驚きの声をあげた。

乱華さんに怒鳴られた龍兄は、執務机で筆を握ったまま、肩をすくめる。乱華さんはソファに座る俺の隣で傷の手当てをしながら、溜め息を吐いた。

「つか、筆にカビはえていたんだが」

「筆？ あー、それ失くしたと思ってたヤツ。つかなんか色おかしくないか？」

「だからてめえは筆にカビ生やしたって言ってんだ!」

部屋から持ち出した例の筆を龍兄に投げつけると「投げるなよ汚いだろ!」と言いながら手にした筆でそれを弾きおとす。

流石に反射神経は大したもの。ってそういう問題じゃねえ。

「大体湯呑放置、机上散乱、書棚滅茶苦茶……茶は飲んだら流し台に置けって教わらなかったか？」

「お、教わりました……」

あーびつくりした。でも俺は関係ありません。当たり前のように仕事を始める龍兄を睨みつけられれば、びくりと肩を揺らす。

流魂街に居たころはちゃんとできていたことも、今は出来なくなっちまっているんだ。退化と言つか悪化と言つか。本当にコイツはどうしようもねえ奴だ。

「使ったものは元の場所に。これもあちゃんが言ってたよな？」

「ごもつともです」

「あははは！！ 大人が子供に説教されてる！！」

「お前は黙ってる松本！！」

乱華さんが貼ってくれた絆創膏の上からヒトの傷をバンバン叩く松本を一喝すれば、コイツもまた肩をすくめる。

何が「この子供、怖いわ……！」だ。ふざけんじゃねえ。

「全く…… 女に悲鳴を上げさせなかっただけ幸いと言つか」

「ああ、昔、桃泣かせたんだっけ？ すごかったよなー、冬獅郎も戦慄してた」

「笑いごとじゃねえよな……？」

「ごめんなさい」

そんな昔を懐かしむように言っんじゃねえ。それはてめえの黒歴史だ、日番谷龍獅郎。

思わず溜め息を落とした俺の横で、乱華さんが「まあまあ」となだめてくる。松本は「三席気短い」とかばやいてるが、余計な御世話だ。

更に「この兄弟、似てるの容姿だけよね？」まで言われる。本当に余計な御世話だ。限りなく余計だ。つーかどうでもいいだろうが、そんなことは。

「とにかくもう龍の部屋に近づいたらダメよ？ 今度こそ大怪我しちゃうわ」

「そんなへましないっすよ。むしろ龍兄の部屋の世話は、昔から俺の役目っスから」

「本に埋まった人のセリフですかそれ？」

「埋まつてる事にすら気付かなかった奴に言われたくねえな」

今まで話していた奴が消えた。そして目の前には大量の本が積みあがっている。その光景を見れば、誰だって中に埋まつてるんだと気付くと思うが。

そんな理屈も、この女には通じないだろう。「だって……」と口を尖らす松本は、取りあえず無視するに越したことは無い。

傷の手当ても終わり、両腕を伸ばすと身体が軋むように痛んだが、仕方がないことだろう。あんな量の本に埋まったのだ。しかも上から降ってきたそれに幾度となく殴打したのだ。

頭を強打しなかったただけマシだと言つか何と言つか……。

「とにかくやることもねえし、龍兄の部屋片付けてくる。お前も来

い、松本」

「えーっ、今度埋まっても助けてあげませんよー？」

「二度も三度も埋まらねえよ」

大体コイツが俺の癪に障るような事を言わなければ、書棚を殴りつけることもねえし、降ってくることもねえ。つまり俺が本に埋まったのは松本の所為だと言うことか。

などと責任転嫁をしながら「マジで？」とぼやいている龍兄を無視して執務室を出る。

正直、少しは改善されているだろうと多少は思っていた。もう俺が手を煩うことはないだろう、と淡い期待は若干あった。

致命的なほどに掃除が苦手な龍兄だって、流石に護廷の隊長となれば少しか……なんて思っていた俺はバカだ。

そうだ、部屋に蟻の大群を巢食わせて雛森を泣かせるほどのバカだ。コップを放置するな、読んだ本は書棚に戻せ。ばあちゃんに散々しごかれておいて、退化するバカだ。

「あの隊長の部下も、つくづく悩まされてただろうな」

「そうねー。て言うか冬……三席はそう言うのはいんですか？　ほら、遺伝とか」

「どっという遺伝だ。悪いが俺は龍兄みたいに変な難癖はねえぞ」

ちっちゃいだけで十分ですものね、貴方の欠点は。こいつはまた嫌なところに触れやがる。身長は関係ねえだろ、身長は。

とにかく本が落下したままの龍兄の部屋に行き、掃除を始める。棚の上や至るところに埃がたまっており、とてもじゃないが放ってお

ける状態じゃねえ。

取り敢えず松本に雑巾と踏み台を持ってこさせて掃除を始める。ひとまずシリーズもサイズもばらばらになっている本をそろえることから始めなければならぬ。

そう言えば先ほどの落丁。あれは何処に行っただろうか。そう思い本の山を掘っているうちに出てきたが、見事に折れてしまっていた。これほどの本が上からどさどさと降ってきたのだ、無理もない。

そこで俺は、ぼうつと突っ立ってこちらを見ている松本に気がつく。

「お前も突っ立ってねえで手伝え」

「えー、あたしこれから修兵を呑みに誘わなきゃいけないんですけど」

「じゃあ向こうの書類でも手伝ってこい」

「……」

口をとがらせたって駄目なモノはダメだ。つーか九番隊の奴を巻き込んでサボるんじゃないやねえ。乱雑に積み上がった本を分けながら睨みつける。

松本もいい加減諦めたのか、ため息をつく俺の隣にスペースを作って腰掛けた。

「あたし龍隊長を見たとき驚いたんですよ。ほら、初めてあたしと三席があつた時、もういなかったみたいじゃないですか、龍隊長。その時あたしは六席やっていたんですけど、お兄さんが居るなんて思っていたんですよねー」

本当にあのときは何事かと思ったわーと、松本は一人で何事かを思い出し、一人で苦笑している。

確かに俺は、松本に導かれたおかげで今ここにいます。本来ならば、このヒトの上についていること自体がおかしいような気もする。何よりも、違和感があるんだ。

普通にタメで話しかけられたら「冬獅郎」なんて当たり前のようには呼ばれたら、この違和感がどうしようもなくなっちまいそうで、俺は煩くこいつの接し方を正そうとするが。

たぶん口にはしねえが、あの時松本が死神になることを勧めてくれたことを、俺は感謝している。

「正直、初めて龍隊長を見たときは貴方かと思ったんですよ。ほら、やっぱり似てるじゃないですか。まさかあんなに小さかった子がこんなに成長してあたしの前に現れるだなんて、って」

「俺は乱華さんを見て驚いたけどな。お前らこそ、双子かと思うほど似てるだろ？」

「それはよく言われますねー」

あ、これそっちの山。と手渡された本をすぐ隣に積み上がっている山へと乗せる。

実際俺も、こうやって同じ隊で、同じ場所で、拳句龍兄の部屋の掃除をするなんて思いもしなかった。

しかも松本に姉がいるだなんて、誰が想像するか。まあ、プライベートを語り合ったこともねえから、知らねえのも無理はないのだが。

パタン、と隣で分厚い本が閉じられた音がした。ふと隣を見ると、松本は分厚い本を片手に、何故か眉を寄せている。

「龍隊長、よくこんなモノ読めますよね。しかもこんなに沢山。あたしには到底無理」

「だろうな。大人しく座って活字を読むって言う柄じゃねえだろ、お前」

ベッドに寝そべって雑誌でも読んでそうだ。そう言ってやると松本は「仰る通りで」と苦笑する。

取り敢えず纏まった本を抱えて、踏み台に乗る。少しづつ棚に収めて行かねえと足場も殆ど無い状態だ。

上から詰めていこうとするが、踏み台を使ってもなお身長が足りねえほど、この書棚は縦に長い。届かねえ、と小言を言うのは俺のプライドが許さねえ。

極限まで腕を伸ばし、背伸びまでして、あと数センチ、あと数ミリ、と若干震えながらも本を積む。

乗った、とやっと板の上に収まった本から手を放した瞬間、顔面にそいつが降ってきた。

「う……が………！」

「確かに埋まりませんでしたね。だけどそれ、埋まるのより痛くないですか……？」

まさかの鼻っ柱直撃。即座にしゃがみこんだ俺の手は、見事に赤く

染まっている。鼻血だ。冗談だと思いたいが、今の一撃で鼻血が出た。

松本もそれに気がついたのか「きゃー!!」などと騒いでいる。わかった、わかったから大声出すな。人が集まっただけ俺が恥ずかしい。

「さ、三席大丈夫ですか!? 無茶するからですよ!」

「く……そ……! 後で龍兄ぶん殴る……!」

「それは立派な八つ当たりですよ」

とにかく休みましようよ。松本はそういいながら手際よくベッドを整えると、そこに俺を寝かせる。

ついでに変な形にたたまれた(つもりらしい)寝巻を放り投げた。これは一々広げて畳む気はないのだろう。当然だ。

ひとまず片付けを中断して血が止まるのを待つしかないか。つーか喉まで逆流してきたんだが。この処理は間違いないのだろうか。手近にあったティッシュで鼻を抑えながら上体を起こすが、あるうことか松本に思い切り押し戻された。

とにかく寝ててください! との事だが、これフツーに飲んじまうぞ。つーか気持ち悪い。

「と、取り敢えずどうしよう……! もう一度叩けば治りますかね!?!」

「それはタブーだろ、完全に……」

「いつそのことかんじゃない良いんじゃないですか!?!」

「もういい出てけ。自分で何とかする」

何ですかー！ とわめく松本を無視して、身体を起こす。このまま寝てたら己の血を飲むだけだ。俺はバンパイアでも何でもねえ。

一息つくくと、窓を開けて風に当たる。そう言えばこの部屋、換気もしてねえだろ。なんとなく空気も淀んでるし。

部屋がアレな所為か、外の空気がかなり気持ちいい。涼しい風が四角く切り取られた空間から入ってきては、俺の頬を撫でた。

と、気持ちがいいそれを堪能していたのだが、それが突然途切れた。そしてこころなし暗くなったような。

何なんだ、一体。疑問に思った俺は目を開けるが、その瞬間思わず飛びあがった。

目を開けた途端にいかつい顔が目の前にあれば誰でも驚くだろう？

「ざ、更木隊長……！？」

「よおガキ。龍獅郎居るか？」

「龍兄……日番谷、隊長なら執務室に」

「よし」

よしって、っーか何故乗り越える！　っーか土足で室内走るな！！
そろえた本をなぎ倒していくな！！

ガバツと身を起こし、文句を言ってやろうかと思ったが既にあの厳ついとげとげは居ない。

呆然と扉の向こうを見ている松本と目が合つと、彼女は「さんせき」
と何故か非難するような声を上げた。

「龍隊長これからしばらく帰ってきませんよ?」

「は? 何でだ?」

「更木隊長、龍隊長の事お気に入りなんですから。命がけなんですよ? VS更木隊長って」

瞬間、更木の高笑いと龍兄の悲鳴がこちらまで聞こえてきた。ついでに窓ガラスが割れた音。松本曰く、窓も開けずに龍兄が逃亡したのだそうだ。

成程、それで龍兄は更木の名を聞くと微妙な表情を見せるのか。しかも霊圧を近くに感じると逃げようとする。

まあ、龍兄に限って死ぬということはねえだろうから、あまり心配することはないだろう。放っておくことにする。

「とにかく掃除再開するぞ。放っておいてもあれは問題ねえ」

「弟のセリフですかそれ? て言うか掃除の鬼ですか」

「良いんだよ。あれは一度痛い目見とかねえと」

何ですかそれー。苦笑する松本を無視して、俺は書棚の整理を再開する。とにかく高いところは後回しにしよう。またひっくり返っていたら進まねえ。

俺でも十分届く位置にある棚を埋め、ついでに踏み台を戻して脚立を持ってくる。この踏み台じゃ低すぎて、俺には届かねえんだ。

松本にやつてもらえばいい、とも思うが、届かないからやつてくれ、なんて死んでも言うか。

「脚立引きずる子供……そこまでしますか」

「うるせえ、黙って抑えとけ」

「はいはい」

これが終われば、書棚は終了だ。まだ机上やあそこの筆筭もあるんだと思うともう何もしたくなくなるが。

放っておけばすぐこうなんだ。放っておけばやることが溜まりまくって手に負えなくなる。ちなみに龍兄に手伝わせようものなら、余計に汚くなるのだから笑えねえ。

取り敢えず松本に支えてもらいながら、先ほど鼻血を出した段は楽々クリア。その上、更にその上の段も埋めてゆく。

「ねえ三席」

「あ？」

「そのシリーズ、下にありましたよ？」

「あ？」

そのシリーズって、これか？ 特に似たようなものが見当たらなかった本を一度眺め、下の方を目で辿ってみる。

「そこそこ、二段目の」

「って手を離すな！！」

「え？ きゃーっ！！」

「そこまでやるなんて、バカじゃないの？」

「バカとか言っちゃかわいそうよ、小さいなりに頑張ってたんだから」

脚立から落下したら、そりや脳震盪も起こすわ。龍隊長のベッドに寝かされた三席を見て、ため息を落とす。

そして脚立が倒れて、いくら子供でも床に落ちちゃえばものすごい音が鳴る。

龍隊長が更木隊長に攫われて、呆れながらも仕事を片付けていた矢先に鳴ったものすごい音に、お姉さんは慌ててやってきた。こっちもこっちで何やってるんだか。地面に倒れて目を回している三席を見てお姉さんが一番に放った言葉は「あんたらまで何してるのよ……」だった。

呆れなくてもいいじゃないの。三席も頑張ってたんだから。

「龍も龍よね。本棚もろくに整頓できないなんて。ある意味才能だわ」

「て言うかこの本全部読んですの？ 正直不要なものもあると思うんだけど……」

「龍は読書家だからね。まだまだ増えるわよ」

「その度に三席が怪我してちゃやってらんないわよ……」

増えれば増えるほど、部屋の本も積み上がって、本棚の中も乱れてくる。龍隊長の事だもの、それは容易に想像がついた。こうならなかったためには、龍隊長の欠点を改善することが一番なのだろうけれど、これではどうしようもないと思う。

大変な兄貴を持ったわね、冬獅郎も。赤くなつた額をそつと撫でてやりながら、あたしはため息を落とす。

「掃除屋三席、ね。伝説よこれは、十番隊の。掃除屋冬獅郎でもいいかしら」

「掃除屋……いくら掃除屋さんでもこんなリスクばかりの依頼受ける？」

「バカ乱菊、だからこそ掃除屋伝説なんじゃないの」

面白いわ、この子。お姉さんは心底楽しそうに笑いながら、執務室に戻って行った。

掃除屋三席、ね。確かにここまでするのだから、伝説と言ってもいいかもしれないけど、本人微妙な顔をするわよ、これ絶対。

まあ、こう言う面白い伝説が十番隊に増えた以上、布教しなきゃ、だけどね。

その翌日、多くの隊士に声をかけられて目を丸くする三席の顔が見れて面白かったわよ。

「たいちよー、そーじ屋久々に見たいです！ あたしの部屋……」

「ふざけんな。自分でやれ」

「えー、だってほら、あたし書類……」

「こつ言つときだけ真面目に仕事しようとするんじゃない？！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8260k/>

Double dragon

2011年10月10日10時00分発行